

学生便覧・講義概要

Annual Bulletin
2013

芸術科／専攻科

音楽専攻

演劇専攻

ステージ・クリエイト専攻

Toho Gakuen College of Drama and Music

桐朋学園芸術短期大学

便 覧	
2013行事予定	1
桐朋学園芸術短期大学の沿革	4
学校法人桐朋学園の機構	4
建学の精神・教育目標	5
1. 建学の精神・教育目標	5
2. 音楽専攻の教育	5
3. 演劇専攻の教育	6
4. ステージ・クリエイト専攻の教育	7
総合ガイダンスセンター	7
I. 教育課程	8
1. 教育課程	8
2. 単位	8
3. 学修の評価	8
4. 卒業の要件	8
5. 履修登録から単位認定まで	9
6. 教育職員免許状「音楽」の取得について	14
7. 科目等履修生について	16
8. 研究生について	17
9. 海外研修旅行について	17
10. 学生による授業評価について	18
II. 学生生活全般	19
1. 学生生活	19
2. 課外活動	22
3. 証明書・諸届	23
4. 学費	25
5. 福利厚生	25
6. 学内諸施設, 機関の案内	30
7. 学園生活の安全と環境の向上のために	33
III. 卒業後の進路について	34
1. 企業への就職について	34
2. 進学・編入学について	34
3. 音楽専攻 卒業後の進路について	35
4. 演劇専攻 卒業後の進路について	35
5. ステージ・クリエイト専攻 卒業後の進路について	36
IV. 学則・諸規則	37
桐朋学園芸術短期大学学則	37
学位規程	43
図書館利用規程 (抄)	44
科目等履修生規程	45
音楽専攻研究生規程 (科目等履修生に準ずる)	46
演劇専攻研究生規程 (科目等履修生に準ずる)	47
学外発表・出演, および学内演奏会関連規則	48
(ステージ・クリエイト専攻実習科目のスタッフ実習N (学外制作研修) について)	
学費の滞納・延納の処理に関する手続について	49
桐朋演劇奨学会規程	49

桐朋学園芸術短期大学専攻科特待生規程	50
校舎施設の使用について	51
学校法人桐朋学園 個人情報保護方針	54
桐朋学園芸術短期大学 学生個人情報保護規程	55
桐朋学園芸術短期大学 セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する規程	58
演劇専攻自治会 自治会規約	59
音楽専攻学生会 学生会会則	62
ステージ・クリエイト専攻学生会 学生会会則	64
音楽専攻同窓会「桐の音」 同窓会会則	66
演劇専攻同窓会 同窓会会則	67

概 要

2013年度入学生

芸術科：教育課程・卒業の要件	69
本学における中学校教諭2種免許状取得の要件	77
専攻科：教育課程・修了の要件	79

2012年度入学生

芸術科：教育課程・卒業の要件	83
専攻科：教育課程・卒業の要件	93

短大事務分掌表	245
2013年度 図書館スケジュール	246
仙川キャンパス校舎配置図	247
短大校舎教室配置図	248
非常時の行動要領	251
交通機関運休時（スト・悪天候等）の対応	251
学園歌	252

Toho Gakuen College of Drama and Music

学生便覧

芸術科／専攻科

音楽専攻

演劇専攻

ステージ・クリエイト専攻

※SC専攻：ステージ・クリエイト専攻

4月					5月						
日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻	日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻
1	月					1	水				
2	火		入学式		TG	2	木			↓	
3	水		ガイダンス			3	金		憲法記念日	演劇セミナー	
4	木		健康診断・マナー講座			4	土		みどりの日		
5	金	↑	前期授業開講			5	日		こどもの日	↓	
6	土	履修登録期間				6	月			通常授業日(振替休日)	
7	日					7	火				
8	月					8	水				
9	火					9	木				
10	水				10	金					
11	木					11	土		オープンキャンパス		
12	金	↓				12	日				
13	土		新入生歓迎行事			13	月				
14	日					14	火				
15	月					15	水				
16	火					16	木				
17	水					17	金				
18	木					18	土				
19	金					19	日				
20	土		小劇場・スペース桐朋・ライブスタジオガイダンス			20	月				
21	日					21	火				
22	月			演2WS(M)		22	水				
23	火					23	木				
24	水					24	金				
25	木					25	土				
26	金					26	日				
27	土					27	月				
28	日					28	火				
29	月		通常授業日(昭和の日)	専演WSA		29	水				
30	火					30	木				
						31	金				

6月					7月						
日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻	日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻
1	土					1	月			↓	
2	日					2	火				
3	月					3	水				
4	火					4	木				
5	水					5	金				
6	木					6	土			演1演技発表会	
7	金					7	日			↓	
8	土					8	月				
9	日					9	火				
10	月					10	水				
11	火					11	木				
12	水					12	金				
13	木					13	土		実技試験(Pf・日)	入学志望者のためのWS	
14	金					14	日		実技試験(V・Gu・弦)		
15	土					15	月		実技試験(管)	海の日	↓
16	日					16	火	↑			
17	月					17	水	前期試験期間		レポート提出	
18	火					18	木			レポート提出	
19	水					19	金				
20	木					20	土		夏期講習	演2実技公開試験	
21	金					21	日				
22	土					22	月	↓		前期授業終講	
23	日					23	火		定演オーディション	大掃除(照明)	
24	月					24	水			大掃除	
25	火		公開講座	専演試演会A		25	木	↑		演2WS(S)	
26	水					26	金	集中講義 補講期間			
27	木					27	土			実技試験 (歌唱個人レッスン)	
28	金					28	日				
29	土		オープンキャンパス			29	月				
30	日					30	火				
						31	水	↓			

8月					9月						
日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻	日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻
1	木					1	日			AO入試	
2	金					2	月	↑		↓	
3	土					3	火			演1面接	
4	日					4	水			↓	
5	月					5	木			演2面接	面接
6	火					6	金				
7	水					7	土	集中講義			
8	木					8	日	補講期間			
9	金					9	月				
10	土					10	火				
11	日					11	水				
12	月	↑				12	木				
13	火	学校閉鎖				13	金				
14	水					14	土			桐朋祭(準備・前夜祭)	
15	木					15	日			桐朋祭	
16	金					16	月		敬老の日	桐朋祭	
17	土					17	火			桐朋祭(片付け)	
18	日					18	水				
19	月					19	木				
20	火					20	金				
21	水					21	土	↑	AOI期入試		後期授業開講
22	木					22	日	履修登録期間			
23	金					23	月			通常授業日(秋分の日)	
24	土			オープンキャンパス		24	火		学内演奏会		
25	日					25	水				
26	月					26	木				
27	火			八ヶ岳合宿		27	金				
28	水			↓		28	土				
29	木					29	日				
30	金					30	月				
31	土		海外研修旅行								

10月					11月						
日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻	日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻
1	火			都民の日		1	金				
2	水			演1WS(S)		2	土				
3	木					3	日		文化の日	推薦入試	
4	金					4	月			↓	
5	土		日本音楽演奏会			5	火			演2試演会①(S)	
6	日			↓		6	水				
7	月					7	木				
8	火					8	金				
9	水					9	土				
10	木					10	日		推薦・社会人I期入試		
11	金					11	月			↓	
12	土					12	火			専演試演会B	
13	日					13	水				
14	月			通常授業日(体育の日)		14	木				
15	火					15	金				
16	水					16	土				
17	木		研究生演奏会			17	日				
18	金					18	月			↓	
19	土					19	火			演2試演会②(V)	
20	日					20	水		創立記念日		
21	月				コンサートステージング(ライブ)	21	木				
22	火					22	金				
23	水					23	土		勤労感謝の日		
24	木					24	日				
25	金					25	月			↓	
26	土					26	火			演2試演会③(M)	
27	日					27	水		定期演奏会		
28	月			専攻科説明会		28	木		↓		
29	火					29	金				
30	水					30	土				
31	木		公開講座								

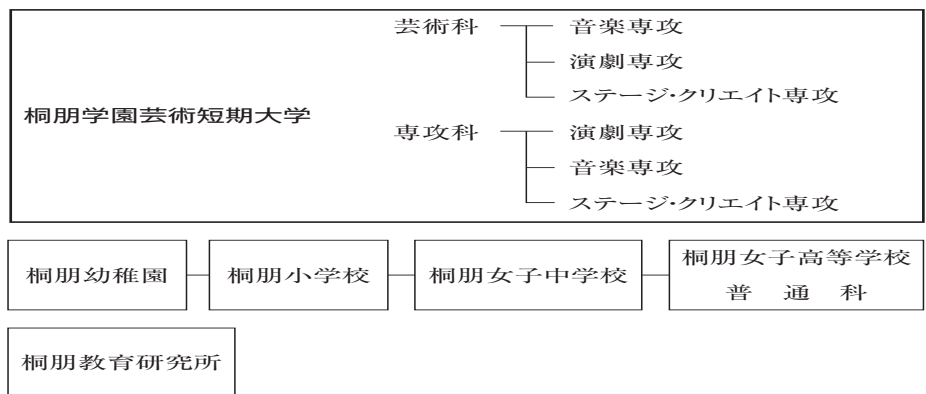
12月					1月						
日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻	日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻
1	日					1	水			元 日	
2	月					2	木				
3	火		学内演奏会	↓		3	金	↓			
4	水					4	土				
5	木		専音学内演奏会リハーサル			5	日				
6	金		↓			6	月			授 業 開 始	
7	土		オープンキャンパス	演1演技発表会		7	火				
8	日			↓		8	水				
9	月					9	木				
10	火					10	金				
11	水					11	土				
12	木		専音学内演奏会			12	日				
13	金		↓			13	月			成 人 の 日	
14	土					14	火				
15	日					15	水				
16	月					16	木				
17	火					17	金				
18	水			年内授業終了		18	土				
19	木			専攻科I期入試		19	日				
20	金	↑ 補集中講義 講義期間				20	月				
21	土			大 掃 除		21	火	↑		専演修了公演	
22	日			大掃除(照明)		22	水	後 期 試 験 期 間		レポ ー ト 提 出	
23	月		冬期講習	天皇誕生日		23	木			レポ ー ト 提 出	
24	火		↓			24	金				
25	水					25	土		実技試験(Pf)		
26	木					26	日				
27	金					27	月	↓	実技試験(管)	後期授業終講	↓
28	土					28	火		実技試験(V)		
29	日	↑ 学校閉鎖				29	水			実技試験(歌唱個人レッスン)	
30	月					30	木		実技試験(弦・Gu・日)		
31	火					31	金		実技試験(副科V)		

2月					3月						
日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻	日	曜	全専攻	音楽専攻	演劇専攻	SC専攻
1	土		実技試験(副科Pf)			1	土			一般入試	
2	日		AOⅡ期:一般A・ 社会人Ⅲ期入試			2	日				
3	月					3	月			演2卒業公演③	
4	火					4	火				
5	水					5	水				
6	木		研究生修了演奏会			6	木			↓	
7	金		↓			7	金			海 外 研 修 旅 行	
8	土					8	土				
9	日					9	日				
10	月					10	月				
11	火			建 国 記 念 の 日		11	火				
12	水					12	水				
13	木					13	木				
14	金					14	金				
15	土					15	土				
16	日					16	日				
17	月			演2卒業公演①②		17	月			↓	↓
18	火					18	火				
19	水					19	水			卒 業 ・ 修 了 式 / 教 育 職 員 免 許 状 授 与 式	
20	木		卒業・修了演奏会			20	木			専攻科Ⅱ期入試	
21	金					21	金			春 分 の 日	
22	土					22	土		一般B・社会人Ⅲ期入試		
23	日					23	日				
24	月		オペラ実習	↓		24	月				
25	火		↓			25	火				
26	水					26	水				
27	木					27	木				
28	金					28	金				
						29	土				
						30	日				
						31	月				

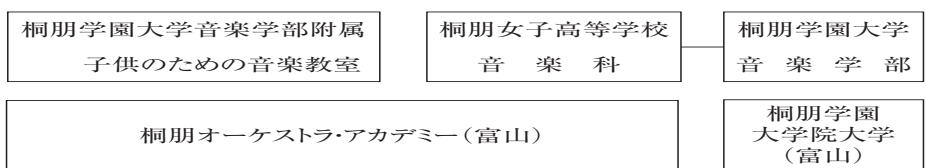
1940年	山下亀三郎氏の献金により財団法人山水育英会が設置され、本学設立の基礎がつくられた。
1941年 3月	山水育英会を母体として、本学所在地に山水高等女学校を設立する。(他に府下北多摩郡国立町168に山水中学校)
1947年 4月	終戦によって山水育英会は東京教育大学(当時は文理大・高師)に経営を移管、同大学に深い関係をもつ財団法人桐朋学園に改編される。
1948年 4月	新学制による桐朋女子高等学校(普通科)・同中学校が併置。
1951年 3月	私立学校法の施行に従って、財団は学校法人となる。
1952年 4月	高校に音楽科が付設される。
1955年 4月	短期大学音楽科ができ、一方普通科には小学校・幼稚園が設置される。
1961年 4月	音楽科に4年制大学(桐朋学園大学音楽学部)が設立される。
1964年 4月	桐朋学園大学短期大学部(文科・音楽科)が設立される。
1966年 4月	短期大学部の音楽科が廃止され、芸術科(音楽専攻・演劇専攻)として再編成される。
1968年 4月	専攻科演劇専攻が設置される。
1988年 4月	文科に日本文化・欧米文化の専攻課程を設置する。
1994年 4月	専攻科に音楽専攻、地域文化研究専攻を設置する。
2004年 4月	名称を桐朋学園芸術短期大学に変更し、芸術科に新たにステージ・クリエイト専攻を設置する。
2005年 9月	文科を廃止する。
2006年 3月	専攻科地域文化研究専攻を廃止する。
2006年 4月	専攻科にステージ・クリエイト専攻を設置する。

学校法人 桐朋学園の機構

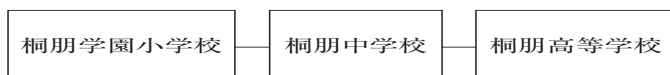
1 女子部門 (調布市)



2 音楽部門 (調布市・富山市)



3 男子部門 (国立市)



1 建学の精神・ 教育目標

一人ひとりの人格を尊重し、自主性を養い個性を伸長する。1947年、高名な哲学者であり、戦後日本の教育改革の担い手であった、東京文科大学の務台理作学長による、この教育理念が桐朋学園の教育の基本に据えられた。以降、その人間教育の場で実践され力強く発展し、桐朋学園における教育の共通の基盤として継承されてきた。同時に、桐朋学園の特色である専門的な高等教育としての芸術教育を展開。「芸術文化の創造と発展に寄与しうる創造的な人材の育成」を目標とする教育活動を行っている。

2 音楽専攻の 教育

音楽専攻は、音楽に関わる専門教育その他を通して、豊かな感性を培い、職業および人間形成に必要な能力の育成をめざしている。徹底した実技指導と、少人数クラス制のきめ細かな講義により、幅広い分野で活躍する人材を送り出すことを目標としている。

ディプロマ・ポリシー

- (1) 音楽をはじめ芸術の表現・創造活動の意義、および文化の諸相について理解し、創造的表現の実現に不可欠な幅広い教養と豊かな音楽的経験を有している。(知識・理解)
- (2) 音楽表現に同時代から求められているものを多面的に考察し、つねに最善の選択を導く判断力を身につけている。(思考・判断)
- (3) 同時代の芸術表現・創造行為の動向に関心をはらい、その世界的規模の動きにみずからも参入する強い意欲をもっている。(関心・意欲)
- (4) 多様な価値観のなかで音楽するとき、他者との協働に積極的にかかわり、相互理解と信頼をもって、豊かな文化の創出と活力ある社会の構築に努める態度を有している。(態度)
- (5) 音楽による表現行為と創造活動の意義および可能性を十分に伝えることのできる高い演奏能力を有している。(技能・表現)

カリキュラム・ポリシー

音楽専攻は、ピアノ、声楽、管弦、日本音楽の四専修から構成され、芸術全般にわたる教養とともに、音楽に関する幅広い知識と技能の教授を通して、表現力にすぐれた音楽家ばかりでなく、繊細な感性と柔軟な思考力を備えて社会のさまざまな分野で活躍しうる有為な人材の育成をめざしている。この教育理念を実現するために、教育課程を編成している。

- (1) 音を読み取れること
一人ひとりの主体性を尊重した個人レッスンを中心に、楽譜（音）にこめられた意味を読み取り、それらを各自の存在性を通して表現する力を養う。
- (2) 音楽表現に身体性を意識できること
高い演奏能力を得るためだけでなく、各自の音楽表現をより説得力あるものにする自在な身体性を身につける。
- (3) 音に合わせられること
既存のジャンルや概念にとらわれず、さまざまなアンサンブルに柔軟に対応することのできる高い合奏能力とコミュニケーション能力を獲得する。

アドミッション・ポリシー

- (1) 入学後の修学に必要な基礎的学力と知識を有している者。(知識・理解)

3 演劇専攻の教育

- (2) ものごとを多面的かつ論理的に思考し、みずからの責任で判断できる者。(思考・判断)
- (3) 芸術のみならず社会の諸事象に関心を持ち、社会に積極的に参加する意欲をもっている者。(関心・意欲)
- (4) 他者と積極的にかかわり、相互理解と信頼をもって、それぞれの課題を果たしていく態度を有している者。(態度)
- (5) 入学後の修学に必要な専修領域の演奏能力と表現力を有している者。(技能・表現)

演劇専攻は、幅広い教養と高度な専門性を兼ね備えた専門俳優の育成と研究を目的とし、演劇芸術における表現の基本を体得することを目標としている。

ディプロマ・ポリシー

- (1) 演劇・舞台表現における様々な表現方法とそのねらいの違いを習得しており、さらにそれらに関連づけて考えることができ、豊かな人間性と社会性を支えるための演劇的経験・教養を身につけている。(知識・理解)
- (2) 自ら設定した課題について、演劇領域、ダンス・歌唱領域の表現手段を用いて他者と考察を深めていくことができる。(思考・判断)
- (3) 社会における自分の存在意義、自己表現の意味を自覚することができ、演劇的な知、経験を自ら実践する力へと高めることができる。(関心・意欲)
- (4) 集団の中で協働を高める役割をはたすことができ、演劇的な技術、知をもって地域社会および国際社会のニーズに応えることができると同時に、生き生きとした文化や生き生きとした社会を作ることにも貢献できる。(態度)
- (5) 他者の表現意図、発言に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や演劇的表現によつて的確に伝えることができる。(技能・表現)

カリキュラム・ポリシー

演劇専攻は専門俳優の育成と研究を目的とし、演劇芸術における表現の基本を体得することを目標としている。そのため、以下の三項目を軸として2年間の教育課程を組んで具体化していく。

- (1) 戯曲がよめること
本を読む力——言葉を演劇にしていくための想像力を養う。
- (2) からだを鍛えること
身体の訓練——想像したことを実際の動きに変えられる身体能力を磨く。
- (3) 集団行動が取れること
アンサンブルを作る力——チームで作る舞台芸術に必要な協働の精神を養う。

アドミッション・ポリシー

- (1) 俳優または表現者としての理解力があり、適性があると自認する者。(知識・理解)
- (2) 心身ともに健康で実技訓練を積極的に取り組むことができる者。(思考・判断)
- (3) 入学後の勉学について明確な志向と熱意をもつ者。(関心・意欲)
- (4) 協調性があり、集団での創造活動に積極的に参加できる者(態度)
- (5) プロの俳優または表現者(声優、ダンサー等)を目指し、その技能習得に必要な心身の素養をもつ者。(技能・表現)

4 ステージ・ クリエイト 専攻の教育

ステージ・クリエイト専攻は、桐朋学園芸術短期大学の発足に合わせて新設された。ここでいう「ステージ」とは「舞台」という意味にとどまらず、音楽や演劇などが上演される「場」をはじめ、芸術文化活動のさまざまな「場」のことを指している。本専攻は、芸術文化活動の「場」を創造し発展させていくクリエイター（舞台制作者・劇場運営者・音楽や映像制作者・創作者・表現活動者など）やプレゼンテーション力豊かな社会人の育成をめざしている。芸術運営・創作を多角的に学ぶほか実技も修得。プロデュースやマネジメントの「実戦力」を学ぶことにより、創造活動におけるキーパーソンとして、活躍の場は大きく広がるであろう。

あらゆる創造活動の企画制作をはじめ、劇場・ホールの運営、地域における芸術運営など、実社会のさまざまな現場で芸術文化に対する豊富な知識と技能と理解を有する制作者・運営者・スタッフが求められている。こうした現場においては、みずからが実技・実習の経験を積んだうえで芸術表現者への理解をもちつつ活躍できる人材は貴重な存在である。舞台創造を、理論とともに実技までも学ぶ本専攻は、あらゆる大学・短大のなかでも希少な存在と言える。

本専攻の教育内容の大きな特色は「実技の修得ができること」、「多くのステージを鑑賞し、舞台裏や現場にも出向くこと」、「音楽・演劇両専攻との連携により上演と上演にいたる舞台創造のさまざまな過程を体験的に修得できること」。芸術に関わる講義科目が充実していることはもとより、コミュニケーションに関する科目として日本語・英語・コンピュータ等の演習も修得できる。「音楽」「演劇」という桐朋ならではの伝統と実績を最大限に生かしつつ、「ステージ・クリエイター」育成のために他に類を見ない教育の実践をめざしているのが、本専攻である。

そのため、専攻の教授・講師陣も第一線で活躍している方ばかりであり、日本の芸術文化の「いま」を見極め、「いま」最も輝いている表現の現場に出会い、学生たちの創る未来の「いま」への大きな手助けをしている。卒業後も、進路に応じて芸術表現、運営、制作、企画などさまざまな現場へ架け橋となっていくステージ・クリエイト専攻である。

総合ガイダンスセンター

Toho Gakuen College of Drama and Music

総合ガイダンスセンターは、大きく二つの役割を担っている。

一つは、本学と社会をつなぐ架け橋としての役割である。インターネット、雑誌はじめ紙媒体など様々なコミュニケーションツールを活用して広く社会へ情報発信し、学外とのコミュニケーションの疎通を行っている。その一例としては、演劇専攻、音楽専攻両専攻において実施される様々な劇上演、演奏会、演技公開等の学内イベントの告知や入試広報などがある。

また、在学生や教職員との情報共有を強化し、大学の価値向上を目指している。

もう一つの役割は、在学生等のキャリア支援である。具体的な就職活動に関わる支援及び、キャリアカウンセリングを行う。（詳細はP.34参照）

総合ガイダンスセンターは短大旧館2階教学課の隣にあるので、活用してほしい。

1 教育課程

教育課程とは、本学の教育目標を達成するために、その教育内容を、必要単位数の設定および学修時期の適切な配置もふくめ、系統的にまとめたものである。

本学の教育課程は、基礎教養科目と専攻科目によって構成されている。

基礎教養科目は、各専攻の枠を越え、共通して必要となる基礎的知識や技術の修得を目的とした科目であり、3つの区分（キャリア・デザイン、芸術文化、外国語）から成る。専攻科目は音楽、演劇、ステージ・クリエイト各専攻の理念目的達成のために開講する専攻独自の科目である。それぞれの現場に直結した実践的な教育内容になっており、専門的内容をより深く学ぶことができる。

2 単位

- (1) 授業科目を通年または前・後期履修し、その試験等に合格した者には所定の単位を与える。
- (2) 1単位は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、そのうち大学における授業時間数は、学則第34条に、講義・演習・実習・実技等について各々定められている。
- (3) 各授業科目の単位数は、『講義概要 別表』に記されている。
- (4) 各学期の履習登録単位数は20単位を上限とする。

3 学修の評価

- (1) 受験資格
出席が授業時数の3分の2に満たない場合および授業料を期限までに納入しない場合は、原則として受験資格を失う。
- (2) 成績の認定基準
成績は100点を最高とし、50点以上を認定、50点未満を不認定とする。また、試験を無断で欠席した場合は不認定とする。

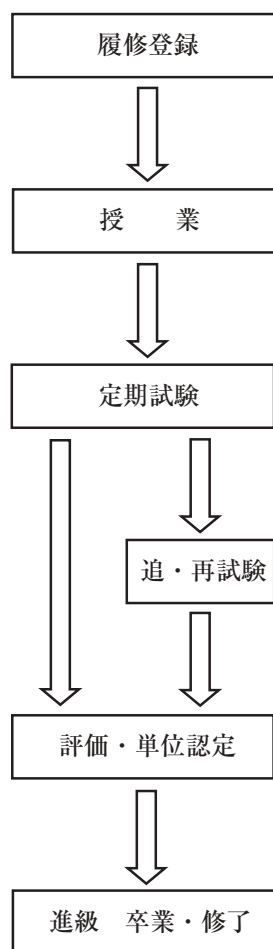
(3) 評価の基準

学科成績	実技成績	評価
100—80	100—80	A
79—60	79—65	B
59—50	64—50	C
50未満	50未満	D

4 卒業の要件

- (1) 本学を卒業するためには、2年以上在学し、学則第37条に定めるように62単位以上を修得しなければならない。
- (2) 本学を卒業するための最低修得単位数は、音楽専攻62単位（2010年度以前入学生は64単位）、演劇専攻62単位、ステージ・クリエイト専攻62単位であるが、履修条件は専攻によって異なる。（『講義概要』別表6「卒業の要件」参照）。

5 履修登録から 単位認定まで



- (1) 履修登録について
- (2) 既修得単位の認定について
- (3) 単位互換について

- (4) 校時について
- (5) 休講について
- (6) 補講について
- (7) 集中講義について
- (8) 教科書・教材の購入について

- (9) 定期試験について
- (10) レポート提出について
- (11) 実技試験について

- (12) 追試験について
- (13) 再試験について
- (14) 追・再試験の受験手続きについて

- (15) 成績の通知について

(1) 履修登録について

①履修登録はマークシート用紙を使用して行う。

2013年度 履修科目登録票（前期・後期）（○で囲む）

履修科目登録用紙 ①

【記入上の注意】
 ①履修科目の登録用紙は、折り曲げたり、汚したりすると正しいデータが入力されないため、注意すること。
 ②マークの記入は、必ずH8の鉛筆を使用して、○からはみ出さないように行うこと。
 ③マークの記入を訂正する場合は、プラスチックの消しゴムで完全に消すこと。
 ④履修科目登録用紙に記入する前に学生定額・日課表等をよく読んで履修計画を立てた上で決定すること。

良い例 悪い例

学籍コード (学生証番号)	学科専	芸術科・専攻科 (○で囲む)
		専攻 年 番
	氏名	
	生年月日	
	昭和・平成	年 月 日

	1時限	2時限	3時限	4時限	5時限																																																																																																																																																																																																																																																										
月曜日	<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																		
火曜日	<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																		
水曜日	<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																		
木曜	<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																			<table border="1"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>																																																		

- ②「履修科目登録用紙」(マークシート用紙)は学籍番号、氏名、指定した科目コードを登録票に従って、「記入上の注意」をよく読みマークし、提出すること。えんぴつで記載し、同紙は汚さない・折らないこと。
- ③履修科目の「登録用紙」提出後、科目の追加、取消および変更は原則として認めない。また指定期日までに提出しなかった学生は受講資格が取り消される場合がある。登録までの期間が短いので、ガイダンスには必ず出席し、『講義概要』を参考に早めに履修計画を立てること。
- ④履修の上限は各学期20単位を基準として登録すること。(ただし教職科目はのぞく)

⑤音楽専攻実技レッスン時間登録票について

音楽専攻の実技レッスンは、担当教員と個別に時間を設定するので前述の履修登録方法とは異なり、レッスン時間決定後、所定の用紙に記入をし、担当教員の確認印をもらい、4月の開講後2週間以内に教学課へ提出すること。

音楽専攻実技レッスン時間登録票		平成 年 月 日
音楽1年1番		
きり	ともこ	
桐	朋子	
第一実技	<input type="checkbox"/> ピアノ <input type="checkbox"/> 声楽 <input type="checkbox"/> 管楽器 <input type="checkbox"/> 弦楽器 <input type="checkbox"/> ギター <input type="checkbox"/> 日本楽器 曜日 時 分～ 時 分 (時限) _____	
	担当教員名 _____ 確認印 <input type="checkbox"/>	

第二実技	<input type="checkbox"/> ピアノ <input type="checkbox"/> 声楽 <input type="checkbox"/> ヴァイオリン <input type="checkbox"/> ヴィオラ <input type="checkbox"/> チェロ 曜日 時 分～ 時 分 (時限) _____	
	担当教員名 _____ 確認印 <input type="checkbox"/>	

副科実技	<input type="checkbox"/> ピアノ <input type="checkbox"/> 声楽 <input type="checkbox"/> ヴァイオリン <input type="checkbox"/> ヴィオラ <input type="checkbox"/> チェロ 曜日 時 分～ 時 分 (時限) _____	
	担当教員名 _____ 確認印 <input type="checkbox"/>	

上記票中の該当する□に○印をつけること、(時限)の欄にはレッスン時間が含まれる時限(「(4)校時について」参照)を記入すること。

なお第二実技の履修を希望する場合は上記時間登録票のほかに第二実技履修申込書を提出し、履修料を別途納入すること。

⑥演劇専攻の歌唱(個人レッスン)は、担当教員と個別に時間を設定するので前述の履修登録方法とは異なる。

所定の受講希望票に記入し、前期・後期の開講後2週間以内に演劇研究室へ提出すること。また、上記受講希望票のほかに教学課に履修申込書を提出し、履修料を別途納入すること。

(2) 既修得単位の認定について

既修得単位とは、本学に入学する前に他の短大又は大学等において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む)をいう。これら入学前の既修得単位について、本学における授業科目の履修により修得したものとしてみなすことを既修得単位の認定という。(短期大学設置基準第16条)

本学では各専攻ごとに既修得単位の限度を決めている。いずれも、専攻科目を除き、音楽専攻14単位、演劇専攻12単位、ステージ・クリエイティブ専攻6単位としている。

既修得単位の認定を希望する学生は、教学課にある所定の用紙に記入し、在

籍した大学等の単位修得証明書あるいは成績証明書を添えて4月の開講後1週間以内に提出すること。なお、この認定は1年次のみである。

(3) 単位互換について

本学は東京都私立短大協会の単位互換事業に参加しており、学生の、この事業に参加する短期大学が開放している授業科目の履修に便宜を図っている。また、一定の条件の下で、その授業科目の履修による取得単位を、本学における修得単位と同等に取り扱うことを行っている。

単位互換事業にかかる履修については、年度の当初のガイダンスにしたがって、所定の手続きをしなければならない。また、単位互換事業にかかる修得単位数と本学卒業要件単位数との関係は、各専攻ごとに定められているので、学生はそれに留意し、その定めに則していく必要がある。

(4) 校時について

本学の校時は年間を通して次のとおりである。

第Ⅰ時限	8:40～10:10
第Ⅱ時限	10:20～11:50
第Ⅲ時限	12:40～14:10
第Ⅳ時限	14:20～15:50
第Ⅴ時限	16:00～17:30

(5) 休講について

学校行事や授業担当者のやむを得ない事情により授業が行えない場合は掲示および本学ホームページで連絡する。

(6) 補講について

休講などによる、授業の未消化や授業時間数の不足を補うために前期、後期のそれぞれ決められた期間内に授業を行う場合がある。

補講を行う科目、期間内の日程などについてはそれぞれの期間の2週間前までに掲示で連絡する。

(7) 集中講義について

授業科目によっては通常の週1回という形をとらずに前期、後期の決められた期間内に集中して授業を行うものがある。〔『講義概要』参照〕

期間内の日程などはそれぞれの期間の2週間前までに掲示で連絡する。

(8) 教科書・教材の購入について

①教科書の購入

『講義概要』に使用する教科書名が記載されている。購入については、研究室で購入できる場合と、指定書店において、学生が各自購入する場合とがある。購入についての指示は掲示をするので注意すること。

②演劇専攻で使用する袴、扇、シューズ等の購入

演劇専攻の学生は授業料と一緒に教材費を納入しているため、袴、狂言扇、日舞扇、タップシューズ、メイク道具一式、舞台製作の道具類等は本学で一斉に購入をしている。袴は「狂言」の授業時間に採寸し仕立てもらう。

なお、会計の都合上、タップシューズの代金は、2年前期の授業料と一

緒に納入することになる。そのため、1年次に退学する学生には、退学時にその金額の追加徴収があるのでそのつもりでいること。

(9) 定期試験について

定期試験は、原則として、前期・後期とも行事予定表に示された試験期間中に、通常授業と同じ時間帯（コマ）で実施する。

試験の有無、方法等については、試験期間の2週間前までに掲示発表するので、必ず確認すること。

なお、追試験・再試験については後述（12）、（13）を参照のこと。

(10) レポート提出について

筆記試験に替えて、レポート提出を課す科目については次のとおりとする。

① 授業期間中に担当教員へ提出する場合

教員の指示した様式に従い、決められた期日に提出すること。

② 指定期日に教学課へ提出する場合

教員に指示された用紙を使用する。必要事項を記入した「レポート提出票」を上につけ、ホチキスで綴じて提出する。（「レポート提出票」は教学課に用意してある。ホチキスは縦書きの場合、原則として右側を2ヶ所、横書きは上部を2ヶ所で留めること。）

提出の際、レポートと引換えに、教学課受領印を押した「レポート提出票（本人控）」が手渡されるので各自保管すること。

郵送や宅配便での提出は、教員あて教学課あてを問わず一切認めない。また、提出期限に遅れた学生については、担当教員の了解を得られた場合のみ、追試験手続きの上、提出を認める場合がある。

提出されたレポートは原則として返還しないので必要があればコピーをしておくこと。

(11) 実技試験について

音楽専攻の実技試験については、試験期間とは別の日程（『行事予定表』参照）で実施する。詳細については適宜掲示で指示する。なお試験に先立って「レッスン受講票」の提出を求めるが、指定期間内に提出しなかった学生は追試験扱いとする。

演劇専攻の実技試験は、特に指定のない限り試験期間中の通常のコマで行う。

歌唱の個人レッスン、グループレッソンの試験は、試験期間とは別の日程で実施することがある。詳細については適宜掲示で指示する。

なお、歌唱の個人レッスンについては、試験に先立って「レッスン受講票」の提出を求めるが、指定期間内に提出しなかった学生は追試験扱いとする。

(12) 追試験について

病気その他やむを得ない理由で定期試験を受けられなかったり、レポートを提出できなかった場合は担当教員が許可した場合について追試験を受けることができる。その日時は教員が指定する。学生からの日時変更希望は一切受け付けない。

(13) 再試験について

定期試験の結果不認定となった科目について、担当教員の許可した場合のみ、再度試験を行う。

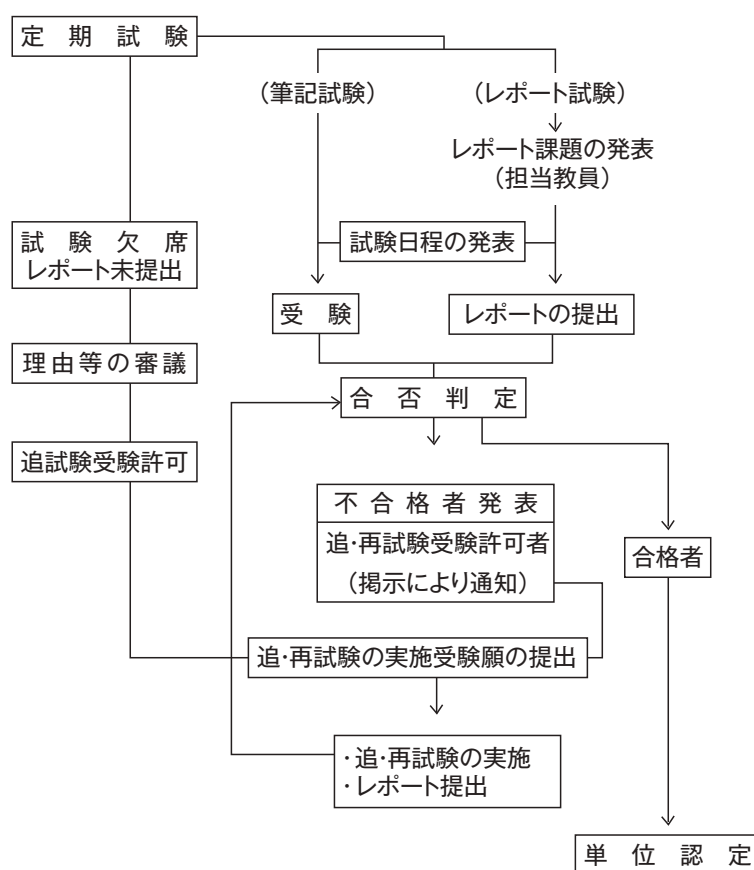
再試験での認定の評価は「C」とする。

(14) 追試験・再試験の受験手続きについて

教学課で「追・再試験願」と「受験手数料の納入用紙」を受け取り、必要事項を記入し、追試験・再試験手数料（1科目2,000円）を納入する。

(15) 成績の通知について

前期成績表は後期開講時に教学課で配付する（ただし9月に行われる集中講義の成績は除く）。1年終了時の成績表は2年次前期開講時に、卒業・修了時の成績表は卒業・修了式に配付する。



6 教育職員免許状「音楽」の取得について

- (1) 音楽専攻では、一定の条件のもとに教科に関する科目および教職に関する科目等を履修して必要単位を修得することにより中学校教諭2種免許状「音楽」を取得することができる。
- (2) 免許状の取得を希望する者は、卒業要件を充たした上で、教職に関する科目24単位以上、教科に関する科目24単位以上、および専攻教養科目を修得しなければならない。これは、「教育職員免許法施行規則」に定める基礎資格および授業科目・単位数に基づいて本学が定めたものである。（『講義概要』別表7参照）

〈参考〉「教育職員免許法施行規則」に定める基礎資格および教科に関する科目と最低修得単位数、教職に関する科目と最低修得単位数は次の通りである。

A. 基礎資格

大学に2年以上在学し、62単位以上を修得すること（本学所定の課程を修了していること）。

B. 教科に関する科目（音楽）及び最低修得単位数

• ソルフェージュ	1 単位
• 声 楽（合唱及び日本の伝統的歌唱を含む）	1 単位
• 器 楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む）	1 単位
• 指揮法	1 単位
• 音楽理論・作曲法（編曲法を含む）及び音楽史 （日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む）	1 単位
	計10単位以上

C. 教職に関する科目及び最低修得単位数

• 教職の意義等に関する科目	2 単位
• 教育の基礎理論に関する科目	4 単位
• 教育課程及び指導法に関する科目	4 単位
• 生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目	4 単位
• 総合演習（2009年度以前入学生のみ）	2 単位
• 教職実践演習（2010年度以降入学生のみ）	2 単位
• 教育実習（事前および事後の指導）	5 単位
• 教育実習	
	計21単位

D. 教科又は教職に関する科目

計 4 単位

- (4) 免許状を取得するには、1年次より2年次にかけて履修する「教育実習」をはじめ、集中講義による履修等の学習の負担が大きく、また、費用もかかるので、安易な気持ちでの教職課程の履修はすすめられない。下記の(7)「教育実習Ⅱ履修の条件について」(8)「教育実習Ⅱにかかわる出欠の取扱いについて」および(10)「受講料について」の項をよく読むこと。
- (5) 免許状は、本学在学中に、必要な資格・要件を充たした者について、所轄官庁に申請して取得することとなる。申請にかかわる事務は大学が一括して行うので連絡や指示をきちんと守ること。
- (6) 本学における中学校教諭2種免許状取得の要件は『講義概要別表7』のとおりである。
- (7) 「教育実習Ⅱ」履修の条件について
「教育実習Ⅱ」を履修することのできる者は、次のとおりである。
- ① 将来、教職に就くことに、確固とした意志がある者。
 - ② 第1年次に開設されている教職に関する科目・教科に関する科目の単位を修得した者。
 - ③ 「音楽科教育法」の評価がB以上の者。なお、「第二実技（ピアノ）」「副科実技（ピアノ）」の評価がC以下の者は、教職委員会において不適格とする場合がある。
 - ④ 当該年度中に、当該免許取得の要件の全てを充足し得る見込みのある者。
 - ⑤ 教育実習に関するガイダンス・「教育実習Ⅰ」（事前指導）の全てに怠り

なく出席した者。

- ⑥ 本学の指示する諸規則及び実習校・当該教育委員会の定める諸規定に違反した者、学業成績および就学態度等が著しく悪い者、介護等体験において教職履修の適格性欠如と判断される者については、教職委員会において不適格とする場合がある。
- ⑦ 教育実習に関する諸連絡、諸手続き等を定められた期間内に行わず、再度にわたり注意を受けた場合も、教職委員会において不適格とする場合がある。

(8) 「教育実習Ⅱ」にかかわる出欠の取扱いについて

「教育実習Ⅱ」にかかわる出欠の取扱いは、次の場合に限り公認欠課とする。

- ① 指定された教育実習期間。
- ② 実習校及び当該教育委員会より事前に招集を受けた日。
- ③ 健康診断について、日時、場所などが指定された場合。
- ④ 実習校が遠隔の場合は、教育実習期間の前後1日に限り、期間に加えることができる。

〔公認欠課の手続き〕

教学課において、所定の願書に必要事項を記入して受付印を受けた後、当該授業科目担当教員に提出する。

(9) 介護等体験について

1998年度入学生より、小学校及び中学校教諭の普通免許状の取得要件として「介護等体験」が義務づけられている。

介護等体験とは、18歳に達した後、7日間を下らない範囲内において盲学校、聾学校もしくは特別支援学校または社会福祉施設その他の施設において行う介護等の体験実習を指す。

なお、介護等体験期間にかかわる出欠の取扱いは公認欠課とする。手続きは前項の「教育実習Ⅱ」に準ずる。

(10) 受講料について

教職に関する科目を受講しようとする者は、受講願を教学課に提出し、受講料を納入すること。

また、介護等体験のうち、社会福祉施設での体験については実費を徴収する。(2012年度、東京都・神奈川県の場合1日あたり2,000円、千葉県・埼玉県の場合1日あたり1,500円)

教科	音楽
教職に関する科目受講料	80,000円
介護等体験	10,000円 (東京都・神奈川県) 7,500円 (千葉県・埼玉県)
教育実習を除いた科目受講料	45,000円

7 科目等履修生 について

- (1) 科目等履修生とは、本学の学生以外の者で1つまたは複数の授業科目を履修する者のことをいう。(短期大学設置基準第17条)
- (2) 科目等履修生として本学の授業科目の履修を希望する者がある時は、学則第52条に基づき認められることがある。
- (3) 履修できる授業科目については、募集要項と一緒に配付する。
- (4) 詳しくは、P.45「科目等履修生規程」を参照すること。

8 研究生について

- (1) 研究生とは、本学専攻科音楽専攻及び専攻科演劇専攻を修了した者で、さらに専修実技等の授業科目を履修する者のことをいう。本学では科目等履修生に準ずる。
- (2) 詳しくは、P.46以降の「音楽専攻研究生規程」及び「演劇専攻研究生規程」を参照すること。

9 海外研修旅行について

(1) 音楽専攻

1999年度より始まった音楽専攻の海外研修旅行は、今年で15年目を迎える。この研修旅行は欧米の音楽大学等での実技レッスン研修を中心に据えたプログラムから成っている。

これまでに実施した研修機関は、米国ボストン大学芸術学部音楽科、英国トリニティ音楽大学(ロンドン)、ドイツ国立フライブルク音楽大学、ベルギー王立メッヘレン・カリヨン専門学校、ポーランド国立ショパン音楽アカデミー、そしてハンガリー国立リスト音楽院、ケチケメート・コダーイ音楽教育研究所、オーブダ民俗音楽学校である。以下は年度別の訪問国および研修機関等の一覧である。

実績年度	訪問国	研修機関	研修分野
1999年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/声楽
2000年度	ドイツ/フランス	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/声楽
2001年度	ハンガリー / オーストリア	国立リスト音楽アカデミー	ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/声楽
		国立コダーイ音楽教育研究所	コダーイ音楽教育システム入門
2002年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/声楽
	アメリカ	ボストン大学芸術学部音楽科	フルート
2003年度	英国 / ベルギー / フランス	トリニティー音楽大学 (ロンドン)	声楽/ピアノ/室内楽/ヴァイオリン ヴァイオラ/フルート/クラリネット
		王立カリヨン専門学校(メッヘレン,ベルギー)	カリヨン体験ワークショップ
2004年度	ハンガリー/スロヴァキア/ オーストリア/チェコ	国立リスト音楽アカデミー	声楽/ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/チェロ
		国立オーブダ民俗音楽学校	マジャール伝統音楽ワークショップ
2005年度	ドイツ/イタリア	国立フライブルク音楽大学	ピアノ/室内楽/ヴァイオリン/声楽/その他 参加学生の専修ジャンルに配慮
2006年度	ポーランド/ チェコ/ドイツ	国立ショパン音楽アカデミー	ピアノ/フルート/その他
			参加学生の専修ジャンルに配慮
2007年度	ハンガリー / ルーマニア	国立リスト音楽アカデミー 同アカデミー民俗音楽科	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他 マジャール伝統音楽ワークショップ
2008年度	ドイツ/フランス	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2009年度	ポーランド/エストニア/ ロシア/フィンランド	国立ショパン音楽アカデミー	ピアノ/フルート/その他
			参加学生の専修ジャンルに配慮
2010年度	ドイツ/オーストリア	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他
2011年度	チェコ/オーストリア/ ハンガリー	芸術アカデミー	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/ チェロ/その他
2012年度	ドイツ	国立フライブルク音楽大学	声楽/ピアノ/ヴァイオリン/フルート/その他

本場の風土に身を置き現地で経験豊かな教授陣のレッスンに接すること、加えてそこに学ぶ各国の学生との積極的な交流は、単に音楽研鑽という視点に留まらず、国際感覚を磨く上でも貴重な体験となっている。

さて今年度は、リューベック（ドイツ）での実技研修を中心に据えたプログラムを予定している。日々研鑽を積んでいる実技（ソロやアンサンブル）の研修を本場において体験し、深めることを目的としている。

本場ヨーロッパの風土に身を置き、現地で経験豊かな教授陣のレッスンに接することは、音楽専攻の学生にとって貴重な体験になるにちがいない。参加学生は「海外特別演習」（日程は掲示）を履修すること。グループ旅行ゆえ、団体行動への自覚が重要となるので、無断欠席、遅刻は認めない。場合によっては参加を取り消すこともある。

(2) 演劇専攻

演劇専攻の創設者の一人である故千田是也教授の日中演劇交流への貢献により、1982年に中国演劇研修旅行が実現して以来、演劇専攻では毎年10日間程度の日程で海外研修旅行を実施している。

研修では、演劇大学など相手国の演劇高等教育機関を訪問し、現地の学生とともに授業やワークショップに参加するなどして、体験を通じてその国の演劇の特色を理解している。近年、交流を行った機関としては、イギリスの王立演劇院（RADA）、ドイツのエルンスト・ブッシュ演劇学校、オーストラリアのNIDA（国立演劇大学）、北京の中央戯劇学院などがあげられる。本年度は、3月に実施する予定である。

また、近年、ITI-UNESCO（国際演劇協会）、GATS（世界演劇学校連盟）、ATEC（アジア演劇学校教育センター）等が開催する演劇フェスティバルにも積極的に参加している。

本年度のプログラムの詳細については4月以降に発表する。

10 学生による 授業評価 について

本学では前期末に「学生による授業評価」を実施している。これは本学で開設されている授業に対して、学生がどのように評価しているかを、アンケートを行って聞き出していこうというものである。レッスンを含む全授業科目を対象として行われる。

この「学生による授業評価」の目的は、学生から寄せられる、授業に関する率直な意見に耳を傾け、今後のより良い教育内容・教育方法・教育環境を、授業担当教員はもとより全学を挙げて作り出していこうというところにある。

学生からの回答に対しては、本学が委託した学外の専門業者が集計し、統計処理等を施す。そして授業担当教員と本学とが、それぞれに関わる情報を受領する。本学が受領した統計処理結果等については公表し、学生の閲覧にも供している。

1 学生生活

(1) 掲示について

必要な連絡・通知事項は掲示で行うので登下校時に必ず確認すること。よって、何かの提出物について、掲示を見ていなかったと言う理由で、提出を免除されたり、延期を認められたりすることはない。

なお、掲示内容は、原則として掲示してから1週間で全員に周知されたとみなす。

(2) オフィスアワー

授業科目等に関する学生の質問・相談に応じるための時間として、教員があらかじめ示す特定の時間帯（何曜日の何時から何時までなど）のことをオフィスアワーという。本学では、専任教員について年度当初に掲示にてその時間帯を伝える。その時間帯であれば、学生は基本的に予約なしで研究室を訪問することができる。

(3) 学内駐輪について

通学する際に徒歩以外は、電車・バス等の公共交通機関によることを原則としているが、やむを得ず自転車やオートバイで通学する場合は、次の条件で短大駐輪場（短大新館南側）の使用を認めている。

- ① 「駐輪場使用許可願」を教学課に提出し、許可を受ける。
- ② 「駐輪許可証」(ラベル)を発行するので、自転車やオートバイの見えやすい部分に貼る。
- ③ 「駐輪許可証」の効力は、申請年度の年度末までとする。(1年ごとに更新を必要とする)
- ④ 許可なく駐輪している場合は撤去、処分する。

(4) 個人ロッカーについて

本学は、学生に対して個人ロッカーを貸与している。各自の責任で清潔に使用すること。

- ① 各専攻とも1人1ロッカーを貸与するので、鍵は各自で用意する。
- ② 貴重品は楽屋等に置いたままにせず、鍵をかけたロッカーに保管する等、各自で責任を持って管理する。
- ③ ロッカーの上に物を置かない。
- ④ 卒業時は指定する期限(掲示にて連絡する)までに各自私物を整理し持ち帰ること。それ以後残っているものは廃棄処分する。

(5) 会議室の使用について

学生の休憩や談話のための場所として会議室がある。使用に当たっては次のことに注意すること。

- ① 使用時間 8:15~21:30(休日・祝日および長期休暇中は閉鎖)
- ② 飲食はできるが、片付けは各自が責任をもって行うこと。
- ③ マナーを守って、皆が気持ち良く使用できるようにする。
- ④ 本学の会議・行事等で使用できない場合がある。

(6) 学内での飲食の場所について

学内での、飲食できる場所は次のとおりである。片付けは必ず行うこと。

- ① 学生食堂(混雑時の11:00~13:00は持ち込み利用不可)

- ② 2102教室（昼休時11:50～12:40のみ）
- ③ 会議室（利用方法は(5)参照）
- ④ ロビーおよび各階フロアのテーブルが置いてある場所

(7) 環境の保持（施設・備品・ごみ等）について

- ① 学園の施設・備品は大切に扱うこと。もし破損等した場合は、直ちに教
学課に届け出ること。事情によっては弁償を請求することがある。
- ② 教室の備品を移動して使用する場合は、教学課に「備品借用願」を提出
して、許可を受けること。
- ③ ごみは「可燃物」と「不燃物」（ビニール・プラスチック・発砲スチロー
ル等）と「ビン・カン・ペットボトル」に分けて所定のごみ箱に捨て、学
内の美化に努めること。

また、スプレー缶を捨てる場合は必ず、穴を開けてから捨てる。器具は
旧館1階通路と新館地下1階にある。

(8) 喫煙・飲酒について

校舎内・外ともに指定の喫煙場所を除いて全面禁煙である。喫煙場所は新
館2階テラスと新館外階段の灰皿の設置してある場所で、喫煙の際は火の始
末等に十分注意すること。なお、学内での飲酒は禁止である。

(9) アパート等の斡旋について

本学ではアパート等の紹介、斡旋は行っていない。ただし、不動産業者か
らのパンフレット等は教学課窓口横にファイルしてある。

(10) アルバイトについて

本学ではアルバイトの斡旋は行っていない。ただし、企業等からの求人案
内は教学課窓口横にファイルしてある。

アルバイトは学業等に支障のない範囲で行い、求人企業、仕事の内容、給
与等の勤務条件をよく確認し、トラブルのないよう十分注意すること。また
アルバイトで何かおかしいと感じることがあったら、学生・安全対策委員会
に報告すること。

(11) 落とし物・忘れ物の取扱い

キャンパス内で落とし物を拾得したときは、教学課窓口へ届け出ること。
また、落とし物・忘れ物をしたときは、教学課窓口まで問い合わせること。
※持ち主が明らかな場合：呼び出し掲示・電話等で連絡する
持ち主不明の場合：届けられた日から6ヶ月間保管する
(教学課前のガラスケースに展示)

(12) セクシュアル・ハラスメント等の防止について

本学は、大学におけるセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラ
スメント、パワー・ハラスメントおよびその他のハラスメント（以下「セク
シュアル・ハラスメント等」という。）を、学生・教職員一人ひとりの人権
を侵害し、適切な教育環境の場を阻害するものとして捉え、これに対して厳
しい姿勢で臨んでいる。

本学では、常勤・非常勤を問わず、本学に在職する教職員と学生との間、

および本学の学生同士の間には、つねに教育環境上の関係があるものとみなす。よって大学におけるセクシュアル・ハラスメント等は、正課の授業時間中の大学構内における場合にとどまらず、課外活動や学外を含むあらゆる場合のそれを意味する。

1. セクシュアル・ハラスメント等とは

1) セクシュアル・ハラスメント

ア. 学生、教職員または関係者が、意図するか否かにかかわらず、性差別的または性的な言動によって、相手を不快にさせる行為

(例) 性的な噂を流したり、人を傷つける性的な内容の冗談を言ったりすること

性的な文書や画像等の掲示や提示をすること

相手が望まない飲食等にしつこく誘うこと

不必要に身体に触れること

イ. 学生、教職員または関係者が、利益もしくは不利益を与えることを利用して、または利益を与えることを代償として、相手に性的な誘いまたは要求をする行為

(例) 成績評価等と引き換えに、性的要求を迫ること

2) アカデミック・ハラスメント

教育・研究の場において、教職員またはこれに準ずる者が、その地位または職務権限を利用し、これに抗し難い地位にある者に対して、相手によって差別したり、人格を否定したり、必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより、相手方の勉学・研究意欲や研究環境を害する言動または行為

3) パワー・ハラスメント

職場において、教職員またはこれに準ずる者が、その地位または職務権限を利用し、これに抗し難い地位にある者に対して、相手によって差別したり、人格を否定したり、必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより、相手方の就労意欲や就労環境を害する言動または行為

4) その他のハラスメント

学生、教職員または関係者が、他の学生、教職員または関係者に飲酒の強要、喫煙にまつわる不法行為、誹謗、中傷、風評の流布などにより人権を侵害したり不快にさせたりする行為

2. セクシュアル・ハラスメント等を起こさないために

セクシュアル・ハラスメント等は、大学の構成員である教職員および学生の相互の人格の尊重と良識ある生活態度によって防止されるものである。

だれもがセクシュアル・ハラスメント等を受ける可能性があると同時に、だれもがセクシュアル・ハラスメント等を起こしうる可能性もあることを自覚し、日頃から、次のような姿勢を心がけることが重要である。

ア. 日常生活において男女間の対等な関係を形成すること

イ. いやなことははっきりと意思表示すること

ウ. お互いに誤解を招かないように、よりよいコミュニケーションを心がけること

3. 被害にあったときの対処方法

実際に被害にあったときには、決してひとりで悩んだり、泣き寝入りしたりせず、以下の対処を心がけること。

- ア. 相手に、自分が「望んでいない、不快である」ことをはっきりと伝える
- イ. いつ、どこで、誰からどのようなことをされたかについての詳しい記録をとる
- ウ. その場を目撃した人がいる場合は、その人にそのとき自分が何をされていたかについての確認をとっておく
- エ. 身近な信頼できる人に相談する
- オ. 学内の相談窓口等に申し出る

4. 被害を訴えた人への本学の対応

本学は、「セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する規程」に基づき、セクシュアル・ハラスメント等防止委員会および相談窓口を設置し、被害を訴えた人にとって不利益になることがないことを保証し、被害を訴えた人のプライバシーを最大限に尊重しつつ、可能なかぎり当該者が望むことへの手助けを行う。

防止委員会は、相談窓口寄せられる事例について、セクシュアル・ハラスメント等であるか否かの判断を行い（必要に応じて、別に調査委員会を組織することもある）、セクシュアル・ハラスメント等と判断した場合は、速やかに学長に報告し、その指示に基づき、関係部署と協議し、適切な措置を講ずる。

■2013年度 セクシュアル・ハラスメント等相談窓口

相談員は学生・安全対策委員が兼任する。

相談申込方法については、オフィスアワーに準拠する。

2 課外活動

(1) 課外活動

- ① 学生が学内でクラブ、サークル等の団体を結成しようとする場合は、1ヵ月前までに「部活動設立申請書」（所定用紙）により、学長の許可を得なければならない。
- ② 学生関係の団体もしくはその他の学外団体の行事に参加する場合には、1週間前までに学生・安全対策委員会に『行事参加許可願』（様式任意）を提出し、許可を受ける。
- ③ クラブ活動等による上演は、桐朋祭等の学内発表に限る。
- ④ 学生が団体で行動する場合は事前に学生・安全対策委員会に願い出て許可を受ける。
- ⑤ 学内にて掲示または印刷物の配布をするときは事前に学生・安全対策委員会に願い出て許可を受ける。
- ⑥ クラブ活動等は授業のさまたげにならぬように注意する。

(2) 学外出演について

音楽専攻・演劇専攻の学生が、学外の演奏会や演劇等に出演する場合は、P.48以降の『学外演奏発表規則』『学外出演規則』に従って所定の手続きを行う。出演許可願の用紙は各研究室にある。

3 証明書・諸届

(3) 「桐朋祭」について

「桐朋祭」は各専攻学生会、自治会が中心となり、学生の日頃の授業成果の発表の場として、あるいは、研究発表の場として催されている。本年度は9月15日(日)・9月16日(月)の予定である。

参加を希望する学生及び団体は各学生会・自治会に企画書を提出する。以後、企画が進む中で企画代表者会議が開かれ必要事項が確認される。なお、以下について十分留意すること。

「桐朋祭」には、本学学生以外の一般の来訪者が多いので、安全対策には特に気を配る。

また、本学はあらゆる宗教的・政治的諸団体の学内における諸活動(情宣や勧誘など)は一切認めていない。

本学の備品を使用する場合には、「備品借用願」、火気を使用する場合には、「火気使用願」、模擬店を出す場合には、多摩府中保健所に「行事開催届」を提出する必要がある。学園は、調布消防署に「催物の開催届出書」を提出する。

企画で外部者を要請する場合は、「外部出演者等の届」を提出し、保険加入を行う。

備品借用願・火気使用願等の提出書類は教学課にある。

(1) 学生証(IDカード)について

学生証は在学期間中有効のものが入学時に交付されるので、現住所・通学区間の欄を記入し、写真を貼付してすみやかに教学課で契印を受ける。学生証は通学時等、常に携行し、卒業、退学等で学籍がなくなった場合は直ちに返納する。もし、紛失した時は、直ちに教学課に届け出て再交付を受けること。

次のような場合、提示を求められることがある。

- 教室使用の申込みをする時
- 定期試験を受ける時
- 通学定期券を購入する時
- 学生旅客割引証(学割証)を使用する時
- 成績表を受け取る時
- コピーカードを購入する時
- その他

また、学生証はIDカードとしても使用している。本学園は保安対策の一環として、身分を判別できるように学生および教職員にはIDカードの着用が義務付けられている。登校した時は必ず着用すること。

(2) 諸届・諸願、証明書の発行について

長期欠席や休学または退学をする場合は事前に専攻主任と相談の上、書類等を提出する。

① 諸 届

(a) 住所変更届

住所を変更した場合、学生証を添えて教学課へ提出する。

(b) 改姓届

改姓した場合、住民票の抄本と学生証を添えて教学課へ提出する。

(c) 保証人（住所）変更届
保証人に変更があった場合、
または保証人の住所に変更が
あった場合、教学課へ提出する。

(d) 公認欠課届
教育実習・介護等体験及び制
作研修の時、教学課へ提出する。

(e) 欠席届（様式任意）
長期にわたる欠席が予想され
る場合には、必要に応じて欠席
届を教学課へ提出する。病気によ
る欠席の場合には診断書を添
える。

② 諸 願

(a) 退学願
事前に専攻主任に相談の上、
教学課へ提出する。

(b) 休学願
病気による場合は、診断書を添えて教学課へ提出する。

(c) 復学願
病気による休学から復学する場合には、診断書を添えて教学課へ提出
する。

なお、上記の願書は学長の許可を受けた後、その旨、本人及び保証人あて
に通知する。

③ 証明書の発行

各証明書等の発行を必要とする場合は、教学課に交付願を提出し、手数料
を納入、原則2日後（英文は6日後）に交付願控を提示して受け取る。

長期休業中は受渡し日時を掲示で別に連絡する。

なお、手数料は左記のとおりである。

④ 通学定期券・学生割引について

(a) 通学定期券について

通学定期券を購入する時は、電車・バスなどの駅等に備えつけの定期
券購入申込書に学生証を添えて購入する。

なお、新入生は学生証に写真の貼付・契印がなくても4月中は購入で
きる。

(b) 学生割引について

鉄道などを利用して101km以上を移動する場合、学割証を使用すると
運賃の一部が割引きされる。

学割証を必要とする時は教学課に学生証提示の上、交付願を提出し、
2日後に交付願控と引き換えに受け取る。なお、学割証の交付枚数は、
原則として一人年間10枚である。

長期休業中は受渡し日時を掲示で別に連絡する。

※証明書等を申し込み後3カ月以上、受け取りに来ない場合は、無効と
し廃棄する。

	証明書種類	金額
1	成績証明書	400円
2	成績証明書（英文）	1,000円
3	卒業証明書	200円
4	卒業証明書（英文）	600円
5	卒業見込証明書	200円
6	在学証明書（在籍証明書）	200円
7	在学証明書（在籍証明書）（英文）	600円
8	推薦書	400円
9	人物考査書・人物証明書・身上調査書	400円
10	人物考査書・人物証明書・身上調査書（英文）	1,000円
11	学生証（身分証明書）再発行	2,000円
12	単位修得証明書	400円
13	単位修得見込証明書	400円
14	学力に関する証明書	400円
15	教員免許状取得見込証明書	200円
16	健康診断書	400円

4 学費

(1) 学費について

- ①授業料等は、学則第46条に定められた期間に納入すること。
 - 前期は4月16日より4月30日まで（新入学生は入学手続日）
 - 後期は9月16日より9月30日まで
- ②施設維持費、学生諸料、各専攻の演習費・実習費は授業料に準じて、年2期に分けて納入する。
- ③納入方法は、前もって保証人に郵送される本学園指定の振込用紙による銀行振込とする。
- ④事情により、納入期限を延ばしたい場合（延納）は期日までに所定の願書を教学課へ提出すること。

詳細はP.49『学費の滞納・延納の処理に関する手続きについて』による。

5 福利厚生

(2) 奨学金・教育ローン

①奨学金

学生生活を経済的に援助するものとして、各種の奨学金制度がある。

個々の奨学金制度には趣旨、選考基準、金額、返還の有無などに違いがあるので、希望者はそれぞれの特徴をよく理解したうえで申し込むこと。

なお、奨学金のうち「貸与」は卒業後返還が必要な奨学金、「給付」は返還の必要がない奨学金である。

(a) 日本学生支援機構の奨学金

日本学生支援機構 第一種奨学金（無利子貸与）・第二種奨学金（有利子貸与）

日本学生支援機構（略称JASSO）は、教育の機会均等に寄与するために修学の援助を行い、次代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成を目的に設立された独立行政法人である。

奨学金は、経済的理由により修学に困難がある、優れた学生を対象としており、無利子で貸与される「第一種奨学金」と、有利子で貸与される「第二種奨学金」の2種類がある。

貸与額：第一種 自宅通学 30,000円 53,000円／月額
自宅外通学 30,000円 60,000円／月額
第二種 30,000円 50,000円 80,000円 100,000円
120,000円から希望月額を選択

募集人数：第一種 10名（2012年度本学への推薦依頼数）
第二種 14名（2012年度本学への推薦依頼数）

募集時期：第一種、第二種とも学内での説明会時に申込書類を配付し、その書類に基づき学内審査の後、機構に推薦する。

第一種、第二種とも年収・所得および学業成績に一定の基準がある。その基準を満たさない場合は、申込数が募集人数以下であっても推薦は行わない。

説明会予定：4月上旬（日時・場所は学内に掲示）

※注1 貸与額、募集人数は2013年度以降変更される可能性がある。

※注2 上記の定期採用以外に「緊急採用（無利子貸与）」、「応急採用（有利子貸与）」があり、家計支持者が失職・破産・倒産・病気・死亡、または火災・風水害等により家計急変が生じ、緊急に奨学金が必要になった場合に申込みが可能。（但し、事由

が発生したときから1年以内)

なお、2013年度入学生で予約採用候補者となっている者は「採用候補者決定通知(進学先提出用)」を入学後、すみやかに短大事務室(教学課)に提出すること。

(b) 本学独自の奨学金

桐朋演劇奨学会奨学金(給付)

演劇専攻には、有志の寄附金を財源に、成績優秀にして、本学在学中に経済的困窮に陥った者を援助することを目的とした奨学金制度が設けられている。(P.49『桐朋演劇奨学会規程』参照のこと)

対 象：芸術科演劇専攻2年次生および専攻科演劇専攻生

給 付 額：授業料の半額

募集人数：若干名

募集時期：年2回(前期、後期各1回)

※本年度の募集期間、提出書類等の詳細は決定次第学内に掲示する。

(c) 地方公共団体の奨学金

都道府県や市町村により、地元出身者・地元高等学校卒業者等を対象とした奨学金制度を設けているところがある。詳しくは、都道府県・市町村の教育委員会まで問い合わせること。

(d) 民間育英団体等の奨学金

本学学生の採用実績があるのは次の奨学金である。

福島育英会奨学金(給付)

財団法人福島育英会は、音楽関係大学生のうち、学業、人物ともに優秀かつ健康であって、経済的理由によって修学の困難の学生に奨学金を支給し、我が国音楽界の発展のために寄与する人材を育成するために設立された公益法人である。

対 象：東京都に居住する芸術科音楽専攻1年生

(収入・所得および学業成績について基準がある)

給 付 額：月額25,000円

募集人数：1名(学内審査の後、育英会に推薦する)

募集時期：9月頃

※2013年度新規募集については未定(給付額、募集人数は2012年度実績)

なお、以下の奨学制度については各個人が直接申込みを行う。詳細・応募方法は各団体のホームページ等で確認すること。

財団法人ヤマハ音楽振興会 音楽奨学支援(給付)

2013年度 月額100,000円

※2013年度の募集は終了している。2014年度の募集は、2013年10月頃公開予定とのこと。詳細については、以下URL参照。

→ <http://www.yamaha-mf.or.jp/shien/index.html>

財団法人ローム ミュージック ファンデーション 奨学生(給付)

2013年度 月額300,000円以内

※2013年度の募集は終了している。2014年度の募集は、2013年9月から開

始する予定とのこと。詳細については、以下URL参照。

→ <http://www.rohm.co.jp/rmf/index.html>

②教育ローン

(a) 提携教育ローン「学費サポートプラン」

本学では、主な学費負担者となる保護者（保証人）の一時的な経済的負担軽減のため、簡単な手続きで利用できる学費の分納制度を、株式会社オリエントコーポレーション（以下、オリコ）と提携し『学費サポートプラン』として案内している。

これは、入学金・授業料・実習費・教材費などの納付金をオリコが立て替え、申込者より毎月分割で口座振替により納付する制度である。

分割の方法も、普通分割だけでなく、在学中には分納手数料のみを納付する「ステップアップ分納方式」などライフプランに合わせて多様な選択ができる。

学費サポートプランのご利用条件

契約対象者

以下の条件を満たしている方

- 本学に入学または在学する学生の保護者（保証人）で安定した収入のある方
- オリコの審査に通った方

利用いただける学費

○入学金・授業料・実習費・教材費等、学校への納付が必要な学納金提出書類

○在学を証明する書類（学生証のコピー等）

○納付額を証明する書類（大学から送付された振込依頼書の写し等）

利用限度額

○総額500万円以内

返済の利率

○実質年率4.80%（固定金利）

返済方法

- 利用月の翌月より毎月27日に指定口座から自動振替
- 在学中は元金を据置く「ステップアップ分納方式」が利用可能
- 一部繰上げ返済可（繰上返済手数料は不要）

申込方法

- オリコ学費サポートデスクに申込用紙を請求する
- インターネット上で申込手続きをする

→ <http://www.orico.tv/gakuhi/index.php>

申込書の請求・問い合わせ

株式会社オリエントコーポレーション 学費サポートデスク

〒102-8503 東京都千代田区麹町5丁目2番1号

TEL 0120-517-325（フリーダイヤル）

営業時間 9:30～17:30（土日祝日を除く）

(b) 国の教育ローン

入学・在学時にかかる諸費用を対象に、学生の保護者（保証人）が低利で融資を受けられる「国の教育ローン」制度がある。応募条件・手続詳細

については、下記問い合わせ先にて確認すること。

取扱機関名：日本政策金融公庫

融資限度額：300万円以内

返済期間：15年以内（交通遺児家庭または母子家庭の方は18年以内）

金利：年2.45%，母子家庭の方は2.05%

（2013年3月13日現在）

問い合わせ先

教育ローンコールセンター TEL 0570-008656

日本政策金融公庫「国の教育ローン」HP

→ <http://www.jfc.go.jp/k/kyouiku/index.html>

(c) その他の教育ローン

銀行、信用金庫、信用組合、労働金庫、JAなどが取り扱う教育ローンについては、それぞれで融資限度額・利率・返済期間など融資条件が異なる。

詳細については各金融機関に直接問い合わせること。

(2) 学生教育研究災害傷害保険制度について

本学は、教育研究活動中の不慮の災害事故補償のための「学生教育研究災害傷害保険」に芸術科・専攻科学生および研究生が加入している。

① 保険金が支払われる事故の範囲

被保険者が在籍する大学の教育研究活動中に被った急激かつ偶然な外来の事故による身体の傷害を被った場合に保険金が支払われる。事故発生時及び不明な点は保健室に申し出ること。

教育研究活動中とは次の場合

(a) 正課中（講義、実験・実習、演習または実技による授業など）
（教職免許取得にかかる、教育実習、介護等体験など）

(b) 学校行事中（入学式、オリエンテーション、卒業式など教育活動の一環としての各種学校行事）

(c) (a) (b) 以外で学校施設内にいる間。

(d) 学校施設外で大学に届け出た課外活動を行っている間。

② 保険金の種類など（2013年度）

担保範囲	死亡保険金	後遺障害保険金	医療保険金	入院加算金
・正課中 ・学校行事中	2,000万円	90万円～3,000万円	治療日数 1日以上が対象 3,000円～300,000円	1日につき 4,000円 (180日を限度)
・通学中 ・学校施設等 相互間の移動中	1,000万円	45万円～1,500万円	治療日数 4日以上が対象 6,000円～300,000円	
・上記以外の学校 施設にいる間 ・課外活動中			治療日数 14日以上が対象 30,000～300,000円	

※保険金が支払われない場合（例：故意、疫病など）もある。

※保険料は本学が負担する。

③ 学研災付帯賠償責任保険について

本学では、国内外において、学生が、正課・学校行事・教育実習等での課外活動及びその往復中で、他人にケガをさせたり、他人の財物を損壊したこ

とにより被る法律上の損害賠償を補償するための「学研災付帯賠償責任保険」に芸術科・専攻科学生および研究生が加入している。この保険で対象となる事故が発生した場合には、直ちに保険会社に連絡し、保健室へも事故についての報告をすること。

詳細については、「学研災付帯賠償責任保険加入者のしおり」を参照すること。

④ 学研災付帯学生生活総合保険について

本学では、学生教育災害傷害保険に全員加入しているが、さらに任意で補償を拡大した保険に加入することができる。

4月に配布されるパンフレットを参照の上、申し込み希望者は、直接パンフレットに記載されている取り扱い代理店に問い合わせること。

(3) 学生食堂・購買部等の利用案内

① 学生食堂

○営業時間 平日 11:00～17:00（土曜～14:00）

なお、学生食堂（ホール）は8:00～21:00の間（日曜を除く）開いているので、営業時間以外も談話等で利用ができる。ただし、厨房への立ち入りや食堂備品の使用、また、楽器演奏、演劇・ダンス等の稽古、携帯電話等の充電は厳禁である。利用後はごみの片付けや整理・整頓に心がけること。

○場 所 短大旧館地下（170席）

○電子レンジの利用について

利用可能な時間帯は、平日11:00～13:00を除く時間とする。（食堂の繁忙時間を避けるため）

各自責任をもって大事に取り扱うこと。

電子レンジに関する質問や意見は、食堂ではなく教学課に申し出ること。

② 購買部

○営業時間 平日 8:05～15:30（13:00～14:00昼休み）

○場 所 短大正面向かい校舎（本館）1階

○販売品目 文房具を中心に、おにぎりも扱っている。なお、おにぎりは午前10時までに予約が必要。

※購買部の隣で、パンのみ平日、土曜日とも9:00～13:00まで販売

③ コピー・サービス

○コピー機設置場所 短大旧館2階

○利用時間 平日 8:15～16:20（土曜～12:30）

○利用方法 プリペイドカードによる使用

○利用料金 1枚10円 カラー 50円

○コピー可能用紙サイズ B5・B4・A4・A3

○カード販売 教学課で1枚500円（50度数使用可）にて販売。その際、学生証を提示すること。

○その他 (a) 著作権に注意して複写のこと。

(b) 図書館の図書は、図書館で複写すること。

(c) 用紙の補給やトラブル等は教学課に申し出ること。

6 学内諸施設、 機関の案内

※上記①学生食堂，②購買部は仙川キャンパス内各学校の共有・共用施設である。そのため学校行事等に関連して一部利用が制限される場合もあるので注意すること。

(1) 図書館

本学図書館は北館にあり，図書，雑誌，視聴覚資料（DVD・CD・ビデオなど）を所蔵している。資料は必要に応じ，規程に準じて借りることができる。辞書・事典類，雑誌の最新号，視聴覚資料などは館内のみでの利用となる。

学外者の利用はできないので，入館の際は，本学学生であることを示す図書館利用カード（学生証でも可）の提示を求めている。利用カードは入学時のガイダンスで，冊子「図書館利用案内」と共に配付する。利用カードがないと館外貸出が受けられないので，卒業時まで各自で保管すること。

なお卒業後も，館内利用（閲覧）は可能である。その際は，氏名の確認ができる物を持参のうえ来館すること。

その他，利用についての詳細は，P.44『図書館利用規程』や，配布される「図書館利用案内」を参照のこと。学習の場として，在学中に大いに活用してほしい。

なお本学学生は，桐朋学園大学音楽学部附属図書館（短大旧館4階）の利用が可能である。利用の際には，学生証を持参して利用登録を行うこと。

(2) 桐朋教育研究所について

桐朋教育研究所は，桐朋学園女子部門の教育活動がより一層円滑に，そして活性化するように，様々な方向から研究し，考察し，そして実践に向けて提言している機関である。教育がより幅と深みのあるものとなるためにも，教職員がより充実した研究・研修が出来るような環境を用意することにも知恵を絞っている。更に，社会の動向と切り離すことの出来ない教育の性格を考慮して，学園と社会との接点として，情報の集約及び発信にも心を砕いている。

このような教育研究所の，直接に短大生に関係する範囲の活動を以下に紹介する。

① 学園機関誌「桐朋教育」の編集・発行

日々の学園の教育活動がどのように行われているのかを，本来の学園の教育理念とどのように結びつけたものなのか，という視点で検証しつつ，広く社会に紹介し，批判を求める，そのような場が，年一回刊行される「桐朋教育」である。入学試験の実際，普段の活動の様子，卒業後の進路の統計，その他の特集の記事で構成されている。巻頭のグラビアページは，学園生活の様子がビジュアルに紹介され，生き生きとした光景が毎年見られる。

② 「桐朋講座」の企画・運営

保護者や卒業生，卒業生の保護者，そして在校生などの学園関係者を対象に，各種の講座を開設し，運営に当たっている。外国語会話教室，趣味や教養など，30を超える講座が，セミナーハウスを拠点に，活発に活動している。学術的な色彩の強い内容の講座には，教員が受講しているケースも見られ，時間が許せば，短大生も受講することが可能である。

尚，受講に際しては所定の受講料金が必要である。

③ 学術資料の収集・管理

全国各地の大学や研究機関との間で，研究紀要の交換を行っている。従ってリアルタイムで各種の学術論文に触れることが出来る。学習や研究活動に

有用なものが少なくないと思われ、希望者には、閲覧や貸し出しも行っている。

④ 本学園関係の様々な資料の保存・管理

創立以来70年を超える本学園の歴史の証人とも言える各種資料（文書に限らず、写真やスライドなどの画像、映画やビデオなどの映像も含めて）が教育研究所に集約され、管理されている。調布市の歴史の編纂など、学園外からも貴重な資料として利用されている。

⑤ 教育研究所・（活動拠点の施設である）セミナーハウスの開設時間は、

月曜日～土曜日 午前9時15分～午後4時45分である。

（日曜日、祝祭日及び中高部の長期休業期間は閉鎖される。）

※ 桐朋教育研究所への問い合わせは、03(3300)2119へ

(3) 総合保健体育センター（含む保健室）について

① 短大校舎の南側に、総合保健体育センターがあり、演技発表会の稽古等をここで行うことがある。

このセンターは、短大を始め、高校・中学・小学校及び音楽大学の学生・生徒等の共用施設なので利用の仕方をよく知っておくこと。

② 保健室について

保健室は体育センター1階に位置し、中学・高校（女子）と場所を共有している。通常養護教諭が対応に当たり、保健衛生管理等を目的とし次の業務を行っている。

(a) 定期健康診断

本学では、4月のガイダンス時に健康診断を実施している。全員必ず受診すること。検査項目は、1年生が胸部レントゲン、尿検査（蛋白・糖・潜血）、血液検査（貧血・脂質）、内科検診、身体測定（身長・体重・視力）を実施し、2年生及び専攻科は、尿検査（蛋白・糖・潜血）、内科検診、身体測定（身長・体重・視力）を実施している（教職課程履修者の希望者のみ、実費にて胸部レントゲン検査可能）。

(b) 健康相談

月2回程度、保健室では健康相談を実施している。日程については「短大保健室通信」に記載し、掲示による連絡をしている。

(c) 短大保健室通信

「短大保健室通信」を4月はガイダンス時に全員に配布し、他の月については掲示をしている。（学生・安全対策委員会の掲示板に掲示。）

(d) 救急処置

保健室では、傷病についての救急処置を行っている。内科的なことに関しては、ベッドでの休養などとしている。（中高生と場所を共有しているので、利用方法に注意すること。）基本的に内服薬の使用はしていない。近年、薬に対するアレルギーの学生が増えたこと、症状を抑えることによる症状の悪化などがその理由である。

外科的なことに関しては、アイシング（氷で冷やす）などを行っている。症状により2次的処置を行ったり、医療機関での受診をしている。

(e) 学生教育研究災害傷害保険に関する手続きについて

学生生活の中で発生した事故に対して、救済措置として設けられている保障制度である。本学では学校負担により、全員加入の手続きを行っている。学内・学外での事故及び通学中の事故に遭った場合は、保険会社に事故発生日から30日以内に届出をしなければならない。（30日以内

に届出をしない場合、保険の適用を受けられない場合がある。)通学中では、正規の通学経路を通っている場合に起きた事故のみ保険の対象となる。事故が発生した場合は、直ちに保健室へその旨を申し出ること。

また、通院の実日数(実際に通院した日数)により、保険申請ができない場合がある。授業中や休憩中など、状況により申請に必要な実日数が異なる。入学時に配布される「学生教育研究災害傷害保険加入者のしおり」とP.28「(2) 学生教育研究災害傷害保険制度について」を参照すること。

また、学研災付帯賠償責任保険及び学研災付帯学生生活総合保険については、P.28を参照すること。

③ スクールカウンセラーについて

学園内にて、スクールカウンセラー(臨床心理士)との面談日が設けられている。プライバシーは完全に守られるので、安心して面談を受けることができる。面談の申し込みは保健室を通しての完全予約制となる。(スクールカウンセラーに急用が生じた場合など、緊急を要する際にその旨を連絡するため名前を申し出てもらっている。)

詳細は以下の通りである。

(a) 面談申し込み方法⇒完全予約制の為、保健室を通しての申し込みとなる。面談をキャンセルする場合は、必ず保健室に連絡すること。

なお、面談の申し込み及びキャンセルについては保健室の直通電話でも受け付けているので、来訪が無理な場合は下記に連絡すること。

◎保健室直通電話 ☎03(3300)4295

(b) 面談日⇒毎週火・水・木・金曜日(休みの日もある。)

(c) 面談時間⇒10:40~17:00(12:20~13:20は除く)

※同じ時間帯に中高生も相談日が開設されている。一人当たりの面談時間約40分。面談希望者が多い場合は予約が取りにくい場合もある。

(d) 面談場所⇒セミナーハウス2階の203教室。場所はP.247で確認すること。

(4) 八ヶ岳高原寮について

「いまだこの地には 語られざる詩がある 見えざる絵がある 聞こえざる歌がある (後略)」

今から約40年前、故生江義男元本学学長が、八ヶ岳高原寮の開設にあたって詠まれた詩の一節である。当時に比べて、建物は木造から鉄筋コンクリートに変わり、周囲の環境も道路が整備され、観光に避暑に訪れる人も多くなってきたが、それでも高原寮を取巻く自然環境は未だ豊かであり、人々の心を惹きつけている。

八ヶ岳高原寮では、年間を通じ、短大の演劇専攻、ステージ・クリエイト専攻の合宿授業を始め、高等学校・中学校・小学校の合宿活動、クラブ合宿や補講等が実施されている。

また、短大を含めた在学生・卒業生、その家族の方も利用ができる。ただし、前述の通り、桐朋学園女子部門の学生・生徒・児童の教育活動のための施設なので、教育活動の期間以外の利用となる。その他詳細については、毎年4月に配布する「八ヶ岳高原寮の利用案内」をご覧になり、その趣旨を理解の上、利用いただきたい。なお、問い合わせ等は本館事務室で取り扱っている。

所在地 〒409-1501
 山梨県北杜（ほくと）市大泉町西井出8240
 電話 (0551) 38-2106 (管理人 牧村 剛)
 F A X (0551) 38-2164
 交通 JR中央線小淵沢駅にて小海線に乗換え， 2 駅目の『甲斐大泉駅』
 下車， 徒歩40分またはタクシー 10分

7 学園生活の 安全と環境の 向上のために

- (1) 桐朋学園女子部門仙川キャンパス内の各学校には，安全対策委員会とそれぞれの代表委員で構成される保安委員会が設置されている。
 これらの委員会では次のような諸業務を行うことにより，園児・児童・生徒・学生・教職員の安全で快適な学校生活の確保に努めている。
- ① 校舎及び諸施設の使用の許可・規制などの管理
 - ② 火気使用（暖房器具も含む）の許可・規制などの管理
 - ③ 学内駐輪場使用の許可・規制などの管理
 - ④ 火災，地震，風水害に対する防災対策全般
 - ⑤ 学内生活環境の施設設備に関すること全般
 - ⑥ その他，安全対策上必要な対応並びに諸規則の作成と指導
- (2) 保安委員会より「安全で快適な学校生活のために」（抜粋）
- ① 指定の喫煙場所（P.20参照）を除いて校舎内外を問わずキャンパス内は全面禁煙である。
 - ② 自動車の校内乗り入れは禁止されている。
 - ③ 駐輪は短大駐輪場以外は禁止されている。希望者は許可手続き（P.19参照）が必要である。
 - ④ 休業中も含めて教室等の使用は，必ず事前に定められた手続きを行って使用すること。（P.51参照）
 - ⑤ 教室等の使用にあたっては，照明・空調等使用施設の後始末を確実に行うこと。
 - ⑥ 貴重品は各自が責任を持って管理すること。
 - ⑦ 不審者を見たり異常を感じたら些細なことでも速やかに近くの教職員に知らせること。（P.251参照）
 - ⑧ キャンパスには幼稚園の園児や小学校の児童が生活している。よって弱者の安全確保には十分留意すること。
 - ⑨ その他，お互いに安全で快適な生活ができるよう自覚を持って行動するように心がけること。

学園各校門の開閉時間

	通常		土曜日		日，祝，振替休日		長期休業中	
	開門時間	閉門時間	開門時間	閉門時間	開門時間	閉門時間	開門時間	閉門時間
正 門	7:25	18:00	7:25	17:00	閉鎖		8:30	16:00
「自動車通用門」脇の 夜間等通用門	6:30 18:00	7:25 22:00	6:30 17:00	7:25 22:00	6:30	22:00	6:30 16:00	8:30 22:00
音楽部門正門	5:10	22:00	5:10	22:00	8:00	22:00	8:00	17:00

※東門，初等部通用門は終日閉門

1 企業への就職 について

- (1) 本学では、総合ガイダンスセンターが就職についての学生支援を取り扱い、就職活動に関する指導、相談、情報提供および斡旋、紹介等を行っている。よって、就職を希望する学生全員に対して、就職に対する一般的心得、就職活動の過程と日程、自己分析、企業研究の必要性とその方法、企業の採用動向（求人状況）、応募書類作成上の注意、応募手続きの方法及び面接・マナー等について、進路講座を随時実施するとともに、個別に学生の相談に応じている。
- (2) 就職斡旋要項
- ① 本学では職業安定法第33条2項及び「就職斡旋要項」に基づき、本学の学生の就職を斡旋する。就職を希望する者は、本要項を厳守しなければならない。
 - ② 就職を希望する者は、必ず所定の手続き（就職登録等）をしなければならない。したがって手続きをしない者には就職の斡旋はしない。
 - ③ 学内選考による就職の斡旋（学校推薦）は、学生一人に対し原則として常時1企業（1法人）とする。
 - ④ 就職が内定した場合には、最初に内定（縁故、自由応募による直接受験をも含む）したところを以て就職先とし、以後の斡旋を中止する。
- (3) 就職斡旋事務
- ① 就職を希望する学生は総合ガイダンスセンターにある就職（進学）カードに、必要事項を記載の上、提出すること。なお、進学を希望する学生も該当する欄をチェックの上、同カードを提出のこと。
 - ② 就職斡旋についての詳細は、掲示で明らかにするので就職を希望する学生は、しっかり把握すること。
 - ③ 会社概況及び募集要項等の求人に関する書類は、総合ガイダンスセンターで閲覧すること。また、各企業への資料請求については、各個人が当該企業に直接請求すること。
 - ④ 学校推薦依頼のあった求人先への受験希望者が、推薦人数を越えた場合は、学内で選考を実施する。
 - ⑤ 学校推薦状の必要な者は、総合ガイダンスセンターに申し込むこと。
 - ⑥ 成績証明書、卒業見込証明書、健康診断書等の各種証明書を必要とする時は、各自が、教学課で申し込むこと。
- (4) 就職を希望する企業（法人）等に内定を得た場合、または進学等が決定した場合には、その時点で総合ガイダンスセンターに報告し、所定の書類を提出すること。

2 進学・編入学に ついて

卒業後の進路として進学、編入学を希望する学生が増えている。総合ガイダンスセンターではその方面に関する情報を収集しているのので、興味・関心に応じてこれを活用することが望ましい。

(1) 本学専攻科への進学

本学芸術科には、専攻科演劇専攻、専攻科音楽専攻、専攻科ステージ・クリエイト専攻が設置されている。本科での学習を深め、より高度な専門的内容を学ぶことのできる2年間の課程である。

(2) 4年制大学への編入学

多くの大学から送付された大学案内を演劇、ステージ・クリエイト専攻研究室前に置いているので、閲覧することができる。編入学試験には二種類あり、一般編入学試験と指定校推薦編入学試験がある。一般編入学試験は各自

で入学要項などを取り寄せ、受験するものである。指定校推薦編入試験では、該当大学から本学宛に推薦依頼が届くものである。なお、指定校推薦編入学試験に合格した場合、入学辞退はできない。芸術関係の学部学科から編入学試験の案内が届くこともある。編入学に関して質問がある場合には、所属専攻の教員および総合ガイダンスセンターに相談すること。

(3) 専門学校への進学

資格取得や技術修得を目指して、専門学校や各種学校へ進学する学生もいる。各学校から送付された資料は演劇、ステージ・クリエイト専攻研究室前に置いている。

どのような進路を考えるにしても、本学2年間の学習を充実させることが基本となる。進学を希望する学生は、所属専攻の教員、あるいは総合ガイダンスセンターに相談し、進学先の内容についてよく知ることが大切である。

3 音楽専攻 卒業後の進路 について

音楽専攻の凝縮した2年間を終えた後、ここで身につけた能力や関心を強力なバネにして、それぞれが、実に多彩で発展的な進路をとっている。その中で、さらなる勉学の継続としては、本学専攻科への進学が約半数を占め、その他桐朋学園大学音楽学部（3年次編入）等他大学への編入が挙げられ、毎年のように武蔵野音楽大学をはじめ各地の大学に編入をしている。海外留学をする卒業生も増えており、留学先としては、ドイツ、オーストリア、イギリス、フランス、ハンガリー、アメリカ等がある。

4 演劇専攻 卒業後の進路 について

日本における劇団の数は俳優座、文学座、青年座等の他、ミュージカルの劇団、若い小劇団も含め、東京だけでも1500以上といわれその実数は把握されていない。

俳優として舞台に立つ為には、所属劇団の公演での抜擢、自分達で劇団を結成しての上演活動、フリーもしくはプロダクション（芸能事務所）に所属して各種公演のオーディションを受けて「役につく」という方法等がある。

劇団、又プロダクションによってその採用方法、研修期間・制度、待遇も異なる。まずなによりも大事なことは「自分の目標は何か?」という目的意識を明確にすること。劇団を選ぶ場合、まずその劇団の舞台を観劇し、その劇団の表現が自分の目的に合ったところであるか否かの判断が重要である。プロダクションの場合は資料を取り寄せるなどして主な実績を知る必要がある。「研修生制度」と称して多額の入所金を徴収する場合もあるので注意してほしい。1年次は、比較的時間にゆとりがあるので少しでも多くの舞台に接して勉強すること。必要な情報を集め、実際の創造現場の状況を把握した上で進路を決めることが大切である。

ここ数年の主な進路は次のとおりである。

[俳優座、文学座、青年座、円、四季、さいたまネクスト・シアター、虚構の劇団、劇団仲間、青年団、燐光群、音楽座、ステップス、アミューズ、劇団座敷童子、トヨタオフィス、オリエンタルランド等]

また、一般就職を希望する場合は総合ガイダンスセンターに相談すること。演劇でつちかった能力は幅広い適応性を示している。

卒業後、さらに勉強を続けたい学生にはより専門性を高める専攻科がある。専攻科では年3回の劇上演実習やワークショップ等を通じて実践力を養っていく。

5 ステージ・クリエイト専攻 卒業後の進路 について

ステージ・クリエイト専攻は、2004年4月に芸術短期大学発足とともに、新設された。

ステージ・クリエイト専攻で学んだ卒業後としては、次のような進路・職種がある。まず、舞台そのものとそれを取り巻く環境を創造していく舞台制作者、劇場運営者をはじめ、さまざまな創造活動におけるプロデューサー、ディレクター、舞台監督、マネージメント・スタッフ、音響・照明・装置などのスタッフ、広告分野の制作者など。また、実技での学習を発展させ、みずからが芸術表現者となる場合として、ダンサー、声優、ミュージシャンなどのパフォーマー。さらに、芸術の問題についての考察を深め、実技や実習で学んだことをコミュニケーションの手段として生かし芸術文化の発信者となる場合として、一般企業での広報・営業セクションなど。このような分野で活躍できるよう、この2年間で実力を十分養ってほしいと願っている。

また、ステージ・クリエイト専攻での学びをさらに発展させるべく、2006年4月には専攻科ステージ・クリエイト専攻が発足した。2010年度からはよりプロフェッショナルな制作に対応するために、より外部での、より演劇や音楽と協働するカリキュラムに変更し、修了後のニーズに込えている。

これまでのステージ・クリエイト専攻卒業生の主な進路は、本学専攻科への進学や四年制大学への編入学等の他、就職先としては、文学座、東急文化村、俳優座劇場、クリエイト大阪、東京舞台照明などをはじめとして映像制作編集会社・音楽事務所・劇場やホール（営業）・劇団（制作）・芸能事務所等、多様な方面に広がっている。また、自分自身がタレント、ダンサーとして活動を続ける者もいる。

桐朋学園芸術短期大学学則

第1章 総 則

(目 的)

- 第1条 本学は、教育基本法および学校教育法の精神にしたがい、芸術文化の専門的な研究と教育とに取り組み、現代社会における芸術文化の創造と発展に寄与する人材の育成を目的とする。
2. 本学の設置する各学科または専攻における人材の育成に関する目的その他教育研究の目的については別に定める。

(目的達成と評価)

- 第2条 本学は、その目的及び社会的使命を達成するため、教育の水準、研究活動等の状況について、自ら点検および評価を行う。
2. 本学は、教育研究等の総合的な状況について、学校教育法施行令第40条で定める期間ごとに、文部科学大臣の認定を受けた認証評価機関による評価をうけるものとする。
3. 前項の点検及び評価に関する事項は別に定める。

(教育内容等の改善)

- 第3条 本学は、授業内容及び方法の改善を図るための委員会を設け、研修及び研究を実施する。
2. 前項の委員会については、別に定める。

(名 称)

- 第4条 本学は、桐朋学園芸術短期大学という。

(位 置)

- 第5条 本学の位置は、東京都調布市若葉町1丁目41番地の1とする。

第2章 組 織

(学科・専攻課程)

- 第6条 本学に、次の学科を置く。
- 芸 術 科
2. 芸術科に、次の専攻課程を置く。
- 音 楽 専 攻
- 演 劇 専 攻
- ステージ・クリエイト専攻

(専攻科)

- 第7条 本学に、専攻科を置く。
2. 専攻科に、次の専攻課程を置く。
- 演 劇 専 攻
- 音 楽 専 攻
- ステージ・クリエイト専攻

(図書館)

- 第8条 本学に図書館を置く。

(総合ガイダンスセンター)

- 第9条 本学に総合ガイダンスセンターを置く。

(保健室)

- 第10条 本学に保健室を設け、学生および教職員の健康管理にあたる。

(事務室)

- 第11条 本学に事務室を置く。
- 第12条 図書館、保健室および事務室に関して必要な事項は、別に定める。

(職員組織)

- 第13条 本学に次の職員を置く。
- 学 長
- 教 授
- 准 教 授
- 講 師

助 手
事 務 職 員
技 術 職 員
司 書
その他必要な職員

(教授会)

第14条 本学に重要事項を審議するため教授会を置く。

2. 教授会は学長、教授、准教授および専任講師をもって構成する。
3. 本条に定めるもののほか、教授会に関する事項は、教授会規程の定めるところによる。

(一般条項の学科適用)

第15条 第3章以後の条項は、特に付言する場合を除き、学科について適用するものとする。

第3章 学生定員および修業年限

(学生定員)

第16条 本学の学生定員は、次のとおりとする。

専攻課程	入学定員	収容定員
音 楽 専 攻	70名	140名
演 劇 専 攻	65名	130名
ステージ・クリエイト専攻	50名	100名

(修業年限および在学年限)

第17条 本学の修業年限は2年とする。

2. 学生は4年を越えて在学することはできない。

第4章 学年、学期および休業日

(学 年)

第18条 学年は4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(学 期)

第19条 学年を次の2学期に分ける。

前学期	4月1日から	9月30日まで
後学期	10月1日から	翌年3月31日まで

(休業日)

第20条 休業日は次のとおりとする。

日曜日	
国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日	
夏季休	7月21日から 9月10日まで
冬季休業	12月21日から翌年1月10日まで
春季休業	3月21日から 3月31日まで
創立記念日	11月20日

2. 必要がある場合、学長は、前項の休業日を臨時に変更することができる。
3. 第1項に定めるもののほか、学長は、臨時の休業日を定めることができる。

第5章 入学、退学および休学

(入学の時期)

第21条 入学の時期は学年の始めとする。

(入学の資格)

第22条 本学に入学することのできる者は、次の各号の1に該当する者とする。

- (1) 高等学校もしくは中等教育学校を卒業した者
- (2) 通常の課程による12年の学校教育を修了した者
- (3) 外国において、学校教育における12年の課程を修了した者またはこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
- (4) 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- (5) 専修学校の高等課程（修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たす者に限る）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が別に定める日以後に修了した者
- (6) 文部科学大臣の指定した者
- (7) 高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規程による大学入学資格検定に合格した者

を含む。)

(8) 個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるとみとめた者で、18歳に達した者

(入学の出願)

第23条 本学に入学を志願する者は、本学所定の願書および必要書類に、検定料を添えて提出しなければならない。

(入学者の選考)

第24条 前条の入学志願者に対しては、入学試験を行い、入学を許可すべき者を定める。

2. 前項の入学試験に関しては、別に定める「入学試験規定」による。

(入学手続きおよび入学許可)

第25条 前条の選考の結果に基づき、合格の通知を受けた者は、所定の期日までに本学所定の書類を提出するとともに、入学料等を納付しなければならない。

2. 学長は、前項の入学手続きを完了した者に入学を許可する。

(転学)

第26条 本学に転学を志願する者があるときは、欠員のある場合に限り、選考の上、相当学年次に入学を許可することができる。

2. 前項の規定により入学を許可された者の既に修得した授業科目および単位数の取扱いならびに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

(退学)

第27条 退学をしようとする者は、学長の許可を受けなければならない。

(休学)

第28条 疾病その他やむを得ない事情により3ヵ月以上修学することのできない者は、学長の許可を得て休学することができる。

2. 疾病のため修学することが適当でないと認められる者については、学長は休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第29条 休学の期間は1年を超えることができない。ただし、特別の事由がある場合は、引き続き更に1年まで延長することができる。

2. 休学の期間は通算して2年を超えることができない。

3. 休学の期間は、第17条の在学年限に算入しない。

(復学)

第30条 休学期間中にその理由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができる。

(除籍)

第31条 次の各号の1に該当する者は、教授会の議を経て学長が除籍する。

- (1) 第17条第2項に定める在学年限を超えた者
- (2) 第29条第2項に定める休学の期間を超えてなお修学できない者
- (3) 授業料の納付を怠り、督促してもなお納付しない者
- (4) 長期間にわたり行方不明の者

第6章 教育課程、履修方法および卒業等

(教育課程及び授業科目)

第32条 本学の授業科目は共通科目と専攻科目とする。

2. 授業科目の種類、単位数等は別表第1のとおりとする。

(教職に関する科目)

第33条 前条に定めるもののほか、教職に関する科目を置く。

2. 教職に関する科目の種類、単位数等は別表第2のとおりとする。

(単位の計算方法)

第34条 各授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により計算するものとする。

- (1) 講義については15時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については30時間の授業をもって1単位とする。
- (2) 演習については30時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については15時間の授業をもって1単位とする。
- (3) 実習・実技については45時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については30時間の授業をもって1単位とする。

- (4) 個人指導による芸術科音楽専攻，専攻科音楽専攻の実技科目については，5時間の授業をもって1単位とする。
- (5) 芸術科演劇専攻，専攻科演劇専攻の劇上演実習については，集中的な研修による成果と準備を評価して，4単位を与える。
- (6) 卒業または修了の論文に対しては，その研究の成果と準備を評価して6単位を与える。

(単位の授与)

第35条 授業科目を履修し，その試験に合格した者には，所定の単位を与える。

(学修の評価)

第36条 試験等の評価は，A，B，C，Dの評語で表し，C以上を合格とする。

2. 成績と評価基準は，次のとおりとする。

学科成績	実技成績	評価
100-80	100-80	A
79-60	79-65	B
59-50	64-50	C
50未満	50未満	D

(卒業の要件)

第37条 本学を卒業するためには，2年以上在学し，別表第1に定めるところにより，62単位以上を修得しなければならない。

(入学前の既修得単位の認定)

第38条 本学は，教育上有益と認めるときは，学生が入学する前に短期大学または大学等において履修した授業科目について修得した単位を，入学後の本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2. 学生が入学する前に行った第36条第1項に規定する学修を，本学における授業科目の履修とみなし，単位を与えることができる。

3. 前2項により修得したものとみなし，または与えることのできる単位数は，転学等の場合を除き，本学において修得した単位以外のものについては，合わせて15単位を超えないものとする。

(他の短期大学または大学等における授業科目の履修等)

第39条 本学は，教育上有益と認めるときは，学生が他の短期大学または大学等において履修した授業科目について修得した単位を，15単位を超えない範囲で本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2. 前項の規定は，学生が外国の短期大学または大学に留学する場合に準用する。この場合修得したものとみなすことのできる単位数は，前項および第38条第2項の単位数と合わせて30単位を超えないものとする。

(短期大学または大学以外の教育施設等における学修)

第40条 本学は，教育上有益と認めるときは，学生が行う短期大学または高等専門学校の専攻科における学修，その他文部科学大臣が別に定める学修を，本学における授業科目の履修とみなし，単位を与えることができる。

2. 前項により与えることができる単位は，前条第1項により修得したものとみなした単位数と合わせて15単位を超えないものとする。

(卒業)

第41条 本学に2年以上在学し，第37条に定める単位を取得した者については，教授会の議を経て，学長が卒業を認定する。

(学位の授与)

第42条 前条により卒業した者には，本学学位規程の定めるところにより短期大学学士の学位を授与する。

(資格の取得)

第43条 本学において取得することができる資格および免許状の種類は次のとおりとする。

専攻課程	資格および免許状の種類
音楽専攻	中学校教諭2種免許状(音楽)

2. 前項の資格を取得しようとする者は，教育職員免許法(昭和63年法律第106号)に定める単位数を取得しなければならない。

第44条 本章に定めるもののほか，教育課程，履修方法及び卒業等に関して必要な事項は別に定める。

第7章 検定料，入学料，授業料その他の費用

(検定料等の種類および金額)

第45条 本学の検定料，入学料，授業料，その他の費用の種類と金額は次のとおりとする。

学費等種類	専攻課程名	金額
検定料	全専攻	40,000円
	(ただし、同一年度内に異なる入試種別で再受験する場合の2回目以降および一般入試で複数の専攻を併願する場合の2専攻目以降の検定料は20,000円)	
入学金	音楽	入学時 420,000円
	演劇	入学時 330,000円
	ステージ・クリエイト	入学時 330,000円
施設拡充費	全専攻	入学時 170,000円
	音楽	年額 1,090,000円
授業料	演劇	年額 975,000円
	ステージ・クリエイト	年額 950,000円
施設維持費	音楽	年額 80,000円
	演劇	年額 70,000円
	ステージ・クリエイト	年額 70,000円
学生諸費	全専攻	年額 32,000円
演習実習費	音楽	年額 45,000円
舞台実習費	演劇	年額 110,000円
演習費	ステージ・クリエイト	年額 60,000円

(授業料等の納入期)

第46条 授業料，清掃冷暖房費等（以下授業料等という）は，学期区分に従い，次の期間に納入しなければならない。

前学期 4月16日より4月30日まで。但し，新入学生は入学手続日

後学期 9月16日より9月30日まで。

但し，納入期の最終日が金融機関休業日に当たる場合，その直前の金融機関営業日を最終期限とする。

2. 特別の事情があると認められる者には，延納または分納を認めることがある。

(退学および除籍の場合の授業料等)

第47条 学期の途中で退学したまたは除籍された者の当該学期分の授業料等は徴収する。

(休学の場合の授業料等)

第48条 休学を許可された者については，その期間，第45条に規定した授業料等の半額を納めなければならない。ただし，学期の中途から休学した者の当該学期分の授業料等は徴収する。

(復学の場合の授業料等)

第49条 学期の中途において復学した者は，当該学期分の授業料等を納入しなければならない。

(学年の途中で卒業する場合の授業料等)

第50条 学年の途中で卒業する者は，卒業する学期分の授業料等を納入しなければならない。

(既納入金の扱い)

第51条 一旦納入した検定料，入学料は原則として返還しない。一旦納入した施設拡充費，授業料等は，4月1日以降は原則として返還しない。

2. 在学生については，第1項の規定にかかわらず，学期末までに退学，休学が認められ，納入済の翌学期の授業料等があるときは，退学にあつては授業料等の全額を，休学にあつては授業料等の半額を返還する。

第8章 科目等履修生，単位互換履修生，外国人留学生および委託生

(科目等履修生)

第52条 本学の授業科目の履修を希望する者があるときは，本学の教育に支障のない限りにおいて科目等履修生として履修を許可することができる。

2. 科目等履修生には，本学則第35条および第36条の規定を準用して単位を与えることができる。

(単位互換履修生)

第53条 東京都私立短期大学協会による単位互換協定を締結している短期大学の学生が本学の履修対象科目の履修を希望した場合，単位互換履修生として履修を許可することができる。

2. 単位互換履修生には，本学則第35条および第36条の規定を準用して単位を与えることができる。

(外国人留学生)

第54条 外国人で，本学に入学を志願する者があるときは，選考のうえ外国人留学生として入学を許可することができる。

(委託生)

第55条 公共団体またはその他の機関が、その所属職員の教育の委託を願い出たときは、本学の教育に支障がない限りにおいて、選考のうえ委託生として入学を許可することがある。

(その他)

第56条 科目等履修生、単位互換履修生、外国人留学生および委託生に関し必要な事項は、別に定める。

第9章 専攻科

(本章の適用)

第57条 この章は、専攻科に関し必要な事項を定める。

(専攻課程および学生定員)

第58条 専攻科の専攻課程および学生定員は、次のとおりとする。

専攻課程	入学定員	収容定員
演劇専攻	20名	40名
音楽専攻	20名	40名
ステージ・クリエイト専攻	10名	20名

(修業年限)

第59条 専攻科の修業年限は各専攻2年とする。

2. 専攻科の学生は、修業年限の2倍を超えて在学することはできない。

(入学資格)

第60条 専攻科に入学することのできる者は、本学を卒業した者およびこれと同等以上の学力があると認められる者とする。

(授業科目)

第61条 専攻科の授業科目の種類、単位等は、別表第3のとおりとする。

(修了の要件)

第62条 本学専攻科を修了するための要件は、次のとおりとする。

専攻課程	在学年数	取得単位
演劇専攻	2年以上	50単位以上
音楽専攻	2年以上	46単位以上
ステージ・クリエイト専攻	2年以上	44単位以上

2. 専攻科を修了した者に、修了証書を授与する。

(専攻科の検定料、入学料、授業料、その他の費用)

第63条 専攻科の検定料（審査料）、入学料、授業料、その他の費用は下表のとおりとする。

学 費	入 学 生		
	専攻課程	本学卒業生	一般公募生
検 定 料	全 専 攻	10,000円	10,000円
入 学 金 (入学時)	演 劇	10,000円	165,000円
	音 楽	10,000円	210,000円
	ステージ・クリエイト	10,000円	165,000円
施設設備費 (入学時)	全 専 攻	0円	85,000円
授 業 料 (年額)	全 専 攻	975,000円	975,000円
施設維持費 (年額)	全 専 攻	70,000円	70,000円
学 生 諸 費 (年額)	全 専 攻	32,000円	32,000円
舞台実習費 (年額)	演 劇	120,000円	120,000円
演習実習費 (年額)	音 楽	45,000円	45,000円
演 習 費 (年額)	ステージ・クリエイト	60,000円	60,000円

(注) 一般公募生とは、本学卒業生以外の者をいう。

(授業料の納入期)

第64条 授業料等は学期区分に従い、次の期間に納入しなければならない。

前学期 4月16日より4月30日まで。但し一般公募生は入学手続日

後学期 9月16日より9月30日まで。

但し、納入期の最終日が金融機関休業日に当たる場合、その直前の金融機関営業日を最終期限とする。

(準用規定)

第65条 この章に定めるもののほか、専攻科学生に関し必要な事項は、学科学生に適用する関係条項を準用する。

第10章 賞 罰

(表 彰)

第66条 学生として表彰に値する行為のあった者は、教授会の議を経て学長が表彰する。

(懲 戒)

第67条 本学の規則に違反し、または学生の本分に反する行為をした者は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

2. 前項の懲戒の種類は、退学、停学および訓告とする。

3. 前項の退学は、次の各号の1に該当する学生に対して行う。

(1) 性行不良で改善の見込みがないと認められる者

(2) 学力劣等で成業の見込みがないと認められる者

(3) 正当な理由がなくて出席常でない者

(4) 本学の秩序を乱し、その他学生の本分に著しく反した者

附 則 略

学位規程

(目的)

第1条 この規程は、学位規則（昭和28年文部省令第9号）第13条及び桐朋学園芸術短期大学学則（以下「学則」という。）第42条の規定に基づき、桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）において授与する学位について必要な事項を定めるものである。

(付記する専攻分野)

第2条 本学において授与する学位は短期大学士とし、付記する専攻分野の名称は次のとおりとする。

音楽 Associate of Music

演劇 Associate of Drama

舞台創造 Associate of Dramatic Art Production

(学位授与の要件)

第3条 短期大学士の学位は、学則第42条の規定に基づき、本学を卒業した者に授与する。

(学位の授与)

第4条 学長は、教授会の議を経て、卒業を認定した者に対して、学位を授与し、学位記を交付するものとする。

(学位の名称)

第5条 本学の学位を授与された者が、その学位の名称を用いるときは、「桐朋学園芸術短期大学」と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第6条 学長は、学位を授与された者が、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したとき、又はその名誉を汚辱する行為があったときは、教授会の議を経て当該学位を取消することができる。

2. 学長は、前項の規定に基づき当該学位を取消したときは、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

附 則

1. この規程は、平成18年1月1日から施行する。

2. この規程の改廃については、教授会において行う。

図書館利用規程（抄）

（開館時間）図書館の開館時間は次のとおりとする。

- (1) 月曜日～金曜日 午前9時～午後7時
- (2) 土曜日 午前9時～午後2時

2. 館長は必要に応じて開館時間を延長または短縮することがある。

（館外利用）

本学は、次の各号により、教職員及び学生に対して資料の貸出を行なう。

(1) 図書については次のとおりとする。

- ①学生 冊数5冊まで、期間は2週間以内とする。
（但し、2年生は卒業式1か月前を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない）
- ②専攻科学生 冊数5冊まで、期間は1か月以内とする。
（但し、2年生は修了式1か月前を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない）

(2) 雑誌については次のとおりとする。

- ①学生 冊数5冊まで、期間は2週間以内とする。
（但し、2年生は卒業式1か月前を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない）
- ②専攻科学生 冊数5冊まで、期間は1か月以内とする。
（但し、2年生は修了式1か月前を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない）

(3) 楽譜については次のとおりとする。

- ①学生 冊数5冊まで、期間は2週間以内とする。
（但し、2年生は卒業式1か月前を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない）
- ②専攻科学生 冊数5冊まで、期間は1か月以内とする。
（但し、2年生は修了式1か月前を最終返却日とし、それ以降の貸出は行わない）

(4) その他の資料については別に定める。

(5) 長期休暇前の貸出期間については別に定める。

2. 学生の卒業、休学及び退学の際は、館外貸出中の図書館資料を直ちに返却するものとする。

（未返却の図書館資料がある場合、卒業、休学及び退学が承認されないこともある）

3. 図書館から借りた資料は、他の利用者に貸してはならない。

4. 図書館は次の資料は原則として貸出を認めない。

- (1) 参考図書
- (2) 映像資料
- (3) 録音資料
- (4) 貴重資料
- (5) その他特別に指定した資料

（視聴覚資料・機器の利用）

利用者は、視聴覚資料ならびに機器を所定の手続きにより、図書館内で利用することができる。

（複写）

利用者は、本学所蔵資料の複写を所定の手続きにより行なうことができる。

ただし次の資料は複写することはできない。

- (1) 著作権法に抵触するもの
- (2) 館長が不適当と認めたもの

（相互利用）

本学における他の図書館等の利用については次のとおりとする。

- (1) 館長は必要に応じて当該機関に対して利用依頼等を行なう。
- (2) 経費は利用者負担とする。

（館内規律）

利用者は次のことを守らなければならない

- (1) 静粛にすること
- (2) 他の利用者の迷惑になるような行為をしないこと
- (3) 館員の指示にしたがうこと
- (4) 資料の無断持ち出しをしないこと

2. 前各号を守らない場合は退館を求めることがある。

(弁償)

利用者は、利用中の資料、機器を紛失、毀損または汚損した場合は弁償しなければならない。弁償は現物弁償を原則とするが、不可能な時は時価弁償とする。

(貸出停止)

館長はこの規程に違反した者に対しては、図書館の利用を制限または停止することができる。

科目等履修生規程

第1章 総 則

(目 的)

第1条 この規程は、本学学則第52条の規定に基き、科目等履修生に関する取扱いについて定める。

(趣 旨)

第2条 本学において開講する授業科目の履修を希望する者があるときは、当該専攻等の授業及び研究の妨げのない限り、科目等履修生として履修を許可することができる。

第2章 出願手続・履修の許可・履修料・履修期間

(出願資格)

第3条 科目等履修生として出願できる者は、芸術科においては本学入学の資格を有する者とする。専攻科においては本学を卒業した者、またはこれと同等以上の学力を有する者。ただし、教職に関する科目については、本学卒業または修了した者とする。

(出願期間)

第4条 願書の受付期限は、原則として前年度末日までとする。

(出願手続)

第5条 出願する者は、次に定める書類を提出しなければならない。また、単位認定を希望する者は別表に定める選考登録料を納入しなければならない。

単位認定を希望する者

ア. 科目等履修生願書

イ. 最終出身学校の卒業証明書（卒業見込証明書）

単位認定を希望しない者

ア. 科目等履修生願書

(履修の許可)

第6条 履修については、30単位以内とし、当該授業科目担当教員の承諾を得るとともに、当該専攻会議等で審査のうえ、教授会の議を経て学長が許可する。

(履修の始期)

第7条 履修の開始は、学年または後学期の初めとする。

(履修料)

第8条 履修を許可された者は別表に定める履修料を所定の期日までに納入し、科目等履修生証の交付を受けなければならない。

(履修期間)

第9条 履修期間は原則として6か月または1カ年以内とする。

第3章 単位の認定

(単位算定基準)

第10条 履修単位の算定基準は、履修した授業科目における本学の学生の算定基準に準ずる。

(単位の認定)

第11条 単位の認定は、履修した授業科目の担当教員の指定する試験または報告、論文、作品等により、当該担当教員の評価に基づき、教授会の承認を経て決定する。

(教員免許状の単位)

第12条 科目等履修生の修得した単位は、教育職員免許法施行規則第20条の規定により、認定された単位とすることができる。

第4章 その他

(準用規定)

第13条 この規程に定めるもののほかは、本学学生に関する規程を準用する。

(規程の改廃)

第14条 この規程の改廃については、教授会において行なう。

附 則 略

【別 表】 選考登録料及び履修料

選考登録料（単位認定希望者のみ必要）	35,000円
履修料（1単位あたり）	12,500円
教育実習関係手数料	35,000円

音楽専攻研究生規程（科目等履修生に準ずる）

第1章 総 則

(目 的)

第1条 この規程は、本学学則第52条の規定に基づき、音楽専攻研究生に関して必要な事項を定めることを目的とする。

(趣 旨)

第2条 本学専攻科音楽専攻を修了した者で、なお特定の専修実技等の研究を深めようとする希望者があるときは、書類審査の上、研究生として履修を許可することができる。

第2章 出願・履修期間・履修料等

(履修開始)

第3条 履修開始は、原則として学年初めとする。

(履修期間)

第4条 履修期間は、原則として一年間とする。ただし、研究のため引続き履修する希望がある場合は、さらに一年に限り延長を認めることがある。

(履修資格)

第5条 履修資格は、本学専攻科音楽専攻を修了した者とする。

(出願者)

第6条 履修希望者は、あらかじめ指導を希望する第一実技担当者の承認を得た上で出願しなければならない。

(履修科目)

第7条 第一実技の他に、本学専攻科音楽専攻の開設科目を所定の手続きを経て履修することができる。ただし、第二実技は履修料を別途徴収する。

(履修料)

第8条 音楽専攻研究生の履修料（年額）は次のとおりとする。

- (1) 審 査 料 5,000円
- (2) 授 業 料 435,000円
- (3) 実 習 費 45,000円（合計 485,000円）

なお、既納の履修料等は、事由のいかんにかかわらず返還しない。

また、特別の事情があると認められる者には、延納または分納を認めることがある。

(研究生証・修了証)

第9条 研究生には履修手続終了と同時に研究生証を交付する。

第10条 修了コンサートをもって研究生修了とみなす。

第11条 研究生を修了した者に、修了証を発行し、履修の成果を認証する。

(特別研究生)

第12条 研究生として二年以上在籍して修了した者で、なお研究を深めようとする者があるときは、特別研究生として履修を許可することができる。

2. 特別研究生は、第一実技の他に、決められた専攻科の科目の中から2科目まで履修することができる。

(特別研究生履修料)

第13条 音楽専攻特別研究生の履修料(年額)は次のとおりとする。

- (1) 審査料 5,000円
- (2) 授業料 275,000円
- (3) 実習費 45,000円 (合計 325,000円)

なお、既納の履修料等は、事由のいかんにかかわらず返還しない。

また、特別の事情があると認められる者には、延納または分納を認めることがある。

(規程の改廃)

第14条 この規程の改廃については、教授会において行う。

演劇専攻研究生規程(科目等履修生に準ずる)

第1章 総 則

(目的)

第1条 この規程は、本学学則第52条の規定に基づき、演劇専攻研究生に関して必要な事項を定めることを目的とする。

(趣 旨)

第2条 本学専攻科演劇専攻を修了した者で、なお特定の専修実技等の研究を深めようとする希望者があるときは、書類審査の上、研究生として履修を許可することができる。

第2章 出願・履修期間・履修料等

(履修開始)

第3条 履修開始は、原則として学年初めとする。

(履修期間)

第4条 履修期間は、原則として一年間とする。ただし、研究のため引き続き履修する希望がある場合は、一年ごとに審査の上、最長四年間まで期間の延長を認めることがある。

(履修資格)

第5条 履修資格は、本学専攻科演劇専攻を修了した者とする。

(出願者)

第6条 履修希望者は、あらかじめ専攻主任の承認を得た上で出願しなければならない。専攻主任は面接の上、承認を与えないこともある。

(履修科目)

第7条 本学専攻科生の受講することのできる科目のうち、20単位分に限り、所定の手続きを経て履修することができる。単位の認定をあわせて行う。

(履修料)

第8条 演劇専攻研究生の履修料(年額)は次のとおりとする。

- (1) 審査料 5,000円
- (2) 授業料 100,000円
- (3) 実習費 220,000円 (合計 325,000円)

なお、既納の履修料等は、事由のいかんにかかわらず返還しない。

また、特別の事情があると認められる者には、延納または分納を認めることがある。

(研究生証・修了証)

第9条 研究生には履修手続終了と同時に研究生証を交付する。

第10条 研究生を修了した者に、修了証を発行し、履修の成果を認証する。

(規程の改廃)

第11条 この規程の改廃については、教授会において行う。

学外発表・出演、および学内演奏会関連規則

(1) 学外演奏発表規則（芸術科音楽専攻・専攻科音楽専攻）

- ① 学生が学外で演奏または発表を行う際には、次の規定に従わなくてはならない。
 - (a) 許可を必要とするもの：入場料、出演料等の有無にかかわらず、あらゆる公開演奏会、門下生発表会、コンクール、放送テレビ等での発表出演に際し、自己の氏名または大学名を明示する場合。
 - (b) 届出のみ必要なもの：上記すべての演奏発表のうち自己の氏名または大学名を明示しない場合。
 - (c) 許可を必要とするものについては音楽研究室にある所定の許可願用紙に必要事項を記入し、専攻実技担当教員ならびに専攻主任の承認を得たうえで、演奏発表の1週間前までに音楽研究室に提出して許可を得ること。
 - (d) 届出のみを必要とするものについては、所定の届出用紙に必要事項を記入の上、事前に音楽研究室へ提出すること。
- ② 学生としてふさわしくない演奏会、発表会、また演奏の技倆、内容が未熟であると判断された場合、もしくは出欠席その他学業に多大の支障が生ずる場合においては、演奏、出演を許可しないことがある。
- ③ 上記の規定に従わない学生に対しては、学則の定めるところにより懲戒処分を行うことがある。

(2) 学外出演規則（芸術科演劇専攻・専攻科演劇専攻）

- ① 学生が学外で演劇・映画・放送・商業写真およびそれに類するものへ出演する際は、履修登録期間内に出演許可願を演劇研究室に提出して許可を得ること。出演許可は、出演内容および出演申請者の状態などを考慮してその決定を行う。ただし、その稽古・リハーサルが履修登録期間以前に開始される場合、出演許可願は稽古・リハーサル開始の1ヵ月前までに提出すること。出演許可は、出演内容および出演申請者の状態などを考慮してその決定を行う。
- ② 舞踊・声楽などの発表会出演は、出演2週間前までに出演許可願を演劇研究室に提出して許可を得ること。
- ③ 単位認定を行う芸術科科目「劇上演実習C」「劇上演実習D」及び専攻科科目「劇上演実習E」「劇上演実習F」を履修する場合は他に手続きがある。
- ④ 上記の規定に従わない学生に対しては、学則の定めるところにより懲戒処分を行うことがある。

(3) 芸術科音楽専攻学内演奏会規則

- ①（目的）

この演奏会は、学生が互いに音楽を探究しあい、日々の勉強の積み重ねを認識し、かつ、ステージ演奏の経験と聴衆としての経験を深めるために、開かれるものである。

出演者は、演奏曲目に対して全力を尽くし、聴く学生は、積極的に集中して聴くことを通し、音楽体験を豊かにすることを目的とする。
- ②（実施要領）
 - (a) この演奏会は公開とし、授業への一環として、学生は全員出席することを原則とする。
 - (b) この演奏会は前期、後期各1回行われる。
 - (c) 演奏者は2年次生とする。
 - (d) 演奏者は原則として音楽専攻会議において実技の成績上位者から選ばれる。
 - (e) 出演者は、出演決定後、所定の期日までに音楽研究室で必要な手続きをすませること。

(4) 専攻科音楽専攻学内演奏会規則

- ①（目的）

この演奏会は、本科の勉強の積み重ねをさらに発展させ、より高度なステージ演奏の経験と、集中して音楽を聴く経験を深めるために、開かれるものである。
- ②（実施要領）
 - (a) この演奏会は公開とし、授業の一環として、学生は全員出席することを原則とする。
 - (b) 1年次生、2年次生とも、必要単位として全員出演する。
 - (c) 2年次で卒業演奏会に出席する者は出演を免除される。

ただし、卒業演奏会と異った曲目を用意し、積極的に希望する場合に限り重複出演を認める。
 - (d) 出演者は、所定の期日までに、音楽研究室で必要な手続きをすませること。

ステージ・クリエイティブ専攻実習科目のスタッフ実習N（学外制作研修）について

1. スタッフ実習N（学外制作研修）とは、一定の期間、学外のイベントや業務に学生が参加することで、実地研修とみなして単位を与える科目である。
2. 本研修の参加者、期間、内容、受入先は、専攻主任が策定し、教務・入試委員会に諮ったうえで、決定する。
3. 受入先とステージ・クリエイティブ専攻は、制作研修についての参加者、期間、内容、経費、報酬などについての諸条件を合意した上で契約を取り交わす。
4. 本研修の成績評価は、専攻主任が受入先による評価も勘案し決定する。
5. 研修期間は、正規の授業に妨げのない範囲で想定する。やむをえない場合は公認欠課扱いとする。
6. 本研修にかかる経費（交通費、食事代他）は原則として参加者負担であり、参加者個人への報酬が発生した場合は、専攻主任の同意のうえで、参加者の帰属となる。
7. 本研修内に発生した事故などの諸問題については、受入先と専攻主任が速やかに対処した上で、学内関係機関に報告し処理にあたる。

学費の滞納・延納の処理に関する手続について

授業料等の納入に関して、指定納入期限を過ぎても納入していない学生（滞納者）および納入期限の延長を願い出た学生（延納者）に対する具体的な処理は以下の手続によって行う。

I. 事前報告と対応

1. 経理課長は、学生の授業料等の納入状況について、定期的に短大教学課長に報告し、短大教学課長は、各専攻に報告する。
2. 各専攻の教員は前項の報告に基づき、授業料等の納入に支障をきたしている学生に対応する。必要のある場合は運営委員会に報告し、助言を得る。

II. 滞 納 者

1. 第1回文書催告

指定納入期限を過ぎても、未納であることが確認され次第、納入期限を示して、経理課長名をもって保証人あて文書による催告を行う。納入期限は、前期分については5月末日、後期分については10月末日とする。

2. 第2回文書催告

第1回文書催告に示した納入期限を過ぎても納入していない学生に対しては、新たな納入期限を示して、学長名をもって保証人あて文書による催告を行う。

この場合、その納入期限までに納入しなかったときには、学則第31条の適用を受けることがある旨を併記する。納入期限は、前期分については6月末日、後期分については11月末日とする。

3. 滞納者の処分

第2回文書催告によっても、その納入期限までに納入しない学生については、学長は教授会に諮って除籍処分とする。ただし、教授会が、特別の事情があると認めるときは、除籍に代えて他の措置を講ずることができる。

III. 延 納 者

1. 延納を申し出た学生には前期分については4月末日までに、後期分については9月末日までに所定の「延納許可願」を短大教学課に提出させる。
2. 延納の納入期限は、前期分については6月末日、後期分については11月末日とする。
3. 新規入学生の前期分授業料等の延納は認めない。
4. 納入期限までに納入しない学生については、学長は教授会に諮って除籍処分とする。ただし、延納期間に再び延納を申し出た場合は、学長の判断でこれを考慮する。
5. 専攻科学生には、学則第64条に定める授業料等の納入期間の最終日を指定納入期限として、この手続を準用する。ただし、一般公募による新規入学生の前期分授業料等については、この手続を準用しない。
6. 研究生には、4月末日を指定納入期限として、この手続を準用する。

桐朋演劇奨学会規程

(名 称)

第1条 本会は桐朋演劇奨学会と称する。

(目 的)

第2条 本会は成績優秀にして、本学在学中に経済的困窮に陥った者を援助することを目的とする。

(女子部門奨学会への繰り入れ)

第3条 前条の目的のために、本会は、各年度において奨学金給付相当額を桐朋学園女子部門奨学会に繰り入れる。

(財 源)

第4条 奨学金の財源は、有志の寄附金をもってこれにあてる。

(運 営)

第5条 本会の会長は桐朋学園芸術短期大学（以下、「本学」という）学長がこれにあたり、運営は本学教職員によって行う。

(奨学生の資格)

第6条 芸術科演劇専攻2年次生および専攻科演劇専攻生（専攻科特待生は除く）である。ただし、学則第8章に定める科目等履修生、外国人留学生および委託生で、本会が特に認めた者についても適用することができる。なお、特別な例を除き、当該年度において本奨学金を一度受給している者は、申し込むことができない。

(奨学生の募集および内容)

第7条 前期、後期の2回にわたり募集し、奨学金は授業料（履修料等を含む）の半額とする。

なお、本学学則第10章第67条に触れない限り返還の義務はない。

(奨学金の申請)

第8条 次の書類を募集期間に事務局に提出する。

- 1 奨学金申請書 (所定用紙)
- 2 家庭調書 (所定用紙)
- 3 収入証明書 (源泉徴収票等)

(奨学生の選考および発表)

第9条 奨学生の選考は本会が行い、その決定は、本人に通知するとともに本学掲示板に告示する。

附 則 略

桐朋学園芸術短期大学専攻科特待生規程

(目 的)

第1条 桐朋学園芸術短期大学 (以下「本学」という。)では、本学芸術科から本学専攻科 (演劇専攻・音楽専攻・ステージ・クリエイト専攻) への進学を積極的に奨励するとともに、学生のさらなる勉学意欲の向上を企図して、学業奨励金を給付する。

(特待生)

第2条 この規程により、学業奨励金の給付を受ける学生を特待生という。

2. 特待生は、以下の期間の成績ならびに勉学への取り組み姿勢等を評価の対象とし、年間10以内とする。
 - (1) 1年次後期待待生は、芸術科および専攻科1年次前期までの成績
 - (2) 2年次前期待待生は、芸術科および専攻科1年次の成績

(特待生の決定)

第3条 各専攻会議は、専攻科入学者数を勘案したうえで、専攻科入学定員 (音楽 (20)、演劇 (20)、SC (10)) を基準に候補者を選抜し、学科会議を経た上で、前条第2項 (1) については6月教授会、(2) については11月教授会で審議・決定する。

2. 特待生として決定した学生には、本人宛てに通知する。

(他の奨学金との関係)

第4条 特待生の選抜にあたっては、同時期に桐朋演劇奨学会奨学生として奨学金の給付を受けている者は対象としない。

(学業奨励金)

第5条 学業奨励金は1名につき100,000円とする。

2. 給付は、各専攻の授業料等納入金から、前項の金額を減ずる形で措置する。授業料等納入金を既に納めている場合は、返金する形で措置する。

(特待生の資格喪失)

第6条 特待生が次の各号のいずれかに該当したと認められた場合は、学科会議および教授会の議を経て、その資格の喪失を決定することができる。

- (1) 退学または除籍となったとき
- (2) 学則及び学生規程による懲戒処分を受けたとき
- (3) 学業成績が不良のとき
- (4) その他特待生として適当でないと認められたとき

(学業奨励金の返還)

第7条 特待生は、第6条に定めるいずれかの項に抵触した場合、資格を喪失し、給付された金額を返還しなければならない。

附 則

1. この規程は平成24年4月1日より施行する。
2. この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

校舎施設の使用について

(1) 一般教室・実習室の使用規程要旨

●平日・土曜の使用

○使用教室

一般教室	新館	2111	2112	2211	2212			
	旧館	2101	2102	2301	2302	2303	2304	2305
実習室	新館	小劇場 第1実習室 第2実習室						
	別棟	第3実習室 第4実習室 スペース桐朋						

- 使用時間 8時30分～21時50分（第4実習室・スペース桐朋 21時30分） ※音楽専攻の学生は1人1回2時間まで
～22時30分（劇上演実習稽古に限り）
～23時00分（劇上演実習関係の搬入搬出に限り）

○使用手続

1. 申込時間 平日 8時15分～16時20分 土曜 8時15分～12時30分
使用当日の一般教室のみ、上記申込時間以降21時まで、警備員の許可にて使用可
2. 申込方法
 - ①使用の前日及び当日、『教室使用状況一覧表』『教室使用届』に所定事項を記入する
 - ②研究室で承認印を得る（研究室が不在時のみ教学課で対応）
 - ③承認済の『教室使用届』を『使用予約 教室等使用届』ファイルに綴じる
 - ④予約した日時に教室を使用する際、上記③で綴ったファイルから『教室使用届』をとりだし、ドアの所定場所に表示する
 - ⑤使用後は『使用済み 教室等使用届』ファイルに綴じる

※『教室使用状況一覧表』及び『使用予約 教室等使用届』及び、『使用済み 教室等使用届』の保管場所は以下のとおり

【月～金】 8時15分～16時00分 ⇒ 教学課窓口
16時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室

【土曜日】 8時15分～12時00分 ⇒ 教学課窓口
12時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室

【休日】 終日 ⇒ 本館警備室

●休日の使用

- 使用教室 新館の一般教室・実習室および第3実習室
- 使用時間 9時00分～18時00分 ※音楽専攻の学生は1人1日4時間まで
～21時00分（劇上演実習稽古に限り）
8時30分～21時50分（上記の開演日の2週間前から）

○使用手続

1. 申込時間 平日 8時15分～16時20分 土曜 8時15分～12時30分
2. 申込方法 平日と同じ
ただし、休日は使用当日の申込ができないため、休前日に予約する

●休業期間中（春季・夏季・冬季）の使用

- 使用教室 旧館/新館の一般教室・実習室およびスペース桐朋・第3・4実習室
期間中の土曜、日曜、休日、及び8/12～16、12/29～1/3の学園閉鎖期間は使用できない。
- 使用時間 9時00分～18時00分
～21時50分（劇上演実習稽古に限り）
- 使用手続 申込期間・申込方法を休業期間前に掲示にて連絡する。

●その他

1. 複数名で使用する場合は、『教室使用届』に同伴者の氏名を記入すること。ただし、学外の同伴者は認めない。
2. 原則として22時までに学外へ出ること（休日及び休業期間中は18時まで）。
3. 原則として小劇場・第1・2・4実習室は演劇専攻以外の学生は使用できない。
4. 第4実習室及びスペース桐朋はグループ（団体）3名以上の使用とする。
5. レッスン室・練習室が空いている場合には、ピアノ等の練習のため、少人数での一般教室の使用を控えること。
6. ピアノ使用後は、必ず蓋をして、カバーを掛けること。故意に傷つけた場合は、弁償すること。
7. 教室に置いている備品は原則として使用できない。
8. 使用を取り消す場合は、教学課又は警備員に連絡すること。
9. 16時以降（土曜12時以降）の使用終了後は、警備員詰所のホワイトボードに終了時間を記入すること。
10. 旧館3階のロビーで練習の為の音出しは上の階の図書館に影響が及ぶため、禁止。
11. 第3実習室での楽器使用不可。
12. 映像音楽編集室（2313）の使用はライブスタジオ調整室の使用規程による。
13. 音楽専攻以外の学生が2301教室を使用する場合は、1回あたりの時間制限を音楽専攻学生と同様とする。

14. 身の安全に注意し、異変等に気づいたら、教学課又は警備室まで連絡する。
15. 戸締り、消灯、空調（暖房機）の節電を必ず行う。
16. 使用申込をした学生が、しかるべき理由なしに教室を継続して30分以上空けた場合は、権利を放棄したものとみなし、他の学生が所定の手続きを経て使用することができる。

(2) レッスン室・練習室の使用規程要旨

●平日・土曜の使用

○使用教室

レッスン室	新館	2213	2214	2215	2216	2217
	旧館	2001	2002	2003	2004	
練習室	旧館	2005	2006	2007	2008	2009 2010

○使用時間 8時30分～21時50分 ※1人1回2時間まで、使用後空いている部屋があれば、再度予約可能

○使用手続

1. 申込時間 平日8時15分～16時20分 土曜8時15分～12時30分
使用当日のみ、上記申込時間以降21時まで、警備員の許可にて使用可
2. 申込方法
 - ①使用の前日及び当日、『レッスン室・練習室使用状況一覧表』『レッスン室・練習室使用届』に所定事項を記入する
 - ②研究室で承認印を得る（研究室が不在時のみ教学課で対応）
 - ③承認済の『レッスン室・練習室使用届』を『使用予約 教室等使用届』ファイルに綴じる
 - ④予約した日時にレッスン室・練習室を使用する際、上記③で綴ったファイルから『レッスン室・練習室使用届』をとりだし、ドアの所定場所に表示する
 - ⑤使用後は『使用済み 教室等使用届』ファイルに綴じる
 ※『レッスン室・練習室使用状況一覧表』及び『使用予約 教室等使用届』及び、『使用済み 教室等使用届』の保管場所は以下のとおり

【月～金】 8時15分～16時00分 ⇒ 教学課窓口
16時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室
【土曜日】 8時15分～12時00分 ⇒ 教学課窓口
12時00分～21時50分 ⇒ 短大警備室
【休日】 終日 ⇒ 本館警備室

●休日の使用

○使用教室

新館レッスン室

○使用時間

9時00分～18時00分 ※1人1日4時間まで、使用後の再予約は不可

○使用手続

1. 申込時間 平日8時15分～16時20分 土曜8時15分～12時30分
2. 申込方法 平日と同じ
ただし、休日は使用当日の申込ができないため、休前日に予約する

●その他

1. 複数名で使用する場合は、『レッスン室・練習室使用届』に同伴者の氏名を記入すること。ただし、学外の同伴者は認めない。
2. 飲食は認めない。
3. 原則として音楽専攻以外の学生は使用できない。音楽学部生・音高生は、新館レッスン室のみ使用可。
4. 音楽専攻以外で副科・第二実技科目を履修している学生は、旧館練習室のみ使用することができる（休日は新館レッスン室の使用可）。
5. 原則として22時までに学外へ出ること（休日及び休業期間中は18時まで）。
6. 使用を取り消す場合は、教学課又は警備員に連絡すること。
7. 16時以降（土曜12時以降）の使用終了後は、警備員詰所のホワイトボードに終了時間を記入すること。
8. ピアノ使用後は、必ず蓋をして、カバーを掛けること。故意に傷つけた場合は、弁償すること。
9. 身の安全に注意し、異変等に気づいたら、教学課又は警備室まで連絡する。
10. 戸締り、消灯、空調（暖房機）の節電を必ず行う。
11. 使用申込をした学生が、しかるべき理由なしにレッスン室を継続して30分以上空けた場合は、権利を放棄したものとみなし、他の学生が所定の手続きを経て使用することができる。

(3) ライブスタジオ使用規程

(目的)

第1条 この規程は、ライブスタジオの使用に関し、必要な事項を定めることを目的とする。

(使用日の区分)

第2条 使用日を次のとおり区分する。

- (1) 平常授業日 月曜日から土曜日までの正規の授業が行われている日をいう。
 - ア 授業内使用 カリキュラムに則った正規の授業時間内での使用をいう。
 - イ 授業外使用 授業終了以降などの授業時間外の使用をいう。
- (2) 休日使用 学則に定める休業日の使用をいう。

(平常授業日の使用)

第3条 平常授業日の使用は次による。

- (1) 授業内使用
 - ア 教務・入試委員会において定められた日課表により、日時、時限及び担当教員を定める。
 - イ 担当教員は、使用に関する責任を負い、使用終了時には、清掃及び初期設置状態への復帰を遵守する。
- (2) 授業外使用
 - ア 通常授業に続く使用時間の延長（補講及び練習を含む）は、担当教員の責任のもとにこれを認める。ただし、事前の届出がない場合には、他の「短大校舎使用許可願」による使用を優先することがある。なお、使用終了後には、清掃及び初期設置状態への復帰を遵守する。
 - イ 授業に準ずる行事などで、専任教職員又はこれに準ずる者が指導する場合に限り、授業外使用を認める。この場合、事前に「短大校舎使用許可願」の提出を必要とする。
 - ウ 椅子、机等機器備品を使用する場合には、あらかじめ「短大校舎使用許可願」に明記し、事前に保管場所の鍵を受け取ったうえで、保管倉庫などから搬入・返却する。なお、照明・音響機器の使用については、第5条に定める。
 - エ 使用にあたっては、他の正規の授業時間を妨げることなく、授業開始時刻から21時30分までの間に限って使用し、21時45分を退室時間とし、22時には校門から退去するものとする。

(休日使用)

第4条 休日の使用は次による。

- (1) 休日使用の手続及び届出
 - 授業又は授業に準ずる行事などで、専任教職員又はこれに準ずる者が指導する場合に限り、休日使用を認める。使用を希望する場合は、事前に「短大校舎使用許可願」の提出を必要とする。
- (2) 使用時間
 - 休日使用は、9時から18時までをその使用時間とし、速やかに退出するものとする。
- (3) 休日使用における管理
 - ア 休日に使用する場合は、警備員及び教職員の指示に従い、使用責任者が責任を持って開錠閉錠を行い管理する。使用終了時には、清掃及び初期設置状態への復帰を遵守する。
 - イ 椅子、机等機器備品を使用する場合には、あらかじめ「短大校舎使用許可願」に明記し、事前に保管場所の鍵を受け取ったうえで、保管倉庫などから搬入・返却する。なお、照明・音響機器の使用については、第5条に定める。
- (4) 楽屋の使用
 - ライブスタジオ使用に際し、楽屋A、Bを併せて使用する者は、その旨を「短大校舎使用許可願」に明記するものとする。楽屋使用についての細則は別に定める。

(調整室及び設置機器の使用)

第5条 調整室及び設置機器の使用は、次による。

- (1) 使用原則
 - 調整室及びライブスタジオ内に設置されている照明・音響などの機器類の使用については、これを目途とした授業の使用以外は、原則として認めない。ただし、全体通常照明や空調の使用は使用責任者の判断による。
- (2) 照明・音響取扱責任者
 - ア ライブスタジオの照明・音響機器使用の説明及び指導を受けた者が責任を持って使用する場合に限り、前号の例外とする。この場合、「短大校舎使用許可願」に機器取扱者を明記するものとする。
 - イ 調整室の鍵の管理は、使用日の前日までに機器取扱者又は使用責任者が関係部署と受け渡しを行う。

(協議・決裁)

第6条 ライブスタジオの使用に関して、何らかの不測の事態あるいは問題等が発生した場合は、理事、学長、短大関係部署（ステージ・クリエイト専攻、短大教学課、教務・入試委員会、学生・安全対策委員会など）及び管財課で協議し、学長が決裁する。

附 則 略

(4) 一号館（大学校舎）レッスン室使用規程要旨（音楽専攻学生のみ）

●一般レッスン室（個人練習・二重奏練習）

主としてレッスンを行うための部屋であるが、練習室として使用できる。

レッスン室番号	211 212 213 214 215 216 217 218 219 223 224 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 328 331 332
---------	---

●練習時間帯（一般授業開講期間 — オリエンテーション期間を含む）

平日	早朝練習時間帯	5:10am ~ 8:00am	休日	休日練習時間帯	8:00am ~ 9:45pm
	授業時間帯	8:00am ~ 5:00pm			
	夜間練習時間帯	5:00pm ~ 9:45pm			

〔授業時間帯〕 授業・レッスンに使用されていない時は自由に練習できる。（特別な届の必要はない）

〔練習時間帯〕 その都度使用願を提出し、許可を受ける。

●使用手続

1. 申し込みは直接本人が行う。伴奏者などの代理人の申し込みは受け付けない。
2. 1回の申し込みは1人（1グループ）1日につき1件とし、1件についての時間を次のように制限する。
早朝練習時間帯→特に定めなし 夜間練習時間帯→2時間30分以内
休日練習時間帯→4時間以内
3. 申し込みにあたっては、『レッスン室一般使用許可願』に必要事項を記入し、身分証明書を添えて窓口に提出する。（用紙は大学の教務課⑤番窓口にある）
4. 許可証は、当日、大学の警備員室窓口で、予約申し込み受け付け時に渡された整理券との引き換えにより交付される。
5. 許可された者は窓口に許可証を呈示し、カギを受け取る。練習終了後遅滞なく窓口に返却する。

		受付窓口など		カギの貸出しなど	
早朝	警備員室	当日	5:10am ~ 7:00am	警備員室	5:10am ~ 7:00am
	教務課	当日	8:30am ~ 2:00pm	警備員室	5:00pm ~ 9:00pm
夜間	⑤番窓口		(予約)		
	警備員室	当日	5:00pm ~ 9:00pm		
休日	教務課	前日	8:30am ~ 2:00pm	警備員室	8:00am ~ 9:00pm
	⑤番窓口		(予約)		
	警備員室	当日	8:00am ~ 9:00pm		

注意 ・休日の正午～午後1時、午後6時～午後7時は申し込み受け付け、カギの貸し出しなどは行わない。

注意 ・上記教務課⑤番窓口での受付時間は午後2時までであるが、当日の教室・レッスンの状況により早める場合もある。

(5) スペース桐朋、ライブスタジオなどの使用についての申し合わせ

- 1) ライブスタジオ、スペース桐朋など本学の諸施設の学生による使用については、本学の学生による自主練習などのための使用にのみ許可される。
基本的には本学の学生のみでの使用に限られるが、一部学外者が参加する場合は、参加者の所属連絡先などを届け出た上、使用目的を勘案し認める場合もある。
- 2) 学外者による制作や主催を主とした諸施設の使用に関しては、本学専任教員の関与するものは別として、たとえ本学学生が参加するものであっても使用は認めない。
- 3) 映像編集室の使用に関しては、ライブスタジオ使用規程に準ずる。

学校法人桐朋学園 個人情報保護方針

学校法人桐朋学園では、教育・研究、事務等の諸活動において、多くの個人情報を取り扱っております。学生、生徒、児童、園児をはじめその保護者、そして教職員等、学園にかかわる方々の個人情報を慎重に取り扱い、適切に保護、管理することは、教育機関としての本法人の社会的責務であると認識しております。

この責務を果たすため、本法人は、個人情報保護法及びその他の規範を遵守するとともに、以下に掲げる方針のもと、個人情報の適切な保護、管理を実行いたします。

1. 個人情報の取得

個人情報の取得に際しては、利用目的を特定のうえ、これを明示し、適法かつ公正な方法により、原則として本人から取得します。

2. 個人情報の利用

個人情報は、取得の際に明示した利用目的の範囲内で利用いたします。本人の同意を得ないで、目的外での利用はいたしません。

3. 個人情報の保護、管理

個人情報の正確性及び安全性を確保するために、安全管理対策を講じ、個人情報の漏えい、改ざん、紛失等を防止します。

本法人は、各部門各機関に「個人情報保護管理責任者」を置き、個人情報の保護、管理について、責任の所在を明確にしております。

個人情報の取扱いは、その権限を付与された教職員のみが、業務の遂行上必要な限りにおいて取り扱うものとします。なお、

個人情報を取り扱う教職員であるか否かにかかわらず、学園に勤務する全ての者に必要かつ適切な監督を行い、加えて、教育・研修等の機会を通して意識の啓発に努めます。

個人情報に関する業務を外部に委託する場合は、委託先において個人情報の安全管理が図られるよう、契約書を取り交わすなど、必要かつ適切な措置を講じます。

4. 個人情報の第三者への提供

原則として、法令に定める場合等を除き、事前に本人の同意を得ることなく、第三者に個人情報を提供することはいたしません。

なお、第三者に個人情報を提供する場合には、提供先においてその安全管理が図られるよう、契約書を取り交わすなど、必要かつ適切な措置を講じます。

5. 個人情報の開示、訂正、利用停止、削除等の請求並びに不服の申立

各機関の「個人情報保護管理責任者」は、開示、訂正、利用停止、削除の請求等に関しては、本人であることの確認をしたのち、速やかに対応いたします。

6. 個人情報に対する保護、管理体制の継続的改善

個人情報保護の重要性を、本法人の役員をはじめ学園に勤務する全ての者に周知徹底するとともに、今後も本方針に則り、保護・管理体制の見直し、改善、向上に努めます。

桐朋学園芸術短期大学 学生個人情報保護規程

第1章 総則

(目的)

第1条 桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）は個人情報（個人情報データベースを含む。以下「個人情報」という。）の保護が、人格の尊厳に由来する基本的人権の保障に係る問題であることを深く認識し、本学が保有する個人情報の取扱いに関する基本事項を定める。

(用語の定義)

第2条 この規程において、「学生」とは次の各号によるものとし、「教職員」とは専任の教職員ならびに本学の業務に直接かかわりがあり、またはかかわりがあった者をいう。

- (1) 「本学において教育を受けている者」で在學生、科目等履修生や聴講生など。
- (2) 「本学において教育を受けようとする者」で受験生、入学前の合格者、入学ガイダンスへの参加者など。
- (3) 「過去において、本学において教育を受けた者」で卒業生、修了生、中退など。
- (4) 「過去において、本学において教育を受けようとした者」で不合格者や入学辞退者など。

2 この規程において、「個人情報」とは次の各号によるものとする。

- (1) 学生について特定の個人が識別されるもの（氏名、住所、生年月日、電話番号）。
- (2) 識別され得るもの（映像、デジタル記録等）。
- (3) 個人を特定できないものであっても学内で対応付けられた個人情報がある場合のもの（学籍番号、IPアドレス等）。
- (4) 教職員が業務上取得または作成した情報（文書、写真、フィルム、磁気テープその他これらに類するものに記録されたものを含む）。

3 この規程において「個人情報データベース」とは、個人情報が含まれる情報の集まりで、検索できる状態のものであって、ユーザーIDとユーザーが記録されているログ情報ファイル、紙ベースの住所録や名刺など整理されて検索できる利用可能な状態のデータベースをいう。

(責務)

第3条 学長はこの規程の目的を達成するため個人情報の保護に関し次の各号に対する必要な措置を講じなければならない。

- (1) 利用目的の特定・公表
 - (2) 適正管理、利用、第三者への提供
 - (3) 本人の権利と関与
 - (4) 本人の権利への対応
 - (5) 苦情の処理
- 2 教職員または教職員であった者は、業務上知り得た個人情報をみだりに他人に知らせ、または不当な目的に使用してはならない。
 - 3 学生、教職員は個人情報保護の重要性を認識し、本規程によって学生個人の権利利益を侵害しないように努めなければならない。

第2章 個人情報の収集および利用目的の特定・公表等

(個人情報収集の制限)

第4条 教職員が業務上学生の個人情報を収集するときは、利用目的を明確に特定・公表し、その目的達成に必要な最小限度の範囲で収集しなければならない。ただし、思想および信教に関する個人情報は、いかなる理由があろうともこれを収集してはならない。

- 2 あらかじめ個人情報を「第三者に提供」することを想定している場合には、利用目的で、その旨特定しなければならない。
- 3 インターネットのCGI等での個人情報の入力には、入力ホームページ内には必ず利用目的をユーザーの目に付く位置に記載しなければならない。
- 4 教職員が業務上、個人情報を収集するときは、適正かつ公正な手段により、次の各号のいずれかに該当するときは除き、直接本人から収集しなければならない。
 - (1) 本人の同意があるとき。
 - (2) 個人の生命、身体、健康、財産に対する急迫の危険を避けるためにやむを得ないと認められるとき。
 - (3) 教員の教育指導上特段の必要性があるとき。
 - (4) 法の定めるところにより、行政機関から依頼があったとき。
 - (5) 指導または相談援助に関わって、本人から収集したのでは目的を達成することができないか、業務に支障があると認められるとき。
 - (6) 学長が正当な理由があると認めたとき。

(個人情報の適正管理)

第5条 学長は、個人情報の保護のため、次に各号に掲げる事項について、適正で安全な措置を講じなければならない。

- (1) 紛失、滅失、毀損、破壊その他の事故の防止
 - (2) 改ざんおよび漏洩の防止
 - (3) 個人情報の正確性および最新性の保持
 - (4) 不要となった個人情報のすみやかな廃棄または消去
- 2 学長は前項の事務をはじめ、本規程に基づく業務を適切に執行するため、業務ごとに個人情報保護管理責任者を選任するとともに次の組織的・人的・物理的・技術的その他の広範囲な安全対策措置を講ずる。

組織的安全管理措置

- ・個人情報保護管理者の設置、組織体制の整備
- ・学内諸規程の整備と運用
- ・個人情報取扱い台帳の整備
- ・安全管理措置の評価、見直し、改善
- ・事故または違反への対処

人的安全管理措置

- ・雇用時や契約時において非開示契約を締結
- ・教職員に対する教育・訓練の実施

物理的安全管理措置

- ・入退室管理
- ・盗難対策
- ・機器、装置等の物理的な保護

技術的安全管理措置

- ・個人情報のアクセス認証・制御・記録・権限管理
- ・不正ソフトウェア対策
- ・移送、通信時の対策
- ・動作確認時の対策
- ・情報システムの監視

その他重要事項

- ・個人情報を閲覧できる教職員の限定
 - ・個人情報の持ち出し制限
 - ・外部からの個人情報への不正アクセス防止策の導入
 - ・教職員に対する個人情報保護研修の実施
 - ・個人情報漏洩時は当該本人に速やかに通知
 - ・事件内容の公表（類似事件の発生回避）
- 3 個人情報保護管理責任者は、業務に関係する教職員に対する情報セキュリティ対策として、個人情報に対するアクセス制限、アクセス管理及び監視を行う。
 - 4 個人情報保護管理責任者は、業務マニュアルを定め、持ち出し制限や移動時の取り決め、暗号化等のプロセスを決め、全て申請・承認によって処理することを決めて、守らせる。
 - 5 個人情報保護管理責任者は、業務に関係する教職員に個人情報を取り扱わせるに当っては、当該個人情報の安全管理が図られるよう、当該教職員に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。
 - 6 個人情報保護管理責任者は、業務に関係する個人情報の取扱いの全部または一部を委託する場合は、その取扱いを委託された個人情報の安全管理が図られるよう、委託を受けた者に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。
 - 7 個人情報保護管理責任者は、第6条に掲げる場合を除くほか、あらかじめ本人の同意を得ないで、個人情報を第三者に提供して

はならない。

(個人情報の利用制限)

第6条 教職員は、業務上収集した個人情報をその目的以外のために利用または提供してはならない。ただし、次の各号のいずれかに該当するときはこの限りでない。

- (1) 本人の同意があるとき。
 - (2) 個人の生命、身体、健康に対する急迫の危険を避けるためにやむを得ないと認められるとき。
 - (3) 教員および保護者の教育上、特段の必要性があるとき。
 - (4) 法の定めがあるとき。
 - (5) 学長または個人情報保護管理責任者が必要と認めるとき。
- 2 前号一から五の各号に該当して個人情報を利用または提供する場合、または緊急に対応した場合は、業務責任者はすみやかに個人情報保護管理責任者に届け出なければならない。

(個人情報に関する業務の学外委託)

第7条 個人情報に関する業務を学外に委託するときは、業務責任者は個人情報保護管理責任者の指導のもと委託業者との間で個人情報の保護に関する必要な措置をとらなければならない。

(収集の届出)

第8条 教職員は、新たに個人情報を収集するときは、あらかじめ次に事項について個人情報保護管理責任者に届け出なければならない。

- (1) 個人情報の名称
 - (2) 個人情報の利用目的
 - (3) 個人情報の収集の対象者
 - (4) 個人情報の収集方法
 - (5) 個人情報の記録項目
 - (6) 個人情報の記録の形態
- 2 前項により届け出た事項を変更または廃止するときは、業務責任者は、あらかじめこれを個人情報保護管理責任者に報告しなければならない。

第3章 個人情報の開示、訂正等

(個人情報の開示)

第9条 学生は本学が保有する自己に関する個人情報の開示を請求することができる。

- 2 開示の請求があったときは、個人情報保護管理責任者は遅滞なくこれを開示しなければならない。ただし、その個人情報が、個人の選考、評価、判定、学生健康記録その他に関するものであって、本人に知らせないことが明らかに適当であると認められるときは、その個人情報の全部または一部を開示しないことができる。
- 3 個人情報の全部または一部を開示しないときは、その理由を本人に通知しなければならない。
- 4 第1項に規定する請求は、学長に対し、本人であることを明らかにして、次に掲げる事項を記載した文書を提出することにより行う。
 - (1) 所属および氏名
 - (2) 個人情報の名称および記録項目
 - (3) 請求の理由
 - (4) その他学長が必要と認めた事項

(個人情報の訂正または削除)

第10条 学生は、自己に関する個人情報の記録に誤りがあると認めるときは、前条第4項に定める手続に準じて、学長に対し、その訂正または削除を請求することができる。

- 2 学長は前項の規定による請求を受けたときは、すみやかに調査のうえ、必要な措置を講じ、結果を本人に通知しなければならない。ただし、訂正または削除に応じないときは、その理由を文書により本人に通知しなければならない。

第4章 不服の申立て

(不服の申立て)

第11条 自己の個人情報に関し、第10条第2項に規定する請求に基づいてなされた措置に不服がある学生は、本人であることを明らかにして、学長に対し、申立てを行うことができる。

- 2 学長は、前項の不服申立てを受けたときは、すみやかに審査し、その結果を文書により本人に通知しなければならない。
- 3 不服の申立ては、次に掲げる事項を記載した文書を学長に対し提出することにより行う。
 - (1) 不服の申立てを行う者の所属および氏名
 - (2) 不服申立て事項
 - (3) 不服申立て理由
 - (4) その他学長が必要と認めた事項

第5章 規程管理

(所 管)

第12条 本規程の管理責任者は学長とし、所管は短期大学教学課とする。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は教授会の議を経て学長が行う。

付 則

第1条 この規程は平成17年7月11日から施行する。

桐朋学園芸術短期大学 セクシュアル・ハラスメント等の防止等に関する規程

(目 的)

第1条 この規程は、桐朋学園芸術短期大学（以下「本学」という。）におけるセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントおよびその他のハラスメント（以下「セクシュアル・ハラスメント等」という。）の防止および排除のための措置並びにセクシュアル・ハラスメント等に起因する問題が生じた場合に適切に対応するための措置（以下「セクシュアル・ハラスメント等の防止等」という。）に関し、必要な事項を定めることにより、本学における良好な学習・教育・研究・労働環境の維持・確立を図ることを目的とする。

(定 義)

第2条 この規程における用語の意義は、次の各号に掲げるものをいう。

(1) セクシュアル・ハラスメント

- ア. 学生、教職員または関係者が、意図すると否にかかわらず、性差別的または性的な言動によって、相手を不快にさせる行為
(例) 性的な噂を流したり、人を傷つける性的な内容の冗談を言ったりすること。
性的な文書や画像等の掲示や提示をすること。
相手が望まない飲食等にしつこく誘うこと。
不必要に身体に触れること

- イ. 学生、教職員または関係者が、利益もしくは不利益を与えることを利用して、または利益を与えることを代償として、相手に性的な誘いまたは要求をする行為
(例) 成績評価等と引き換えに、性的要求を迫ること

(2) アカデミック・ハラスメント

教育・研究の場において、教職員またはこれに準ずる者が、その地位または職務権限を利用し、これに抗し難い地位にある者に対して、相手によって差別したり、人格を否定したり、必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより、相手方の勉学・研究意欲や研究環境を害する言動または行為

(3) パワー・ハラスメント

職場において、教職員またはこれに準ずる者が、その地位または職務権限を利用し、これに抗し難い地位にある者に対して、相手によって差別したり、人格を否定したり、必要以上に厳しく指導したりまた指導を放棄することにより、相手方の就労意欲や就労環境を害する言動または行為

(4) その他のハラスメント

学生、教職員または関係者が、他の学生、教職員または関係者に飲酒の強要、喫煙にまつわる不法行為、誹謗、中傷、風評の流布などにより人権を侵害したり不快にさせたりする行為

(5) セクシュアル・ハラスメント等に起因する問題

セクシュアル・ハラスメント等のため学生等の修学上または職員の就労上の環境が害されることおよびセクシュアル・ハラスメント等への対応に起因して学生等が修学上または職員が就労上の不利益を受けること

(6) 学生

本学で修学する一般学生（本科生・専攻科生）、科目等履修生（研究生含む）、単位互換履修生、外国人留学生および委託生をいう。

(7) 教職員

教員、事務職員、非常勤講師、嘱託職員、定時職員、委託職員など本学に勤務するすべての教職員をいう。

(8) 関係者

学生の保護者および関係業者等職務上の関係を有する者をいう。（ただし、教職員および学生を除く。）また、かつて本学に在籍し、現在大学を離れた者であっても、セクシュアル・ハラスメント等と判断される行為のどちらか一方の当事者が、学生または教職員である場合はこれに含める。

(9) 教育・研究の場

本学では、常勤・非常勤を問わず、本学に在職する教職員と学生との間、および本学の学生同士の間には、つねに教育環境上の関係があるものとみなす。よって大学におけるセクシュアル・ハラスメント等は、正課の授業時間中の大学構内における場合にとどまらず、課外活動や学外を含むあらゆる場合のそれを意味する。

(学生および教職員の責務)

第3条 学生および教職員は、相互に個人の人格を尊重するよう努め、セクシュアル・ハラスメント等を行ってはならない。

2. 学生および教職員は、前条で規定した用語の意義を深く認識し、セクシュアル・ハラスメント等の防止および排除に努めなくてはならない。
3. 学生のセクシュアル・ハラスメント等に関する苦情や相談については、全ての教職員がこれにあたり、相談を受けた教職員は、必要な指導、助言を行うとともに、事実関係の調査に協力するなど、適切な対応をとらなければならない。

(学長の責務)

第4条 学長は、セクシュアル・ハラスメント等を差別、人権侵害として禁止するとともに、その防止および排除するため、本学の教職員に対し、この規程の周知徹底を図るものとする。

2. 学長は、万一セクシュアル・ハラスメント等による問題が本学内に生じた場合は、必要な措置を迅速かつ適切に講じなければならない。

(防止委員会)

第5条 セクシュアル・ハラスメント等に関する具体的事例について、事実関係の調査および対応策の検討を行うため、また、セクシュアル・ハラスメント等の防止に関する広報および啓蒙等に関する業務を行うためにセクシュアル・ハラスメント等防止委員会（以下「防止委員会」という）を設置する。

2. 防止委員会の運営については、別に定める。

(相談窓口)

第6条 防止委員会は、セクシュアル・ハラスメント等に関する苦情相談が学生、教職員または関係者からなされた場合に対応するため、セクシュアル・ハラスメント等相談窓口（以下「相談窓口」という。）を設置し相談員を配置する。

2. 相談窓口の運営については、別に定める。

(調査委員会)

第7条 防止委員会は、特定の事例について調査が必要と判断した場合、セクシュアル・ハラスメント等調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置くことができる。

2. 調査委員会の運営については、別に定める。

(不利益取扱いの禁止)

第8条 学長および教職員は、セクシュアル・ハラスメント等に関する苦情相談、当該苦情相談に関する調査への協力その他セクシュアル・ハラスメント等に関して正当な対応をした学生または教職員に対し、そのことをもって不利益な取扱いをしてはならない。

(懲戒)

第9条 セクシュアル・ハラスメント等を行った教職員は、その態様等によっては、桐朋学園女子部門就業規則第54条(3)「教職員としての信用を著しく失う非行があった場合」に該当するものとして、懲戒処分を行うことがある。

2. セクシュアル・ハラスメント等を行った学生は、桐朋学園芸術短期大学学則第67条に基づき、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

附 則

1. この規程は平成20年4月1日より施行する。
2. この規程の改廃は教授会の議を経て行う。

演劇専攻自治会 自治会規約

第1章 総 則

(名称・本部)

第1条 本会は、桐朋学園芸術短期大学・演劇専攻自治会とし、その本部を桐朋学園芸術短期大学内に置く。

(会 員)

第2条 本会は桐朋学園芸術短期大学芸術科・演劇専攻生並びに専攻科生をもって組織する。

(目 的)

第3条 本会は、会員一人一人の主体性ののっとり、演劇芸術の創造と、その新なる運動体を形成することを目的とするものである。各会員はその能力を十二分に発揮し、思想性を高めると共に、既存の諸観念を乗り越え自らの主体を確立し遂に現在の広漠たる芸術分野に、ひとつの指標を打ち立てる責務を担う。

第2章 構成

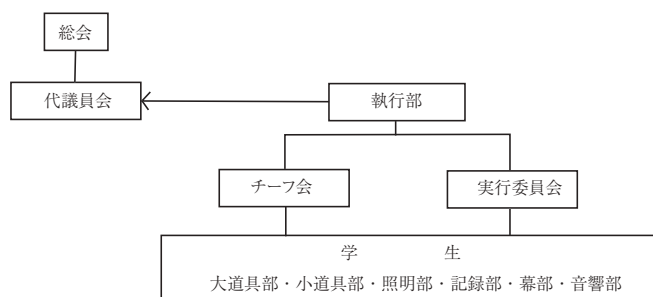
(構成)

第4条 本会は次の機関を設ける。

1. 総会
2. 代議員会（会計監査、選挙管理委員会）
3. 執行部
4. チーフ会
5. 各種行事実行委員会

(議決機関)

第5条



(総会)

第6条 総会は本会における最高の機関であり、第2条に定められた全会員をもって組織する。

(総会の開催)

第7条 総会は原則として年2回開催し、本会会長がこれを招集する。ただし、会長が必要と認めた場合及び全会員の5分の1以上の要請があった場合には会長は臨時に総会を開催しなければならない。

会長は総会開催の3日前迄に、日程、議案、その他必要事項を全会員に明示しなくてはならない。

(総会成立)

第8条 総会は全会員の過半数（休学者をのぞく在籍数）をもって成立し、その議決は3分の2以上の支持によって成立する。

(総会決議)

第9条 総会において次のことを決議する。

1. 規約改正に関すること。
2. 予算及び決算に関すること。
3. 運営方法に関すること。

(代議員会)

第10条 本委員会は総会に次ぐ議決機関であり、学年代議員（各学年2名、ただし専攻科は2学年をもって2名とする）をもって組織する。

(代議員会の開催)

第11条 本委員会は原則として本会会長が必要と認めた場合会長が招集する。ただし学年代議員の3分の1以上の要請があった場合、会長は臨時に代議員会を開催しなければならない。

会長は代議員会開催の7日前迄に、日程、議案、その他必要事項を全会員に明示しなくてはならない。

(代議員会の成立)

第12条 本委員会は、学年代議員の過半数をもって成立し、その議決は3分の2以上の支持によって成立する。

(代議員会の決議)

第13条 代議員会において次のことを決議する。

1. 学年代議員の提出事項。
2. 各委員会からの提出事項
3. その他本委員会において必要と認められる事項。

(執行部)

第14条 執行部は本会を円滑に運営する機関であり、会長1名、副会長2名、会計2名、書記2名をもって組織する。

第15条 執行部は次の事項を執行する。

1. 総会及び代議員会への議案提出
2. 予算原案及び決算書の作成
3. その他必要事項

(執行部役員の職務)

第16条 会長は本会を代表し、本会の一切の会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長不在のときの職務を代行する。会計は会の会計を、書記は会の記録を担当する。

(各部)

第17条 1. 演劇専攻の全学生は、4月中に各部に所属しなければならない。原則として、部署の移動は認められない。
2. 各部は、1名のチーフと1名のチーフ補佐を執行学年から選出しなければならない。相談役として専攻科から各部に1名付けるものとする。

(チーフ会)

第18条 チーフ会は各部チーフをもって組織する。

(チーフ会の開催)

第19条 チーフ会は原則として会長が必要と認めた場合、チーフ会議長がこれを招集する。ただし、チーフの3分の1以上の要請があった場合には、臨時にチーフ会を開催しなければならない。

(チーフ会の成立)

第20条 チーフ会はチーフの過半数をもって成立し、その議決は3分の2以上の支持によって成立する。

(チーフ会決議)

第21条 チーフ会において次のことを決議する。
1. 道具、備品に関すること。
2. 仕込み、ばらしに関すること。
3. その他チーフ会において必要と認められた事項。

(各種実行委員会)

第22条 本委員会の役員は、行事ごとに執行部が必要数を公募し、各行事の企画運営及び総括を行う。

第3章 選挙

(学年代議員の選出)

第23条 学年代議員は年度始め学年ごとに2名選出し、総会で了承を得る。

(学年代議員の任期)

第24条 学年代議員の任期は毎年4月1日より翌年3月31日までの1年間とする。

(議長)

第25条 1. 総会の議長は、総会で選出されたものとする。
2. 学年代議員の議長は、代議員会で選出されたものとし、総会で承認を得る。
3. チーフ会の議長は、執行部副会長のうちいずれか1名を議長とする。

(執行部の選出)

第26条 執行部は演劇専攻1学年の中から選出し、総会で承認を得る。

(執行部の任期)

第27条 執行部の任期は毎年10月から翌年9月末日までとし、10月中は連絡期間とし、その期間の続任を認める。

(選挙管理委員会)

第28条 本委員会は各学年代議員のうち1名、計3名をもって組織される。

(リコール)

第29条 リコール請求は会員の3分の2以上の要求によって成立し、選挙管理委員会がこれにあたる。

第4章 会計

(会費)

第30条 本会の財務は、自治会費にその基をおく。

(金額)

第31条 本会の会員は本会によって定められた会費(入会金2,500円, 年額3,500円)を定期に納入しなければならない。ただし, 入会金は入学年度のみとし, 芸術科演劇専攻から専攻科演劇専攻への進学者はこれを免除される。

(会計年度)

第32条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月末日までとする。会計年度に剰余金のある場合は翌年に繰り越す。

(会計報告)

第33条 本会に収支決算書は執行部会計が作成し代議員会で審議し, 総会において承認されることにより成立する。

(会計監査)

第34条 本会に会計監査6名(学年代議委員)を置き, 本会の会計を監査する。

第5章 クラブ

(クラブ)

第35条 本会員は第2条の主旨に基づきクラブならびに同好会を結成することができる。

(構成)

第36条 各クラブは年度始めに構成員名簿および活動計画を執行部に提出しなければならない。

(クラブ会計)

第37条 各クラブの会計担当者は年度初めに前年度決算報告ならびに新年度予算申請書を執行部に提出しなければならない。

(成立基準)

第38条 下記の成立基準に満たないものは同好会とする。

1. 活動開始から1年未満のもの
2. 人数が5名に満たないもの

第6章 附 則

第39条 本規約の改正は本会会員の3分の1以上をもって成立する。

第40条 本会規約は2002年4月1日より施行する。

音楽専攻学生会 学生会会則

第1章 総 則

(名称)

第1条 桐朋学園芸術短期大学音楽専攻に学生会を置き, 桐朋学園芸術短期大学音楽専攻学生会(以下, 本会という)と称する。

(会 員)

第2条 本会は桐朋学園芸術短期大学芸術科音楽専攻・専攻科音楽専攻の学生全員をもって組織する。

(本 部)

第3条 本会の本部は, 東京都調布市若葉町1-41-1桐朋学園芸術短期大学内に置く。

(目 的)

第4条 本会会員は個人の人格を尊重し, 学生相互の親睦をはかり, 学生会活動を有効かつ円滑に運営し, 学生の福祉増進をはかることを目的とする。

第2章 機 関

(機 関)

第5条 本会に次の機関を置く。

1. 総 会
2. 執行部

(総 会)

第6条 総会は本会の最高決議機関であって, 芸術科音楽専攻・専攻科音楽専攻の学生全員をもって組織する。

(総会の開催)

第7条 総会は毎年4月, 年1回の開催を原則とし, 本会会長がこれを招集する。ただし, 全会員の3分の1以上の要求があった場

合に会長は臨時に総会を招集しなければならない。

(総会成立)

第8条 総会は全会員の3分の2以上の出席をもって成立し、その決議は出席者の過半数の賛成を必要とする。(委任状出席を認める。)
ただし、会則改正の場合は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(議長・総会決議)

第9条 総会の議長はそのつど選出され、総会において次のことを決議する。
1. 会則の改正に関すること。
2. 運営方法に関すること。
3. 予算および決算に関すること。

(執行部)

第10条 執行部は本会の運営を円滑に執行する機関であり、次のことについて共同の責任を負うものとする。
1. 各行事の企画および運営
2. 予算の作成および決算報告
3. その他の必要事項

(執行部)

第11条 執行部は次の役員をもって構成する。
1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 会計 2名
4. 書記 2名
5. 桐朋祭実行委員 必要数

(職務)

第12条 会長は本会の一切の会務を統括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐し、会長不在のときの任務を代行する。書記は会の記録を、会計は会の会計を、桐朋祭実行委員は桐朋祭の企画運営などを担当する。

(会計監査)

第13条 本会に会計監査2名を置き、本会の会計を監査する。

(顧問)

第14条 本会に顧問を置く。顧問は桐朋学園芸術短期大学音楽専攻の教員に委嘱し、本会活動全般に関して指導助言を仰ぐものとする。

第3章 選挙

(執行部役員選出)

第15条 執行部役員は学年初め、学年ごとに3名から4名選出する。

(任期)

第16条 執行部の役員の任期は4月1日より翌年の3月31日までの1年間とし、再任を妨げない。ただし、任期途中で欠員が生じた場合は補充を行う。この場合は、後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長、副会長選出)

第17条 会長、副会長は総会によって選出される。

(会計、書記)

第18条 会計、書記は執行委員の互選による。

(桐朋祭委員)

第19条 桐朋祭委員は執行委員に加え、必要数を公募する。

(会計監査)

第20条 会計監査は総会によって選出される。

第4章 会計

(会費)

第21条 本会の財務は、会費にその基をおく。

(金額)

第22条 本会の会員は本会によってさだめられた会費（入会金 2,000円、年額 2,000円）を定期に納入しなければならない。ただし、入会金は入学年度のみとし、芸術科音楽専攻から専攻科音楽専攻への進学者は、これを免除される。

(会計年度)

第23条 本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わるものとする。

(会計報告)

第24条 本会の収支決算書は執行部会計が作成し、執行部に提出された後に会計監査と総会の承認をえるものとする。

第5章 クラブ

(クラブ)

第25条 会員相互の親睦を深め、責任ある自主活動を行うため、本会に教養、趣味、特技などを同じくするクラブならびに同好会を結成することができる。

(構成)

第26条 各クラブは年度初めに構成員名簿、および活動計画を執行部に提出しなければならない。

(クラブ会計)

第27条 各クラブの会計担当者は年度初めに前年度決算報告ならびに新年度予算申請書を執行部に提出しなければならない。

(成立基準)

第28条 下記の成立基準に満たないものは同好会とする。

1. 活動開始から1年未満のもの
2. 人数が10名に満たないもの（同好会は5名から活動できる）

(クラブ顧問)

第29条 各クラブならびに同好会には顧問を置く。顧問は桐朋学園芸術短期大学の常勤の教職員に委嘱する。

第6章 会則の改正

(会則の改定)

第30条 会則の改正は本会が必要と認め、かつ総会で全会員の3分の2以上の承認を得た場合に行われる。

(会則改定委員会)

第31条 本会は必要に応じ、会則改正委員会を置き、会則の改正を検討させることができる。

附 則

本会会則は平成8年4月1日より施行する。

ステージ・クリエイト専攻学生会 学生会会則

第1章 目的

第1条 本会は桐朋学園芸術短期大学ステージ・クリエイト専攻学生会（以下、本会と称する）と称し、会員の自治活動を通じて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第2章 組織

第1節 構成

第2条 本会は桐朋学園芸術短期大学ステージ・クリエイト専攻学生をもって組織し、入学と同時に本会会員とする。

第3条 本会役員役職は次のように構成する。

会長	1名
副会長	2名
書記	2名
会計	2名
役員	若干名

第4条 役員の仕事は次の通りとする。

1. 会長は本会の代表として会務の全体を総括する。
2. 副会長は会長を補佐する。
3. 書記は本会の庶務的事項を担当する。
4. 会計は本会の財務事項を担当する。

5. 役員は本会執行の補佐をする。

第5条 本会役員の運営は次の通りとする。

1. 必要に応じ臨時委員会を随時開催する。
2. ステージ・クリエイト専攻学生委員から必要に応じて指導・助言を得る。

第6条 本会の役員の任期は、総会で承認を得てから翌年の3月31日までの1年間とする。(ただし、平成16年度のみ例外として任期を2年とする)

第2節 総会

第7条 総会は本会の最高議決機関である。

第8条 総会は全会員によって構成され、原則として年3回は開くものとする。

第9条 総会は全会員の2/3以上の同意署名による要求のあったとき、総会を開催しなければならない。

第10条 全会員の1/3以上の同意署名による要求のあったとき、総会を開催しなければならない。

第11条 総会の開催の告示は最低10日前とする。

第3章 役員選出

第12条 役員は学年のはじめ、学年ごとに3～4名を選出する。その際、現役員の中から選挙管理委員2名を選出する。

第13条 1年生の役員は原則として立候補制とし、年度第1回の総会で承認を得て決定する。

第14条 2年生の役員選出は原則として行わない。

第15条 立候補が多数で選挙が必要なときは、次のように行う。

1. 選挙管理は選挙管理委員が行う。
2. 選挙は全会員の2/3以上の有効票数をもって成立する。
3. 開票は即日開票とし、直ちにその結果を発表する。

第16条 リコール請求は会員の2/3以上の同意署名によって成立し、選挙管理委員がこれにあたる。

第4章 会計

第17条 本会の会員は本会によって定められた会費(入会金1,500円、年額2,500円)を定期に納入しなければならない。ただし、入会金は入学年度のみとする。

第18条 本会の会計年度は4月1日から翌年の3月31日までとする。

第19条 予算案は役員会にて作成し、年度第1回目の総会で承認を得る。

第20条 決算は会計が行い委員会にて審議する。

第5章 課外活動団体

第21条 会員相互の親睦を深め、責任ある自主活動を行うため、本会に教養、趣味、特技などを同じくするクラブならびに同好会を結成することができる。

第22条 新しくクラブを作る際には役員会に「団体結成承認願」を提出しなければならない。「団体結成承認願」の申請があったときは、役員会で審議し、ステージ・クリエイト専攻の学生委員にその結果を報告し、その後の手続きを委ねる。

第23条 各クラブは年度始めに構成員名簿および活動計画を役員会に提出しなければならない。

第24条 各クラブの会計担当者は年度初めに前年度決算報告ならびに新年度予算申請書を役員会に提出しなければならない。

第25条 人数が3名に満たないものは同好会とする。

第26条 各クラブならびに同好会は顧問をおく。顧問は基本的に桐朋学園芸術短期大学同専攻の常勤の職員に委嘱する。また、学外者のコーチを依頼する場合等の申請があったとき、役員会で審議し、その可否を決定する。

第27条 解散するクラブ等の団体が生じたとき、速やかにその「団体解散届」を提出させ備品の管理を行う。

第6章 規約改正

第28条 役員会において必要と判断したとき、それを総会に提案することができる。

第29条 全会員数の1/3以上の同意署名による要求があったとき、役員会はそれを総会に提案しなければならない。

附 則

本会則は、平成17年4月1日より改正、施行する。

音楽専攻同窓会「桐の音」同窓会会則

第1条 名称

桐朋学園芸術短期大学芸術科音楽専攻同窓会「桐の音」（以下本会とする）と称する。

第2条 目的

本会は会員相互の親睦と向上をはかることを目的とする。

第3条 事業

本会は下記の事業を行う。

- (1) 会員名簿及び会報の発行。
- (2) 会員の音楽活動の後援及び奨励。
- (3) 母校の発展に寄与し、後援する。
- (4) その他必要に応じて事業の開催・後援を行う。

第4条 組織

- (1) 本会は正会員と特別会員により組織される。
- (2) 本会の運営は正会員より選任された役員及び委員により遂行される。
- (3) 正会員のうち若干名を理事とする。

第5条 本部及び事務局

- (1) 本会の本部は桐朋学園芸術短期大学内に置く。
- (2) 本会の事務局は桐朋学園芸術短期大学音楽研究室に置く。

第6条 正会員及び特別会員

- (1) 正会員は母校の卒業生及び母校の一時在籍者のうち入会希望者とする。
- (2) 特別会員は母校の現教職員のうちの専門科目の教職員及び理事会から推薦された者とする。

第7条 名誉会長及び名誉顧問、顧問

- (1) 本会は桐朋学園芸術短期大学学長を名誉会長に推挙する。
- (2) 桐朋学園芸術短期大学音楽専攻主任を顧問に推挙する。
- (3) 理事会は必要に応じ顧問を推挙できる。

第8条 理事

- (1) 理事は本会会長経験者及び理事会役員会で認められた者とし、任期は定めないものとする。
- (2) 理事は、理事及び会長、役員会が必要と認めた場合、会の運営活動に参加することができる。

第9条 役員及び委員

- (1) 本会の役員は会長、副会長、書記・会計・庶務からなり、委員は代表委員、音楽活動委員、編集委員とし、役員及び委員は全員が評議する権利を持つ。
- (2) 役員及び委員は定められた方法により、正会員の中より選任される。
- (3) 役員及び委員の任期は原則として5年間とし、再選を阻まない。

第10条 役員の職務・権限

- (1) 会長は会務を統括し、会の代表者としての活動をする。
- (2) 副会長は4名とし、会長を補佐し、必要ある時は会長の任務を代行することができる。
- (3) 副会長は運営委員長、代表委員長、音楽活動委員長、会報委員長があたり、各々担当の委員会活動を統括する。
- (4) 役員及び委員選任の決定及び任命は、会長及び副会長の合議により行う。
- (5) 運営委員長は書記・会計・庶務を統括し、運営実務を担当する。
- (6) 役員は必要に応じて理事会に参加することができる。

第11条 委員の任務

- (1) 代表委員は各期2名以上とし、各期会員の動勢、及び活動を把握し、また名簿作成にあたり、名簿、会報その他印刷物を配布する。
- (2) 音楽活動委員は、会員の演奏会活動の支援、研究会その他音楽活動の中心となる活動をする。
- (3) 編集委員は、同窓会の機関紙としての会報の企画・編集にあたる。

第12条 総 会

- (1) 総会は、会長またはその代行が必要と認めた場合これを招集する。
- (2) 本会則の改正は総会において承認される。

第13条 理 事 会

- (1) 理事会は、年1回以上開くものとする。
- (2) 理事及び会長、役員が必要と認めた場合これを招集することができる。
- (3) 必要に応じて役員会に議事を提出することができる。

第14条 役員会及び委員会

- (1) 役員会は会長、副会長、書記、会計、庶務からなる。
- (2) 役員会は年1回以上開くものとするが、会長及び役員が必要と認めた場合これを招集することができる。
- (3) 役員会の議事は出席役員の過半数でこれを決し、可否同数の場合は理事、役員合議の上審議し決定するものとする。
- (4) 代表委員会、音楽活動委員会、会報委員会は会則にのっとり個別に活動することができる。
- (5) 会報委員会は会報委員長及び編集委員からなる。

第15条 本会の経費

- (1) 本会の経費は、年会費、入会金、臨時会費、寄付金をもって充てる。
- (2) 入会金は、本会の入会と同時に納入する。

第16条 会計年度及び決算

- (1) 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
- (2) 決算は会報により会員へ報告されなければならない。
- (3) 会計監査を置く。

第17条 会則の改定

- (1) 本会則の改定は役員会により審議され総会により承認される。
- (2) 同窓会の運営実務については、別にこれを定める。

第18条 報 告

- (1) 総会及び役員会、委員会で承認された事項は会員に報告されなければならない。

演劇専攻同窓会 同窓会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は桐朋学園芸術短期大学・芸術科演劇専攻（以下、演劇科と略す）同窓会と称する。
- 第2条 本会は会員の相互の連結・親睦・団結及び演劇文化の向上をめざし、母校の発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は以下の活動を行なう。
 1. 総会その他会員間の親睦を計るための集会
 2. 会員名簿・会報等の発行
 3. その他、前条の目的に則した活動への支援
- 第4条 本会の本部及び事務局は桐朋学園芸術短期大学演劇研究室内に置く。

第2章 会 員

- 第5条 本会は以下の会員により構成される。
 1. 正会員・演劇科に在籍した者、及び専攻科演劇専攻のみに在籍した者。
 2. 賛助会員・演劇科教職員、演劇科担当事務職員及びその職にあった方々。

第3章 組 織

- 第6条 本会は以下の役員を置く。
 1. 会長1名・会長は本会を代表し会務全般を統括する。
 2. 副会長3名・副会長は会長を補佐し、必要ある場合これを代行する。
 3. 事務局長1名・事務局長は会務全般に関する事務を統括する。
 4. 会計2名・会計は金銭出納に関する事務を行う。
- 第7条 役員は必要に応じ随時役員会を開く。
- 第8条 役員は正会員中から幹事会（第11条及び第4章第15条参照）により選出し、総会（第4章第14条参照）において正会員の承諾を受ける。
- 第9条 役員の任期は次回定例総会までとする。但し再任は妨げない。
- 第10条 役員は正会員の1/3の不信任があった場合、ただちに役員改選をしなければならない。

第11条 本会は各期3名の幹事を期ごとの互選によって置く。その任務・任期は以下の通りである。

1. 各期会員の意見を掌握し本会会務に反映させる。
2. 各期会員の転居地変更を掌握し名簿作製の任に当たる。
3. 本会会費（第5章第17条参照）の徴収の任にあたる。
4. 任期は原則として4年とする。但し再任は妨げない。
5. 改選されたときは、事務局に速やかに届け出ること。

第12条 本会は名誉会長を置き、その職は本学の学長職にある者に委嘱する。

第13条 本会は監査役2名を置く。任務、選出及び任期は以下の通り。

1. 会計等の会務を監査し総会・幹事会において必要に応じて監査報告をする。
2. 正会員中から幹事会により選出する。
3. 任期は次回定例総会までとする。但し再任は妨げない。

第4章 総会及び幹事会

第14条

1. 総会は原則として4年に1度開かれる。
2. 総会は正会員の1/3（委任状を含む）の出席者をもって成立する。
3. 正会員の1/10の要求があったときは速やかに臨時総会を開かねばならない。
4. 総会においては次の事項を承認決定する。
 - ① 会則の改正
 - ② 役員の人選
 - ③ 会務の一般報告及び活動予定
 - ④ 予算及び決算
 - ⑤ その他の事項
5. やむを得ず総会の開催が困難と認められた時は、幹事会をもって総会とする事ができる。但しその場合の幹事会は、幹事の2/3の出席（委任状も含む）を必要とする。尚、正会員はこれに出席し意見を述べる事ができる。

第15条

1. 幹事会は役員と各期幹事によって構成される。
2. 幹事会は原則として年1回、その他必要な場合随時開かれる。
3. 正会員は幹事会に出席し意見を述べる事ができる。

第16条 本会の全ての議決は出席者の過半数を必要とする。

第5章 会 計

第17条 本会の会費は終身会費1万円とする。尚、1989年3月までに本会に入会した会員は個人の納入した年会費の額に応じて終身会費の1万円との差額を納入することとする。

第18条 本会の経費は会費及び臨時会費、寄附金及びその他の収入をもってあてる。

第19条 本会の資産は演劇科同窓会の名義により保管する。

第20条 本会の会計年度は1989年4月より2年毎を区切りとする。

第6章 会則の改正

第21条 本会則の改正は幹事会により審議され総会により承認される。

第7章 補 則

第22条 本会則は1997年5月18日より施行するものとする。

Toho Gakuen College of Drama and Music

講義概要

芸術科／専攻科

音楽専攻

演劇専攻

ステージ・クリエイト専攻

2013 年度入学生用 別表…1

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：1. 基礎教養科目

科目 区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				概要 ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	
キャリア デザイン	キャリア・デザインA (基礎教養)	未定	後期	2				97
	キャリア・デザインB (文章表現)	未定	後期	2				97
	キャリア・デザインC (情報処理)	藤本 真咲	前期	2				98
	芸術とキャリアA	久保田慶一	前期	2				98
	芸術とキャリアB	米屋 尚子	前集	2				99
芸術文化	芸術文化講座A (日本国憲法)	山田 亮介	後期	2				99
	芸術文化講座B (異文化理解)	坂田 博	後期	2				100
	芸術文化講座C (現代の福祉)	藤森 雄介	前期	2				100
	芸術文化講座D (日本語論)	王 伸子	前期	2				101
	芸術文化講座E (芸術運営)	※2013年度は開講せず		2				
外国語	英語A I	中村 達	前期	1				101
	英語A II	中村 達	後期		1			102
	英語B I	中村 達	前期			1		102
	英語B II	中村 達	後期				1	103
	英語C	①② 田村奈穂子	後期		1			103
	演劇英語	①② C. バーナム	前期	1				104

2013年度入学生用 別表…2

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：2. 芸術科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	チャップ対象外	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
基礎教養科目	キャリア・デザインC (情報処理)	藤本 真咲	前期	2				※教職受講者必修	① 必修科目の修得単位は自由選択単位として卒業要件に含むことができる ② 必修科目の修得単位は専攻科目単位として卒業要件に含むことができる			98
	芸術文化講座A (日本国憲法)	山田 亮介	後期		2			※教職受講者必修				99
	芸術文化講座C (現代の福祉)	藤森 雄介	前期	2				※教職受講者必修				100
	英語A I・II	中村 達	前・後	1	1			●全専修必修 (いずれか2単位) ※ただし、声楽専修は「イタリア語I・II」2単位に加え、英・独・仏語から2単位選択、計4単位必修 ※同じ語学の「I・II」「III・IV」をもって、1科目とみなす				101・102
	英語B I・II	中村 達	前・後			1	1					102・103
ドイツ語I・II	D. グロス	前・後	1	1							117	
ドイツ語III・IV	D. グロス	前・後			1	1					105	
イタリア語I・II	M. スバラグリ	前・後	1	1							118	
専攻教養科目	イタリア語III・IV	M. スバラグリ	前・後			1	1				107	
	フランス語I・II	野坂・S・マガリ	前・後	1	1						119	
	音楽基礎演習-バロックダンス	a b 浜中 康子	前期	1				●全専修必修			120	
	音楽理論基礎	福田 恵子	前期	1				●全専修必修			120	
	演劇専攻科目	狂言I	善竹富太郎	後期		1			●全専修必修 (いずれか1単位) ※ただし、日本音楽専修は狂言以外を選択すること			173
日本舞踊I		藤間 希穂	後期		1						172	
マイム		服部 宣子	前期	1							171	
アクション		藤田 けん	後期		1						172	
ジャズダンスB		畔柳小枝子 渡邊美津子 三村みどり	後期		1						177 177 178	
専攻科目・1年次	音楽理論 [和声] I	a b 平井 正志 福田 恵子	前期	2				PVWSG必修			121 121	
	音楽理論 [和声] II	a b 平井 正志 福田 恵子	後期		2			PVWSG必修			121 121	
	音楽理論 [楽式] I	穴戸 里佳	通年		4			PVWSG必修	○		122	
	音楽史概説	森下 俊一	通年		4			PVWSG必修	○		122	
	日本音楽理論A	森重 行敏	通年		4			J必修	○		123	
	日本音楽史概説	野川美穂子	通年		4			J必修	○		123	
	日本音楽特講	杵屋 巳織	後期		2			※教職受講者 (J除く) 必修 (教職受講者のみ履修可)	△		124	
	演奏会制作法	佐藤 修悦	後期		1				○		124	
	アウトリーチ概説	永井 由比	前期	2							125	
	アウトリーチ演習	永井 由比	後期		1						125	
	音響学	岩崎 真	前期	2					○		126	
	ディクション (イタリア語)	井上 由紀	前期	1				V必修			126	
	S. H. M. I	① 福田 恵子 ② 池田 哲美 ③ 坂田 晴美	通年		2			●全専修必修			127	
	合唱	樋本 英一	通年		2			PVWSG (女子のみ) 必修			127	
	オーケストラ・スタディA	奥田 雅代	前期	1				S必修			128	
	合奏A	奥田 雅代	後集		2			S必修		□	128	
	管楽器基礎 (呼吸法)	三塚 至	前期	1				W必修			129	
	声楽アンサンブルA	松井 康司	通年		2			男子のみ (J除く) 必修、女子は履修不可			129	
	サクソフォン・アンサンブルA	(開講せず)	通年		2			W (S×のみ) 必修				
	ギター・アンサンブルA	佐藤 紀雄	通年		2			G必修			130	
	うたA	今藤美知央	前期	1				J必修	△		130	
	楽器法 (和楽器) A	滝田美智子	前期	2				J必修			131	
	初見演奏 (基礎)	吉田 真穂	前期	1				P必修			131	
	第一実技I		通年		4			●全専修必修		□	145	
	第二実技I (ピアノ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)		通年		4				○	□	146	
	副科実技I (ピアノ)		通年		2			●全専修必修	○	□	146	
	副科実技I (声楽)		通年		2				PGJ	○	□	146
	副科実技I (管・弦・ギター・日本音楽)		通年		2				GJ	○	□	146
	伴奏A	(1) 荻野 千里 (2)	前集 後集	1		1				□	132	
	海外特別演習A	荻野 千里 松井 康司	前集	2						□	132	
	特別演習A	松井 康司 奥田 雅代	通年		1			●全専修必修			132	
	コラボレイト実習A	(1) 松井 康司 (2)	前集 後集	1		1				□	133	
									□	133		

科目 区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業 要件	他 専攻	キャ ップ 対 象 外	概要 ページ
				1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
専攻科目・2年次	音楽理論 [和声] III	a 平井 正志 b 福田 恵子	前期			2		PVWSG必修			134	
	音楽理論 [和声] IV	a 平井 正志 b 福田 恵子	後期				2	PVWSG必修			134	
	対位法	a 石島 正博 b 新美 徳英	通年				4				134	
	楽器法	大澤 健一	前集			2			◎	□	136	
	楽器法 (和楽器) B	滝田美智子	前期			2		J必修			131	
	音楽マネジメント	佐藤 修悦	前期			1						
	日本音楽理論B	森重 行敏	通年				4	J必修	◎		123	
	音楽史特講A	関野さとみ	前期			2			◎		136	
	音楽史特講B	久保田慶一	前期			2			◎		137	
	音楽史演習A	関野さとみ	後期				1		◎		137	
	音楽史演習B	久保田慶一	後期				1		◎		138	
	音楽療法概論	鈴木千恵子	前期			2			◎		138	
	演奏解釈 (1) ピアノ楽曲	荻野 千里	後期				2				139	
	演奏解釈 (2) 声楽曲	松井 康司	前期			2			◎		139	
	演奏解釈 (3) 室内楽曲	寺岡有希子	前期			2					140	
	演奏解釈 (4) 日本音楽	未定	後期				2	J必修				
	S. H. M. II	① 塩崎 美幸 ② 池田 哲美 ③ 坂田 晴美	通年				2	●全専修必修			114	
	オーケストラ・スタディB	奥田 雅代	前期			1		S必修			128	
	合奏B	奥田 雅代	後集				2	S必修		□	128	
	声楽アンサンブルB	松井 康司	通年				2	男子(J除く)・女子(Vのみ)必修			129	
	管楽アンサンブル	石橋 雅一	通年				2	W (S×除く) 必修			140	
	指揮法	樋本 英一	通年				2	※教職受講者必修			141	
	室内楽A	a 荻野 千里 b 野口千代光 c 北本 秀樹 中川 昌三	前期				2				141	
	室内楽B	a 市坪 俊彦 b 蓼沼恵美子 c 白尾 隆	後期					2			142	
	サクソフォン・アンサンブルB		通年				2	W (S×のみ) 必修			142	
	ギター・アンサンブルB	佐藤 紀雄	通年				2	G必修			143	
	うたB	今藤美知央	前期			1		J必修			143	
	邦楽アンサンブル	野坂 恵子	通年				2	J必修			144	
	伴奏法	羽生百合子	通年				2	※教職受講者(J除く)必修			144	
	第一実技II		通年				4	●全専修必修		□	145	
	第二実技II (ピアノ・チェンバロ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)		通年				4		◎	□	145	
	副科実技II (ピアノ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)		通年				2		◎	□	146	
	第一実技卒業試験						4	●全専修必修		□		
伴奏B	(1) 荻野 千里 (2)	前集 後集			1				□	132		
海外特別演習B	荻野 千里 松井 康司	前集				2			□	132		
特別演習B	松井 康司 奥田 雅代	通年				1	●全専修必修			133		
コラポレイト実習B	(1) 松井 康司 (2)	前集 後集			1				□	133		
						1			□	133		

専攻科目は各専修の必修単位を含め、1・2年次を通じて48単位以上修得

【備考】

- ①P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修
 ②「他専攻の履修」欄は、○は他専攻の学生（1・2年次とも。専攻科生含む）が履修可能な科目。
 ただし、◎は芸術科2年生以上、△は専攻科演劇専攻でないと履修できない。

<平成25年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 48単位
(基礎教養科目・専攻教養科目・演劇専攻科目より各専修の必修単位数を含む)
- ②自由選択単位数 14単位

※専修別による必修単位数は、「注⑩専攻科目必修単位数」を参照のこと

注

- ① I の修得なしに II の履修はできない。
- ② 第一実技は、専修別による必修（1年次・2年次各50分）
- ③ 第二実技は、選択（40分）。第一実技に準じた専門レベル。履修料別途徴収。
- ④ 副科実技は、I 必修、II 選択（20分）
I は、ピアノ専修者は声楽、声楽・管楽器・弦楽器専修者はピアノを必修とする。
副科実技を第二実技として履修する場合は100,000円、第二実技と副科実技の両方を履修する場合は200,000円を別途徴収。
- ⑤ 「日本音楽特講」は教職に関する科目の受講手続きを経た学生のみ履修可。
ただし、教職課程受講生の人数が少ない等の事情によっては、その他の学生の受講を認める場合がある。
- ⑥ 選択科目「伴奏」について
前期、後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。「伴奏受講票」を使用のこと。
- ⑦ 選択科目「コラボレイト実習」について
専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。「コラボレイト実習受講票」を使用のこと。
- ⑧ 学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。
- ⑨ 専攻科目必修単位（※基礎教養科目・専攻教養科目内の必修単位含む）

	1年次		2年次		合計	
	男	女	男	女	男	女
ピアノ専修	29	29	17	15	46	44
声楽専修	31	31	17	17	48	48
管楽器専修	29	29	19	17	48	46
管楽器専修 (S x)	31	31	19	17	50	48
弦楽器専修	31	31	20	18	51	49
ギター専修	30	30	19	17	49	47
日本音楽専修	26	26	23	23	49	49

ただし、日本音楽専修者の専攻科目必修単位数は、下記科目群の単位数を含む。

科目区分	授業科目	担当氏名	期間	単位数
演劇専攻科目	狂言 I	善竹富太郎	後期	1
	狂言 II	善竹 十郎	前期	1

2013年度入学生用 別表…3

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：3. 芸術科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャンパス対象外	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
基礎実技科目	基礎演劇演習A	a	越光 照文	前期	2				a組必修	6		147
		b	鈴江 俊郎	前期	2				b組必修		147	
		c	P. ゲスナー	前期	2				c組必修		148	
		d	宮崎 真子	前期	2				d組必修		148	
	基礎演劇演習B	a	P. ゲスナー	前期	2				a組必修		149	
		b	宮崎 真子	前期	2				b組必修		149	
		c	越光 照文	前期	2				c組必修		150	
		d	鈴江 俊郎	前期	2				d組必修		150	
	身体トレーニング	a	金森 勢	前期	1				a組必修		151	
		b	金森 勢	前期	1				b組必修		151	
		c	金森 勢	前期	1				c組必修		151	
		d	金森 勢	前期	1				d組必修		151	
ボイス・トレーニング（歌唱）	a	信太 美奈	前期	1				a組必修	151			
	b	信太 美奈	前期	1				b組必修	151			
	c	信太 美奈	前期	1				c組必修	151			
	d	信太 美奈	前期	1				d組必修	151			
演技系科目	演劇演習A	a	鈴江 俊郎	後期		2			a組必修	8		152
		b	越光 照文	後期		2			b組必修		152	
		c	宮崎 真子	後期		2			c組必修		153	
		d	P. ゲスナー	後期		2			d組必修		153	
	演劇演習B	a	宮崎 真子	後期		2			a組必修		154	
		b	P. ゲスナー	後期		2			b組必修		154	
		c	鈴江 俊郎	後期		2			c組必修		155	
		d	越光 照文	後期		2			d組必修		155	
	演劇演習C	a	未定	前期			2		a組必修		156	
		b	未定	前期			2		b組必修		156	
		c	未定	前期			2		c組必修		157	
		d	未定	前期			2		d組必修		157	
	演劇演習D	a	未定	後期				2	a組必修		158	
		b	未定	後期				2	b組必修		158	
		c	未定	後期				2	c組必修		159	
		d	未定	後期				2	d組必修		159	
ストレートプレイ系	演技演習A（ダイアログ）	a	未定	後期			2	ストレートプレイコース必修	4		160	
		b	未定	前期			2			160		
演技演習B（アンサンブル）	a	未定	前期			2		160				
	b	未定	後期				2	160				
ミュージカル系実技科目	歌唱 I ①～⑥		橋爪、佐山（陽）、林、矢部、大場	後期		1		ミュージカルコース必修	6		163~165	
	歌唱 II ①～⑦		橋爪、佐山（陽）、林、矢部、大場	前期			1			165~167		
	ショーダンス I	c d	三村みどり	後期		1				168		
	ショーダンス II	c/d	三村みどり	前期			1			168		
	ソルフェージュ I	①②	岩崎 廉	後期		1				169		
	ソルフェージュ II	①②	岩崎 廉	前期			1					

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャリア教育対象外	概要ページ	
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期						
実技科目(共通)	演劇特別演習 I	①②③ 鴻上 尚史	後期		1						169		
	演劇特別演習 II	①②③ 鴻上 尚史	前期			1					170		
	マイム	①② 服部 宣子	前期	1							171		
	アクション	①② 藤田 けん	後期		1						172		
	日本舞踊 I	①② 藤間 希穂	後期		1						172		
	日本舞踊 II	①② 藤間 希穂	前期			1					109		
	狂言 I	①② 善竹富太郎	後期		1						173		
	狂言 II	①② 善竹 十郎	前期			1					109		
	アテレコ実技 I	未定	前期			1							
	アテレコ実技 II	未定	後期				1						
	クラシック唱法 I	松井 康司	後期		1						173		
	クラシック唱法 II	松井 康司	前期			1					174		
	ミュージカル唱法 I	①② 信太 美奈	後期		1						174		
	ミュージカル唱法 II	信太 美奈	前期			1					175		
	ジャズダンスA	① 畔柳小枝子	前期	1								○	175
		② 渡邊美津子										○	176
		③ 三村みどり										○	176
	ジャズダンスB	① 畔柳小枝子	後期		1							○	177
		② 渡邊美津子										○	177
		③ 三村みどり										○	178
	ジャズダンスC	① 未定	前期			1						○	
		② 未定										○	
		③ 未定										○	
	バレエ・ムーヴメント	①② 安達 悦子	前期	1							○	178	
	クラシックバレエ I	①② 安達 悦子	後期		1						○	179	
	クラシックバレエ II	①② 安達 悦子	前期			1					○	179	
	タップダンス I	①② 中川裕季子	後期		1						○	180	
	タップダンス II	①② 中川裕季子	前期			1					○	112	
	歌唱(個人レッスン) A		前期	2							自由選択単位		
	歌唱(個人レッスン) B		後期		2								
	歌唱(個人レッスン) C		前期			2							
	歌唱(個人レッスン) D		後期				2						
歌唱(個人レッスン) E		前期	1										
歌唱(個人レッスン) F		後期		1									
歌唱(個人レッスン) G		前期			1								
歌唱(個人レッスン) H		後期				1							
理論系科目	舞台芸術概論	全専任	前期	2			必修	16	○	180			
	日本演劇史A(古典)	安富 順	後期		2		ストレートプレイコース必修		○	181			
	日本演劇史B(近現代)	未定	前期			2			○	182			
	西洋演劇史A(古典)	安宅りさ子	後期		2				○				
	西洋演劇史B(近現代)	安宅りさ子	前期			2			○				
	ミュージカル概論	橋爪 貴明	後期		2		ミュージカルコース必修		○	183			
	ミュージカル論	未定	前期			2			○	183			
	演劇史特講	未定	後期				2						
	ミュージカル特講	未定	後期				2						
	映画論	行定 勲	集中			2			○	□	184		
	演出論	鶴山 仁	集中			2			○	□	184		
	舞踊論	村山久美子	後期			2			○		185		
	戯曲論	福田 善之	前期			2			○		185		
	演劇論	鴻 英良	後期			2			○		186		
	音声生理学	川崎 順久	前集			1			○	□	186		
	戯曲講読演習A(古典)	安宅りさ子	前期			1			○		187		
	戯曲講読演習B(近現代)	安宅りさ子	後期			1			○		187		
	戯曲講読演習C(日本)	井上 理恵	後期			1			○		188		
	劇作法	岡安 伸治	後期			1			○		188		
	演劇学演習A(演劇史)	未定	前期			1							
	演劇学演習B(演劇論)	未定	後期				1						
	特別講義A	P. ゲスナー	前期			2			○		189		
	特別講義B	鈴江 俊郎	後期			2			○		190		

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	キャリア教育対象外	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
実習科目	集中講義（舞台照明実習） ①	森脇 清治	前集	1						<input type="radio"/>	<input type="checkbox"/>	190
	集中講義（舞台照明実習） ②	未定	前集	1						<input type="radio"/>	<input type="checkbox"/>	190
	集中講義（舞台音響実習） ①	佐藤こうじ	前集	1						<input type="radio"/>	<input type="checkbox"/>	191
	集中講義（舞台音響実習） ②	未定	前集	1						<input type="radio"/>	<input type="checkbox"/>	191
	集中講義（舞台監督実習）	宮下 卓	後集		1					<input type="radio"/>	<input type="checkbox"/>	191
	集中講義（ヘアメイク実習）	宮崎 龍	前集	1							<input type="checkbox"/>	192
	舞台基本実習（入門講座）	鈴江 俊郎	前集	1							<input type="checkbox"/>	192
	舞台スタッフ実習A（劇上演実習B）	各担当教員	後集		1						<input type="checkbox"/>	193
	舞台スタッフ実習B（専攻科劇上演実習C/D）	各担当教員	後集		1						<input type="checkbox"/>	193
	舞台制作実習A（劇上演実習B）	各担当教員	後集		1						<input type="checkbox"/>	193
	舞台制作実習B（専攻科劇上演実習C/D）	各担当教員	後集		1						<input type="checkbox"/>	193
	ワークショップ（ストレートプレイ） 1年次	伊藤 キム	後集		1						<input type="checkbox"/>	194
	ワークショップ（ミュージカル） 1年次	横山 由和	後集		1						<input type="checkbox"/>	194
	ワークショップ（ストレートプレイ） 2年次	未定	前集			1					<input type="checkbox"/>	194
	ワークショップ（ミュージカル） 2年次	未定	前集			1					<input type="checkbox"/>	194
	演劇研修（ハケ岳合宿）	鈴江 俊郎	前集	1							<input type="checkbox"/>	195
	海外研修	1年次 2年次	P. ゲスナー	後集		1					<input type="checkbox"/>	195
				後集				1			<input type="checkbox"/>	195
	劇上演実習A（試演会）	ストレートプレイ ミュージカル	未定	後集				4				196
			未定	後集				4				196
劇上演実習B（卒業公演）	ストレートプレイ ミュージカル	未定	後集				4				196	
		未定	後集				4				196	
劇上演実習C（学外出演）					4					<input type="checkbox"/>	197	
劇上演実習D（学外出演）					4					<input type="checkbox"/>	197	
劇上演実習E（学内出演）					1					<input type="checkbox"/>	197	
劇上演実習F（学内出演）					1					<input type="checkbox"/>	197	

<平成25年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 58単位
 - 1.実技系科目 30単位
 - 2.理論系科目 16単位
 - 3.実習科目 12単位
- ②基礎教養科目単位数 1単位
 - 外国語（英語） 1単位必修
- ③自由選択単位数 3単位

注

- ① I の修得なしに II の履修はできない。
- ②基礎演劇演習A B、身体トレーニング、ボイス・トレーニング（歌唱）、演劇演習A B C D、舞台芸術概論は全コース必修
- ③演技演習A B、日本演劇史AB、西洋演劇史ABはストレートプレイコース必修
- ④歌唱ⅠⅡ、ショーダンスⅠⅡ、ソルフェージュⅠⅡ、ミュージカル概論、ミュージカル論はミュージカルコース必修
- ⑤歌唱（個人レッスン）の修得単位数は自由選択単位数に含む。レッスン時間はA B C D 40分、E F G H 20分。履修料別途徴収。

○講義科目は半期2単位、実習・実技・演習科目は半期1単位、劇上演実習は4単位

【教育課程・卒業の要件】

卒業の要件

本学を卒業するには、教育課程をよく理解し、以下の条件を満たす最低修得単位数以上の単位を修得しなければならない。卒業要件の詳細については、各専攻の別表及び注意事項を参照すること。

1. 芸術科 音楽専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	48単位
自由選択単位数	14単位
(専攻科目・専攻教養科目・他専攻科目・基礎教養科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数には、各専修の必修単位数を含む。

③ 専攻教養科目より、「外国語」(基礎教養科目の「英語 A I・II」「英語 B I・II」を含む)「音楽基礎演習-バロックダンス」「音楽理論基礎」合計 4 単位必修とする。(ただし、声楽専修はイタリア語を含む 2 外国語を必修とし、合計 6 単位)

④ 外国語は、同じ語の「I・II」または「III・IV」をもって 1 科目とみなす。

⑤ 演劇専攻科目の、「狂言 I」「日本舞踊 I」「マイム」「アクション」「ジャズダンス B」より、いずれか 1 単位必修とする。

2. 芸術科 演劇専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	58単位
基礎教養科目単位数	1単位
自由選択単位数	3単位
(専攻科目・他専攻科目・共通科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数の内訳は

実技系科目 30単位 理論系科目 16単位 実習科目 12単位

③ 基礎教養科目単位数の内訳は

外国語 (英語) 1 単位必修

【本学における中学校教諭2種免許状取得の要件】

1. 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目

・下記の(1)～(5)に定める授業科目を履修し、計10単位以上修得すること

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位	要件	概要 ページ	
(1) 日本国憲法	芸術文化講座A(日本国憲法)	山田 亮介	後期	2	必修	99	
(2) 体育	音楽基礎演習-バロック・ダンス	浜中 康子	前期	1	1単位必修	120	
	狂言I	善竹 十郎	後期	1		173	
	日本舞踊I	藤間藤三郎	後期	1		172	
	マイム	服部 宣子	前期	1		171	
	アクション	藤田 けん	後期	1		172	
	ジャズダンスB	畔柳小枝子	後期	1		1単位 選択必修	177
		渡邊美津子	後期	1			177
	三村みどり	後期	1	178			
(3) 外国語コミュニケーション	英語A I	中村 達	前期	1	2単位 選択必修	101	
	英語A II	中村 達	後期	1		102	
	英語B I	中村 達	前期	1		102	
	英語B II	中村 達	後期	1		103	
	ドイツ語I	D. グロス	前期	1		117	
	ドイツ語II	D. グロス	後期	1		117	
	ドイツ語III	D. グロス	前期	1		105	
	ドイツ語IV	D. グロス	後期	1		105	
	フランス語I	野坂・S・マガリ	前期	1		119	
	フランス語II	野坂・S・マガリ	後期	1		119	
	フランス語III	野坂・S・マガリ	前期	1		106	
	フランス語IV	野坂・S・マガリ	後期	1		106	
	イタリア語I	M. スバラグリ	前期	1		118	
	イタリア語II	M. スバラグリ	後期	1		118	
	イタリア語III	M. スバラグリ	前期	1		107	
イタリア語IV	M. スバラグリ	後期	1	107			
(4) 情報機器の操作	キャリア・デザインC(情報処理)	藤本 真咲	前期	2	必修	98	
(5) 介護等体験関連	芸術文化講座C(現代の福祉)	藤森 雄介	前期	2	必修	100	

2. 教職に関する科目

・下記に定める授業科目を指定された年次に履修し、すべての単位を修得すること(計24単位)

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位	学年	概要 ページ
教育の意義等に関する科目	教師論	岡本 直久	後期	2	1年次	239
教育の基礎理論に関する科目	教育原理	林 直美	後期	2	1年次	239
	教育心理学	佐藤 哲男	前期	2	2年次	240
	教育史概説	林 直美	前期	2	2年次	240
教育課程及び指導法に関する科目	音楽科教育法	森下 俊一	後期	2	1年次	241
	道徳教育の研究	岡本 直久	後集	2	1年次	241
	特別活動の研究	真野 彰	後集	1	1年次	242
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	生徒指導I	安富由美子	後期	2	1年次	242
	生徒指導II	安富由美子	前期	2	2年次	243
教育実習	教育実習I・II	松井 康司	通年	5	1・2年次	243
		荻野 千里				244
教職実践演習	教職実践演習(中学校)	永井 由比	後期	2	2年次	244

3. 教科に関する科目

・必修の授業科目含めて24単位以上を修得すること

科目区分	授業科目	学年	単位	要件
ソルフェージュ	S. H. M. I	音1	2	必修
	S. H. M. II	音2	2	
声楽 (合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む)	合唱	音1	2	J2単位 必修
	声楽アンサンブルA	音1	2	
	声楽アンサンブルB	音2	2	
	うたA	音1	1	
	うたB	音2	1	
	狂言 I	音1	1	
	狂言 II	音2	1	
	第一実技 I (声楽)	音1	4	
	第二実技 I (声楽)	音1	4	
	副科実技 I (声楽)	音1	2	
	第一実技 II (声楽)	音2	4	
	第二実技 II (声楽)	音2	4	
	副科実技 II (声楽)	音2	2	
	オペラ実習A	専音1	6	
オペラ実習B	専音2	6		
器楽 (合奏及び伴奏並びに和楽器を含む)	第一実技 I (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音1	4	GJ ピアノ必修
	第二実技 I (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音1	4	
	副科実技 I (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音1	2	
	第一実技 II (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音2	4	
	第二実技 II (ピアノ・チェンバロ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音2	4	
	副科実技 II (ピアノ・管楽器・弦楽器・ギター・日本音楽)	音2	2	
	サクソフォン・アンサンブルA	音1	2	
	サクソフォン・アンサンブルB	音2	2	
	サクソフォン・アンサンブルC	専音1	2	
	サクソフォン・アンサンブルD	専音2	2	
	ギター・アンサンブルA	音1	2	
	ギター・アンサンブルB	音2	2	
	ギター・アンサンブルC	専音1	2	
	ギター・アンサンブルD	専音2	2	
	管楽アンサンブル	音2	2	
	室内楽A	音2	1	
	室内楽B	音2	1	
	邦楽アンサンブル	音2	2	
	邦楽アンサンブル研究A	専音1	4	
	邦楽アンサンブル研究B	専音2	4	

科目区分	授業科目	学年	単位	要件
器楽 (合奏及び伴奏並びに和楽器を含む)	オーケストラ・スタディA	音1	1	
	オーケストラ・スタディB	音2	1	
	オーケストラ・スタディC	専音1	1	
	オーケストラ・スタディD	専音2	1	
	合奏A	音1	2	
	合奏B	音2	2	
	合奏C	専音1	2	
	合奏D	専音2	2	
	ピアノデュオ研究A	専音1	4	
	ピアノデュオ研究B	専音2	4	
	歌曲研究A	専音1	4	
	歌曲研究B	専音2	4	
	管楽アンサンブル	音2	2	
	管楽アンサンブル研究A	専音1	4	
	管楽アンサンブル研究B	専音2	4	
	室内楽研究A	専音1	2	
	室内楽研究B	専音1	2	
室内楽研究C	専音2	2		
室内楽研究D	専音2	2		
伴奏法	音2	2	1科目 必修	
合奏基礎 (和楽器)	音1	1		
日本音楽特講	音1	2	必修(J除く)	
指揮法	指揮法	音2	2	必修
音楽理論・作曲法 (編曲法を含む)及び音楽史 (日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む)	音楽理論 [和声] I	音1	2	J4単位 必修
	音楽理論 [和声] II	音1	2	
	音楽史概説	音1	4	J4単位必修
	音楽理論 [和声] III	音2	2	
	音楽理論 [和声] IV	音2	2	
	音楽理論 [楽式] I	音1	4	
	対位法	音2	4	
	楽器法	音2	2	
	日本音楽理論A	音1	4	
	日本音楽理論B	音2	4	
	日本音楽理論C	専音1	4	
	日本音楽史概説	音1	4	
	音楽史特講A	音2	2	
	音楽史特講B	音2	2	
	音楽史演習A	音2	2	
	音楽史演習B	音2	2	
	音響学	音1	2	
	演奏解釈 (1) ピアノ楽曲	音2	2	
	演奏解釈 (2) 声楽	音2	2	
演奏解釈 (3) 室内楽曲	音2	2		
演奏解釈 (4) 日本音楽	音2	2		
日本音楽概論	音2	2	必修	

[注]

教職履修者の特例措置として、副科実技を2科目履修することができる。(別途費用本科100,000円、専攻科150,000円)。
ただし単位認定についてはいずれか1科目とする。なお、専攻科の修了要件には算入しない。

2013年度教育課程 別表…6

【教育課程・修了の要件】

1. 専攻科 音楽専攻

科目 区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了 要件	他 専攻	概要 ページ	
				1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
専攻科目・1年次	音楽理論 [和声] V	平井 正志	前期	2							211	
	音楽理論 [和声] VI	平井 正志	後期		2						211	
	日本音楽理論C	名倉 明子	通年	4							211	
	楽曲分析A	新実 徳英	前期	2							212	
	楽曲分析B	新実 徳英	後期		2						212	
	音楽史研究	関野さとみ	通年	4							213	
	日本音楽史研究A	野川美穂子	通年	4				J必修			213	
	音楽療法概説A	鈴木千恵子	通年	4							214	
	音楽療法演習A	鈴木千恵子	通年	2							214	
	演奏現場論A	合田 香	前期	2							215	
	第一実技Ⅲ	(ピアノ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)		通年	6				●全専修必修			227
	第二実技Ⅲ	(ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (バロック・フルート) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)		通年	4							227
	学内演奏 I		松井 康司 荻野 千里	通年	2				●全専修必修			
	ピアノデュオ研究A		荻野 千里	通年	4				P必修			215
	管楽アンサンブル研究A		石橋 雅一	通年	4				W (S x 除く) 必修			216
	室内楽研究A	a	荻野 千里 野口千代光	前期	2							216
		b	北本 秀樹									
		c	中川 昌三									
	室内楽研究B	a	市坪 俊彦	後期		2						218
		b	蓼沼恵美子									
		c	白尾 隆									
	室内楽特設クラスA		荻野 千里	前集	1							219
	室内楽特設クラスB		荻野 千里	後集		1						219
	歌曲研究A		松井 康司 東井 美佳	通年	4							220
	オペラ実習A		松井 康司 P. ゲスナー	通年	6							220
	邦楽アンサンブル研究A		野坂 恵子	通年	4				J必修			221
	オーケストラ・スタディC		奥田 雅代	前期	1				S必修			221
	合奏C		奥田 雅代	後集		2			S必修			222
	ギター・アンサンブルC		佐藤 紀雄	通年	2				G必修			222
	サクソフォン・アンサンブルC			通年	2				S x 必修			
	初見演奏 (応用)		吉田 真穂	後期		1			P必修			223
	伴奏C	(1)	荻野 千里	前集	1							223
		(2)		後集		1						223
	伴奏研究A		荻野 千里	前集	1							224
	伴奏研究B		荻野 千里	後集		1						224
	海外特別演習C		荻野 千里 松井 康司	前集	2							224
	特別演習C		荻野 千里	通年	1				●全専修必修			225
	コラボレート実習C	(1)	松井 康司	前集	1							225
		(2)		後集		1						225

1・2年次を通じて必修科目を含めて46単位以上

科目 区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了 要件	他 専攻	概要 ページ	
				1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期					
専攻科目・2年次	楽曲分析〔編曲〕	たかの舞俐	前期			2					226	
	楽曲分析〔創作〕	たかの舞俐	後期				2				226	
	日本音楽史研究B	野川美穂子	通年			4		J必修			213	
	音楽療法概説B	鈴木千恵子	通年			4					214	
	音楽療法演習B	鈴木千恵子	通年			2					214	
	演奏現場論B	合田 香	前期			2					215	
	第一実技Ⅳ (ピアノ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)		通年			6		●全専修必修				227
	第二実技Ⅳ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (バロック・フルート) (弦楽器)		通年			4						227
	第一実技修了試験						4	●全専修必修				
	学内演奏Ⅱ	松井 康司 荻野 千里	通年			2		●全専修必修				
	ピアノデュオ研究B	荻野 千里	通年			4						215
	管楽アンサンブル研究B	石橋 雅一	通年			4		W(S×除く)必修				216
	室内楽研究C	a 荻野 千里	前期			2						216
		b 野口千代光										
		c 北本 秀樹										
	室内楽研究D	a 中川 昌三	後期									217
		b 市坪 俊彦										
		c 蓼沼恵美子										
	室内楽特設クラスC	a 白尾 隆	前集			1						218
		b 荻野 千里										
		c 荻野 千里										
	室内楽特設クラスD	荻野 千里	後集				1					219
	歌曲研究B	松井 康司 東井 美佳	通年			4						220
	オペラ実習B	松井 康司 P. ゲスナー	通年			6		V選択				220
	邦楽アンサンブル研究B	野坂 恵子	通年			4		J必修				221
	オーケストラ・スタディD	奥田 雅代	前期			1		S必修				221
	合奏D	奥田 雅代	後集			2		S必修				222
	ギター・アンサンブルD	佐藤 紀雄	通年			2		G必修				222
	サクソフォン・アンサンブルD		通年			2		S×必修				
	伴奏D	(1) 荻野 千里	前集			1						223
		(2) 荻野 千里	後集				1					223
	伴奏研究C	荻野 千里	前集			1						224
伴奏研究D	荻野 千里	後集				1					224	
海外特別演習D	荻野 千里 松井 康司	前集			2						224	
特別演習D	荻野 千里	通年				1					225	
コラボレイト実習D	(1) 松井 康司	前集			1						225	
	(2) 松井 康司	後集				1					225	

1・2年次を通して必修科目を含めて46単位以上

【備考】

①P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修

<平成25年度入学生の修了要件>

最低修得単位数 46単位（2学年合計）

注

①Ⅰの修得なしにⅡの履修はできない。

②Ⅲの修得なしにⅣの履修はできない。

③第一実技は、専修別による必修（1年次・2年次各60分）

④第二実技は、選択（40分）。履修料（150,000円）を別途徴収する。

⑤選択科目「伴奏」について

前期、後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。「伴奏受講票」を使用のこと。

⑥選択科目「コラボレイト実習」について

専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。「コラボレイト実習受講票」を使用のこと

⑦「室内楽研究」等アンサンブル科目の履修において、研究生を含むグループは、科目担当者及び専攻の教員との相談の上、外部より臨時のアンサンブル指導員を招聘することができる。

⑧学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。

○修了要件とは別に、芸術科音楽専攻科目及び他専攻の履修可能な科目のうち、年間5科目まで所定の手続きを経て履修することができる。

○他専攻専攻科目については、2年間で6単位まで、修了要件内で履修することができる。

2. 専攻科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				修了要件	他専攻	概要ページ		
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
実技・演技系科目	演劇特別研究	1年次	志賀廣太郎	通年	2			12		229		
		2年次			2					229		
	演劇研究A（現代劇）	1年次	鈴江 俊郎	通年	2						229	
		2年次			2						229	
	演劇研究B（日本演劇）	1年次	三浦 剛	通年	2						230	
		2年次			2						230	
	演劇研究C（外国演劇）	1年次	P. ゲスナー	通年	2						230	
		2年次			2						230	
	演劇研究D（演劇論）	1年次	安宅りさ子	通年	2						231	
		2年次			2						231	
	演劇研究E（実験劇）	1年次	宮崎 真子	通年	2						231	
		2年次			2						231	
	実技A（コンテンポラリー）	1年次	勝倉 寧子	通年	2				6		232	
		2年次			2						232	
	実技B（ヒップホップ）	1年次	赤地 寿美	通年	2							232
		2年次			2							232
	ミュージカル唱法	1年次	信太 美奈	通年	2							233
		2年次			2							233
	ワークショップA	1年次	N. パーター	前集	1							233
		2年次				1						233
ワークショップB	1年次	未定	後集		1					233		
	2年次					1				233		
海外研修	1年次	P. ゲスナー	後集		1					234		
	2年次					1				234		
特別講義A	1年次	P. ゲスナー	前期	2						234		
	2年次			2						234		
特別講義B	1年次	鈴江 俊郎	後期	2			8			235		
	2年次			2						235		
劇上演実習	劇上演実習A	1年次	鈴江 俊郎	集中	4					235		
		2年次			4					235		
	劇上演実習B	1年次	P. ゲスナー	集中	4					235		
		2年次			4					235		
	劇上演実習C（専1最終公演）		福田 善之	集中	4			16	236			
	劇上演実習D（修了公演）				4				236			
	劇上演実習E（学外出演）			集中	4				237			
	劇上演実習F（学外出演）			集中	4				237			
劇上演実習G（学内出演）			集中	1				237				

<平成25年度入学生の修了要件>
最低修得単位数 50単位（2学年合計）

【内訳】

- ①演劇研究から12単位以上
- ②実技、ミュージカル唱法、ワークショップ、海外研修から6単位以上
- ③特別講義 8単位必修
- ④劇上演実習から16単位以上
- ⑤自由選択科目として8単位（自他専攻科目より）

○修了要件とは別に、芸術科演劇専攻および他専攻の履修可能な科目のうち、年間5科目まで履修可

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：1. 共通科目

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				概要 ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	
コミュニケーション系ユニット	英語 A I ① ②	【基】 英語 A I	中村 達	前期	1				101
	英語 A II ① ②	【基】 英語 A II	中村 達	後期		1			102
	英語 B I ① ②	【クラス統合】 英語 B I	中村 達	前期			1		102
	英語 B II ① ②	【クラス統合】 英語 B II	中村 達	後期				1	103
	英語 C I	【基】 英語 C	田村奈穂子	後期	1				103
	英語 C II								
	英語 D I	廃止			前期	1			
	英語 D II	廃止			後期	1			
	英語 E I	廃止			前期	1			
	英語 E II	廃止			後期	1			
	英語 F I	廃止			前期	1			
	英語 F II	廃止			後期	1			
	ドイツ語 I	【音】 ドイツ語 I	D. グロス	前期	1				117
	ドイツ語 II	【音】 ドイツ語 II	D. グロス	後期		1			117
	ドイツ語 III		D. グロス	前期			1		105
	ドイツ語 IV		D. グロス	後期				1	105
	フランス語 I	【音】 フランス語 I	野坂・S・マガリ	前期	1				119
	フランス語 II	【音】 フランス語 II	野坂・S・マガリ	後期		1			119
	フランス語 III		野坂・S・マガリ	前期			1		106
	フランス語 IV		野坂・S・マガリ	後期				1	106
	イタリア語 I	【音】 イタリア語 I	M. スバラグリ	前期	1				118
	イタリア語 II	【音】 イタリア語 II	M. スバラグリ	後期		1			118
	イタリア語 III		M. スバラグリ	前期			1		107
イタリア語 IV		M. スバラグリ	後期				1	107	
演劇英語 ①②③	【基】 演劇英語 ①②	C. パーハム	前期	1				104	
音楽英語	廃止		前期	1					
キャリア教育系ユニット	文章表現法	【基】 キャリア・デザインB (文章表現)	未定	後期	2				97
	日本語コミュニケーション	【基】 芸術文化講座D (日本語論)	王 伸子	前期	2				101
	コンピュータ演習 [基礎] I	廃止		前期	1				
	コンピュータ演習 [基礎] II	廃止		後期		1			
	コンピュータ演習 [制作] I		竹内 聖	前期			1	108	
	コンピュータ演習 [制作] II		竹内 聖	後期				1	108
	キャリア・デザインA (資格取得)	廃止		後期	2				
	キャリア・デザインB (進学/留学)	廃止		前期	2				
芸術文化系ユニット	キャリア・デザインC (業界研究)	【基】 芸術とキャリアA	久保田慶一	前期	2				98
		【基】 芸術とキャリアB	米屋 尚子	前集	2				99
	音声生理学	【演】 音声生理学	川崎 順久	前集	1				186
	比較文化論	廃止		後期	2				
	文学論	廃止		前期	2				
	映画論	【演】 映画論	行定 勲	集中	2				184
	音楽史概説	【音】 音楽史概説	森下 俊一	通年	4				122
	舞踊論	【演】 舞踊論	村山久美子	後期	2				185
	演出論	【演】 演出論	鶴山 仁	集中	2				184
	戯曲論	【演】 戯曲論	福田 善之	前期	2				185
	演劇論	【演】 演劇論	鴻 英良	後期	2				186
	劇作法	【演】 劇作法	岡安 伸治	後期	1				188
	戯曲研究 (ギリシャ)	【演】 戯曲講読演習A (古典)	安宅りさ子	前期	1				187
	戯曲研究 (シェイクスピア)								
	戯曲研究 (チェーホフ)	【演】 戯曲講読演習B (近現代)	安宅りさ子	後期	1				187
	戯曲研究 (現代)								
	戯曲研究 (日本)	【演】 戯曲講読演習C (日本)	井上 理恵	後期	1				188
特別講義A	【演】 特別講義A	P. ゲスナー	前期	2				189	
特別講義B	【演】 特別講義B	鈴江 俊郎	後期	2				190	
音響学	【音】 音響学	岩崎 真	前期	2				126	

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				概要 ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	
ストレートブレイ系ユニット	狂言Ⅰ ①②③	【演】狂言Ⅰ ①②	善竹 富太郎	後期		1			173
	狂言Ⅱ ①②③		善竹 十郎	前期			1		109
	日本舞踊Ⅰ ①②③	【演】日本舞踊Ⅰ ①②	藤間 希穂	後期	1				172
	日本舞踊Ⅱ ①②③		藤間 希穂	前期			1		109
	マイムⅠ ①②③	【演・前期】マイム ①②	服部 宣子	後期	1				171
	マイムⅡ ①②③		服部 宣子	前期			1		110
	アクションⅠ ①②③	【演】アクション ①②	藤田 けん	後期	1				172
アクションⅡ ①②③		藤田 けん	前期			1		110	
音楽・ミュージカル系ユニット	ジャズダンスA ①②③	【演】ジャズダンスA ①②③	畔柳小枝子	前期	1				175
			渡邊美津子						176
			三村みどり						176
	ジャズダンスBⅠ ①②③④⑤	【演】ジャズダンスB ①②③	畔柳小枝子	後期		1			177
			渡邊美津子						177
			三村みどり						178
	ジャズダンスBⅡ ①②③④		畔柳小枝子	前期			1		111
			渡邊美津子						111
	バレエ・ムーヴメントA	【演・前期】 バレエ・ムーヴメント ①②	安達 悦子	後期		1			178
	バレエ・ムーヴメントB		安達 悦子	前期			1		112
	タップダンスⅠ ①②	【演】タップダンスⅠ ①②	中川裕季子	後期	1				180
	タップダンスⅡ ①②		中川裕季子	前期			1		112
	ポピュラーⅠ ①②③	廃止		後期		1			
	ポピュラーⅡ ①②③		モンデン モモ	前期			1		113
林 絵理			113						
S. H. M. Ⅰ ①②③④	【音】S. H. M. Ⅰ ①②③	福田 恵子	通年		2			127	
		池田 哲美							
		坂田 晴美							
S. H. M. Ⅱ ①②③		塩崎 美幸	通年			2		114	
		池田 哲美							
		坂田 晴美							
コンテンポラリー・ミュージックⅠ	【演】ソルフェージュⅠ ①②	岩崎 廉	後期		1			169	
コンテンポラリー・ミュージックⅡ		岩崎 廉	前期			1		114	
声優系ユニット	朗読・スピーチ A	廃止		後期		1			
	朗読・スピーチ B		飯原 道代	前期			1		115
	表現	廃止		後期		1			
	ボイス・トレーニングⅠ（演劇） ①②	廃止		後期		1			
	ボイス・トレーニングⅡ（演劇） ①②		三塚 至	前期			1		115
	声優演技法 A	廃止		後期		1			
	声優演技法 B		篠崎 光正	前期			1		116

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：2. 芸術科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	概要ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期				
共通科目	英語A I・II	【基】英語A I・II	中村 達	前・後	1	1			●全専修必修 (いずれか2単位) ※ただし、声楽専修は「イタリア語I・II」2単位に加え、英・独・仏語から2単位選択、計4単位必修 ※同じ語学の「I・II」「III・IV」をもって、1科目とみなす	修得単位は自由選択単位として卒業要件に含むことができる(必修科目の修得単位は専攻科目単位として卒業要件に含むことができる)	101・102 102・103	
	英語B I・II	廃止	中村 達	前・後			1	1				
	英語C I・II	廃止		前・後	1	1						
	英語D I・II	廃止		前・後	1	1						
	英語E I・II	廃止		前・後	1	1						
	英語F I・II	廃止		前・後	1	1						
	ドイツ語I・II	【音】ドイツ語I・II	D. グロス	前・後	1	1						
	ドイツ語III・IV		D. グロス	前・後			1	1				
	フランス語I・II	【音】フランス語I・II	野坂・S・マガリ	前・後	1	1						
	フランス語III・IV		野坂・S・マガリ	前・後			1	1				
	イタリア語I・II	【音】イタリア語I・II	M. スバラグリ	前・後	1	1						
	イタリア語III・IV		M. スバラグリ	前・後			1	1				
	音楽史概説	【音】音楽史概説	森下 俊一	通年		4						PVWSG必修
	狂言I	【演】狂言I	善竹富太郎	後期		1						●全専修必修 (いずれか1単位) ※ただし、日本音楽専修は狂言以外を選択すること
	日本舞踊I	【演】日本舞踊I	藤間 希穂	後期		1						
	マイムI	【演・前期】マイム	服部 宣子	後期		1						
	アクションI	【演】アクション	藤田 けん	後期		1						
	ジャズダンスB I	【演】ジャズダンスB	畔柳小枝子 渡邊美津子 三村みどり	後期		1						
S. H. M. I	① ② ③ ④ 【音】S. H. M. I	① 福田 恵子 ② 池田 哲美 ③ 坂田 晴美	通年		2			●全専修必修				
S. H. M. II	① ② ③	塩崎 美幸 池田 哲美 坂田 晴美	通年			2			●全専修必修			
音響学	【音】音響学	岩崎 真	前期	2								
専攻教養科目	日本国憲法	【基】芸術文化講座A	山田 亮介	後期		2			※教職受講者必修	○	99	
	異文化理解	【基】芸術文化講座B	坂田 博	後期		2				○	100	
	現代の福祉	【基】芸術文化講座C	藤森 雄介	前期	2				※教職受講者必修	○	100	
	情報処理	【基・前期】キャリアデザインC	藤本 真咲	後期		2			※教職受講者必修	○	98	
	音楽基礎演習-バロックダンス	a b	浜中 康子	前期	1				●全専修必修		120	
	音楽理論基礎		福田 恵子	前期	1				●全専修必修		120	
	専攻科目・1年次	音楽理論 [和声] I	a b	平井 正志 福田 恵子	前期	2				PVWSG必修		121 121
		音楽理論 [和声] II	a b	平井 正志 福田 恵子	後期		2			PVWSG必修		121 121
		音楽理論 [楽式] I		穴戸 里佳	通年	4				PVWSG必修	○	122
		日本音楽理論A		森重 行敏	通年	4				J必修	○	123
		日本音楽史概説		野川美穂子	通年	4				J必修	○	123
		日本音楽概論	※2013年度開講せず		後期		2			J必修 ※教職受講者必修		
		演奏解釈 (4) 日本音楽A	※2013年度開講せず		後期		2			J必修		
		日本音楽特講		杵屋 巳織	後期		2			※教職受講者(J除く)必修 (教職受講者のみ履修可)	△	124
		ディクショ (イタリア語)		井上 由紀	前期	1				V必修		126
		ディクショ (ドイツ語)	※2013年度：後期集中	松井 康司	後期		1			V必修		
		合唱		樋本 英一	通年		2			PVWSG (女子のみ) 必修		127
		オーケストラ・スタディA		奥田 雅代	前期	1				S必修		128
合奏A			奥田 雅代	後集		2			S必修		128	
管楽器基礎 (呼吸法)			三塚 至	前期	1				W必修		129	
弦楽基礎		廃止		後期		1						
声楽アンサンブルA			松井 康司	通年		2			男子のみ (J除く) 必修、女子は履修不可		129	
サクソフォーン・アンサンブルA		※2013年度開講せず		通年		2			W (S×のみ) 必修			
ギター・アンサンブルA			佐藤 紀雄	通年		2			G必修		130	
うたA		今藤美知央	前期	1				J必修	△	130		
楽器法 (和楽器) A		滝田美智子	前期	2				J必修		131		
合奏基礎 (和楽器)	※2013年度開講せず		後期		1			J必修				
初見演奏 (基礎)		吉田 真穂	前期	1				P必修		131		
第一実技I			通年		4			●全専修必修		145		
第二実技I (ピアノ/声楽管弦ギター-日本音楽)			通年		4					145		
第二実技I (ミュージカル) A	【演】個人レッスンA		前期	2				音楽専攻学生は履修不可	○			
第二実技I (ミュージカル) B	【演】個人レッスンB		後期		2				○			
副科実技I (ピアノ)			通年		2			●全専修必修	○	146		
副科実技I (声楽)			通年		2			VWSGJ PGJ GJ	○	146		
副科実技I (管弦ギター-日本音楽)			通年		2				○	146		
副科実技I (ミュージカル) A	【演】個人レッスンE		前期	1				音楽専攻学生は履修不可	○			
副科実技I (ミュージカル) B	【演】個人レッスンF		後期		1				○			

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	概要ページ	
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
専攻科目・1年次	伴奏A (1)		荻野 千里	前集	1							132	
	伴奏A (2)		荻野 千里	後集		1						132	
	海外特別演習A		荻野 千里 松井 康司	前集	2							132	
	特別演習A		松井 康司 奥田 雅代	通年		1			●全専修必修			133	
	特別演習A		松井 康司 奥田 雅代	通年		1			●全専修必修			133	
専攻科目・1年次	コラボレート実習A (1)		松井 康司	前集	1							133	
	コラボレート実習A (2)		松井 康司	後集		1						133	
	音楽理論 [和声] III a		平井 正志	前期			2		PVWSG必修			134	
	音楽理論 [和声] III b		福田 恵子	前期			2		PVWSG必修			134	
	音楽理論 [和声] IV a		平井 正志	後期				2	PVWSG必修			134	
音楽理論 [和声] IV b		福田 恵子	後期				2	PVWSG必修			134		
音楽理論 [楽式] II	廃止			通年			4						
対位法 a			石島 正博	通年				4				135	
	b		新実 徳英	通年				4				135	
音楽理論 [総合演習]	廃止			通年				2					
楽器法			大澤 健一	前集			2			◎		136	
楽器法 (和楽器) B			滝田美智子	前期			2		J必修			131	
日本音楽理論B			森重 行敏	通年				4	J必修	◎		123	
音楽史特講A			関野さとみ	前期			2			◎		136	
音楽史特講B			久保田慶一	前期			2			◎		137	
音楽史演習A			関野さとみ	後期				1		◎		137	
音楽史演習B			久保田慶一	後期				1		◎		138	
音楽療法概論			鈴木千恵子	前期			2			◎		138	
演奏解釈 (1) ピアノ楽曲			荻野 千里	後期				2		◎		139	
演奏解釈 (2) 声楽曲			松井 康司	前期			2			◎		139	
演奏解釈 (3) 室内楽曲			寺岡有希子	前期			2					140	
演奏解釈 (4) 日本音楽B	※2013年度開講せず			後期				2					
アウトリーチ概説			永井 由比	前期			2					125	
アウトリーチ演習			永井 由比	後期				1				125	
オーケストラ・スタディB			奥田 雅代	前期			1		S必修			128	
合奏B			奥田 雅代	後集				2	S必修			128	
声楽アンサンブルB			松井 康司	通年				2	男子(J除く)・女子(Vのみ)必修			129	
管楽アンサンブル a		【クラス統合】		通年				2	W (F1のみ) 必修			140	
	b	管楽アンサンブル	石橋 雅一	通年				2	W (F1、S×除く) 必修			140	
指揮法			樋本 英一	通年				2	※教職受講者必修			141	
室内楽A a			荻野 千里	前期			2					141	
	b		野口千代光										142
	c		北本 秀樹										142
室内楽B a			中川 昌三	後期			2					143	
	b		市坪 俊彦										143
	c		蓼沼恵美子										143
サクソフォン・アンサンブルB	※2013年度開講せず			通年				2	W (S×のみ) 必修				
ギター・アンサンブルB			佐藤 紀雄	通年				2	G必修			130	
うたB			今藤美知央	前期			1		J必修	△		130	
邦楽アンサンブル			野坂 恵子	通年				2	J必修			144	
伴奏法			羽生百合子	通年				2	※教職受講者(J除く) 必修			145	
第一実技II				通年				4	●全専修必修			145	
第二実技II (ピアノ・チェンバロ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)				通年		4				◎		146	
第二実技II (ミュージカル) A	【演】個人レッスンC			前期			2		音楽専攻学生は履修不可	◎			
第二実技II (ミュージカル) B	【演】個人レッスンD			後期			2		音楽専攻学生は履修不可	◎			
副科実技II (ピアノ・声楽・管・弦・ギター・日本音楽)				通年				2		◎		146	
副科実技II (ミュージカル) A	【演】個人レッスンG			前期			1		音楽専攻学生は履修不可	◎			
副科実技II (ミュージカル) B	【演】個人レッスンH			後期				1		◎			
第一実技卒業試験								4	●全専修必修				
伴奏B (1)			荻野 千里	前集			1					132	
	(2)		荻野 千里	後集				1				132	
海外特別演習B			荻野 千里 松井 康司	前集			2					132	
特別演習B			松井 康司 奥田 雅代	通年				1	●全専修必修			133	
コラボレート実習B (1)			松井 康司	前集			1					133	
	(2)		松井 康司	後集				1				133	

専攻科目は各専修の必修単位を含め、1・2年次を通じて48単位以上修得

【備考】

- ① P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修
 ② 「他専攻の履修」欄は、○は他専攻の学生（1・2年次とも。専攻科生含む）が履修可能な科目。
 ただし、◎は芸術科2年生以上、△は専攻科演劇専攻でない履修できない。

<平成24年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

- ①専攻科目単位数 48単位
(共通科目・専攻教養科目より各専修の必修単位数を含む)
- ②自由選択単位数 14単位

※専修別による必修単位数は、「注⑩専攻科目必修単位数」を参照のこと

注

- ①Ⅰの修得なしにⅡの履修はできない。
- ②第一実技は、専修別による必修（1年次・2年次各50分）
- ③第二実技は、選択（40分）。第一実技に準じた専門レベル。履修料別途徴収。
- ④副科実技は、Ⅰ必修、Ⅱ選択（20分）
Ⅰは、ピアノ専修者は声楽、声楽・管楽器・弦楽器専修者はピアノを必修とする。
副科実技を第二実技として履修する場合は100,000円、第二実技と副科実技の両方を履修する場合は200,000円を別途徴収。
- ⑤第二実技・副科実技のうち、ミュージカルに限っては半期ごとの科目とし、履修料も半期ごとに徴収する。
- ⑥「情報処理」「日本音楽特講」は教職に関する科目の受講手続きを経た学生のみ履修可。
ただし、教職課程受講生の人数が少ない等の事情によっては、その他の学生の受講を認める場合がある。
- ⑦選択科目「伴奏」について
前期、後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。
「伴奏受講票」を使用のこと。
- ⑧選択科目「コラボレート実習」について
専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。
「コラボレート実習受講票」を使用のこと。
- ⑨学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。
- ⑩専攻科目必修単位（※共通科目・専攻教養科目内の必修単位含む）

	1年次		2年次		合計	
	男	女	男	女	男	女
ピアノ専修	29	29	17	15	46	44
声楽専修	31	31	17	17	48	48
管楽器専修	29	29	19	17	48	46
管楽器専修（Sx）	31	31	19	17	50	48
弦楽器専修	31	31	20	18	51	49
ギター専修	30	30	19	17	49	47
日本音楽専修	31	31	21	21	52	52

ただし、日本音楽専修者の専攻科目必修単位数は、下記科目群の単位数を含む。

科目区分	授業科目	担当氏名	期間	単位数
共通科目	狂言Ⅰ	善竹富太郎	後期	1
	狂言Ⅱ	善竹 十郎	前期	1

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：3. 芸術科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	概要ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期				
基礎実技科目	基礎演劇演習 A	a	越光 照文	前期	2				a組必修	6		147
		b	鈴江 俊郎	前期	2				b組必修		147	
		c	P. ゲスナー	前期	2				c組必修		148	
		d	宮崎 真子	前期	2				d組必修		148	
	基礎演劇演習 B	a	P. ゲスナー	前期	2				a組必修		149	
		b	宮崎 真子	前期	2				b組必修		149	
		c	越光 照文	前期	2				c組必修		150	
		d	鈴江 俊郎	前期	2				d組必修		150	
	身体トレーニング	a	金森 勢	前期	1				a組選択		151	
		b	金森 勢	前期	1				b組選択		151	
		c	金森 勢	前期	1				c組選択		151	
		d	金森 勢	前期	1				d組選択		151	
	ボイス・トレーニング (歌唱)	a	信太 美奈	前期	1				a組選択		151	
		b	信太 美奈	前期	1				b組選択		151	
		c	信太 美奈	前期	1				c組選択		151	
d		信太 美奈	前期	1				d組選択	151			
ムーヴメント	ab cd	廃止						a b組選択 c d組選択				
演技系科目	演劇演習 A	a	鈴江 俊郎	後期		2			a組必修	8		152
		b	越光 照文	後期		2			b組必修		152	
		c	宮崎 真子	後期		2			c組必修		153	
		d	P. ゲスナー	後期		2			d組必修		153	
	演劇演習 B	a	宮崎 真子	後期		2			a組必修		154	
		b	P. ゲスナー	後期		2			b組必修		154	
		c	鈴江 俊郎	後期		2			c組必修		155	
		d	越光 照文	後期		2			d組必修		155	
	演劇演習 C	a	三浦 剛	後期			2		a組必修		156	
		b	三浦 剛	後期			2		b組必修		156	
		c	篠崎 光正	後期			2		c組必修		157	
		d	三浦 剛	後期			2		d組必修		157	
演劇演習 D	a	岡安 伸治	前期			2		a組必修	158			
	b	三浦 剛	前期			2		b組必修	158			
	c	P. ゲスナー	前期			2		c組必修	159			
	d	三浦 剛	前期			2		d組必修	159			
ストレートプレイ系実技科目	演劇特別演習 I	a	鴻上 尚史	後期		1		ストレートプレイ コース必修	8		169	
		c	鴻上 尚史	後期		1				169		
	演劇特別演習 II	a	鴻上 尚史	前期		1				170		
		c	鴻上 尚史	前期		1				170		
	演技演習 A (ダイアログ)	a	篠崎 光正	前期		2				160		
		c	篠崎 光正	後期			2			160		
	演技演習 B (アンサンブル)	a	岡安 伸治	後期			2			160		
		c	岡安 伸治	前期		2				160		
	クラシック唱法 I	abc	松井 康司	後期		1				173		
	クラシック唱法 II	abc	松井 康司	前期			1			174		
身体表現 I	a		後期		1		ストレートプレイ コース選択					
	c		後期		1							
身体表現 II	a		山本光二郎	前期		1		171				
	c		山本光二郎	前期		1		171				
ミュージカル系実技科目	歌唱 I ①~⑦		橋爪、佐山(陽)、 林、矢部、大場	後期		1		ミュージカルコース 必修	8		163~165	
			橋爪、佐山(陽)、 林、矢部、大場	前期			1			165~167		
	ショーダンス I	d	三村みどり	後期		1				168		
		d	三村みどり	前期			1			168		
	クラシックバレエ I	d	安達 悦子	後期		1				179		
	クラシックバレエ II	d	安達 悦子	前期			1			179		
	ミュージカル唱法 I	d①②	信太 美奈	後期		1				174		
	ミュージカル唱法 II	d	信太 美奈	前期			1			175		
	演劇特別演習 I	bd	鴻上 尚史	後期		1				ミュージカルコース 選択	169	
	演劇特別演習 II	bd	鴻上 尚史	後期		1				170		
声優系実技科目	演技演習 C (ナレーション) I		斉藤 洋美	前期			1	声優コース必修	8		161	
			斉藤 洋美	後期						1	161	
	演技演習 D (朗読劇) I			後期		1				162		
			原 えりこ	前期			1			162		
	演技演習 E (アテレコ) I			後期		1				174		
			小金丸大和	前期			1			162		
	クラシック唱法 I	abc	松井 康司	後期		1				173		
	クラシック唱法 II	abc	松井 康司	前期			1			174		
演劇特別演習 I	bd	鴻上 尚史	後期		1		声優コース選択	169				
演劇特別演習 II	bd	鴻上 尚史	前期			1	170					

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	概要ページ
					1年 前期	1年 後期	2年 前期	2年 後期				
理論系科目	日本演劇史A (古典)	※2013年度：後期開講	安富 順	前期	2				ストレートプレイ コース必修	12		181
	日本演劇史B (近代)	開講せず		後期		2						181
	日本演劇史C (現代)		鴻 英良	前期			2					182
	西洋演劇史A (古典)	※2013年度：後期開講	安宅りさ子	前期	2							182
	西洋演劇史B (近代)	開講せず		後期		2						183
	西洋演劇史C (現代)		安宅りさ子	前期			2					183
	ミュージカル概論	※2013年度：後期開講	橋爪 貴明	前期	2							183
	ミュージカル論A		篠崎 光正	後期		2						
	ミュージカル論B		横山 由和	前期			2					
	漫画論	廃止		後期		2						
アニメーション論	廃止		前期	2				声優コース必修	10		189	
外国映画論		石原 康臣	前期			2					190	
集中講義 (舞台照明実習)		森脇 清治	前集	1							191	
集中講義 (舞台音響実習)		佐藤こうじ	前集	1							191	
集中講義 (舞台監督実習)	※2013年度：後期集中	宮下 卓	前集	1							192	
集中講義 (ヘアメイク実習)		宮崎 龍	前集	1							194	
ワークショップ (ストレートプレイ) 1年次		井田 邦明	後集		1						194	
ワークショップ (ミュージカル) 1年次		横山 由和	後集		1						194	
ワークショップ (声優) 1年次		亀山 俊樹	後集		1						194	
ワークショップ (ストレートプレイ) 2年次		井田 邦明	前集			1					194	
ワークショップ (ミュージカル) 2年次		絹川 友梨	前集			1		194				
ワークショップ (声優) 2年次		伊藤健太郎	前集			1		194				
演劇研修 (ハケ岳合宿)		鈴江 俊郎	前集	1				195				
海外研修		P. ゲスナー	後集		1			195				
			後集			1		195				
実習科目	劇上演実習A (試演会)	ストレートプレイ	井田 邦明	後集			4		196			
		ミュージカル	酒井麻也子	後集			4		196			
		声優	小金丸大和	後集			4		196			
	劇上演実習B (卒業公演)	ストレートプレイ	越光 照文	後集			4		196			
		ミュージカル	宮崎 真子	後集			4		196			
		声優	岡安 伸治	後集			4		196			
	劇上演実習C (学外出演)					4		197				
	劇上演実習D (学外出演)					4		197				
	劇上演実習E (学内出演)					1		197				
	劇上演実習F (学内出演)					1		197				

<平成24年度入学生の卒業要件>

- 最低修得単位数 62単位
- 【内訳】
- ①専攻科目単位数 44単位
 - 1.実技系科目 22単位
 - 2.理論系科目 12単位
 - 3.実習科目 10単位
 - ②学科共通科目 15単位
 - 1.各専門のユニット 6単位
 - 2.コミュニケーション系ユニット (語学) 1単位必修
 - 3.コミュニケーション系ユニット・芸術文化系ユニット 8単位
 - ③自由選択科目 3単位

注

- ① I の修得なしに II の履修はできない。
- ② 基礎演劇演習 A B、演劇演習 A B C D は全コース必修
- ③ 演劇特別演習 I II、演技演習 A B、日本演劇史 A B C、西洋演劇史 A B C はストレートプレイコース必修
- ④ 歌唱 I II、ミュージカル唱法 I II、ショーダンス I II、クラシックバレエ I II、ミュージカル概論、ミュージカル論 A B はミュージカルコース必修
- ⑤ 演技演習 C D E、クラシック唱法 I II、漫画論、アニメーション論、外国映画論は声優コース必修

○講義科目は半期2単位、実習・実技・演習科目は半期1単位、劇上演実習は4単位

【教育課程・卒業の要件】

教育課程：4. 芸術科 ステージ・クリエイト専攻

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	卒業要件	他専攻	概要ページ
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期				
2 総合基礎科目	スタッフ演習AⅠ (演出)		越光 照文	前期			1		6単位以上 選択必修	6	199	
	スタッフ演習AⅡ (演出)		越光 照文	後期				1			199	
	スタッフ演習BⅠ (演劇制作)	廃止		前期	1							
	スタッフ演習BⅡ (演劇制作)	廃止		後期		1						
	スタッフ演習CⅠ (舞台制作)	廃止		前期	1							
	スタッフ演習CⅡ (舞台制作)	廃止		後期		1						
	スタッフ演習DⅠ (マルチメディア)	廃止		前期	1							
	スタッフ演習DⅡ (マルチメディア)	廃止		後期		1						
	スタッフ演習EⅠ (芸術運営)		中山 夏織	前期			1				200	
スタッフ演習EⅡ (芸術運営)		中山 夏織	後期				1	200				
総合演習科目	上演鑑賞演習Ⅰ	廃止		前期	1				必修	2		
	上演鑑賞演習Ⅱ	廃止		後期		1			必修			
スタッフ・プロデューサー系科目	ミュージック・プロデュース	廃止		前期	1				8単位以上 選択必修	14		
	舞台監督法	【演・後集】舞台監督実習	宮下 卓	前期	1						191	
	音響法	【演・前集】舞台音響実習	佐藤こうじ	前期	1						191	
	音響法実習	廃止		後期		1						
	照明法	【演・前集】舞台照明実習	森脇 清治	前期	1						190	
	照明法実習	廃止		後期		1						
	演奏会制作法A	【音】演奏会制作法	佐藤 修悦	後期		1					124	
	演奏会制作法B		佐藤 修悦	前期			1				201	
	舞台プロデュース法A		中島 豊	前期			1				201	
	舞台プロデュース法B		中島 豊	後期				1			202	
	舞台美術法A		島川とおる	前期			1				202	
	舞台美術法B		島川とおる	後期				1			203	
	コンサート・ステージング(クラシック) A		合田 香	前期			1				203	
	コンサート・ステージング(クラシック) B		合田 香	後期				1			204	
	コンサート・ステージング(ライブ) A		高田 憲治	前期			1				204	
	コンサート・ステージング(ライブ) B		高田 憲治	後期				1			205	
	衣装・装飾プロデュース	廃止		後集		1						
	メイクアップ・プロデュース	【演・前集】ヘアメイク実習	宮崎 龍	後期		1					192	
	メディア・ディレクション	廃止		前期	1							
映像表現法	廃止		後期		1							
メディア・プロデュース	廃止		前集	1								
理論系科目	芸術の効能	廃止		後集		2			6単位以上 選択必修	14		
	メディアリテラシー		渡辺真由子	後集			2				○ 205	
	文化環境論	廃止		前期	2							
	サウンドスケープ	廃止		前期	2							
	地域コミュニティと芸術運営	廃止		後期		2						
	舞台美術論	廃止		後期		2						
	芸術経営論		伊藤 裕夫	前集			2				○ 206	
	イベントプロデュース論	廃止		前集	2							
	芸術心理学		熊谷 保宏	前期			2				○ 206	
知的財産権論・著作権論		中山 夏織	後期				2	○ 207				
実習科目	演劇研修 (ハヶ岳合宿)		鈴江 俊郎	集中	1				14	195		
	海外研修	1年次 2年次	P. ゲスナー	後集		1				195		
	スタッフ実習A (専攻科劇上演実習A)			後集			1			195		
	スタッフ実習B (オペラ実習)			集中	4					必修		
	スタッフ実習C (演2劇上演実習A)			集中		2				必修		
	スタッフ実習D (演2劇上演実習B)			集中		4						
	スタッフ実習E (専攻科劇上演実習B)			集中		4						
	スタッフ実習F (専攻科劇上演実習C・D)			集中		4						
	スタッフ実習G (専攻科劇上演実習A)		鈴江 俊郎	集中			4					
	スタッフ実習H (演2劇上演実習A)		各担当教員	集中				4				
	スタッフ実習I (専攻科劇上演実習B)		P. ゲスナー	集中				4				
	スタッフ実習J (音楽定期演奏会等)			集中		2						
	スタッフ実習K (卒業・修了演奏会)			後集		2						
	スタッフ実習L (音楽定期演奏会等)		松井 康司	集中				2				
	スタッフ実習M (オペラ実習)		松井 康司	後集				2				
	スタッフ実習N (学外制作研修)		安宅りさ子	通年		2				208		
	スタッフ実習O (演2劇上演実習B)		各担当教員	集中				4		209		
	スタッフ実習P (卒業・修了演奏会)		松井 康司	後集			2					
	スタッフ実習Q (専攻科劇上演実習C・D)		各担当教員	集中			4					
卒業創作		安宅りさ子 ほか	後期				4	209				
芸術科共通科目										10		
※「日本語コミュニケーション」「文章表現法」から2単位と、「コンピュータ演習」から2単位、「英語」1単位を含んで10単位必修												

<平成24年度入学生の卒業要件>

最低修得単位数 62単位

【内訳】

①専攻科目単位数 46単位

1.総合基礎科目 「スタッフ演習」6単位（選択必修）

2.総合演習科目 2単位（必修）

3.スタッフ・プロデュース系科目・理論系科目から14単位（スタッフ・プロデュース系科目から8単位、専門講義科目から6単位選択必修）

4.実習科目（2科目以上） 14単位（必修）

5.芸術科共通科目「日本語コミュニケーション」「文章表現法」2単位と、「コンピュータ演習」から2単位、英語1単位を含んで10単位必修

②自由選択科目 16単位

（専攻の卒業要件とは別に、共通科目、実技科目も含む自他専攻科目、および単位互換の認められる他大学の科目から取得する）

注

① I の取得なしに II は履修できない

② 実習科目の「スタッフ実習N（学外制作研修）」は他団体の上演、ワークショップ、地域イベント、インターンシップなどへの参加状況に応じて単位を認定し取得したものとみなす。学外制作研修は、重複（複数回）履修可能。

○講義科目は半期2単位、実習・実技・演習科目は半期1単位

【教育課程・卒業の要件】

卒業の要件

本学を卒業するには、教育課程をよく理解し、以下の条件を満たす最低修得単位数以上の単位を修得しなければならない。卒業要件の詳細については、各専攻の別表及び注意事項を参照すること。

1. 芸術科 音楽専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	48単位
自由選択単位数	14単位
(専攻科目・専攻教養科目・他専攻科目・共通科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数には、各専修の必修単位数を含む。

③ 共通科目より、「外国語」「SHMI」「SHMII」合計6単位必修とする。(ただし、声楽専修は2外国語を必修とし、合計8単位)

また、「狂言I」「日本舞踊I」「マイムI」「アクションI」「ジャズダンスBI」より、いずれか1単位必修とする。

④ 外国語は、同じ語の「I・II」または「III・IV」をもって1科目とみなす。

2. 芸術科 演劇専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	44単位
共通科目単位数	15単位
自由選択単位数	3単位
(専攻科目・他専攻科目・共通科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数の内訳は

実技系科目 22単位 理論系科目 12単位 実習科目 10単位

③ 共通科目単位数の内訳は

各専門のユニット 6単位

コミュニケーション系ユニット (外国語 (英語)) 1単位必修

コミュニケーション系ユニット・芸術文化系ユニット 8単位

3. 芸術科 ステージ・クリエイト専攻

最低修得単位数	62単位
内訳 専攻科目単位数	46単位
自由選択単位数	16単位
(専攻科目・他専攻科目・共通科目・単位互換履修科目可)	

注① I の修得なしに II を履修することはできない。

② 専攻科目単位数の内訳は

総合基礎科目 6単位

総合演習科目 2単位 (必修)

スタッフ・プロデュース系科目 8単位

理論系科目 6単位

実習科目 (4科目以上) 14単位

共通科目 10単位

(ただし、「日本語コミュニケーション」「文章表現法」2単位、「コンピュータ演習」から2単位、「外国語 (英語)」1単位は必修)

2012年度教育課程 別表…13

【教育課程・修了の要件】

1. 専攻科 音楽専攻

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了要件	他専攻	概要ページ																							
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期																											
専攻科目・1年次	音楽理論 [和声] V		平井 正志	前期	2							211																							
	音楽理論 [和声] VI		平井 正志	後期		2						211																							
	日本音楽理論C		名倉 明子	通年	4							211																							
	楽曲分析A	楽曲分析A 楽曲分析B	新実 徳英	前期	2								212																						
				後期		2								212																					
	音楽史研究		関野さとみ	通年	4								213																						
	日本音楽史研究A		野川美穂子	通年	4				J必修				213																						
	音楽療法概説A		鈴木千恵子	通年	4								214																						
	音楽療法演習A		鈴木千恵子	通年	2								214																						
	演奏現場論A		合田 香	前期	2								215																						
	第一実技Ⅲ	(ピアノ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)			通年	6				●全専修必修				227																					
						第二実技Ⅲ	(ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (バロック・フルート) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)								通年	4							227												
																学内演奏 I	松井 康司 荻野 千里	通年	2					●全専修必修											
																			ピアノデュオ研究A									荻野 千里	通年	4		P必修			215
																														管楽アンサンブル研究A	石橋 雅一				
	室内楽研究A	荻野 千里 野口千代光	前期	2									216																						
				b	北本 秀樹				217																										
														c	中川 昌三					217															
	室内楽研究B	a	市坪 俊彦	後期	2					218																									
					b	蓼沼恵美子								218																					
															c	白尾 隆				219															
	室内楽特設クラスA		荻野 千里	前集	1							219																							
	室内楽特設クラスB		荻野 千里	後集		1						219																							
	歌曲研究A		松井 康司 東井 美佳	通年	4								220																						
	オペラ実習A		松井 康司 P. ゲスナー	通年	6				V選択				220																						
	邦楽アンサンブル研究A		野坂 恵子	通年	4				J必修				221																						
	オーケストラ・スタディC		奥田 雅代	前期	1				S必修				221																						
	合奏C		奥田 雅代	後集		2			S必修				222																						
	ギター・アンサンブルC		佐藤 紀雄	通年	2				G必修				222																						
	サクソフォン・アンサンブルC		※2013年度開講せず	通年	2				S x 必修																										
	初見演奏 (応用)		吉田 真穂	後期		1			P必修				223																						
	伴奏C	(1) (2)		荻野 千里	前集	1							223																						
					後集		1							223																					
	伴奏研究A		荻野 千里	前集	1							224																							
	伴奏研究B		荻野 千里	後集		1						224																							
	海外特別演習C		荻野 千里 松井 康司	前集	2								224																						
	特別演習C		荻野 千里	通年	1				●全専修必修				225																						
	コラボレート実習C	(1) (2)		松井 康司	前集	1							225																						
					後集		1							225																					

1・2年次を通じて必修科目を含めて46単位以上

科目区分	授業科目・クラス	2013年度授業名 【読替】	担当氏名	期間	単位				必須条件	修了要件	他専攻	概要ページ	
					1年前期	1年後期	2年前期	2年後期					
専攻科目・2年次	音楽理論【創作】	廃止		通年			4						
	編曲法	廃止		通年			4						
	楽曲分析B	楽曲分析【編曲】 楽曲分析【創作】	たかの舞俐	前期 後期			2 2				226 226		
	日本音楽史研究B		野川美穂子	通年			4	J必修			216		
	音楽療法概説B		鈴木千恵子	通年			4				214		
	音楽療法演習B		鈴木千恵子	通年			2				214		
	演奏現場論B		合田 香	前期			2				215		
	第一実技Ⅳ (ピアノ) (声楽) (管楽器) (弦楽器) (ギター) (日本音楽)				通年			6	●全専修必修			227	
	第二実技Ⅳ (ピアノ) (チェンバロ) (声楽) (ミュージカル) (管楽器) (バロックフルート) (弦楽器)				通年			4				227	
	第一実技修了試験							4	●全専修必修				
	学内演奏Ⅱ			松井 康司 荻野 千里	通年			2	●全専修必修				
	ピアノデュオ研究B			荻野 千里	通年			4				215	
	管楽アンサンブル研究B			石橋 雅一	通年			4	W(S×除く)必修			216	
	室内楽研究C	a		荻野 千里 野口千代光	前期			2				216	
		b		北本 秀樹									217
		c		中川 昌三									217
				市坪 俊彦 藤沼恵美子 白尾 隆		後期				2			
	室内楽特設クラスC		荻野 千里	前集			1				219		
	室内楽特設クラスD		荻野 千里	後集			1				219		
	歌曲研究B			松井 康司 東井 美佳	通年			4				220	
	オペラ実習B			松井 康司 P. ゲスナー	通年			6	V選択			220	
	邦楽アンサンブル研究B			野坂 恵子	通年			4	J必修			221	
	オーケストラ・スタディD			奥田 雅代	前期			1	S必修			221	
	合奏D			奥田 雅代	後集			2	S必修			222	
	ギター・アンサンブルD			佐藤 紀雄	通年			2	G必修			222	
	サクソフォン・アンサンブルD		※2013年度開講せず		通年			2	S×必修				
	伴奏D	(1)		荻野 千里	前集			1				223	
		(2)		荻野 千里	後集			1				223	
	伴奏研究C			荻野 千里	前集			1				224	
	伴奏研究D			荻野 千里	後集			1				224	
	海外特別演習D			荻野 千里 松井 康司	前集			2				224	
	特別演習D			荻野 千里	通年			1				225	
コラボレイト実習D	(1)		松井 康司	前集			1				225		
	(2)		松井 康司	後集			1				225		

1・2年次を通して必修科目を含めて46単位以上

【備考】

①P：ピアノ専修 V：声楽専修 W：管楽器専修 S：弦楽器専修 G：ギター専修 J：日本音楽専修

<平成24年度入学生の修了要件>

最低修得単位数 46単位（2学年合計）

注

- ①Ⅰの修得なしにⅡの履修はできない。
- ②Ⅲの修得なしにⅣの履修はできない。
- ③第一実技は、専修別による必修（1年次・2年次各60分）
- ④第二実技は、選択（40分）。履修料（150,000円）を別途徴収する。
- ⑤選択科目「伴奏」について
前期、後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表（実技試験・学内演奏会・卒業演奏会）をもって各々単位認定を行う。
「伴奏受講票」を使用のこと。
- ⑥選択科目「コラボレイト実習」について
専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。
「コラボレイト実習受講票」を使用のこと。
- ⑦「室内楽研究」等アンサンブル科目の履修において、研究生を含むグループは、科目担当者及び専攻の教員との相談の上、外部より臨時のアンサンブル指導員を招聘することができる。
- ⑧学内外の演奏会及び試験について、提出曲目及び曲数と異なる場合は失格とすることがある。

- 修了要件とは別に、芸術科音楽専攻科目及び他専攻の履修可能な科目のうち、年間5科目まで所定の手続きを経て履修することができる。
- 他専攻専攻科目については、2年間で6単位まで、修了要件内で履修することができる。

2. 専攻科 演劇専攻

科目区分	授業科目・クラス	担当氏名	期間	単位				修了要件	他専攻	概要ページ
				1年前期	1年後期	2年前期	2年後期			
実技・演技系科目	演劇特別研究	1年次	志賀廣太郎	通年	2		12		229	
		2年次			2				229	
	演劇研究A（現代劇）	1年次	鈴江 俊郎	通年	2				229	
		2年次			2				229	
	演劇研究B（日本演劇）	1年次	三浦 剛	通年	2				230	
		2年次			2				230	
	演劇研究C（外国演劇）	1年次	P. ゲスナー	通年	2				230	
		2年次			2				230	
	演劇研究D（演劇論）	1年次	安宅りさ子	通年	2				231	
		2年次			2				231	
	演劇研究E（実験劇）	2年次	宮崎 真子	通年			2		231	
	実技A（コンテンポラリー）	1年次	勝倉 寧子	通年	2				232	
		2年次			2				232	
	実技B（ヒップホップ）	1年次	赤地 寿美	通年	2				232	
		2年次			2				232	
	ミュージカル唱法	1年次	信太 美奈	通年	2				233	
		2年次			2				233	
	ワークショップA	1年次	N. パーター	前集	1			6	233	
		2年次				1			233	
ワークショップB	1年次	未定	後集		1			233		
	2年次					1		233		
海外研修	1年次	P. ゲスナー	後集		1			244		
	2年次		後集			1		244		
特別講義A	1年次	P. ゲスナー	前期	2				244		
	2年次			2				244		
特別講義B	1年次	鈴江 俊郎	後期	2			8	245		
	2年次			2				245		
劇上演実習	劇上演実習A	1年次	鈴江 俊郎	集中	4				235	
		2年次		集中	4				235	
	劇上演実習B	1年次	P. ゲスナー	集中	4				235	
		2年次		集中	4				235	
	劇上演実習C（専1最終公演）		福田 善之	集中	4				236	
	劇上演実習D（専2最終公演）			集中	4				236	
	劇上演実習E（学外出演）			集中	4				237	
	劇上演実習F（学外出演）			集中	4				237	
劇上演実習G（学内出演）			集中	1				237		

<平成24年度入学生の修了要件>

最低修得単位数 50単位（2学年合計）

【内訳】

- ①演劇研究から12単位以上
- ②実技、ミュージカル唱法、ワークショップ、海外研修から6単位以上
- ③特別講義 8単位必修
- ④劇上演実習から16単位以上
- ⑤自由選択科目として8単位（自他専攻科科目より）

○修了要件とは別に、芸術科演劇専攻および他専攻の履修可能な科目のうち、年間5科目まで履修可

※ 以下の科目を履修しても②実技の単位数に含めることができる。

科目区分	授業科目	担当氏名	期間	単位数
音楽専攻	うたA・B	今藤美知央	前期	1
	日本音楽特講	杵屋 巳織	後期	2

Toho Gakuen College of Drama and Music

基礎教養

科目名 キャリア・デザインA (基礎教養)

期 間 後期

対 象 全専攻1・2年

担当教員 未定

詳細が決定次第、掲示等により周知する。

科目名 キャリア・デザインB (文章表現)

期 間 後期

対 象 全専攻1・2年

担当教員 未定

詳細が決定次第、掲示等により周知する。

科目名 キャリア・デザインC (情報処理)

対象 全専攻1・2年

履修条件

教職課程受講者は必修。

授業の概要

インターネット、webページ、携帯電話とメール、モラルとルール、そして情報セキュリティと情報化社会が進展していく中で、社会の仕組みや人と人との関わりが大きく変わってきた今、自然との調和、社会への参画、人とのつながり、個人のあり方が重要視されている。また、学校においては業務の効率化や情報の共有化にコンピュータは必要不可欠なものとなっており、各教員にもコンピュータを使いこなすスキルが求められている。中でも、各文書の作成や成績管理には欠かせない。この授業ではPCの基本操作・文書作成・表計算を始め、溢れる情報の中から必要な情報を集捨選別し有効に活用する能力を養い活用し、情報モラルについて学んでいく。

授業の到達目標

- (1) PCの基本操作を習得し、情報の収集発信することができる。
- (2) 表計算の基礎計算・関数の活用ができる。
- (3) ネットにおけるマナー・情報モラルについて理解する。

授業計画

- (1) ガイダンス (PCの基本的な操作の仕方・PCルームの環境)
- (2) 文書作成 wordによる文書の作成①
- (3) 文書作成 wordによる文書の作成②
- (4) 文書作成 wordによる文書の作成③
- (5) 文書作成 wordによる文書の作成④

期間 前期

担当教員 藤本 真咲

- (6) 情報収集 インターネットの活用①
- (7) 情報収集 インターネットの活用②
- (8) 情報モラル 著作権の扱い方
- (9) 情報モラル 個人情報の流出とセキュリティ
- (10) プレゼンテーション 適切な表現の仕方①
- (11) プレゼンテーション 適切な表現の仕方②
- (12) 表計算 基本操作
- (13) 表計算 計算式・関数
- (14) 表計算 グラフ
- (15) 表計算 様々な応用

授業時間外の学習

授業で学習したことはよく復習し、次回の授業で使えるようにしておくこと。

教科書・参考書等

課題で学ぶ「情報」活用テキスト(パソコン検定協会 事務局)

成績評価

毎回提出する課題の内容により評価する。

- A 80点以上 (必要項目も含め課題が完全に仕上がっている)
- B 65点以上 (8割程度の仕上がりに)
- C 50点以上 (半分程度の仕上がりに)
- D 49点以下 (著しく欠席が多く、尚且つ課題の仕上がりがまたは提出状況が悪い)

科目名 芸術とキャリアA

対象 全専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

キャリアとは何かを理解して、自分のこれからの人生や仕事について考えるための知識やスキルを修得する。

授業の到達目標

自分の人生を自分で設計できるようになる。

期間 前期

担当教員 久保田 慶一

授業計画

1. キャリアとは何か?
2. 人生の転機とは何か?
3. 働くとはどういうことか?
4. 職業とは何か?
5. 社会人とは何か?
6. 音楽の仕事とは何か?
7. 音楽と社会はどう関わるのか?
8. 起業的精神とは何か?
9. 音楽経営学とは何か?
10. 音楽的市民とは何か?
11. 「音楽に生きる」とはどういうことか?
12. 音楽的社会貢献とは何か?
13. 5年後の自分を考えてみよう
14. 予備日
15. 予備日

授業時間外の学習

授業で課題を課すので、次の授業で提出・発表できるようにしておくこと。

教科書・参考書等

適宜、指示する。

成績評価

出席状況 (50%)、課題の提出 (30%)、授業中での発表の状況 (20%) で、総合的に判定する。

科目名 芸術とキャリアB

対象 全専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

芸術と社会の関係について考え、芸術に携わる専門家として、どのようなスタンスをとるべきか、それぞれが選択するための基礎を固められるよう、芸術をとりまく経済、社会、文化政策の基礎について考察を進める。グループ・ディスカッションの時間をとり、一人で考えるのではなく、他の人の見方を参考にしながら考える時間にしていく。

授業の到達目標

自分の言葉で芸術の重要性について、芸術を特に重要でないと考えている人たちにも、説得力のある発言ができるようになることを目指す。

期間 前期集中

担当教員 米屋 尚子

授業計画

- ・芸術に対する一般的イメージ
- ・芸術をとりまく環境の変遷
- ・芸術に関する数字
- ・文化政策の理念
- ・芸術家の今日における役割とは
※履修者の関心によって、芸術＝演劇、芸術＝音楽というように置き換えて考察することは可能。

授業時間外の学習

芸術をとりまく経済、社会、文化政策等について調べること。

教科書・参考書等

参考書：米屋尚子著「演劇は仕事になるのか？ 演劇の経済的側面とその未来」(彩流社)
そのほか、インターネットで情報検索することを推奨。

成績評価

課題に取り組む積極性と出席状況。授業中の作業をもとにしたレポートを提出。

科目名 芸術文化講座A (日本国憲法)

対象 全専攻1・2年

履修条件

特になし。教職課程受講者は必修。

授業の概要

法は普段なかなか目に見えないが、私たちの家族や職場などの日常生活に様々なかわりを持っている。例えば欲しい服を買ったり、住むアパートを借りたりするのは民事法に規定があるし、犯罪やその裁判には刑事法が関係している。職業に就けば労働法が適用される。これらの法と比較するとき、「憲法」の存在を日々の暮らしの中で直接感じ取る機会は少ないかもしれない。しかし実際には、私たちが国家権力から不当な制約を受けず自由であることや、国政に参加する民主主義原理、憲法9条と自衛隊の問題といった重要なテーマを扱うのは憲法学である。ゆえに日本国憲法を学ぶことは日本国民として大切である。この授業では、憲法が保障する国民の自由や人権、そして国会・内閣・裁判所に関する基本的な知識を一通り習得することを目的とする。授業の形式は、判例などの具体例や資料を用いながら、それぞれの規定の意義や論点を解説する形でおこなう。

授業の到達目標

- ①社会生活を送る上で知っておくべき日本国憲法に関する基礎的なレベルの知識を身につける。
- ②日本国憲法の構造を体系的に把握して、人権の意義や統治機構の役割を理解する。

授業計画

- 1 ガイダンス—法とは何か、憲法とは何か
- 2 国民主権と天皇制
- 3 戦争放棄と平和主義
- 4 人権総論—基本的人権の歴史、種類、主体、限界
- 5 包括的基本権—幸福追求権、法の下での平等
- 6 精神的自由権(1)—思想良心の自由、信教の自由、
- 7 精神的自由権(2)—学問の自由、表現の自由

期間 後期

担当教員 山田 亮介

- 8 経済的自由権—職業選択の自由、居住移転の自由、財産権
- 9 人身の自由・国務請求権・参政権
- 10 社会権—生存権、教育を受ける権利、勤労の権利、労働基本権
- 11 統治機構(1)—国会
- 12 統治機構(2)—内閣
- 13 統治機構(3)—裁判所
- 14 財政・地方自治・憲法保障
- 15 授業内テスト
※授業の進み具合や時間の都合で、講義内容は多少前後することがある。

授業時間外の学習

教科書で次回講義予定の箇所を予め読んでくること。講義が終わったら、その都度配布したプリントやノートを整理すること。

教科書・参考書等

教科書：大矢吉之、奥村文男 編『スタンダード 法学・憲法 [第2版]』(法律文化社)
参考書：その他の必要な教材は、授業中に適宜指定・配布する。

成績評価

評価はおおよそ期末試験7割、平常点(出席や小テスト)3割によっておこなう。
A評価(80点以上)：授業へ真面目に出席した。日本国憲法の基本的な知識を十分に理解している。
B評価(60点以上)：授業へよく出席した。日本国憲法の基本的な知識を一通り理解している。
C評価(50点以上)：授業へ出席した。日本国憲法について学習したことが認められる。
D評価(49点以下)：授業を多く欠席した。ほとんど学習成果を認めることができない。

科目名 芸術文化講座B (異文化理解)

対象 全専攻1・2年

履修条件

意欲的積極的であることが望ましい。

授業の概要

イタリアの風土・自然・町並・建築・音楽・料理・文化などを題材として、自分たちとは異なる見方や生き方についてどのように接していくかを研究する。

ドイツの文豪ゲーテがイタリア各地を訪れ、その印象を『イタリア紀行』にまとめている。この作品をてがかりにして、ドイツ人の目にはイタリアがどのように映ったか、また、それに対してどのように接したかを学ぶ。

映像や絵画などを観賞しながら、ゲーテと同じようなものを体験して、各自の見方や感じ方がどう異なるか、あるいは変わらないかを探る。その背景となるドイツにも目を向ける。

授業では学生も意見や感想などを述べ、話し合いを中心に進めていく。

授業の到達目標

1. イタリアについて理解を深める。
2. ゲーテについて理解を深める。
3. ものの見方の多様性を知る。
4. 異文化との接し方を身につける。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 田園地帯
3. リモーネ、ヴェローナ
4. ヴェネツィア (1)
5. ヴェネツィア (2)
6. ポローニャ、アッシジ
7. ローマ (1)
8. ローマ (2)

期 間 後期

担当教員 坂田 博

9. ナポリ (1)
10. ナポリ (2)
11. ナポリからパレルモまで
12. パレルモ (1)
13. パレルモ (2)
14. 旅行の総括
15. まとめ

授業時間外の学習

テレビの旅行番組の視聴、イタリアの音楽・絵画・文学の観賞、イタリア料理の飲食など。

教科書・参考書等

教科書は使用しない。授業時にプリントを配付する。

参考書には次のようなものがある。ゲーテ著『イタリア紀行』岩波文庫、ディケンズ著『イタリアのおもかげ』岩波文庫、牧野宣彦著『ゲーテ「イタリア紀行」を旅する』集英社新書、イタリア旅行ガイドブック各種。

成績評価

観点を次の5つとする。①授業への出席、②授業中の意見や感想の発表、③イタリアおよびゲーテの理解、④レポートの研究内容、⑤異なる文化に対する接し方。

- A 5つの観点のうち、いずれも目標に到達している。
- B 5つの観点のうち、①を含む4つの観点において目標に到達している。
- C 5つの観点のうち、①を含む3つの観点において目標に到達している。
- D 5つの観点のうち、①を含む2つの観点において目標に到達している。

科目名 芸術文化講座C (現代の福祉)

対象 全専攻1・2年

履修条件

特になし。教職課程受講者は必修。

授業の概要

21世紀の日本における社会福祉は、「社会福祉基礎構造改革」以降、その制度施策も含めて大きな変革の渦中にある。

本講義においては、上記のような現状を踏まえつつ、現代に至る戦後日本社会における社会福祉の歴史的背景や思想等を学んでいきたい。

また、教職課程における施設実習に取り組む際に必要な社会福祉援助技術についても合わせて学んでいくとともに、いわゆる「対人援助」に対する心構え等についても理解を深めていく機会としたい。

授業の到達目標

1. 社会福祉全般に対する基本的理解
2. 「対人援助」の現場における、援助者の基本的な心構えの理解
3. 社会福祉の学びを通じた、新たな視点の獲得

授業計画

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 現代日本における社会福祉の定義
- 第3講 「介護」の概念
- 第4講 ノーマライゼーションの思想
- 第5講 「共生」の思想
- 第6講 社会保障制度の基本的理解①
～社会保障制度における社会福祉の位置づけについて～

期 間 前期

担当教員 藤森 雄介

- 第7講 社会保障制度の基本的理解②
～近代イギリス社会と救貧法について～
- 第8講 社会保障制度の基本的理解③
～20世紀のイギリスと福祉国家について～
- 第9講 社会福祉制度の成立過程①～昭和20年代～
- 第10講 社会福祉制度の成立過程②～昭和30年代～
- 第11講 社会福祉制度の成立過程③～昭和40年代～
- 第12講 社会福祉制度の成立過程④～昭和50年代～
- 第13講 社会福祉制度の成立過程⑤～平成年代～
- 第14講 社会福祉制度の成立過程⑥～21世紀の方向性～
- 第15講 社会福祉援助技術の体系と「対人援助」の基本

授業時間外の学習

本科目は、予習よりは復習を重視している。第2講以降の受講日前日には前回の講義内容の振り返りを行った上で、翌日の講義に臨んでほしい。また、いわゆる「社会福祉」は実学であり現代社会の動向とは不可分な学問である。日頃から、政治や経済の動向にも関心を持っておくことが必要である。

教科書・参考書等

教科書は特に定めない。必要に応じて、プリントを配布する。また、講義中に参考文献を適時紹介していく。

成績評価

原則として、期末に行う筆記試験の得点をもとに評価を行う。

- A → 100点～90点
- B → 89点～70点
- C → 69点～60点
- D → 60点以下

科目名 芸術文化講座D (日本語論)

対象 全専攻1・2年

履修条件

なし。

授業の概要

この科目は、言語学のうち、発音等をあつかう「音声学」と、それを支える「音韻論」を学ぶものである。日本語の音声に焦点をあてるが、それと同時に、他の外国語の音声とも対照させて観察することも行う。まず、日本語の発音を、音韻という観点から歴史的にみていこう。普段、意識せずに使っている日本語のはなしことばと発音を、意識することから始める。

さらに、発音を構成している母音や子音など、音声のしくみと、どのように発生し、発音を作っているのかという身体の仕組みと、発音の仕組みを学ぶ。基礎的な音声の本を自分で勉強することができるよう、専門用語も学んでいく。また、日本語の特徴である、意味の区別に貢献している「高さ」と「時間的長さ」を客観的に観察し、音声分析ソフトによる観察を試みる。

授業の到達目標

- ・言語学的観点から、音声の仕組みを知る。
- ・発音の仕組みとコントロールの方法を知る。
- ・音声の専門書を読むことができるようになる。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 音韻：日本語の音韻における時代区分と上代特殊仮名遣い、ハ行転呼音など
3. 音韻：連濁、連声、万葉集と日本語の発音

期間 前期

担当教員 王 伸子

4. 音韻：四つ仮名、キリシタン文献、活写語と発音
5. 音韻／音声 拍と音節
6. 口腔の仕組みと発音
7. 子音の仕組み、調音点・調音法
8. 国際音声記号
9. 母音の特徴
10. 音素
11. アクセント
12. イントネーション
13. プロミネンス
14. 母音の無声化
15. まとめ

授業時間外の学習

毎回、授業の最初に前回のまとめと小テストをおこなう。必ず復習をしていくこと。

教科書・参考書等

プリントを使用する。参考書は、参考文献リストにより、提示する。

成績評価

小テストおよび平常点の成績30%、期末試験成績70%により、算出する。

また、欠席が全体の三分の一を超えた者には、単位は認定しない。欠席すると内容が分からなくなるため、きちんと出席することを心がけること。

科目名 英語A I

対象 全専攻1年

履修条件

「英語A II」(後期)とあわせて受講すること。

授業の概要

この講義では、中学と高校で習得する英文法の再確認を行うと同時に、基本的な語彙や語法にも目を向けていく。体系的に英文法を学習するべく、各講義内容をクロス・レファレンスできるように配慮するが、そのためには当然十分な理解を必要とするため、ひとつひとつの講義内容を確実にマスターしてもらう。

基本的には、演習形式で進めていく。まず、例文とともに文法項目の確認をし、その後、問題を解いて演習することを通して学習を進める。

最終的に、生涯を通して英語を学ぶことの重要性を認識すること、いわば「気づき」を得ることを目標とする。

授業の到達目標

英語を生涯学習していくための土台(基本的な文法や語彙)を築く。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 be動詞
- 3 一般動詞(現在)
- 4 一般動詞(過去)
- 5 進行形
- 6 未来形
- 7 現在完了形

期間 前期

担当教員 中村 達

- 8 助動詞
- 9 名詞・冠詞
- 10 代名詞
- 11 前置詞
- 12 形容詞・副詞
- 13 比較
- 14 まとめ
- 15 総復習

授業時間外の学習

毎回講義の冒頭で単元確認小テストを行うので、履修者は予習と復習(特に復習)をすること。

教科書・参考書等

Tetsuzo, Sato, et al. First Primer (Nan'un-do).
参考資料などは必要に応じて授業内で配布する。

成績評価

担当教員の評価(10%)、小テスト成績(20%)、期末試験成績(70%)によって評価。

担当教員の評価：出席状況、予習復習の状況、授業参加の積極性を評価。

- A. 総合点が80点以上の者(授業内容を十分に理解している)
- B. 総合点が60点以上の者(授業内容をほぼ理解している)
- C. 総合点が50点以上の者(授業内容をある程度理解している)
- D. 総合点が49点以下の者(授業内容の理解が欠けている)

科目名 英語 A II

対象 全専攻1年

履修条件

「英語 A I」(前期)とあわせて受講すること。

授業の概要

この講義では、中学と高校で習得する英文法の再確認を行うと同時に、基本的な語彙や語法にも目を向けていく。体系的に英文法を学習するべく、各講義内容をクロス・レファレンスできるように配慮するが、そのためには当然十分な理解を必要とするため、ひとつひとつの講義内容を確実にマスターしてもらう。

基本的には、演習形式で進めていく。まず、例文とともに文法項目の確認をし、その後、問題を解いて演習することを通して学習を進める。

最終的に、生涯を通して英語を学ぶことの重要性を認識すること、いわば「気づき」を得ることを目標とする。

授業の到達目標

英語を生涯学習していくための土台(基本的な文法や語彙)を築く。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 命令文・感嘆文
- 3 接続詞(I)
- 4 不定詞(I)・動名詞(I)
- 5 受動態
- 6 接続詞(II)
- 7 5つの基本文型

期 間 後期

担当教員 中村 達

- 8 各種疑問文
- 9 不定詞(II)
- 10 Itの特別用法
- 11 分詞・動名詞(II)
- 12 関係代名詞
- 13 まとめ(I)
- 14 まとめ(II)
- 15 総復習

授業時間外の学習

毎回講義の冒頭で単元確認小テストを行うので、履修者は予習と復習(特に復習)をすること。

教科書・参考書等

Tetsuzo, Sato, et al. First Primer (Nan'un-do).
参考資料などは必要に応じて授業内で配布する。

成績評価

担当教員の評価(10%)、小テスト成績(20%)、期末試験成績(70%)によって評価。

担当教員の評価:出席状況、予習復習の状況、授業参加の積極性を評価。

- A. 総合点が80点以上の者(授業内容を十分に理解している)
- B. 総合点が60点以上の者(授業内容をほぼ理解している)
- C. 総合点が50点以上の者(授業内容をある程度理解している)
- D. 総合点が49点以下の者(授業内容の理解が欠けている)

科目名 英語 B I

対象 全専攻2年

履修条件

「英語 B II」(後期)とあわせて受講すること。

授業の概要

この講義では、日常の身近なトピックを扱ったまとまりのある英文(200語程度)の読解を通して基本的な語彙や文法事項を確認すると同時に、4技能のうち、最近軽視されがちな「読む」能力を特に養う。

授業はテキストに語彙、内容理解、語法、文法を確認する問題が用意されているので、読解と演習という形式で進めていく。また、音読の練習が授業内でも求められる。

この授業が、英語の文章(英字新聞、洋書等)に慣れる場となり、最終的には多読や読書習慣へのきっかけをつかむことを目標とする。

授業の到達目標

精読、速読、音読を通して基本的な文法事項や語彙に関する知識を習得し、英文に慣れる。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 The End of Newspapers?
- 3 The Hero of the Hudson
- 4 E-mail: Online Shopping
- 5 The Homeless Man with a Golden Voice – Part 1
- 6 The Homeless Man with a Golden Voice – Part 2
- 7 Exhibit Preview

期 間 前期

担当教員 中村 達

- 8 Improving Memory
- 9 The Brownings: A Poetic Love Story
- 10 Invitation to a Party
- 11 The Prince of Poyais – Part 1
- 12 The Prince of Poyais – Part 2
- 13 Superheroes in the Real World
- 14 まとめ
- 15 総復習

授業時間外の学習

音読に努めること。毎回講義の冒頭で単元確認小テストを行うので、履修者は予習と復習(特に復習)をすること。

教科書・参考書等

Bennett, Andrew E., et al. Quick-Step English (Nan'un-do).
参考資料などは必要に応じて授業内で配布する。

成績評価

担当教員の評価(10%)、小テスト成績(20%)、期末試験成績(70%)によって評価。

担当教員の評価:出席状況、予習復習の状況、授業参加の積極性を評価。

- A. 総合点が80点以上の者(授業内容を十分に理解している)
- B. 総合点が60点以上の者(授業内容をほぼ理解している)
- C. 総合点が50点以上の者(授業内容をある程度理解している)
- D. 総合点が49点以下の者(授業内容の理解が欠けている)

科目名 英語B II

対象 全専攻2年

履修条件

「英語B I」(前期)とあわせて受講すること。

授業の概要

この講義では、日常の身近なトピックを扱ったまとまりのある英文(200語程度)の読解を通して基本的な語彙や文法事項を確認すると同時に、4技能のうち、最近軽視されがちな「読む」能力を特に養う。

授業はテキストに語彙、内容理解、語法、文法を確認する問題が用意されているので、読解と演習という形式で進めていく。また、音読の練習が授業内でも求められる。

この授業が、英語の文章(英字新聞、洋書等)に慣れる場となり、最終的には多読や読書習慣へのきっかけをつかむことを目標とする。

授業の到達目標

精読、速読、音読を通して基本的な文法事項や語彙に関する知識を習得し、英文に慣れる。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 Thank You Note
- 3 Human-Powered Machines
- 4 Twitter
- 5 Twitter Feed
- 6 Okamoto Taro: The Artist among Us
- 7 Jazz Club Review

期 間 後期

担当教員 中村 達

- 8 Survival on the Ice – Part 1
- 9 Survival on the Ice – Part 2
- 10 Wanted: Homestay Hosts
- 11 Garbage at Sea
- 12 Blog Post
- 13 Who was Cleopatra?
- 14 まとめ
- 15 総復習

授業時間外の学習

音読に努めること。毎回講義の冒頭で単元確認小テストを行うので、履修者は予習と復習(特に復習)をすること。

教科書・参考書等

Bennett, Andrew E., et al. Quick-Step English (Nan'un-do).
参考資料などは必要に応じて授業内で配布する。

成績評価

担当教員の評価(10%)、小テスト成績(20%)、期末試験成績(70%)によって評価。

担当教員の評価:出席状況、予習復習の状況、授業参加の積極性を評価。

- A. 総合点が80点以上の者(授業内容を十分に理解している)
- B. 総合点が60点以上の者(授業内容をほぼ理解している)
- C. 総合点が50点以上の者(授業内容をある程度理解している)
- D. 総合点が49点以下の者(授業内容の理解が欠けている)

科目名 英語C①②

対象 全専攻1年

履修条件

なし。

授業の概要

基礎的英文法を確認しながらBernard Sladeの戯曲Same Time Next Yearを読む。この戯曲は1975年にニューヨークで初演され、それから1978年までに1453回のロングランを達成し、映画にもなった作品である。内容はそれぞれ家庭のある男女が、年に一度、同じ場所で密会をするという二人芝居である。設定は単純ではあるが、その背景は1951年から1975年までの25年間に及び、各場面の時代とともに登場人物の心理的变化を読み解く必要が生じる。このため、履修者は予習に時間を要することもあるだろう。

授業では担当を決め、輪番でテキスト訳を発表し理解度を確認する。さらに戯曲を使った発話練習を考えている。

授業の到達目標

英語で書かれた戯曲を正確に読み取れるようにする。

授業計画

- 1回目:ガイダンス。作品の概要、背景等の説明。
- 2回目:テキストpp.6-9
- 3回目:pp.10-14
- 4回目:pp.15-18

期 間 後期

担当教員 田村 奈穂子

- 5回目:pp.19-22
- 6回目:pp.23-26
- 7回目:pp.27-30
- 8回目:pp.31-34
- 9回目:pp.35-38
- 10回目:pp.39-42
- 11回目:pp.43-46
- 12回目:pp.47-50
- 13回目:pp.51-54
- 14回目:教場試験。
- 15回目:テキストの総括。

授業時間外の学習

担当者は和訳と登場人物の心理・時代背景を説明できるように準備すること。他の履修者も積極的な授業参加のためには十分な予習が必要。

教科書・参考書等

教材は授業時にプリントを配布する。

成績評価

期末試験60%、授業への参加態度40%を総合的に評価する。

- A. 総合点が80点以上の者(戯曲を十分に理解できている)
- B. 総合点が60点以上の者(戯曲を概略で理解できている)
- C. 総合点が50点以上の者(戯曲を半分ほど理解できていない)
- D. 総合点が49点以下の者(戯曲を理解できていない部分が多い)

科目名 演劇英語①②

期 間 前期

対 象 全専攻 1 年

担当教員 Chris Parham

● 履修条件

なし。

● 授業の概要

The English through Drama course is designed to introduce the students to a number of drama practices to assist them in performing in one English performance.

● 授業の到達目標

To teach students how to approach and perform one English short play.
To give students the confidence to perform in English.

● 授業計画

- 1 Introduction
- 2 Activities: Games I
- 3 Activities: Image series
- 4 Activities: Blind series
- 5 Activities: Mirror series
- 6 Activities: Sculpture series
- 7 Activities: Games II
- 8 Casting & Reading Plays

- 9 Analyzing Character
- 10 Applying Actions
- 11 Basic Blocking
- 12 Character Work
- 13 Character Work
- 14 Final Rehearsal
- 15 Performance & Feedback

● 授業時間外の学習

Students are required to prepare and review each lesson.

● 教科書・参考書等

The work is based on the practices of Konstantin Stanislavski, yet no set text is used in class.

● 成績評価

Grades are determined by attendance, participation & enthusiasm in class & skill in final performance.
A-Excellent Student, Pass
B-Good Student, Pass
C-Satisfactory Student, Pass
D-Poor Student, Fail

Toho Gakuen College of Drama and Music

共通科目

科目名 ドイツ語Ⅲ

対象 全専攻2年

履修条件

「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ」を既に修得した者。

授業の概要

発音や読解力の訓練をロールプレイ形式で進めて行く。又ロールプレイだけでなくテキストやCDを使用し、リスニングトレーニングも行う。その他にもピクチャーワークシートなどを使用し、めりはりのある授業にしていきたい。

授業の到達目標

一年目で身につけた基礎から、さらに流暢な発音が出来ようになること。リスニング能力、コミュニケーション能力の向上。

授業計画

- 第1回 復習
- 第2回 3格、4格（だれに／何を～）
- 第3回～5回 どこで（3格）どこへ（4格）地図を使用
- 第5回 主文と副文（何故～ warum／～なので weil）
- 第6回 ロールプレイ（内容5回目のレッスン）
- 第7回 接続詞と副文（～にもかかわらず obwohl／～なので weil）
- 第8回 接続詞と副文（～するとき wenn）

期 間 前期

担当教員 Daniel Gross

- 第9回 esの使い方
- 第10回 dassの使い方
- 第11回 ロールプレイ
- 第12回 コミュニケーションプラクティス
- 第13回 従属の接続詞と副文
- 第14回 復習
- 第15回 ファイナルテスト

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。
予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

1年目と同じ「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%～80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%～60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%～40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 ドイツ語Ⅳ

対象 全専攻2年

履修条件

「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

前期同様のスタイルで進めていく。またこれらの身に付けた能力をベースにドイツ語文化やドイツ社会の習慣等を学生と共に話し合い、ディスカッションしながら授業を進め、更に実用的なドイツ語へと近づけていく。

授業の到達目標

ドイツ語で自信を持って自己表現し、実用的に使えるようになること。

授業計画

- 第1回 復習
- 第2回～第3回 話法の助動詞
- 第4回 分離助詞
- 第5回 zu不定詞
- 第6回 現在完了形
- 第7回 現在完了形のプラクティス
- 第8回 再帰代名詞と再帰動詞

期 間 後期

担当教員 Daniel Gross

- 第9回 楽器、音楽関係
- 第10回 比較級、最上級
- 第11回 関係文の作り方
- 第12回～第13回 過去形
- 第14回 復習
- 第15回 ファイナルテスト

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。
予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

1年目と同じ「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%～80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%～60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%～40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 フランス語Ⅲ

対象 全専攻2年

履修条件

「フランス語Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。
フランス語を勉強したことがある方。

授業の概要

フランス語の基本会話と日常会話で便利な表現から、知識を深めて、もっと豊かな表現ができるように。

本の名前どおり(Spirale=らせん)前に勉強した内容を復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識を身につけることができる。各レッスンに発音の練習は必ず行う。

授業の到達目標

聞き取り、書き取り、そして、自己表現ができるようになることを目的とする。

授業計画

- Unité 3, Leçon 7: 自分について話す・年齢を言う・科目について話す・数字(～59)・曜日
- Unité 3, Leçon 7: 時間の使い方または時間割について話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 3, Leçon 8: 待っているものについて話す・所有をあらわす
- Unité 3, Leçon 8: 物を借りる、あやまる・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 3, Leçon 9: 場所について話す・場所について情報を求める
- Unité 3, Leçon 9: 場所についてたずねる、位置づける・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 4, Leçon 10: 何をするかをたずねる・答える

期間 前期

担当教員 野坂・スタンフリ・マガリ

- Unité 4, Leçon 10: 余暇の過ごし方をきく・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 4, Leçon 11: 趣味・余暇の過ごし方について話す、回数を示す
- Unité 4, Leçon 11: 習慣について話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 4, Leçon 12: 家族について話す
- Unité 4, Leçon 12: 過去の出来事について話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 5, Leçon 13: どこに行くかをたずねる・答える、時間をたずねる・答える
- Unité 5, Leçon 13: どこに行くかを詳しく話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回、出された宿題を授業前にその準備を必ずすること。
また、授業中に毎回、参加すること。

教科書・参考書等

Spirale (スパイラル) Hachette Français Langue étrangère, Pearson Education Japan

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 フランス語Ⅳ

対象 全専攻2年

履修条件

「フランス語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修し、単位を修得していること。
フランス語を勉強したことがある方。

授業の概要

フランス語の基本会話と日常会話で便利な表現から、知識を深めて、もっと豊かな表現ができるように。

本の名前どおり(Spirale=らせん)前に勉強した内容を復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識を身につけることができる。各レッスンに発音の練習は必ず行う。

授業の到達目標

聞き取り、書き取り、そして、自己表現ができるようになることを目的とする。

授業計画

- Unité 5, Leçon 14: できることとするべきことを言う、人を誘う
- Unité 5, Leçon 14: 誘いを受ける、断る・会う約束をする・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 5, Leçon 15: よく行く場所について話す・時期、日付を言う
- Unité 5, Leçon 15: 目的を言う・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 6, Leçon 16: 日常の習慣について話す・驚いてたずねる
- Unité 6, Leçon 16: 出来事を順番に話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 6, Leçon 17: 交通手段についてたずねる、起点と目的地を言う

期間 後期

担当教員 野坂・スタンフリ・マガリ

- Unité 6, Leçon 17: 交通手段発着の情報をたずねる・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 6, Leçon 18: 適当な交通手段と、移動にかかる時間についてたずねる
- Unité 6, Leçon 18: 道順を説明する・予約をする・支払う・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 7, Leçon 19: 近い未来の計画を話す、どんな天気になるかを話す
- Unité 7, Leçon 19: 天気の仮定をする・助言を求める・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- Unité 7, Leçon 20: 食生活について話す、必要なものの説明をする、値段を聞く
- Unité 7, Leçon 20: 注文する、助言を求める(2)・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
- 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回、出された宿題を授業前にその準備を必ずすること。
また、授業中に毎回、参加すること。

教科書・参考書等

Spirale (スパイラル) Hachette Français Langue étrangère, Pearson Education Japan

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 イタリア語 Ⅲ

対 象 全専攻2年

履修条件

「イタリア語Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

授業計画

1. ガイダンス、既習事項の確認
2. 現在形を用いての基本的な作文&会話練習(1)
3. 現在形を用いての基本的な作文&会話練習(2)
4. 近過去形を用いての基本的な作文&会話練習(1)
5. 近過去形を用いての基本的な作文&会話練習(2)
6. 再帰動詞の用法(現在形)
7. 再帰動詞の相互的用法(現在形)

期 間 前期

担当教員 Sbaragli Marco

8. 再帰動詞(近過去形)
9. avereを用いた文章
10. essereを用いた文章
11. 直接目的語代名詞の使い方
12. 近過去の文章における直接目的語代名詞の使い方
13. 半過去形の用法(1)
14. 半過去形の用法(2)
15. まとめ

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。
予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)
「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著(白水社)

成績評価

授業態度30% 出席状況30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断) 40% で100点換算
A およそ80点以上
B およそ60点以上
C およそ50点以上
D 49点以下

科目名 イタリア語 Ⅳ

対 象 全専攻2年

履修条件

「イタリア語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

授業計画

1. 近過去形と半過去形を用いた基本的な作文&会話練習(1)
2. 近過去形と半過去形を用いた基本的な作文&会話練習(2)
3. 近過去形と半過去形を用いた基本的な作文&会話練習(3)
4. 現在→近過去→半過去 総復習
5. 未来形の用法(1)
6. 未来形の用法(2)
7. 未来形と現在形を用いた基本的な作文&会話練習

期 間 後期

担当教員 Sbaragli Marco

8. 動詞piacere 他
9. 直接目的語代名詞
10. 間接目的語代名詞
11. 間接目的語代名詞の用法(1)
12. 間接目的語代名詞の用法(2)
13. 間接目的語代名詞と直接目的語代名詞の複合形
14. 総まとめ(1)
15. 総まとめ(2)

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。
予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)
「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著(白水社)

成績評価

授業態度30% 出席状況30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断) 40% で100点換算
A およそ80点以上
B およそ60点以上
C およそ50点以上
D 49点以下

科目名 コンピュータ演習 [制作] I

対象 全専攻2年

履修条件

「コンピュータ演習 [基礎] I・II」を受講し、単位を修得した者が望ましい。

各自ノートPCを用意すること (Windows、Macは問わない)。無線LANが使用可能であり、Windowsの場合、最新のウイルス対策ソフトが稼働していること。

授業の概要

インターネットの普及によりメディアの多様化が進み従来の宣伝広告手法でないメディアミックスの手法やソーシャルメディアを利用した宣伝広告手法を行う必要が出てきている。各メディアの特徴を理解し、プロモーションの企画から実際の制作までを、ITリテラシーや著作権、マーケティング手法、心理学などの知識を交えながら学ぶ。

授業の到達目標

宣伝広告マーケティングやの企画立案の基本的な知識を習得する。

ITリテラシーや著作権の基本的知識を理解し作品制作を行える。

印刷の知識やWEBの基本的な知識を理解し制作物を制作出来る。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 メディアミックス時代の宣伝広告とITリテラシー (講義)
- 3 フライヤーの制作1 (レイアウトの基本)
- 4 フライヤーの制作2 (画像処理)

期間 前期

担当教員 竹内 聖

- 5 フライヤーの制作3 (デザイン案の制作と課題制作)
 - 6 フライヤーの制作4 (作品講評)
 - 7 デザイン宣伝企画立案とマーケティング
 - 8 パンフレットの制作1 (ページ物制作の基本知識)
 - 9 パンフレットの制作2 (デザイン案の制作と課題制作)
 - 10 パンフレットの制作3 (課題制作)
 - 11 パンフレットの制作4 (課題制作)
 - 12 パンフレットの制作5 (作品講評)
 - 13 Webディレクション (サイト設計とサイト制作)
 - 14 サイトの制作1 (サイト制作ツールAの基本操作)
 - 15 サイトの制作2 (サイト制作ツールBの基本操作)
- 夏休みサイト制作課題説明

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、授業内容の復習となる宿題を出すので、提出物のある場合は、次回の授業開始前に提出すること。内容によっては小テストを行う場合もあるので、しっかりと理解しておくこと。

教科書・参考書等

テキスト、資料を授業内で配布。参考図書なども授業内で案内します。

成績評価

出席・実習への取り組みと態度50%、課題提出50%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 コンピュータ演習 [制作] II

対象 全専攻2年

履修条件

「コンピュータ演習 [制作] I」を受講し、単位を修得した者。また、「コンピュータ演習 [基礎] I・II」を受講し、単位を修得した者が望ましい。

各自ノートPCを用意すること (Windows、Macは問わない)。無線LANが使用可能であり、Windowsの場合、最新のウイルス対策ソフトが稼働していること。

授業の概要

前期で学んだ各メディア毎の制作物を総合的に組み合わせた宣伝企画制作手法を学ぶと同時にソーシャルメディア。動画配信など最新のIT技術やサービスをどのように組み合わせ、それらを実際の現場に活かしていくかを制作の技術を学びながら学習していく。

授業の到達目標

ソーシャルメディアや動画配信など最新の技術やサービスの基礎知識と利用法を身につける。

制作というジャンルの中で宣伝広告の果たす役割や技術知識を総合的に身につける。

実際の公演の宣伝広告企画立案から各制作物の制作や運用管理などをグループワークで行う。

授業計画

- 1 授業ガイダンス。夏休み課題講評会
- 2 ソーシャルメディアと最新のITサービス (講義)
- 3 サイトの制作1 (ソーシャルメディア、ITサービスとの融合)

期間 後期

担当教員 竹内 聖

- 4 サイトの制作2 (サイト設計と課題制作)
- 5 サイトの制作3 (サイト制作)
- 6 サイトの制作4 (作品講評)
- 7 プレゼンテーションスキル (講義)
- 8 宣伝広告総合企画立案1 (グループワーク)
- 9 宣伝広告総合制作1 (企画発表・講評)
- 10 宣伝広告総合制作2 (メインビジュアル・コンセプト作り)
- 11 宣伝広告総合制作3 (役割分担とデザイン案の制作)
- 12 宣伝広告総合制作4 (デザイン案の発表)
- 13 宣伝広告総合制作5 (実制作指導)
- 14 宣伝広告総合制作6 (制作発表)
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、授業内容の復習となる宿題を出すので、提出物のある場合は、次回の授業開始前に提出すること。内容によっては小テストを行う場合もあるので、しっかりと理解しておくこと。

教科書・参考書等

テキスト、資料を授業内で配布。参考図書なども授業内で案内します。

成績評価

出席・実習への取り組みと態度50%、課題提出50%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 狂言Ⅱ①②③

期 間 前期

対 象 全専攻2年

担当教員 善竹 十郎

履修条件

「狂言Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。
音楽専攻日本音楽専修は必修。

授業の概要

- ・腹式呼吸でしっかり声を出す訓練から始まる。
- ・狂言の謡を謡い、身体を動かす訓練の舞を舞う。
- ・狂言「附子」または「呼声」を実習する。
- ・三次元の空間に自分の体がどのようにあるべきか演劇の基本が感得できるだろう。

授業の到達目標

大きな声を出すこと。
まっすぐ前を向いて（下、横を見ずに）摺り足で前に進み元の位置に正しく戻ることができること。
「左右」の完成。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
1年後期からの復習「盃」「泰山府君」「土車」の謡
- 第2回 「雪山」の謡 「土車」の舞の復習
- 第3回 「雪山」の謡 「土車」の舞の復習 「雪山」の舞①
- 第4回 「十七八」の謡 「雪山」の謡の復習 「雪山」の舞②

- 第5回 「十七八」の謡の復習 「雪山」の舞③
「雪山」の謡の復習
- 第6回 「宇治の晒」の謡① 「雪山」の舞試験
- 第7回 「宇治の晒」の謡② 「十七八」の舞①
- 第8回 狂言「呼声」の詞①=本読み① 「十七八」の舞②
- 第9回 狂言「呼声」の詞② 「宇治の晒」の謡③
「十七八」の舞③
- 第10回 狂言「呼声」の詞③ 「暁の明星」の謡①
「十七八」の試験
- 第11回 狂言「呼声」の立ち稽古① 「暁の明星」の謡②
- 第12回 狂言「呼声」の立ち稽古② 「暁の明星」の舞①
- 第13回 狂言「呼声」の立ち稽古③ 「暁の明星」の舞②
- 第14回 狂言「呼声」の立ち稽古④ 「暁の明星」の舞③
- 第15回 「暁の明星」試験

授業時間外の学習

授業内容をふまえ、自主稽古を行うこと。

教科書・参考書等

「狂言」ガイドブック（三省堂）

成績評価

- 出席点と実技。
- A 出席点90%以上 実技点80点以上
 - B 出席点70%以上 実技点65点以上
 - C 出席点50%以上 実技点50点以上
 - D 出席点49%以下 実技点49点以下

科目名 日本舞踊Ⅱ①②③

期 間 前期

対 象 全専攻2年

担当教員 藤間 希穂

履修条件

前年度に「日本舞踊Ⅰ」を履修し、単位を取得していること。

授業の概要

- 「座学」と「実技」の二部構成
- ・座学では日本舞踊Ⅰにて学んだ表現者の心得（品性・健康・コミュニケーション能力・美意識）を基にさらにパーソナルブランディング構築を意識したプロとしての素養を身に付ける。
- ・実技では、座学で学ぶロジックに加え、古典芸能を通じて表現者に必要な所作を学ぶ。

【曲目】

清元「青海波」 長唄「あやめ浴衣」 常磐津「紅壳」 いずれか一曲を課題曲とする。

授業の到達目標

- ・表現者に必要な礼儀作法を実施できる。
- ・プロとしてのパーソナルブランドを個々に構築できる。
- ・美意識を向上し、自らを売りだす長所を伸ばすことができる。
- ・古典芸能を通じ自国の文化を体得し表現者としてのスキルを上げることができる。

授業計画

	【座学】	【実技】
第一テーマ	表現者に必要な礼儀作法 日常的な礼儀から業界特有の礼儀を学び体得する。	課題曲の習得 ・音がとれる ・振りが入る ・向き・方向・振りと振りの導線 ・情景描写と心理描写
第二テーマ	パーソナルブランディングの構築 「価値を生む」で学んだことを活かし卒業後個々の目指すステージへ立つための自らの売り方を構築する。	実技発表会向けのフォーメーション作成
	・理解度を深め実践に結ぶための筆記テストあり。 ・コミュニケーションシートの記入により担当講師からの個別指導あり。	実技発表会にて実技テストあり
	※授業タイムスケジュール及び進行表は初回授業時に各自に配布する。	

授業時間外の学習

前回の講義内容の復習。

教科書・参考書等

- ・授業時に配布。 ・必ず和服を着用すること。

成績評価

- ・筆記試験・出席日数・実技テスト・授業態度・コミュニケーションを総合100点にて評価。
- A 100～90点 B 90～85点
- C 85～70点 D 69点以下
- ※値は絶対数ではなく総体数のため変化する場合あり。

科目名 マイムⅡ①②③

対象 全専攻2年

履修条件

「マイムI」を履修し、単位を修得していること。
稽古着着用のこと。

授業の概要

脳の場所で、想像（創造）性や空間性を司る右脳の働きを利用して、想像（創造）の力で、集中力をつけていく。さらにその集中力を深化させることで、動きの中から自己の内に眠っている才能を目覚めさせ、なおかつプラス思考で、より良く生きるクセをつける。そのことにより、表現力豊かで明るく自分らしい生き方を見つけ出し、人間関係におけるコミュニケーションを円滑にして、社会の中で生き生きと楽しんで生きる方法を、パントマイムの訓練である「変身の原理」を通して学んでいく。

授業の到達目標

頭で考えたこと、心で思ったことを言葉を使わなくても表現できる方法と精神力を身につけること。

期間 前期

担当教員 服部 宣子

授業計画

- ・想像したとおりに自分の身体を動かす練習（イメージを創る）
- ・発想の転換をする練習（プラス思考の持ち方）
- ・宇宙すべてのものを模倣する練習（感性を磨く）
- ・考えを徹底的に1つのことにしぼり込む練習（集中力の深化）
- ・グループで遊びを創作したり表現したりする練習（協調性を養う）
- ・自由な発想と動きの中から個性の開発をする練習（才能に気づく）
- ・お話を創り、それを演じる練習（創作）
- ・心の状態を言葉や、ダンスの動きを使わなくても表現でき、それを人に伝えられるような心の動きの開発をしていく練習（人とのコミュニケーション）
- ・生活の中にあるものを、体が代わって表現する練習（見えないはずのものが見えてくる）
- ・瞬間にどんなものでも状態でも表現できる柔軟な心と体を作る練習（変身の原理）
- ・自然な動きの練習（自然体の発見）

授業時間外の学習

公開試験の準備中は各グループが責任を持って授業外の練習にも必ず参加すること。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

出席状況を重視。心の成長を評価。レポート及び実技試験を行う。

科目名 アクションⅡ①②③

対象 全専攻2年

履修条件

「アクションI」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

現代アクション、時代アクション（殺陣）を隔週で行なう。立ち廻りによって身体を動かすことにより、わきあがる感情を自然に表現できるよう基本を指導する。
現代アクションは、表現者として身体をつかって感情をだせるように指導する。
時代アクションは、刃など武器に感情がのるように指導する。

授業の到達目標

俳優として最小限の基本を身につけることや、人に怪我させないように立ち廻りをできることを目標にする。

期間 前期

担当教員 藤田 けん

授業計画

- 現代アクション、時代アクションとも体をあたためることから始める。
現代アクションの基本練習
 - 殴る、蹴り、受け、よけ方など
 - 1対1での基本練習
 - 基本的な立ち廻り時代アクションの基本練習
 - 正眼、真っ向、袈裟、突き、体裁きなど
 - 1対1での基本練習
 - 基本的な立ち廻り回数によってレベルを上げていく。

授業時間外の学習

自己の体調管理。体力の増進を行なう。

教科書・参考書等

動きやすい格好。

成績評価

- A 立ち廻りが十分に表現できるもの。
- B 立ち廻りがほぼ表現できるもの。
- C 立ち廻りがあまり表現できないもの。
- D 立ち廻りがまったく表現できないもの。

科目名 ジャズダンスBⅡ①②

対象 全専攻2年

履修条件

「ジャズダンスBI」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

欧米で一般的に実施しているレッスン方法を採用。

ダンスに必要な柔軟性・筋力トレーニング・基本的な身体の使い方・リズムのとり方・乗り方を学ぶ。

色々な種類の音楽を用いて、その音色・リズム・アクセントを身体を使って表現することを考える。

ダンスを通して、身のこなしと感受性豊かな表現力を身につける。

授業の到達目標

肉体・精神共にコントロールすることを身につけ、踊ることを通じて表現豊かなパフォーマンスを目指す。

授業計画

- ① ストレッチ・エクササイズ(正しいストレッチの仕方)・コンビネーション①
- ② ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー(リズムのとり方・乗り方)・コンビネーション①
- ③ ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー(正しい姿勢・軸のとり方)・コンビネーション①
- ④ ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー(軸、バランスのとり方)・コンビネーション①
- ⑤ コンビネーション①重視
- ⑥ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②

期 間 前期

担当教員 畔柳 小枝子

- ⑦ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑧ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑨ ステップ・ジャンプ・ターン・コンビネーション②
- ⑩ コンビネーション②重視
- ⑪ 音の音色・アクセントのつけ方、見せ方。コンビネーション③
- ⑫ 音の音色・アクセントのつけ方、見せ方。コンビネーション③
- ⑬ 更に踊りの表現方法を考える。コンビネーション③
- ⑭ 更に踊りの表現方法を考える。コンビネーション③
- ⑮ コンビネーション③重視

授業時間外の学習

各自、柔軟、筋力トレーニングは行なって欲しい。

小テストを行うので振付の練習をし、その音やイメージの表現を研究しておく。

教科書・参考書等

稽古着を着用。
ダンスシューズ(ジャズシューズ等)を使用。

成績評価

出席・小テスト・期末テストの状況で評価する。

- A 音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者。
- B 音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者。
- C 振付を覚えて踊れる。又は成果がでた者。
- D 振付を覚えず練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者。

科目名 ジャズダンスBⅡ③④

対象 全専攻2年

履修条件

前年度に「ジャズダンスBI」を履修し、単位を取得していること。

授業の概要

ストレッチ、筋肉トレーニング、アイストレーションで基本的な動きをマスターしたら、重心の移し方、体の引き上げ方、ハイレベルなバランス感覚を身につけ、質のよいターン(回転)、より確実なビルエットを目指していく。クラシックバレエ、ジャズダンス、タップダンス、HIPHOP等の基本的なステップを使って、個人のレベルに合わせた振付を覚えてもらうが、最終的にはテクニックのみならず、表現力も身につけていきたい。表現力の幅を広げる意味でも、HIPHOPジャズ、シアタージャズ、モダンジャズなどいろいろなジャンルに挑戦していきたい。

授業の到達目標

振付を正確に踊る。ニュアンスを感じとることが出来る。自己表現が出来ること。

授業計画

- 1 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-1
- 2 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-2
- 3 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-3
- 4 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション①-まとめ
- 5 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-1
- 6 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、

期 間 前期

担当教員 渡邊 美津子

- コンビネーション②-2
- 7 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-3
- 8 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション②-まとめ
- 9 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション③-1
- 10 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション③-2
- 11 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション③-3
- 12 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション③-まとめ
- 13 復習、レベルアップ、コンビネーション①、②、③
- 14 復習、レベルアップ、コンビネーション①、②、③
- 15 実技試験、コンビネーション①、②、③

授業時間外の学習

ストレッチ、筋力トレーニング、振付の自主練習を行うこと。

教科書・参考書等

稽古着を着用。バレエ基礎、コンビネーション②は裸足で行うのでフータータイツ不可。ジャズダンスシューズ、ジャズスニーカー着用。

成績評価

(1)出席日数、(2)授業態度、(3)課題に対する成果、等を総合的に評価する。

- A 実技試験において、評価が80点以上で、表現力のある者。
- B 実技試験において、評価が60点以上の者。
- C 実技試験において、評価が40点以上の者。
- D 実技試験において、評価が39点以下の者。

科目名 バレエ・ムーヴメント B

対 象 全専攻 2 年

履修条件

「バレエ・ムーヴメント A」を履修していることが望ましい。バレエ経験者。

授業の概要

1学年に引き続き、クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して、

- 1 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、placement
- 2 あらゆる踊りの基礎となる体の使い方
- 3 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
- 4 音楽性、リズム感、ピアノ伴奏により生の音楽を体に通ず感覚

等を身につけ、深められるようにレッスンを行う。
一人で踊るだけでなく、ペアやアンサンブルで人と合わせて踊る感覚もつくっていききたい。

授業の到達目標

それぞれが自分の体と向き合い、自分の体を理解する。
豊かな表現ができる体を作る。
バレエのアカデミックなムーヴメント、テクニックを学び、動きの可能性を広げる。
音楽的に踊れるように、感性を磨く。

期 間 前期

担当教員 安達 悦子

授業計画

- 毎回、床上でのバーレッスン、ストレッチから始める。
- ①から⑤：バレエ・ムーヴメント A で学んだことをしっかりと習得できるよう、バーレッスン、センターレッスンをやる。
 - ⑥から⑨：バーレッスン、センターレッスン。様々な小さいジャンプつなぎのステップ、ピルエット、移動する回転等のステップを加える。
 - ⑩から⑬：バーレッスン、センターレッスン。習得したステップを繋げて、より複雑なアンシェヌマンを踊れるように。
 - ⑭：試験のアンシェヌマン
 - ⑮：試験 まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

- ①出席日数②授業の状況③期末試験を総合的に100点満点で評価する。
- A 総合点が80点以上の者
 - B 総合点が60点以上の者
 - C 総合点が50点以上の者
 - D 総合点が49点以下の者（出席の足りない者）

科目名 タップダンスⅡ①②

対 象 全専攻 2 年

履修条件

「タップダンスⅠ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

より表現力を豊かにする為、様々な曲に合わせて振付していく。又、時には太鼓やドラム等、パーカッションとのコラボレーション（組合せ）やアドリブ（即興）等タップダンスの奥の深さを学んでほしいと思う。

発表会を体験し、舞台創りの楽しさと厳しさを学ぶ。

授業の到達目標

リズム感（音の強弱等）とより幅の広い表現方法を充分に身につけること。

期 間 前期

担当教員 中川 裕季子

授業計画

- 専門的なことを修得して頂きたく、振付もなるべく多くの曲を体験してもらう。
音色やリズムの変化、アドリブやセッションまで出来るようになると本当のタップの楽しさを感じてもらえると思う。

授業時間外の学習

二回三回と続けて欠席すると全体の進み方が遅れてしまうので、友人にきく等して欠席した時のステップ等を教えてもらい学んでおくこと。常に復習、練習をすること。

教科書・参考書等

タップシューズ。

成績評価

出席状況を重視及び普段の授業態度と発表会を評価する。

科目名 ポピュラーⅡ①

対象 全専攻2年

履修条件

「ポピュラーⅠ」を履修し、単位を修得していること。
ポピュラーヴォーカルの経験者が望ましい。
あらゆるジャンルに対応できる発声方法、マイクのテクニック。
カラダの使い方を習得したい方。ヴォーカリストとしての素養を追求したい方。やる気のある人をもとめる。

授業の概要

ミックスボイス発声の習得。
あらゆるこのミックスのパーセンテージをコントロールするやめのインナーマッスルの使い方を習得する。
そのための、ストレッチ訓練をして、毎日の練習を習慣づける。
個別の声を発掘し、レコーディングの発声テクニックにつなげていく。
あらゆるジャンルのレパートリーを紹介し各自のライブのプログラミングが出来るところまで持って行きたい。
ワールドソングとして角国の原語学習 その国特有のリズム感情表現に触れて行く。
クロスオーヴァークラシック ミュージカル ジャズ 特にウィーンミュージカルや
クルトワイルソング 文学的シャンソン サンバカンソン ルンバ(ラテンバラード)
サルサ アルゼンチンタンゴなどに着手。
原語と邦訳の表現方法の違いに触れる。
また楽楽曲のキー設定 アレンジ方法の選び方も学ぶ。

授業の到達目標

自分のレパートリーを創る。
ソロのボーカルのライブが構成できるようになる。
声とカラダのコントロールが出来 つねに一定のレベルを保てるようになる。

授業計画

- 1 ガイダンス(ミックスボイス発声方法の説明)
- 2 クロスオーヴァークラシックの楽曲を使い ミックスボイスのファルセットからのアプローチ
- 3 ゴスペルナンバーを使い ファルセットとシャウトボイスのミックスを学ぶ
- 4 ワールドソング アルゼンチンタンゴ サルサなどの楽曲体験

期 間 前期

担当教員 モンデンモモ

- 5 ワールドソング イタリア シャンソン(フレンチポップス)などの楽曲体験
- 6 ワールドソング ジャズ ブルーすなどの楽曲体験
- 7 自分のレパートリーとして 楽曲の歌い込み 暗譜をする
- 8 自分のレパートリーとして 楽曲の歌い込み 暗譜をする 人前で演奏
- 9 自分のレパートリーとして 楽曲の歌い込み 暗譜をする 人前で演奏
- 10 ラフレコーディングをしてみて レコーディングのテクニックを学ぶ
- 11 ラフレコーディングをしてみて レコーディングのテクニックを学ぶ
- 12 オンマイク オフマイクの 発声方法の違いを学びながら発表
- 13 あらゆるジャンルの楽曲を紹介
- 14 自分のレパートリーを完成 発表
- 15 自分のレパートリーを完成 発表

授業時間外の学習

授業内で、ソロの演奏をしてもらいレッスンしていくので自主稽古をしておくこと(暗譜は必須)。毎日の肉体訓練を習慣づける。

教科書・参考書等

モンデンモモ著「発声トレーニング本～しゃべればうたえる」(ドレミ出版)
モンデンモモ著「発声トレーニング実践本～しゃべれば歌える2」(ドレミ出版)
楽曲資料は随時配布。動きやすい格好で参加が望ましい。
音源を紹介するので 各自録音機材を持参のこと。

成績評価

- 毎回の授業内の発表の仕上がり 30%
レコーディング体験の仕上がり 20%
最終的な発表の仕上がり 50%で100点に換算(出席率 80%以上)
- A 総合点が、80点以上(自分の声が見つかりコントロールでき表現している)
B 総合点が、60点以上(個性の表現ができていて)
C 総合点が、50点以上(やる気はある)
D 総合点が、49点以下(取り組みが悪い)

科目名 ポピュラーⅡ②③

対象 全専攻2年

履修条件

「ポピュラーⅠ」を受講し、単位を修得していること。
欠席、遅刻厳禁。積極的な姿勢をもっていること。

授業の概要

とにかく歌って、踊って、そして、呼吸する音とは何か?楽譜には何が書き込まれているのか?音の持っている意志をどう感じ、読み取ったらいいのか?オリジナリティーはどう生まれるのか?

授業の到達目標

歌うこと、舞台上立つこと、自分を表現すること、思いを伝えること、音楽の持つ素晴らしさを表現するために必要な知識、実行力を培い、感性を高め、人として舞台人として自分のあるべき姿を見いだすこと。

期 間 前期

担当教員 林 絵理

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2～14 楽曲のお稽古と役決め 基礎トレーニングを含む
- 15 授業の総括 実技試験

授業時間外の学習

出された課題への予習、復習をきちんと行い自分なりの次の授業への課題を持てるようにすること。
同じダメ出しをされないように何らかの形で改善がみられるようにすること。
時間外でもグループでやらなくてはいけないことにはきちんと参加し、全体の中での個の在り方も考えること。

教科書・参考書等

必要な教材等は授業時に配布。

成績評価

- 出席日数、授業に取り組む態度、成果等を総合的に判断するが出席日数、受講態度に特に重きを置く。
- A 出席日数、積極性、成果ともに優秀と判断できた者
B 出席日数、積極性は優秀であったが成果があと一息と判断した者
C 出席日数、積極性、成果ともにあと一息と判断した者
D 出席日数、積極性、成果ともに不満足であった者
※最後の授業時に実技試験を行う。

科目名 S. H. M. II

期 間 通年

対 象 全専攻2年

担当教員 塩崎、池田、坂田晴

履修条件

● 音2必修「S.H.M.I」の単位を修得していること。自分なりの能力を向上させる努力を、常に実践すること。遅刻をせずに、きちんと出席すること。

授業の概要

● 授業内容は「S.H.M.I」の延長上にある。
能力に応じて、基礎力の充実から、より音楽的な応用まで、各自、力をつけていく。

授業の到達目標

● 音楽実践に必要な基礎的能力を高め、幅広く優れた音楽性を身につけさせる。

授業計画

● 前期は一年次の成績により能力別クラス編成で授業を行う。前期終わりに後期のためのクラス分けテストを行う。
主な授業項目。クラスにより内容、進度は異なる。
・多様なリズムの習得
・多様な拍子の理解
・ト音記号、ヘ音記号、ハ音記号の理解
・正しい読譜による初見視唱の練習

- ・正確な音程を身につける
- ・より高度なメロディの書き取り
- ・2声、3声等同時に鳴る音への理解
- ・種類の違う和音がもたらす響きの色彩を感じ取る
- ・和音の機能の理解と聴き分け
- ・四声体の書き取り、その重唱
- ・多様な調への挑戦
- ・転調を伴う課題における調の判定
- ・移調奏
- ・多様な音階による課題

授業時間外の学習

● 授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

● 特になし。クラスの担当教員から指示される場合もある。

成績評価

● 学年末に実施する一斉テストで、単位評価する。(出席は2/3以上満たすことが必須)
S・H・M各100点の合計300点満点を100点に換算する。
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が65点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 コンテンポラリー・ミュージックII

期 間 前期

対 象 全専攻2年

担当教員 岩崎 廉

履修条件

● 「コンテンポラリー・ミュージックI」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

● 「コンテンポラリー・ミュージックI」で学習した知識を更に深め、コードを使い作曲する。覚える事、考える事、感じる事、脳の力をしっかり切り分けて使い、感性を高めて行く。実際に自分で作曲する事により、他者の作った作品への理解力を上げて行く。

授業の到達目標

● カデンツを理解し、モチーフを作る。普段の生活の中から身近なテーマを選び作詞する。
詩先の作曲、曲先の作詞が出来るようになる。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 カデンツを学ぶ
- 3 コードを連結しピアノで弾く
- 4 旋律を考える(モチーフの創作)
- 5 詩を書く
- 6 アナリーゼ
- 7 詩先の作曲
- 8 曲先の作詞
- 9 小試験
- 10 小発表会
- 11 演習
- 12 試験、まとめ

授業時間外の学習

● 毎回の授業でモチーフ、詩の提出がある。

教科書・参考書等

● 特になし。

成績評価

● 提出物評価…40点満点
小試験…20点満点
期末試験…40点満点
3つの点数の総合で評価される。

科目名 朗読・スピーチ B

対象 全専攻2年

履修条件

なし。

授業の概要

それぞれの声とことばを、豊かに表現力に満ちたものにしていくための実践。日本語の発語・発声の基礎となる50音を学び、体現できるようにして日本語の「音」を意識化する。言語をつかうコミュニケーションの最少単位である「私」と「あなた」の概念を体得し、その後「ことば」「テキスト」へと進む。自らの音声表現と身体の同一性を、共通体験から探究し学びあう。

授業の到達目標

意識化された声とことば、身体の使い手となり、自らの表現・創造に役立てることができるようにする。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 「自分」と「他者」
- 3 母音
- 4 子音①
- 5 子音②
- 6 50音の音声・身体表現①
- 7 50音の音声・身体表現②

期間 前期

担当教員 飯原 道代

- 8 50音の音声・身体表現③
- 9 テキストの実践①
- 10 テキストの実践②
- 11 テキストの実践③
- 12 テキストの実践④
- 13 テキストの実践⑤
- 14 テキストの実践⑥
- 15 まとめ

授業時間外の学習

母音から子音までですんだら、毎日短時間、自分の耳と目で音を確認する時間をとる。その方法と理由については授業で説明する。

教科書・参考書等

教科書なし。その都度必要なものをプリントを配布。動ける服装で。

成績評価

出席日数、授業内容への理解・実践を中心に評価

- A 内容を理解し、実践することができる
- B 内容の理解に努力、実践することに努力した
- C 内容の理解・実践の方法がわからない
- D 内容の理解・実践がみられず出席日数が少ない

科目名 ボイス・トレーニングⅡ（演劇）①②

対象 全専攻2年

履修条件

「ボイス・トレーニングⅠ（演劇）」を既に受講し、単位を修得していること。

授業の概要

「ボイス・トレーニングⅠ（演劇）」で体得した事をひとつひとつ確認しながら、自然な呼吸、無理のない発声、そのための体の使い方より確実にしていく。授業ではI同様、ストレッチを取り入れ、エチュード、カデンツ、歌唱曲などをテキストに進めて行く。

授業の到達目標

基本となる呼吸筋の働き、共鳴のしくみ（アンザツ）を正しく理解できたか。
求められるシチュエーション、声の大小、色に関わらず、喉に負担の無い、共鳴の伴った明瞭な声が出るようになったか。
正しい音程感、リズム、アンサンブルのバランスに「こたわる」耳、感覚がついたか。

授業計画

- 1) 授業ガイダンス。
※2回目からは毎回、ストレッチ、発声練習、歌唱を行う。
- 2) 呼吸筋の働きの確認。
- 3) アンザツ（共鳴のポイント）についての確認。
- 4) 歌唱における母音唱法の確認。
- 5) 歌唱における子音の確認。
- 6) 表情筋と声について。
- 7) 長短音階、全半音階、47抜き、琉球、都節、民謡、中東アジア、ブルーノートなどさまざまなスケールで音程感を養う。
- 8) カデンツとハーモニーの練習。
- 9) 様々なシチュエーション歌唱1（体位編：座位、臥位、不安定位など）。
- 10) 様々なシチュエーション歌唱2（声色編：頭声、胸声、地声、ファルセット、作為）。

期間 前期

担当教員 三塚 至

- 11) グループ歌唱1（歌曲分析及び音楽稽古。創作表現：演出を付けて内容の具現化）。
- 12) グループ歌唱2（音楽稽古の徹底。創作表現の完成）。
- 13) 講義のまとめと試験に向けての個別指導。作品練習。
- 14) 課題曲による個人の歌唱テスト。
- 15) グループ作品発表：1. 基本的歌唱（動作を付けない）2. 同曲の創作表現。

授業時間外の学習

トレーニングは毎日少しでも行う事が大切である。授業の内容を必ず復習する事を心掛けること。

教科書・参考書等

特になし。こちらで毎回用意する。

ただし、ストレッチなど、体を使った表現が多い時間のため、寝転がっても大丈夫なように動きやすい格好で参加すること。ジーンズは不可。履物もスニーカーなど安全なものにすること。

成績評価

平常点：授業への能動的参加、協調性、表現の工夫、日頃の練習、成果の有無。

実技（個人歌唱、グループ発表）：発声、演奏のクオリティ、音楽性、表情、表現力、集中力。

以上の総合的評価。

- A 上記の条件を全てにおいて十分に満たしていると認められるもの。
- B 上記の条件を一定のレベルにおいて満たしていると認められるもの。
- C 上記の条件にばらつきがあり、全体にやや不足していると認められるもの。
- D 上記の条件で満たしている項目が半分以下と判断されるもの。
※欠席は減点の対象となるので注意すること。出席日数が足りない場合は不可とする。

科目名 声優演技法 B

対象 全専攻2年

期間 前期

担当教員 篠崎 光正

履修条件

声優は本人が直接発声をして、音声を表現手段にするため、履修者がその空間に共に存在して、その劇的状況を直接体験しなければ修得することが難しい職種である。そのためこの授業では、劇的状況によって教育成果を求める為、履修者の出席日数及び遅刻回数を重く見て、評価の対象としている。演技発表日の欠席についても、他の履修者に多大な迷惑をかける為、場合によっては再履修として、発表班から外す場合があることを予め承知しておいてほしい。

期末試験に関しては、上記の理由からいかなる理由があっても、30%以上欠席したものは、受験を認めず、また、遅刻についても、同様に30%以上は受験を認めないので健康管理には充分注意すること。

再履修者については、授業成立条件を満たす為の人数制限により、履修を許可したのだけとする。また、10%以上の欠席または遅刻をした再履修者については、その時点で履修許可を取り消すことがあるので、あらかじめ十分に注意すること。なお、この科目を履修するにあたっては、上記の履修条件をよく自覚し、自己管理を徹底すること。

授業の概要

短期大学の2ヵ年という期間に「声優演技法」を完璧に修得することは大変難しく、その為それに見合う凝縮された教育システムが要求される。そこで、この科目の約6ヶ月間というこの短期授業に、26週間で修得できる演技者養成システムの「シノザキ・システム」を使用し、演技基本を修得することを目指す。授業は、①理論、②実技、③基本訓練、の3部から構成され、一回の授業の中で展開していく。また、集団芸術としての演技には、必須条件のアンサンブルについても、これの修得を目的の一つに上げ、班編成による演技課題の発表を実施する。従って、班別に自主稽古をして、発表の準備をすることが課せられる。

特に、この授業が目指すものは、「声優演技法A」の修得後の、実践学習を軸に展開する演技法である。声優として演じる時にその発想の根拠となる「演劇とは何か」「演じるとは如何なる行為か」という演劇における基本の理念と、それを可能にする基本の表現方法、さらにはそれを展開して表現する高度な能力の修得である。

毎回の授業は、教科書持参の他、プリント教材を配布。稽古着の着用は当然のこと、すべらないゴム靴の内履きシューズを履く事。また、授業内容によっては、衣装着用、小道具持参が必要な場合があるので、事前の指示に従い各自調達し準備すること。

授業の到達目標

- 1 演技を演劇全体から考えることができるようになること。

- 2 基礎演技ができるようになること。
- 3 声優として必要な音声表現法の基礎になる鼻濁音などができるようになること。
- 4 演技の呼吸が理解できるようになること。
- 5 そのほか自分の個性を表現できるようになること。

授業計画

<基本>

1 序論 呼吸	2 ウソ	3 二つの神経
4 三つの間	5 笑い	6 ダゾデザドゼ
7 手をひっぱたく	8 背中合わせ	9 真似
10 スローモーション	11 視覚	12 総合課題1
13 信頼	14 ワルツ	15 喜び
16 耳を動かす	17 物になる	18 総合課題2
19 大学を落ちて浪人	20 母親の涙	21 出会い
22 クラウン	23 イメージ	24 役づくり
25 朗読 朱雀門	26 総合課題3	

<課題>

- 1 脚本の一部を稽古
- 2 脚本の一部を発表
- 3 講評

授業時間外の学習

- 1 班別に自主稽古をして、演技課題発表の準備をすること。

教科書・参考書等

- 教科書：篠崎光正著「シノザキ・システム・篠崎光正演技術」(晩成書房)
参考書：スタニスラフスキー・システム
近代俳優術(千田是也著)
篠崎光正著「シノザキ・システム・ベーシック・アクション」

成績評価

この授業では、劇的状況によって教育成果を求める為、履修者の出席日数及び遅刻回数を重く見て、評価の対象としている。

- 演技基本の理論、実技、基本訓練のすべてが修得できたものはA
演技基本の理論、実技、基本訓練のうち2つが修得できたものはB
演技基本の理論、実技、基本訓練のうち1つが修得できたものはC
演技基本の理論、実技、基本訓練のどれもが修得できなかったものはD

Toho Gakuen College of Drama and Music

芸術科音楽専攻

科目名 ドイツ語Ⅰ

対象 音楽専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

このコースは、ドイツ語の基礎や知識のない学生を対象にドイツ語圏の人々と基礎的な日常会話ができるようになり、ドイツ文化や習慣、地域の見解を深めてもらうことを目標としている。

授業で使用するテキストは、修了時(2年間)には、ドイツ語の公式テスト(Zertifikat Deutsch)を受ける能力を修得することができるものを使用する。また、授業では、テキストだけでなく、学生に自主的に参加して話をするスタイルで進め、学んだことを実用的に使えるよう、授業を進めていく。

授業の到達目標

- 1 ドイツ語の文法的な概念を理解する
- 2 基本的なドイツ語のボキャブラリーの構築
- 3 発音の修得

期間 前期

担当教員 Daniel Gross

授業計画

- 第1回 あいさつ、自己紹介(アルファベット)
- 第2回 カウンティング(1~100まで)
- 第3回 Week day、Month(月)、day(日)
- 第4回 動詞の現在人称変化
- 第5回 定冠詞と名詞の格変化
- 第6回 不定冠詞と名詞の格変化
- 第7回 名詞と形容詞の使い方(一格)
- 第8回 名詞(男性名詞、女性名詞、中性名詞) ex. 食べ物、飲み物
- 第9回 4格
- 第10回 名詞と形容詞の使い方(4格)
- 第11回 ein / kein (1格)
- 第12回 ein / kein (4格)
- 第13回 時計
- 第14回 復習
- 第15回 ファイナルテスト

授業時間外の学習

予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%~80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%~60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%~40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 ドイツ語Ⅱ

対象 音楽専攻1年

履修条件

「ドイツ語Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

授業は、「ドイツ語Ⅰ」と同様、学生が自信を持ってボキャブラリー、文法を使えるようになることを目標としている。

授業で使用するテキストも「ドイツ語Ⅰ」で使用したテキストを使用する。「ドイツ語Ⅰ」で学んだボキャブラリーや文法の幅を「ドイツ語Ⅱ」ではさらに広げていく。

授業の到達目標

- 1 ドイツ語の文法的な概念を理解する
- 2 基本的なドイツ語のボキャブラリーの構築
- 3 発音の修得
- 4 基本的なコミュニケーションスキルとリスニングスキルの修得

期間 後期

担当教員 Daniel Gross

授業計画

- 第1回 復習
- 第2回 単語(洋服)
- 第3回 色
- 第4回 2~3のプラクティス(4格の使い方)
- 第5回 ロールプレイ
- 第6回 現在完了形
- 第7回 現在完了形のプラクティス
- 第8回 コミュニケーションプラクティス
- 第9回 ロールプレイ
- 第10回 3格と結びつく前置詞
- 第11回 単語(3格の使い方)
- 第12回 3格のプラクティス
- 第13回 3格と4格
- 第14回 復習
- 第15回 テスト、まとめ

授業時間外の学習

予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「クロイツング・ネオ」朝日出版社

成績評価

- A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。
筆記試験の結果が100%~80%の者。
- B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。
筆記試験の結果が79%~60%の者。
- C 授業中、積極的に参加しているが、授業内容をある程度理解している。
筆記試験の結果が59%~40%の者。
- D 授業に参加せず、筆記試験の結果が40%以下の者。

科目名 イタリア語 I

対象 音楽専攻 1年

履修条件

声乐専修は必修。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

期間 前期

担当教員 Sbaragli Marco

授業計画

1. ガイダンス、イタリア語へのアプローチ
2. イタリア語の発音、挨拶や簡単な自己紹介、数え方
3. 性と数、定冠詞等を中心としたイタリア語の特徴
4. 指示代名詞、形容詞の性と数の一致
5. 動詞essereを用いた文章の構造
6. 疑問詞che及びchiを用いた疑問文の作り方、その答え方
7. c'èとci sonoを用いた文章
8. 主語人称代名詞と動詞essereの直説法現在の活用
9. 動詞avereの活用変化とその使い方
10. avere、essereを用いた文章
11. 定冠詞と不定冠詞、前置詞等を中心とした文章の構造
12. 規則動詞の現在形とその使い方(1)
13. 規則動詞の現在形とその使い方(2)
14. 規則動詞を使った文章、疑問文&答えを中心に
15. まとめ

授業時間外の学習

予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)
「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著 (白水社)

成績評価

授業態度30% 出席状況30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断) 40% で100点換算

- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 イタリア語 II

対象 音楽専攻 1年

履修条件

声乐専修は必修。
「イタリア語I」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

- ・文法：できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
- ・コミュニケーション内容：簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。

授業の到達目標

イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身に付ける。

期間 後期

担当教員 Sbaragli Marco

授業計画

1. 時間、曜日の表現
2. 動詞andareとvenire
3. 動詞andareとvenireの前置詞の使い方
4. 助動詞dovereを使った文章
5. 助動詞potereを使った文章
6. 助動詞volereを使った文章
7. その他の不規則動詞
8. 動詞piacereの使い方
9. 所有形容詞
10. 現在形のまとめ(1)
11. 現在形のまとめ(2)
12. 近過去の仕組み(1)
13. 現在形のまとめ(2)
14. 近過去を使った文章の作り方
15. 1年間の総復習

授業時間外の学習

予習・復習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

「デイリー日伊英・伊日英辞典」(三省堂)
「イタリア語のひとさら」(un piatto d'italiano) 遠藤礼子著 (白水社)

成績評価

授業態度30% 出席状況30% イタリア語の理解度(試験の成績や、授業中の受け答えなどで総合的に判断) 40% で100点換算

- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 フランス語Ⅰ

対象 音楽専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

ゼロから、ゆっくと楽しみながらフランス語の基本会話と日常会話での便利な表現を覚えていく。正しい発音の勉強もする。

授業の到達目標

聞き取り、書き取り、そして、自己表現ができるようになることを目的とする。各レッスンでは、必ず発音の練習も行う。本の名前どおり(Spirale⇒らせん)前に勉強した内容を復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識を身につけることができる。

授業計画

1. 教室でよく使う表現・発音の基本
2. Initiation 1: 挨拶する・別れの挨拶する
3. Initiation 1: 自己紹介・数字(0~5)・発音の練習
4. Initiation 2: 夜の挨拶・人についてたずねる(1)
5. Initiation 2: 名前のつづりを言う・アルファベット
6. Initiation 2: 数字(6~10)・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
7. Unité 1, Leçon 1: 名前、職業、住んでいる場所についてたずねる・自分の仕事について話す(1)
8. Unité 1, Leçon 1: 人について質問する・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
9. Unité 1, Leçon 2: 職業をたずねる(2)・やりたい職業を言う

期 間 前期

担当教員 野坂・スタンフリ・マガリ

10. Unité 1, Leçon 2: 国籍をたずねる・何語を話すかを言う・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
11. Unité 1, Leçon 3: 人についてたずねる(2)・何かを示す
12. Unité 1, Leçon 3: 何語を話すかを言う(2)・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
13. Unité 2, Leçon 4: 好きなものを言う・好き嫌いの程度を言い表す
14. Unité 2, Leçon 4: どちらが好きか言う・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
15. 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回、出された宿題を授業前にその準備を必ずすること。また、授業中に毎回、参加すること。

教科書・参考書等

Spirale (スピラール) Hachette Français Langue étrangère, Pearson Education Japan

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 フランス語Ⅱ

対象 音楽専攻1年

履修条件

「フランス語Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

楽しみながらフランス語の基本会話と日常会話での便利な表現を覚えていく。正しい発音の勉強もする。

授業の到達目標

聞き取り、書き取り、そして、自己表現ができるようになることを目的とする。各レッスンでは、必ず発音の練習も行う。本の名前どおり(Spirale⇒らせん)前に勉強した内容を復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識を身につけることができる。

授業計画

1. Unité 2, Leçon 5: 何をするのが好きか言う・行動について好き嫌いの程度を言い表す(2)
2. Unité 2, Leçon 5: したいことについて話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
3. Unité 2, Leçon 6: 好みを説明する・どちらが好きかの理由を述べる
4. Unité 2, Leçon 6: 人を描写する・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
5. Unité 3, Leçon 7: 自分について話す・年齢を言う・科目について話す・数字(~59)・曜日
6. Unité 3, Leçon 7: 時間の使い方または時間割について話す・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
7. Unité 3, Leçon 8: 待っているものについて話す・所有をあらわす

期 間 後期

担当教員 野坂・スタンフリ・マガリ

8. Unité 3, Leçon 8: 物を借りる、あやまる・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
9. Unité 3, Leçon 9: 場所について話す・店の話
10. Unité 3, Leçon 9: 場所について情報を求める・場所を示す前置詞
11. Unité 3, Leçon 9: 場所についてたずねる、位置づける・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
12. Unité 4, Leçon 10: 何をするかをたずねる・答える(1)・時間を表す表現
13. Unité 4, Leçon 10: 何をするかをたずねる・答える(2)
14. Unité 4, Leçon 10: 詳しく聞く・余暇の過ごし方・発音の練習・聞き取りと書き取りの練習
15. 試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回、出された宿題を授業前にその準備を必ずすること。また、授業中に毎回、参加すること。

教科書・参考書等

Spirale (スピラール) Hachette Français Langue étrangère, Pearson Education Japan

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 バロック・ダンス a / b

対象 音楽専攻1年

履修条件

音1必修。

授業の概要

17世紀初めの頃から18世紀半ばにかけてフランス宮廷を中心に栄え、ヨーロッパ中に広まっていったダンスをバロック・ダンスと称する。

メヌエットやガヴォット等がその代表的なものであり、日頃演奏や鑑賞を通して関わっているこれらのバロック舞曲を、実際のダンス・ステップを通して体験する。バロック・ダンスのステップや踊り方は、現存する舞踏譜やダンス教本によって300年以上経た今、復元することができる。これらの読み方についても触れ、音楽とダンスの歴史的及び運動的関連性を明らかにする。

ダンスの実習と共に、器楽で舞曲を演奏し、実際にダンスの伴奏を試みたい。

授業の到達目標

様々な舞曲の中でブレ、メヌエット、カヴォットを発表できるように仕上げる。

期間 前期

担当教員 浜中 康子

授業計画

各授業とも、歴史的資料(舞踏譜等)に基づいてダンス実技実習を中心とする。

- 1 テクニックの基本、歴史的背景
- 2 同上(2)
- 3 プレ、メヌエットを中心に
- 4 同上(2)
- 5 同上(3)
- 6 同上(4)
- 7 同上(5)
- 8 同上(6)
- 9 ガヴォット、サラバンド他
- 10 同上(2)
- 11 同上(3)
- 12 同上(4)
- 13 まとめ 総合的な練習
- 14 同上(2)
- 15 同上(3)

授業時間外の学習

- ・授業中は知的な理解に留まることも身体表現としてスムーズに行えるようにステップ名と動きを結びつけながらリピート練習すること。
- ・様々な作曲家・時代の舞曲を数多く演奏・鑑賞すること。

教科書・参考書等

- 書籍：「栄華のバロック・ダンス—舞踏譜に舞曲のルーツを求めて」浜中康子著(音楽之友社)
- DVD：フランス宮廷の華「バロック・ダンスへの招待」I・II浜中康子監修(音楽之友社)
- 服装：膝の曲げ伸ばしが行きやすいパンツまたはスカート(タイトスカート不可)、ダンスシューズ使用

成績評価

- ・出席状況を重視する
- ・実技発表
- ・レポート

科目名 音楽理論基礎

対象 音楽専攻1年

履修条件

音1必修。

出された宿題、テスト準備を真面目に行うこと。
欠席、遅刻は厳しくとる。

授業の概要

専門実技はもちろん、「音楽を真に学ぶ」ために設けられた様々な授業、「和声」「楽式」「対位法」「S.H.M.」その他、音楽理論に関する科目の理解、習得にあたり、その大前提として欠くことのできない「楽典」を中心に講義を行なう。単なる理解にとどまらず、即時の判断力を必要とするので、多量の実習を義務づけることとなる。

※1回目の授業時にテストを行ない、すでに楽典を十分に習得していると認められる学生は、履修を免除する。

授業の到達目標

音楽を理解するために必要不可欠な基礎力となる「楽典」の習得。

各調の固有音が即座にイメージできる、指を使わずとも音程を答えられる等、音楽専攻の学生として当然の基礎力の獲得。

期間 前期

担当教員 福田 恵子

授業計画

1. 本講座授業の概要説明及び習得度確認テスト
2. 音の不思議、楽譜の常識
3. 音程の説明
4. 音程の聴き分け、名曲における効果的音程の使いかた
5. 小テスト、音階の説明
6. 音階の続き、調号
7. 調号の確認
8. 小テスト、和音の種類、和音の位置
9. 調における和音の役割
10. Dominantの和音①、属七の和音について
11. Dominantの和音②、減七の和音について
12. 終止形、借用和音について
13. 小テスト、調の判定
14. 和声外音とは
15. 授業で習得した知識を使って、名曲のアナリーゼ

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

授業ではプリントを配布する。
参考書としては「楽典 理論と実習」(音楽の友社)を所持することを勧めます。初回授業時に説明する。

成績評価

小テスト成績30%、期末試験成績60%、出席・遅刻・授業態度10%、総合100点満点に換算する。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が65点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 音楽理論 [和声] I・II a

対象 音楽専攻1年

履修条件

日本音楽専修以外は必修。

授業の概要

本科の2年間に、ロマン派までの西洋音楽における和声学の基礎理論を理解し、課題の実習を通して、和声機能の本質を把握し得る能力を育成する。

1年次には、三和音の基本形および転回形とドミナント諸和音(属七・属九の和音)の配置、連結に関する原則を中心に、終止形の形成、様々な終止(全終止、半終止、偽終止、変終止)に対する考察、基本的な声部進行法について学習する。

授業の到達目標

1. 三和音(各種転回形を含む)による和声体を扱うための基礎力を確実に習得すること。
2. 七の和音を扱うことを通じ、より厳密な声部進行の書法を身に付けること。

授業計画

- | | |
|--------|--|
| 第1～2回 | 和声学概論(初歩の音響学に対する知識を踏まえて)
・四声体和声法課題実施に先立つ楽典的理解の確認。
・三和音の四声体配置を行う上での規則、良好な音響状態についての理解。 |
| 第3～7回 | 基本形三和音の配置と連結
・基本形三和音における声部進行法上の規則、その背景となる和声法の原則の理解、旋律的配慮に関する考察。
・終止形と、和音進行法についての理解、および、音感としての把握。 |
| 第8～10回 | 三和音の第1転回形 |

期 間 前期・後期

担当教員 平井 正志

- | | |
|---------|-------------|
| 第11～14回 | 三和音の第2転回形 |
| 第15回 | 前期筆記試験 |
| 第16～19回 | 属七の和音 |
| 第20～23回 | 属七の和音の根音省略形 |
| 第24～29回 | 属九の和音 |
| 第30回 | 後期筆記試験、まとめ |

授業時間外の学習

講義の回と実施した課題内容を添削する回を交互に行う。出題された課題は必ず授業に先立って実施し、かつ鍵盤楽器によって実際に音を出し、内容を確認、点検しておくこと。

止むを得ない事情で欠席した場合は、講義内容と課題を他の受講者から入手するなどして自習しておくこと。

教科書・参考書等

教科書: 課題を配布
参考書等: 和声[理論と実習] 第一巻 音楽之友社(執筆責任 島岡 譲)

成績評価

- 前・後期々末に筆記試験を行う。筆記試験の成績を元に下記の評定を行うが、単位認定の条件としては、出席状況と課題の実施実績についても勘案し、総合的な判断によって可否を決定する。
- A 80点以上: 重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して習熟度が高い。
 - B 60点～: 概ね重要な公理が理解できているが、課題の実施に際しては練達不足が見られる。
 - C 50点～: 重要な公理の理解不足が散見され、課題実施に向けた努力が足りない。
 - D 49点以下: 重要な公理が理解出来ておらず、和声法を修めたと認めがたい。

科目名 音楽理論 [和声] I・II b

対象 音楽専攻1年

履修条件

音1(日本音楽専修以外)必修。

和声学は途中が抜けると理解できなくなるので、欠席、遅刻をしないこと。

与えられた課題を必ず実践すること。

授業の概要

和声学は物理的必然、力学的合理性に基づき、加えて人間の素晴らしい感性により築きあげられた珠玉の学問といえる。

2年間を通して、和声の機能(D・T・S)を理解、感じ取り、ロマン派までの名曲を形作った和声構造を勉強していく。

1年目は和声学を学ぶにあたっての予備知識から入り、四声体構造の意味、固有三和音の基本位置から転回形、調性の要となる属七、属九の和音等、実感を伴った理解を目指したい。机の上の学問にならぬよう、常に耳を澄まし感性をみがいてもらいたい。

期 間 前期・後期

担当教員 福田 恵子

授業計画

- | | |
|--------|-----------------------|
| 1～3回 | 和声学習の予備知識 及び概念 |
| 4～5回 | 和声構造の原理 和声進行の原則 基本的禁則 |
| 6～8回 | 固有三和音の基本位置での連結 |
| 9～10回 | 基本位置までの小テスト 三和音第一転回 |
| 11～12回 | 三和音第二転回 |
| 13～14回 | 三和音の総合 |
| 15回 | 総合確認テスト |
| 16～18回 | 属七の和音 倍音列の復習 純正律 |
| 19～21回 | 属九の和音 減七の和音の不思議 |
| 22～24回 | 属和音の総合 |
| 25～26回 | 副七の和音 II度の七 IV度の七 |
| 27～29回 | 準固有和音 ドッペルドミナント |
| 30回 | 総合確認 |

授業時間外の学習

授業時に与えられた課題を必ず実践すること。

教科書・参考書等

プリントを配布するので、和声専用のファイルを作成すること。

成績評価

宿題等の平常点および筆記試験を行い評価する。

- A 80点以上
- B 60点以上
- C 50点以上
- D 49点以下

授業の到達目標

- ・いくつかある禁則の意味をよく理解する(何故いけないのか?)。
- ・同じ課題の解答は複数ある。制約のあるなかで、「いかに美しく作れるか」に心をくだく。

科目名 音楽理論 [楽式] I

期 間 通年

対 象 音楽専攻1年

担当教員 宍戸 里佳

履修条件

なし。
日本音楽専修以外は必修。

授業の概要

音楽形式の基礎。バロック・古典派の主な形式についての説明を行い、楽曲の分析を試みる。
授業は講義形式で行うが、自分の頭で考え、授業に積極的に参加することが求められる。

授業の到達目標

音楽形式の基本を理解し、簡単な楽曲を自分で分析できるようになること。

授業計画

- [前期]
- 1 音楽形式とは
 - 2 二部形式 (バッハ)
 - 3 三部形式 (シューマン)
 - 4 複合三部形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
 - 5~7 ロンド形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
 - 8~14 ソナタ形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
 - 15 前期試験、まとめ
- [後期]
- 1~2 歌曲の分析 (ベートーヴェンなど)
 - 3~6 変奏曲形式 (モーツァルト、ベートーヴェン)
 - 7~10 フーガ形式 (バッハ)
 - 11~14 自由形式 (バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン)
 - 15 後期試験、まとめ

授業時間外の学習

- ・知らない曲は事前にCDなどで聞いておくこと (= 予習)
- ・次の授業までに、一度は授業内容に目を通しておくこと (= 復習)

教科書・参考書等

プリント配布。

成績評価

- 筆記試験 (計2回) の平均点をもとに、ボーダーライン上の場合は出席状況、受講態度、レポート提出 (任意)、小テスト (適宜) 等を加味して評価する。
- A およそ80点以上
 - B およそ60点以上
 - C およそ50点以上
 - D 49点以下

科目名 音楽史概説

期 間 通年

対 象 音楽専攻1年

担当教員 森下 俊一

履修条件

日本音楽専修以外は必修。

授業の概要

古代から中世、ルネサンス、バロック、古典派、ロマン派の時代を経て、現代に至るまでのヨーロッパ音楽史を概観する。
ヨーロッパ音楽の理解を深めるため、ヨーロッパ以外の地域 (とりわけ日本を含むアジアの音楽) にも目を向ける。
教科書は使用しないが、楽譜や音資料、映像資料を適宜用いながら講義を進める。

授業の到達目標

ヨーロッパ音楽の歴史的・様式的変遷を正しく理解する。

授業計画

- 1 基本的様式をめぐって
 - 2 古代の社会と音楽
 - 3 中世の社会と音楽 (聖楽)
 - 4 中世の社会と音楽 (俗楽)
 - 5 初期ポリフォニー
 - 6 ルネサンスの社会と音楽
 - 7 バロックの社会と音楽
 - 8 古典派の音楽
 - 9 ロマン派の音楽
 - 10 19世紀末の音楽
 - 11 20世紀の音楽
 - 12 まとめ
- 以上の内容を各2~4回の時間配当で取り扱う予定。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

参考書は多数あるので、開講時に一覧表を配布する。

成績評価

出席状況、授業への取り組み姿勢、提出物等を総合的に勘案して評価する。評価基準・評価区分は学則に準拠する。

科目名 日本音楽理論 A / B

期 間 通年

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 森重 行敏

履修条件

● 特になし。日本音楽専修は必修とする。他専攻の学生も歓迎する。ただし、日本音楽について関心を持つ者とする。出席状況を重視する。

授業の概要

● 日本音楽においては伝統的に演奏者は理論よりも実践を重視してきたため、理論的な用語や概念が統一されておらず、流派や研究者によってもまちまちであることが多い。

この授業では、音楽にとって理論とは何かという基本的な観点に立ち戻って、日本音楽をアジア各地の音楽や洋楽を含めた広い視野で観察するとともに、その理論的基礎を見つけ出して行くこととしたい。

授業の到達目標

● 日本の楽器や伝統音楽についての基礎知識を身につけるとともに、その音楽的特性、理論などを指摘できるようにする。

授業計画

● [前期]

1回目 オリエンテーション。日本音楽の概観

2回目～5回目 日本の楽器と楽譜

6回目～10回目 日本の音階とリズム

11回目～15回目 日本音楽の演奏形態

[後期]

1回目～5回目 日本音楽と音律

6回目～10回目 日本の洋楽を考える

11回目～14回目 日本音楽の伝統と改革

15回目 まとめのテスト

授業時間外の学習

● 授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

● 「日本音楽との出会い」月溪恒子著（東京堂出版）

随時プリントも配布

成績評価

● 出席態度50%、課題または試験成績50%で100点に換算

A 総合点が80点以上の者

B 総合点が60点以上の者

C 総合点が50点以上の者

D 総合点が49点以下の者

科目名 日本音楽史概説

期 間 通年

対 象 音楽専攻1年

担当教員 野川 美穂子

履修条件

● 日本音楽専修必修。

授業の概要

● 縄文・弥生時代から現在にいたるまで、日本人は様々な音楽に親しんできた。しかし、現在の生活では、日本の伝統的な音楽を聴く機会が少なくなっている。この授業では、日本音楽の変遷をたどりながら、楽器や音楽様式の特徴、文学・演劇・舞踊との関連などについて概説する。知識としてではなく音としての理解を深めるために、毎回、視聴覚教材を活用する。

授業の到達目標

● 時代や種目による違いをたどりながら、日本音楽の魅力を知る。

授業計画

● 以下の順に進める。

(1) 日本音楽の枠組みと特徴

(2)(3) 日本古来の音楽

(4)(5)(6) 雅楽の歴史と音楽

(7)(8) 声明の歴史と音楽

(9)(10) 琵琶楽の歴史と音楽

(11)(12)(13)(14) 能楽の歴史と音楽

(15) 古代、中世の日本音楽のまとめ

(16) 三味線の伝来

(17)(18) 地歌箏曲の歴史と音楽

(19) 尺八楽の歴史と音楽

(20)(21)(22) 文楽の歴史と音楽

(23)(24) 歌舞伎の歴史と音楽

(25) 豊後系浄瑠璃の歴史と音楽

(26)(27) 長唄の歴史と音楽

(28)(29) 現代の日本音楽。日本音楽のこれから

(30) 近世、近代、現代の日本音楽のまとめ

授業時間外の学習

● 授業でとりあげた種目や作品の特徴を整理し、より深く調べること。

教科書・参考書等

● 授業時にプリントを配布する。参考書については、その都度指示する。

成績評価

● 出席状況と前期・後期末の筆記試験により評価する。

(出席状況50%、筆記試験の成績50%の配分)

科目名 日本音楽特講

対象 音楽専攻1年

履修条件

基本的には教職受講者対象。専攻科演劇専攻の履修も認める。
教職受講者・専攻科演劇専攻の受講が少ない場合はそれ以外の学生の履修を認める。

授業の概要

日本音楽が学校教育に取り入れられるようになり、学校教育の現場に立つ教員にとっても、日本音楽に対する知識や経験が必要となってきた。

具体的に教育者としての立場になった時に使える知識と三味線を弾く技術を学び、三味線を弾く事により日本音楽の音としての個性を知り、日本人として音の美しさを感じていく。日本音楽の年代を重ねた深さについても考えていく。

授業の到達目標

- ・三味線を中心に日本の楽器についての正しい知識を持つこと。
- ・西洋音楽とは違った音階を用いている日本の音を知ること。
- ・三味線について正しい扱い方・正しい姿勢を習得すること。

授業計画

- 1 日本音楽の簡単な説明と話。三味線の部位の名称を学ぶ。楽器にさわる。
- 2 三味線の扱い方。構え方。音の出し方。
- 3 長唄の説明。譜面の説明。
- 4 譜面を読みつつ三味線を弾く。

期 間 後期

担当教員 杵屋 巳織

- 5 楽器の特性を理解しつつ弾く。その折に合わせた日本音楽の説明。
- 6 /
- 7 /
- 8 /
- 9 唄の簡単な説明と発声。楽器の演奏。
- 10 /
- 11 合奏の準備。
- 12 /
- 13 /
- 14 合奏。
- 15 試験曲を演奏。

授業時間外の学習

歌舞伎の鑑賞。邦楽器を使用した演奏会の鑑賞。

教科書・参考書等

五線譜三味線曲集「三粹集」藤井凡大・編（花書院）他。

成績評価

- ・出席日数 ・授業態度 ・レポート
- A 演奏も諸事項も十分理解している。
- B 演奏も諸事項もほぼ理解している。
- C 演奏も諸事項もある程度理解している。
- D 演奏も諸事項も理解が欠けている。あるいは出席回数の足りない者。

科目名 演奏会制作法

対象 音楽専攻1年

履修条件

なるべく2013年以降、学校で義務付けられる以外にもコンサート会場、劇場に通う習慣を身につけること。

授業の概要

演奏会制作法はさほど難しいものではない。むしろ易しく、誰にでもできるものだ。

ただ何を制作し、お客様に何を伝えるかが難しく、最も大切なことである。しかもほとんどの演奏会はリスクを伴い、継続してこそ信頼を得られ、事業となるものだ。と説明すると学生達は途端に引き始める。しかし現実には現実なのである。

都内の年間演奏会数が約5千回と聞いて諸君はどう思うだろう。分析しなければならない情報だ。昔からこんなにたくさんあったのだろうか。日本の演奏会史にも触れてみたい。さらに古代ローマの一地方都市ポンペイを例に人間生活にとって何故、音楽等の芸術や娯楽が必要だったのか考察したい。

最後に、演奏会制作法は単なる技術の他に、背景である現実の音楽市場（マーケット）事情に明るくなること、また個人個人のやる気等の精神力の部分がどうしても必要なものである。究極はやはり個人個人の人間力に関わってくるのだ。

授業の到達目標

まずはクラシックコンサートにできるだけ多く連れて行きたい。音楽知識を身を持って獲得し、また世界でも有力な東京の音楽市場（マーケット）事情に少しでも明るくなっていくこと。とにかくクラシック音楽の現場になじませ、クラシック音楽に対する自信を持たせたい。

授業計画

- 1、ガイダンス
- 2、都内主要コンサートホール、劇場について
- 3、主要演奏団体、演奏家について
- 4、主要音楽主催者（音楽事業者）について
- 5、聴衆の動向について
- 6、音楽市場（マーケット）について

期 間 後期

担当教員 佐藤 修悦

- 7、音楽楽曲（使用楽曲）基礎知識（1）（プログラミングのための）
- 8、音楽楽曲（使用楽曲）基礎知識（2）（プログラミングのための）
- 9、演奏会制作工程表について
- 10、約束事と契約の重要性について
- 11、企画とチケット発売について
- 12、宣伝と販売促進について
- 13、収支予算と精算について
- 14、ヒットコンサートの作り方
- 15、まとめ

授業時間外の学習

- ◎演奏会場見学および音楽会鑑賞
- ◎演奏会スタッフ体験

教科書・参考書等

教科書：特になし。随時プリントを渡す。
参考書等：「私のオーケストラ史 回想と証言」草刈津三（音楽之友社）
「史上最強のオペラ」ジョセフ・ヴォルピー著
佐藤真理子訳・監修（インプレザリオ）

成績評価

- 授業全体の理解について、100点満点で評価する。小テスト（20点）、レポート（50点）、出席日数（30点）
- A 総合点が80点以上の者（基本的な諸事項を十分理解している）
- B 総合点が60点以上の者（基本的な諸事項をほぼ理解している）
- C 総合点が50点以上の者（基本的な諸事項をある程度理解している）
- D 総合点が49点以下の者（基本的な諸事項の理解が欠けている）

科目名 アウトリーチ概説

期 間 前期

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 永井 由比

履修条件

特になし。

授業の概要

アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉などの分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービスなどの意味で多用される。音楽でのアウトリーチというものは、演奏家が学校や施設などに出向いて、普段の生活空間（教室や音楽室）で演奏会やワークショップを行うことである。ここでは、その音楽におけるアウトリーチ活動について、音楽というソフトをどう社会に還元していくか、また、聴衆と演奏を通して感動を共有できる舞台（プログラム）や手法を模索していく。

授業の到達目標

学年や対象に適したプログラム作り。
一時間のコンサートで何を伝えたいか、また何を伝えるべきかを考え、それを生かした企画を作る。

授業計画

- 1 ガイダンス アウトリーチとは
- 2 公共ホールや自治体によるアウトリーチの評価と課題
- 3 施設や場所によつそれぞれのアウトリーチの手法
- 4 楽器紹介について①
- 5 楽器紹介について②

- 6 楽器紹介について③
- 7 学校訪問アウトリーチについて①
- 8 学校訪問アウトリーチについて②
- 9 学校訪問アウトリーチについて③
- 10 福祉施設、養護学校におけるアウトリーチについて①
- 11 福祉施設、養護学校におけるアウトリーチについて②
- 12 福祉施設、養護学校におけるアウトリーチについて③
- 13 アウトリーチにおけるワークショップの手法①
- 14 アウトリーチにおけるワークショップの手法②
- 15 まとめ

授業時間外の学習

- ・プログラミングするにあたり色々曲を調べておくこと
- ・専修楽器について構造など勉強しておくこと

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席状況、授業への取り組み姿勢、レポートなどの提出物で判断する。（出席態度50% レポート50%）

- A 総合点が80点以上のもの
- B 総合点が60点以上のもの
- C 総合点が50点以上のもの
- D 総合点が49点以下のもの

科目名 アウトリーチ演習

期 間 後期

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 永井 由比

履修条件

前期の「アウトリーチ概説」を履修した者。

授業の概要

現在、自治体や各文化会館での自主事業に置いて、学校や施設に演奏家を派遣するアウトリーチ事業が盛んに行われている。普段の生活（勉強）の場で、少人数で行われるこのコンサートは演奏者と聴衆の垣根のないバリアフリーなコンサートとして大変喜ばれる。この講座では、前期に学んだアウトリーチの手法を生かして実際にプログラミングをし、演奏発表する。

授業の到達目標

聴衆と感動が共有できるコンサート作りをする。
一時間のコンサートで何を伝えたいか、また何を伝えるべきかを考えていく。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 企画作り
- 3 企画作り
- 4 プログラム構成
- 5 プログラム構成
- 6 聴衆が参加できるコンサート作り

- 7 聴衆が参加できるコンサート作り
- 8 楽器演奏体験について
- 9 演奏発表
- 10 演奏発表
- 11 演奏発表
- 12 演奏発表
- 13 演奏発表
- 14 演奏発表
- 15 まとめ

授業時間外の学習

演奏発表に向けて個々、またはグループで練習をしっかりとしてくること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席状況、授業への取り組み姿勢、演奏発表などで判断する。（出席態度50% 演奏発表50%）

- A 総合点が80点以上のもの
- B 総合点が60点以上のもの
- C 総合点が50点以上のもの
- D 総合点が49点以下のもの

科目名 音響学

対象 音楽専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

音響学の対象は広範囲にわたる。

本科目は前期のみで回数も限られているため、「音」に関するいくつかの基礎的な部分を講義し、そういったことが実際の音楽とどう関わっているか、ということを見ていく。

授業の到達目標

「音とは何か」ということに常識と、よりいっそうの興味を持ち、自分自身の音楽や、その表現に生かせる取っ掛かりをつかんでもらえればと願っている。

期 間 前期

担当教員 岩崎 真

授業計画

以下のようなテーマを考えている。

- ・「音」の基本的性質
- ・音の三要素
- ・録音技術
- ・コンサートホールとその音響
- ・新しいテクノロジーによる音楽

前期のみの講義のため、初回はガイダンスのみとせず、ガイダンスの後、講義に入る。最初からしっかり出席していただきたい。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

「サウンドセンス」(講談社サイエンティック)を教科書として使用する。その他、必要に応じてプリントを配布する。

成績評価

以下の順で評価対象とする。

- 1 出席
3/4以上の出席が必要。
遅刻は15分程度まで、それ以後は欠席扱い。
- 2 平常の受講態度
出席カードに関する不正行為、私語等により講義を妨げる者は不可とし、以後の講義への出席は認めない。
毎年何人が該当者がいる。あなどらないこと。
- 3 前期末に行う試験、もしくはレポートの評価。
詳しくは最初の講義時間内で説明する。

科目名 ディクシオン (イタリア語)

対象 音楽専攻1年

履修条件

特になし。
声楽専修は必修。

授業の概要

一言葉と音楽の密接な関係—歌を学ぶ者にとって、この研究は大変重要なことである。ただ、難しく考えるのはよそう。まずは、明るく美しいイタリア語に親しみ、詩を読み表現する。そして楽譜を眺めてみる。そうすると、色々なことが発見できる。その発見をもとに皆さんと歌唱表現がさらに豊かになることを願いつつ、イタリア歌曲を中心としたディクシオンの学習を行う。声楽専修の方だけでなく、伴奏の勉強をしている方も一緒に学ばれることを期待する。

授業の到達目標

作品にふさわしいイタリア語の歌詞の朗読ができ、実際に音楽の中でそれを理解し表現できることを目指す。

授業計画

1. イタリア語の音に慣れ、親しむ
2. 正しく明確な発音をする
3. 単語の意味を考え表現する
4. 繰り返しの表現を学ぶ
5. 音節の数、押韻を考える

期 間 前期

担当教員 井上 由紀

6. 強調すべき音節、単語を考え表現する
7. 表現の速さや間を考える
8. レチタティーヴォの学習
9. “
10. レチタティーヴォの発表
11. 歌詞と音のつながりを考える
12. 伴奏者とのコミュニケーションをはかる
13. “
14. 鑑賞
15. まとめ

☆講義内容に関しては、受講生の理解度のみで、前後することがある。

☆取り上げる曲については、受講生の声種を考慮し、その都度選ぶ(イタリア古典歌曲が中心)。

授業時間外の学習

事前に配布される楽譜・詩によく目を通し、どのような内容の曲なのかを考えること。また授業で学習したことの復習に努めること。

教科書・参考書等

授業時にその都度指示、プリントを配布する。

成績評価

- A 基本的な諸事項を十分に把握し、発表ができる
 - B 基本的な諸事項をほぼ把握し、発表ができる
 - C 基本的な諸事項の理解に欠け、適切な表現ができない
 - D 基本的な諸事項を理解せず、適切な表現ができない
- なお、出席日数、授業に取り組む姿勢、中間発表・学期末朗読試験の成績を総合的に評価する。

科目名 S. H. M. I

期 間 通年

対 象 音楽専攻1年

担当教員 福田、池田・坂田晴

履修条件

音1必修。
自分なりの能力を向上させる努力を、常に応用すること。
遅刻をせずに、きちんと出席すること。

授業の概要

Solfège (S)、Harmony (H)、Melody (M) を中心に、楽譜を初見で視唱・視奏・視読し、あるいは、演奏され響いている和声や旋律を正しく聴き取り音符化することを通して、音感及び音楽性を訓練する。音楽の三要素である、メロディ・ハーモニー・リズムを真に理解し、表現に結びつけられるよう、多岐にわたる方法と課題の実践を通して学ぶ。

上記の視点に立ち、「S.H.M.I」は基礎力充実を図る。レベル別クラス編成に分けて授業を行う。

授業の到達目標

音楽実践に必要な基礎的能力を高め、幅広く優れた音楽性を身につけさせる。

授業計画

入学後最初の授業日に、クラス分けテストを一斉に実施する。授業は、各クラスごとに、学生それぞれの能力・状況に対応した内容及び進度をとる。より適切なクラスへの移動が可能となるように、前期の終わりに、再びクラス分けテストを実施する。通年の授業計画については、漠然とした内容を記すが、前述のとおり各クラスで異なる。

- ・正しい楽譜の書きかた
- ・リズム(音価)の正しい理解
- ・多様な拍子の理解
- ・正しい音程を身につける

- ・初見視唱の練習
- ・音楽的なフレーズを身につける
- ・長調と短調の理解
- ・メロディーの書き取り
- ・二声、三声等同時に鳴る音の認識
- ・和音の種類の見分け
- ・四声体の書き取り、その重唱
- ・多様な調への挑戦
- ・旋法や様々な音階による音楽にふれる
- ・移調奏
- ・試験に向けた練習

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

特にないが、クラスの担当教員から指示される場合もある。

成績評価

後期に実施する一斉テストで、単位評価する。(出席は2/3以上満たすことが必須)

学年末に実施する一斉テストで単位評価する。

S・H・M各100点の合計300点満点を100点に換算する。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が65点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 合唱

期 間 通年

対 象 音楽専攻1年

担当教員 樋本 英一

履修条件

本授業は必修科目である。音楽大学で、なぜ「合唱」が必修であるかを考え、熱意、意欲をもって受講すること。

授業の概要

合唱作品とその演奏を通して、合唱及び声楽において息の線、そのゆれ、そして言語の発音、意味がいかにその作品を演奏する上で重要かを知り、その上でアンサンブルすることの意味、楽しさを味わう。その過程に合唱作品を練習、指導していく方法、要領が含まれる。

授業計画

- 1 パート分け及び平易な作品による導入
- 2-4 ルネッサンスあるいは古典期ごろの宗教作品
- 5-7 イタリア語による作品
- 8-10 ドイツ語による作品
- 11-15 日本の合唱作品①
- 16-18 日本の合唱作品②
- 19-21 日本の合唱作品③
- 22-24 日本の合唱作品④
- 25-27 日本の合唱作品⑤
- 28-30 ポップス系の合唱作品

授業時間外の学習

授業で不十分であった譜読みは各自で補うこと。
配布されたコピー譜を各自製本すること。

教科書・参考書等

授業用コピー譜をその都度配布。

授業の到達目標

詞(テキスト)、音楽に即した息づかいをし、それを人と合わせていくこと、その楽しさを知る。

成績評価

出席状況を重視する。

科目名 オーケストラ・スタディA/B

対象 音楽専攻1・2年

履修条件

弦楽器専修者は必修である。

授業の概要

後期「合奏」授業への準備段階とする。

- ①オーケストラプレイヤーとしての心がまえ、事前準備の重要性の認識。各自の練習、スコアの用意、CDなども聴き、作品を理解して臨む。
- ②演奏するためのテクニックやアンサンブル態力を習得する。パートごと、時に一人ずつの演奏を課しながら、個人、セクションの責任を高める。それぞれのパートを把握し、ひとりひとりがオーケストラ全体を捉えられるようにする。

授業の到達目標

オーケストラを通して、個人の、そしてアンサンブルの技術の向上。全員で1つの作品を作り上げる喜びを知る。

授業計画

曲目は4月に発表する。

11月定期演奏会（オーケストラ）の演奏曲目を課題とする。

毎回の練習スケジュールを作り、進める。しかし、進行状況により、適宜スケジュールを調整するものとする。

期間 前期

担当教員 奥田 雅代

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であれば、コンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意すること。

学期末に実技試験を行う。（9月を予定）

- A 授業内容をよく理解して自らのパートのみならず、他のパートをしっかりと把握してアンサンブル奏者としての力を発揮できる者
- B 試験時、ところどころ技術向上、改善努力が必要に思われるが、後期合奏においてアンサンブル能力向上が見込まれる者
- C 後期合奏授業においてなんとかついていけるレベル、もしくは相当の個人的努力を求められる者
- D 後期合奏授業についていける能力が見込まれない者、遅刻、無断欠席をした者

試験の結果により後期合奏授業へのレベルが達していないと思われる者には追試験を行い、場合によっては個人的指導も行う、合奏授業に向けての能力を引き上げる機会を持つ。

科目名 合奏A/B

対象 音楽専攻1・2年

履修条件

前期授業「オーケストラ・スタディ」で単位認定を受けた者。弦楽器専修者は必修である。弦楽器奏者以外についてはオーディション等で選出された者。

授業の概要

黒岩英臣氏を指揮者にお迎えして、11月の定期演奏会本番に向けて、約6日間の集中リハーサルが行われる。

個々の力が合わさると、素晴らしい響き、音楽が生まれることを体感してほしい。演奏会当日まで、各自、練習・準備をすること。

授業の到達目標

オーケストラのリハーサルを通して、全員で演奏会に向けて、それぞれの曲の完成度を高めていく。

期間 後期集中

担当教員 奥田 雅代

授業計画

- 第1回 オーケストラガイダンス（オーケストラ授業に対する心がまえ、様々な準備などについての確認）
- 第2回～第7回 黒岩氏とのリハーサル
定期演奏会当日 ゲネプロ 本番
- 第8回 演奏会録画を鑑賞しながら、演奏について検証、反省を行い、意見交換の場とする
毎回のリハーサルスケジュールは、進行状況により、指揮者の判断で適宜調整するものとする。

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であればコンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意のこと。演奏だけではなく、譜面台や椅子の準備も含めて成績評価の対象とする。

科目名 管楽器基礎（呼吸法）

期 間 前期

対 象 音楽専攻1年

担当教員 三塚 至

履修条件

管楽器専修必修。
他専攻学生の履修も可。

授業の概要

私達人間が生まれたばかりの時は、小鳥達のようにその小さな体からは想像もできない程、よく響く、大きな声で泣いていたはずである。それは、私達が成長するに従いつつしか忘れてしまった「自然な呼吸」を生まれて間もない頃は「無意識」に営んでいたからではないだろうか。

この授業では、こうした「自然な呼吸」、つまり、のどを開けて（オーブンスロート）、腹筋、背筋、胸筋及び腰筋を、バランス良く使った呼吸（主に腹式呼吸）をストレッチ体操等を取り入れ、体を動かすことによって正しく理解していきたい。

またこれと併行して、実際に声を出して歌うことで、より響きのある、美しい音を目指したい。楽器を用いて演奏する人は特に、歌声が変わると、音色も変わることを実感してほしいところである。

授業の到達目標

演奏家として必要な体作りができたか。
体の使い方を体得できたか。

授業計画

- 1) 授業ガイダンス。
※ 毎回、ストレッチ、呼吸筋トレーニング、発声、歌唱をおこなう。
- 2) 正しい姿勢と呼吸と呼吸筋の働きについて。喉を「あける」練習。
- 3) 呼吸筋強化1（上半身）。2段階呼吸、息を「吐ききる」事の徹底。
- 4) 呼吸筋強化2（下半身）。ベルカントモードをつかっ。
- 5) 呼吸筋強化3（深層筋）。15段階呼吸1（10段階まで）。
- 6) 15段階呼吸2（15段階まで）。
- 7) 共鳴について。
- 8) 横隔膜、呼吸筋を意識した発声トレーニング。

- 9) 頭声、胸声、地声、ファルセットについての考察。
- 10) 浅呼吸、深呼吸と歌唱への応用。
- 11) 表情筋、舌と呼吸筋の関係。
- 12) 呼吸を意識した子音、母音の発音。
- 13) これまでの復習、まとめ。
- 14) 歌唱テスト準備（全員が一人ずつ歌い、改善すべき点をチェックする）。
- 15) 歌唱テスト。

授業時間外の学習

正しい呼吸は音楽家としての体づくりの基本である。
毎日必ずトレーニングする癖をつけること。

教科書・参考書等

必要な時は、こちらで用意する。
マットを使うので、動きやすい服装と内履きを用意すること。

成績評価

平常点：出席を含め、授業に能動的参加をしているか。努力はみられるか。成果はあったか。

実技テスト（個人歌唱）：姿勢、呼吸が正しくおこなわれているか。呼吸筋が正しく動いているか。正しい発声を目指しているか。その他、音楽家としての表現力、集中力をみる。

以上を総合的にみて評価する。

- A 上記の条件を全てにおいて十分に満たしていると認められる者。
 - B 上記の条件を一定のレベルにおいて満たしていると認められる者。
 - C 上記の条件にばらつきがあり、全体にやや不足していると認められる者。
 - D 上記の条件で満たしている項目が半分以下と判断される者。
- ※欠席は減点の対象となるので注意すること。出席日数が足りない場合は不可とする。

科目名 声楽アンサンブルA/B

期 間 通年

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 松井 康司

履修条件

Aは男子のみ必修（日本音楽以外）で、女子は履修不可。
Bは男子（日本音楽以外）及び声楽専修の女子は必修である。
他専修、他専攻の学生（特に男性）の積極的な履修を希望する。

授業の概要

この授業では、日本人作曲家による混声合唱曲を取り上げる。曲は未定だが、日本語の美しさとハーモニーの関係を深く探っていく。

曲目は、履修人数を考慮し決める。

授業の到達目標

声によるハーモニー感覚を身につける。
日本語による歌唱表現を身につける。

授業計画

11月の定期演奏会に向けて授業を進めていく。本番前には臨時練習を組むことがある。

- 第1回 今年度の履修人数の確認とレベルチェック
- 第2回 簡単な混声合唱曲に取り組み（定期演奏会演奏曲を決定）
- 第3回～第15回 定期演奏会演奏曲の音取り練習
- 第16回～第24回 定期演奏会演奏曲を音楽的に深めていく
- 第25回～第30回 オペラ実習試演会に向けての合唱練習

授業時間外の学習

授業で言われたことを確認する復習をすると共に、次回授業で取り上げる曲の音取りをしておくこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

- A 授業に積極的に参加し、強い意識を持って本番に取り組んだ者。
- B 授業への欠席はあったが、強い意識を持って本番に取り組んだ者。
- C 授業への欠席があり、本番への意識が低かった者。
- D 授業への欠席が目立ち、本番の舞台に立つことができなかった者。

科目名 ギター・アンサンブルA / B

期 間 通年

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 佐藤 紀雄

履修条件

ギター専修者必修。

授業計画

- 1～5回 カルメン組曲
- 6～10回 ロッシーニ『どろぼうかささぎ』序曲
- 11～15回 バントウクイッカン
- 16～20回 ヴィバルディ四季より『春』
- 21～25回 ラベル・ワルツ
- 26～30回 佐藤敏直『風と光と空』
出席状況、事業態度を重視する。

授業の概要

古典から現代までのギターアンサンブル作品をオリジナル曲、編曲作品に加え学生自身の作品、学生自身による編曲作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの習得過程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会を得ることは特に貴重である。将来、様々な楽器とのアンサンブルや、新しい作品の演奏の際にスムーズに演奏を達成できるよう、様々な様式のアンサンブルに慣れ親しんでおく。さらにアンサンブルを通してギターという楽器の独自の表現力を各自が知ることとなる。

また将来、多様な場面に応じて、自在なアンサンブルと形態で応えられるよう簡単なアレンジも学生自身が行う。

授業時間外の学習

授業で学ぶ作品の原曲を事前にCDで聴いたり、スコアを見て予習する。またパート毎に練習しておく。

授業の到達目標

年2回の発表会に向けて、アンサンブルの課題曲の演奏を完成させる。

教科書・参考書等

開講時に楽曲を与える。
音楽史、楽典書をその都度参考。

成績評価

- A 100～75点以上
- B 75～55点
- C 55～41点 出席75%以下
- D 40点以下 出席50%以下

科目名 うたA / B

期 間 前期

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 今藤 美知央

履修条件

日本音楽専修は必修。
邦楽(長唄・三味線)に興味がある者。

- 5 / 日本人の豊かな感性について研究
- 6 / 唄について、語りについて
- 7 / 自然現象を三味線で表現すると…
- 8 / 歌舞伎と長唄の解説
- 9 / 指揮者不在で何故演奏ができるのか
- 10 / 長唄から見る日本の歴史
- 11 / 新しい邦楽の紹介
- 12～15 まとめ(上記の講義内容は前後することがある)
※希望があれば、三味線の実習を含む。

授業の概要

「邦楽」ってなあに？

吸引力のおこない掃除機の優れた部分はすぐに説明できても、桐箱に入った茶碗の良さはなかなか説明しにくい。しかしじっくり研究していくと、見えなかった部分が見えてきて、見れば見るほど奥深い心うたれる美が伝わってくる。「邦楽」はそれに似ている。

日本人ならではの感性豊かな「邦楽」を理解し、今後自分の芸術表現にも活かせるよう、技術を学ぶ。前年度から中学用教科書にとりあげられている「勸進帳」を学ぶ。

授業時間外の学習

授業中課題があれば、予習復習に努めること。

授業の到達目標

自分なりに邦楽(長唄)を紹介できるようになること。
技術をマスターすること。
情景を大切にしながら音楽的表現ができること。きれいな発音で唄うこと。

教科書・参考書等

参考資料、譜面等は授業時に配布する。配布されたものは、毎回持参すること。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 発声について、間のとり方について、課題曲についての解説と稽古
- 3 課題曲の稽古を中心に西洋音楽との違いを解説
- 4 / 長唄の特徴を解説

成績評価

- 出席日数、授業中の様子、課題に対する成果等を総合的に評価する。
- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 楽器法（和楽器）A／B

対象 音楽専攻1・2年

履修条件

特になし。
日本音楽専修は必修。

授業の概要

邦楽器（箏、三味線、尺八、笛、琵琶）について各楽器の特徴、仕組み、音律、音域等を知る事はアンサンブルする上で重要と考える。各楽器を知った上で、相手の音を聴き、自分の音を重ね合わせる事により、レベルの高いアンサンブルにつながると考える。歴史的な事も含めて、楽器を演奏したり、演奏を聴きながら邦楽器を知り、知識を深め、目標に近づきたい。

また、洋楽専攻の学生にとっては、洋楽と邦楽の共通点、相違点を実感する事は重要と考える。

授業の到達目標

各楽器を知り、アンサンブル演奏に活かす。又作曲、編曲する知識とする。教育現場にも役立てたい。邦楽、洋楽の共通点、相違点を実感してほしい。

期間 前期

担当教員 滝田 美智子

授業計画

- 1 授業ガイダンス（箏を使って邦楽器の特質を考える）
 - 2～6 〈箏〉“さくら”を題材にする
正しい調弦法、奏法等習得
 - 7～10 〈三味線〉三味線（非常に多くのジャンルがある）の種類等を知りながら“さくら三下り”を題材に演奏
 - 11 尺八について
 - 12 笛について
 - 13 琵琶について
 - 14～15 各楽器のアンサンブルを実際に演奏したり聴いたりしながら総まとめ。質問等、受け付けながらディスカッション。
- ⑤各楽器の回数には変更ないが、順番に変更有る可能性有り。

授業時間外の学習

前回授業の復習を必ず行なうこと。

教科書・参考書等

各楽器ごとにプリント配布する。

成績評価

出席状況、授業での積極性を重視する。試験なし。

- A 総合点90点以上
- B 総合点80点以上
- C 総合点70点以上
- D 総合点69点以下

科目名 初見演奏（基礎）

対象 音楽専攻1年

履修条件

ピアノ専修者に限る。（必修）

授業の概要

バロックから現代にいたる作品をテキストとして、初見奏で求められる正確な読譜力、想像力、集中力を習得し、ピアノ演奏の基礎能力を高めていく。

楽譜を丁寧に読み、正確で表現をともなった演奏ができるよう実習する。

毎回の授業でなるべく多くの演奏ができるよう、積極的に参加してほしい。

連弾や二台ピアノの作品も随時取り入れて、アンサンブルの経験も積んでいく。

授業の到達目標

短い時間で曲の構成や特徴を把握し、ただ音を弾くばかりではなくテンポ、フレーズ、ペダリングなどにも考慮して、表現豊かな演奏ができるようになること。

期間 前期

担当教員 吉田 真穂

授業計画

- (1) ガイダンス
- (2) 小品の演奏①
- (3) 小品の演奏②
- (4) 連弾の小品
- (5) 二台ピアノの小品
- (6) バロックの作品①
- (7) バロックの作品②
- (8) 歌曲（声楽作品）
- (9) 日本の作品
- (10) 古典派の作品①
- (11) 古典派の作品②
- (12) 近・現代の作品①
- (13) 近・現代の作品②
- (14) 連弾、オーケストラの編曲
- (15) まとめ

授業時間外の学習

授業で配布したテキストでの復習、また、指示する曲集、曲目などを参考に予習するよう努めてほしい。

教科書・参考書等

その都度配布。

成績評価

- A 欠席1/3以下で、授業態度および試験の成績が80点以上の者
- B 欠席1/3以下で、授業態度および試験の成績が65点以上の者
- C 欠席1/3以下で、授業態度および試験の成績が50点以上の者
- D 欠席1/2以下で、授業態度および試験の成績が50点未満の者

科目名 伴奏 A / B

期 間 前期集中・後期集中

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 荻野 千里

● 履修条件

なし。

● 授業計画

各々の実技担当教員のレッスン計画による。

● 授業の概要

前期・後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表(実技試験・学内演奏会・修了演奏会)をもって各々単位認定を行う。“伴奏受講票”を使用のこと。

● 授業時間外の学習

「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。

● 教科書・参考書等

なし。

● 授業の到達目標

伴奏の役割を学びつつ、また、アンサンブルの楽しみも感じてほしい。
それらを試験、演奏会という場につなげるようにする。

● 成績評価

決められたレッスン回数をクリアし、演奏発表を行なった場合は「A」と認定する。
上記条件を満たしていない場合は「D」と認定する。

科目名 海外特別演習 A / B

期 間 前期集中

対 象 音楽専攻1・2年

担当教員 松井 康司・荻野 千里

● 履修条件

研修旅行に参加する意志のある者。

● 授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 旅行会社による説明会Ⅰ
- 3 訪問都市についての勉強会Ⅰ
- 4 〃 Ⅱ
- 5 旅行会社による説明会Ⅱ
- 6 訪問都市についての勉強会Ⅲ
- 7 受講曲による試聴会
- 8 研修旅行

● 授業の概要

今回の研修旅行は、ドイツを訪れる。前半は、ドイツ・リュエックにてレッスンを受け、その後、ハンブルク、メルヘン街道の町として有名なブルーメン、ハーメルンをはじめ、ケルン、ボン(ベートーヴェン生誕、シューマン終焉の地)等を訪れる。また、各都市にて、オペラ・コンサートの鑑賞も予定している。

● 授業時間外の学習

訪れる町の歴史や、関係する作曲家について深く学んでおくこと。

● 教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

● 授業の到達目標

充実した研修旅行にするため、実技面において、レッスンに向け、十分な事前準備を心がける。

● 成績評価

- A 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に積極的に参加した者。
- B 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に参加した者。
- C 事前の授業に出席し、研修旅行に参加した者。
- D 事前の授業に出席不良、研修旅行に参加できなかった者

科目名 特別演習 A / B

対象 音楽専攻 1・2年

履修条件

A・Bともに全専修必修。

授業の概要

特別講座（公開講座）、学内演奏会、定期演奏会、卒業演奏会の4つが特別演習の内容である。特別講座はプロの演奏家による演奏会を中心とする。定期演奏会は2夜で構成され、オーディションにより出演者を決める。学内演奏会は本科生は成績優秀者の出演、専攻科生は必須で全員出演する。卒業演奏会も成績優秀者による演奏会である。

音楽の勉強は自分自身の毎日の練習、訓練の積み重ねが大切なのはもちろんのことだが、現役で活動している音楽家や、一緒に学んでいる学生の演奏を聴くことからの得るものの大きさも是非認識して欲しい。

授業の到達目標

様々な演奏、楽曲を聴くことにより、音楽の理解力をさらに深める。

期 間 通年

担当教員 松井 康司・奥田 雅代

授業計画

年間、4回の特別講座、3回の学外演奏会、6回（または7回）の学内演奏会が行われ、それぞれのジャンルに出席義務回数が定められている。

日程、演目の詳細はオリエンテーション時に発表する。

また日程は変更となる場合もあり、常に掲示を確認のこと。

授業時間外の学習

ゲストの音楽家や、演奏される楽曲について調べ、理解を深めること。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

各公演の開演前、終演後に行う出席チェックによる出席状況にて評価。

- A 3つのジャンルの出席義務回数を満たし、さらにそれ以上の出席回数認められた者
- B 3つのジャンルの出席義務回数を満たした者
- C 3つのジャンルの出席義務回数を満たさず、担当者と相談の上、他のジャンルへの複数出席を条件とされた者
- D 出席回数不足の者

科目名 コラボレイト実習 A / B

対象 音楽専攻 1・2年

履修条件

専攻主任からの指名により履修できる。

授業の概要

専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。コラボレイト実習受講票を使用のこと。

なお、単位認定は、前期・後期、1回ずつを限度とする。

授業の到達目標

演劇公演等に演奏者として参加することにより、演劇等における音楽の在り方を考え、学ぶ。

期 間 前期集中・後期集中

担当教員 松井 康司

授業計画

各々の公演担当教員の稽古計画による。

- 第1回 打ち合わせ
- 第2回 稽古への参加 I
- 第3回 稽古への参加 II
- 第4回 稽古への参加 III
- 第5回 本番

稽古への参加は1回につき、授業3回分に相当。本番は授業5回分に相当。

授業時間外の学習

演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督の要望に応えるよう練習をしていかななくてはならない。

教科書・参考書等

公演台本等、各公演により異なる。

成績評価

- A 稽古に積極的に参加し、本番での演奏が、公演の質を高めた者
- B 予定された稽古に参加し、本番で力を発揮した者
- C 本番で演奏はしたが、稽古への参加が積極的ではなかった者
- D 専攻主任の指名による授業のため不適格者はいない

科目名 音楽理論 [和声] Ⅲ・Ⅳa

対象 音楽専攻2年

履修条件

日本音楽専修以外必修。
「音楽理論 [和声] Ⅰ・Ⅱ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

2年次においては、借用和音(準固有、副属和音)、サブ・ドミナント諸和音(副七の和音、四度の付加6)と各種の変化和音(増六、ドリアの四度、ナボリの6の和音)を扱ったバス課題の実施を通じて、より多様で高度な声部進行法の練達を目指す。さらに、それ等の和音を含み、かつ近親転調を伴うソプラノ課題の実施によって、2年間に学んだ和声法の総合的な習熟をはかる。

授業の到達目標

1. 借用和音や変化和音などの多彩な和音を扱ったバス課題を確実に実施できる力を養うこと。
2. 転調を含むソプラノ課題の実施を通して、和声進行の本質が把握できる素養を身に付けること。

授業計画

和声Ⅰ・Ⅱの内容を継続的に確認、把握しつつ、以下の項目において課題を出題し、さらに高度な和声法の習熟、練達を計る。

第1～4回 準固有和音(長調における、同主短調の和音の借用)
 第5～9回 借用のドミナント和音(五度五度の和音を中心に)
 第9回～14回 五度五度の下方変位の和音
 第15回 前期筆記試験
 第16～19回 二度の七、四度の七の和音
 第19～23回 ドリアの四度の七、ナボリの六の和音、付加六、付加四六の和音

期 間 前期・後期

担当教員 平井 正志

第24～29回 近親転調を伴うソプラノ課題
第30回 後期レポートの提出(授業時間内に内容の検討を行う)

授業時間外の学習

講義の回と実施した課題内容を添削する回を交互に行う。出題された課題は必ず授業に先立って実施し、かつ鍵盤楽器によって実際に音を出し、内容を確認、点検しておくこと。
止むを得ない事情で欠席した場合は、講義内容と課題を他の受講者から入手するなどして自習しておくこと。

教科書・参考書等

教科書:課題を配布
参考書等:和声「理論と実習」第一巻、第二巻 音楽之友社(執筆責任 島岡 譲)

成績評価

前期々末に筆記試験を行い、後期々末に最終実施課題をレポートとして提出する。
筆記試験およびレポートの成績を元に下記の評定を行うが、単位認定の条件としては、出席状況と課題の実施実績についても勘案し、総合的な判断によって可否を決定する。

A 80点以上:重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して習熟度が高い。
 B 60点～:概ね重要な公理が理解できているが、課題の実施に際しては練達不足が見られる。
 C 50点～:重要な公理の理解不足が散見され、課題実施に向けた努力が足りない。
 D 49点以下:重要な公理が理解出来ておらず、和声法を修めたと認めがたい。

科目名 音楽理論 [和声] Ⅲ・Ⅳb

対象 音楽専攻2年

履修条件

音2(日本音楽専修以外)必修。
和声学は途中が抜けると理解できなくなるので、欠席、遅刻をしないこと。
与えられた課題を必ず実践すること。

授業の概要

2年次のⅢ(前期)・Ⅳ(後期)は1年次で学んだことを土台にして、さらにナボリやドリア等の美しいサブドミナント系の和音、同一調内から他の調への転調、非和声音による不響和な響きの加わる美しさ、などを学ぶ。後期の中ごろから、四声体連結からはなれ、2年間で学んだ和声が過去の名曲の中でいかに効果的に使われているかを各自で分析する。

授業の到達目標

2年間という短い期間に授業で和声学のすべてを習得することは不可能に近い。が、演奏家にとっては四声体の連結としての和声学にこだわる必要はないと考える。それよりも名曲の中でいかに効果的に和声進行が図られているかを見定める力量こそ和声学を学んだ甲斐がある……というものだ。耳と心を澄まし、学んだ知識と結びつけることこそ大切である。

授業計画

1～2回 1年次に学んだことの確認(教師の引き継ぎによる)
 3～4回 サブドミナントの諸和音

期 間 前期・後期

担当教員 福田 恵子

5～7回 ドリア ナボリ 増六の和音等
転調とは
調名の判定 調の要のドミナントの和音 借用和音

8～9回 遠隔調も含めた転調課題

10～12回 非和声音(和声外音)の種類と使い方

13～14回 非和声音を総合的に使用 同型反復

15回 授業の総括

16～18回 総合練習

19～20回 名曲の中での和音の分析法

21～22回 Bach の和声法

23～24回 Mozart Beethoven

25～26回 Schubert Chopin

27～28回 Schumann Brahms 等

29回 2年間の総括

30回 筆記による授業の総括

授業時間外の学習

授業時に与えられた課題を必ず実践すること。

教科書・参考書等

プリントを配布するので、和声専用のファイルを作ることをお勧めする。

成績評価

宿題等の平常点および筆記試験を行い評価する。

A 80点以上
 B 60点以上
 C 50点以上
 D 49点以下

科目名 対位法 a

対象 音楽専攻 2年

履修条件

特になし。

授業の概要

西洋音楽における対位法の歴史的発展のプロセスと技法、とりわけ J.S.バッハの音楽語法を《インヴェンションとシンフォニア》を主なテキストとして、それを他のバッハ作品及びバッハ以前と以後の主要な対位法を用いた作曲家・作品のテキストと適宜交差させつつ、実際の試奏を通して検証する。バッハ自身が曲集の巻頭に記した、《単に良い音楽^{インヴェンション}を得るだけでなく、それを巧みに展開する技術と作曲することの喜びを強く予感するようになるための方法》を会得し、対位法の宇宙、その無限の音楽的創意に少しでも触れられれば幸いである。

授業の到達目標

参照すべき知識としての対位法理解に留まらず、演奏家として求められる対位法的感覚（対位法的楽曲の演奏へのアプローチ）を同時に養い、学ぶことを目的とする。

授業計画

1. ポリフォニーとホモフォニー、14～20世紀の対位法的テクニクの推移と特徴
- 2-3. 単一モチーフによる推移と発展 BWV.772 C-dur
- 4-5. カノン技法 BWV.773 c-moll
6. 通奏低音と終止構造 BWV.774 D-dur
7. 対位法の諸相① 後期ルネッサンスの対位法1500-1600 (Lasso)
- 8-9. コラル、オルガン小曲集、同一モチーフによる複数曲制作のプロセス BWV.775 d-moll
- 10-11. 修飾と連打の構造 BWV.776 Es-dur

期間 通年

担当教員 石島 正博

12. 対位法の諸相② モテット、カンツォネット、ファンタジア Josquin des Prez、Palestrina、Luis de Victoriaの音楽
13. クロマティズム BWV.777 E-dur
- 14-16. 受難曲、ミサ、フィグーラ BWV.778 e-moll, BWV.779&795 f-moll
17. 対位法の諸相③ フーガ（平均率クラヴィア曲集）
- 18-19. 協奏曲（ブランデンブルク協奏曲etc.） BWV.780 F-dur
- 20-21. 変奏曲（ゴールドベルク変奏曲etc.） BWV.781 G-dur
22. 対位法の諸相④ Monteverdiの音楽
23. 音階法、流れ、引用法 BWV.782 g-moll
24. 拍子と性格（組曲の構造） BWV.783 A-dur
- 25-26. G.Frescobaldi、Corelli、Couperin、Rameauの音楽
27. ヘンデルとスカルラッチェ BWV.784 a-moll
28. 音のジオメトリー BWV.785 B-dur
29. 数の神秘（3度循環、7と11の象徴数） BWV.786 h-moll
30. 対位法の諸相⑤ バッハと20世紀の対位法（Hindemith、Bartok、Stravinsky）

授業時間外の学習

毎回の講義で使用する楽譜および配布プリント（原則として、講義の前週に配布）を予め読譜（試奏）または予習しておくこと。

教科書・参考書等

バッハ：インヴェンションとシンフォニア及び、講師が配布するプリント。

成績評価

出席状況および期末レポートの内容により評価する。（成績評価における出席状況と期末レポートの配分の目安：出席状況50%、期末レポート50%）
原則として1/3以上（忌引、教育実習等を除く）欠席した者およびレポートの評価Dの者は単位不認定とする。

科目名 対位法 b

対象 音楽専攻 2年

履修条件

和声学初級程度の力があること。
自分で譜面を書く意欲があること。
対位法的楽曲に興味があること。

授業の概要

1. 主としてJ.S.バッハの対位法的楽曲により、そのスタイルを学ぶ。
2. テーマと対旋律を10～20作る。
3. そのうちの一つを選んで、2声部の対位法的楽曲を作る。（ピアノ曲として）

授業の到達目標

上記の曲を少なくとも一曲、できれば二曲を作る。

期間 通年

担当教員 新実 徳英

授業計画

1. ガイダンス
2.]
3. 主としてバッハの対位法的楽曲のスタイルを学ぶ。
4.]
5.]
6.]
7.]
8.]
9.]
10.]
11.]
12.]
13.]
14.]
15.]
16. 楽曲はたとえば次のように構成する。
17. 一つのテーマ・対旋律をTとする
18. 主調でのT¹⁾→嬉遊部→VI調でのT
19. 2)嬉遊部→IV調でのT³⁾→嬉遊部
20. →II調でのT⁴⁾→嬉遊部
21. 5)]
22. 属音上での嬉遊部→再現部=
23. 主調でのT⁶⁾→主音上での嬉遊部=
24. コーダ
25. 1)、2)、3)、4)の嬉遊部は次の調への転調部分である。
26.]
27. 5)、6)は各々属音、主音の上にテーマが展開される部分である。
28.]
29.]
30. 総括

授業時間外の学習

授業時に指定された楽曲を聴くこと、弾くこと。

教科書・参考書等

J.S.バッハのあらゆる対位法的楽曲。

成績評価

対位法的楽曲を少なくとも1曲は作成し提出すること。原則として欠席が7回を超えた学生には単位を認定しない。

科目名 楽器法

対象 音楽専攻2年

履修条件

特になし。

授業の概要

人が音を奏でる手段としての楽器は太古から今日にいたるまで実に多くの楽器が作られてきた。伝達、信号として登場した楽器は次第に歌や踊りの伴奏として使われ、やがて音楽を伝える主役楽器となった。授業では、現在の管弦楽などで使われる楽器について講義するが、その楽器の原点である民族楽器についてもふれる。木管、金管、打楽器、弦楽器に分類して、その誕生と現在の役割、使用楽曲、メンテナンスなどについて講義する。

これら楽器の正確な知識は、あらゆる音楽に携わるすべての行動に必要な不可欠であろう。

授業の到達目標

- ・ 楽器というものが、どのように分類され、どのような歴史をたどって、現在使われているかを理解する。また作編曲、器楽指導に必要な楽器の基礎知識を学習する。
- ・ 気鳴楽器、弦鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、機械電気楽器の5つの楽器体系を理解し、全ての楽器がこれらに分類されることを理解する。

授業計画

[進行予定]

木管楽器…フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォン
金管楽器…トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ

期間 前期集中

担当教員 大澤 健一

弦楽器…ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス
打楽器

体鳴楽器…シンバル、トライアングル、ドラ、鍵盤楽器他

膜鳴楽器…太鼓、ティンパニー、タンバリン、ボンゴ他

気鳴楽器、弦鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、機械電気楽器について

[ポイント]

- 1 構造…発音原理、楽器の材質
- 2 音域…調性、最低音、最高音、適切音域
- 3 特色…得意な奏法、不得意な奏法
- 4 同属楽器…調性の異なる同属楽器
- 5 歴史…楽器の誕生について
- 6 楽曲…この楽器を説明するのに適した楽曲
- 7 メンテナンス…楽器の取り扱い上での注意点

授業時間外の学習

室内楽、管弦楽のコンサートを鑑賞し、使用される各楽器の特徴を調べておくこと。

教科書・参考書等

参考プリントを授業で配布する。

成績評価

出席状況50点、受講態度20点、質疑応答30点で評価する。

- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 音楽史特講 A

対象 音楽専攻2年

履修条件

特になし。授業内容に興味・関心をもち、積極的に参加する学生は、専攻を問わず大いに歓迎する。

授業の概要

テーマは「近現代の西洋音楽の諸相」。フランスの作家ポール・ヴァレリーは、近代を「相反する様々な思考や感覚が共存する時代」と定義した。これは単に時代に限って語られるものではなく、近代における個々の人間、そして音楽の在りようにも深く共通する。本講義では、「授業計画」に挙げたように、さまざまな「～ism」が氾濫した19～20世紀の西洋音楽の雑な在りようを、文化史の観点から多角的に検討していく。西洋音楽史において大きなターニング・ポイントとなった近・現代という時代と、その音楽に関する知識を深め、他の時代の音楽、文化・芸術と比較できるようにすることで、受講生が音楽について考えるための基礎知識を豊かなものにする。

授業の到達目標

19～20世紀の西洋音楽史について一定の知識を身に付け、西洋芸術音楽の理解をより立体的にする。

授業計画

- 1 導入
- 2 フランス革命と音楽
- 3 ロマン主義
- 4 標題音楽／絶対音楽
- 5 ヴァグネルismus
- 6 印象主義

期間 前期

担当教員 関野 さとみ

- 7 象徴主義
- 8 神秘主義
- 9 表現主義
- 10 音楽における「前衛」
- 11 新古典主義
- 12 民族主義
- 13 12音音楽
- 14 第二次大戦後の方向性
(セリアリズム、電子音楽、ミニマリズム etc.)
- 15 まとめ

授業時間外の学習

予習は必要ないが、復習には力を入れてほしい。授業後に内容を見直し、紹介された音源や参考文献を図書館などでチェックすること。また、与えられた情報だけでなく、自分が関心のある作曲家やその作品、さらに同時代の文化的・社会的事象についても積極的に調べ、主体的に学ぶ習慣を身に付けてほしい。

教科書・参考書等

毎回プリントを配布する。参考文献は授業時に紹介。

成績評価

- 平常点(出席率(年間2/3以上の出席) / 授業態度) と期末課題によって判定
- A 100～80点
 - B 79～60点
 - C 59～50点
 - D 50点未満

科目名 音楽史特講 B

対象 音楽専攻 2年

履修条件

特になし。

授業の概要

音楽(史)の理解に必要な、さまざまな分野の知識や理解を深める。

授業の到達目標

上記の視点から、楽曲の解説ができて、文章表現できるようになる。

授業計画

- 第1回：音楽(史)と数の世界
- 第2回：音楽(史)と科学の世界
- 第3回：音楽(史)と聖書
- 第4回：音楽(史)と宗教
- 第5回：音楽(史)と文学
- 第6回：音楽(史)と哲学・思想(1)
- 第7回：音楽(史)と哲学・思想(2)
- 第8回：音楽(史)と地理
- 第9回：音楽(史)と絵画
- 第10回：音楽(史)と身体
- 第11回：音楽(史)と心理

期間 前期

担当教員 久保田 慶一

- 第12回：音楽(史)と経済・経営
- 第13回：音楽(史)とコミュニティ(震災後)
- 第14回：まとめ
- 第15回：予備日

授業時間外の学習

授業で参考CDなどを指示するので、図書館などで試聴しておくこと。
また、参考図書なども適時指示するので、読んでおくことを勧める。

教科書・参考書等

参考書等：「キーワード150音楽通論」久保田慶一(アルテスパブリッシング)
希望者には、初回の授業で販売する。1冊：2000円

成績評価

出席状況50%、レポート評価50%とする。

- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 音楽史演習 A

対象 音楽専攻 2年

履修条件

特になし。授業内容に興味・関心をもち、積極的に参加する学生は、専攻を問わず大いに歓迎する。

授業の概要

テーマは「近現代音楽を考えるためのキーワード」。各回、19～21世紀の音楽における重要なキーワードを設定し、それらについて自由に議論することで、近代から現代に至るまでの音楽が生み出された歴史的・社会的・文化的文脈について理解を深める。キーワードごとに担当者(1～2)を決め、授業内で口頭発表の時間を設けるので、受講生は必ず1回以上、自分の意見を発表する機会が求められる。最終的には、これらのキーワードを通して、時代や国を越えて浮かび上がってくる「音楽」の在り方、また今日の社会や文化のなかで音楽が置かれている状況について、受講生が自分なりの考えを持てるようになることを目的としている。

初回のガイダンスで各キーワードに関する説明、発表者の決定、またプレゼンの仕方についてなどを説明する。発表に関しては、要望に応じて担当者と個別に相談する時間も設けるので、不安に感じることなく、ぜひ積極的に臨んでもらいたい。

授業の到達目標

音楽が幅広い文化的事象の1つとして成立していることを認識し、現代の音楽について、自分の言葉で説明できるようになる。

授業計画

- 1 ガイダンス(プレゼンの仕方やプリント作成に関する説明) / 各キーワードの説明 / 発表担当者の決定)
- 2～14 各回、以下のようなキーワードについて担当者が発表し、内容について補足、議論する(キーワードは、受講生

期間 後期

担当教員 関野 さとみ

の状況や要望に応じて変更する場合もある)。
「音楽と宗教」「東洋/西洋(「異国趣味」「オリエンタリズム」「ジャポニズム)」「世界音楽」「音楽と美術」「音楽と文学」「ジェンダー」「映画音楽」「世界大戦」「総合芸術」「調性/旋法性/無調性」「前衛」「テクノロジー」「ポストモダン」 etc.

15 総括

授業時間外の学習

担当するキーワードについて、既知の事柄を入念に調べだけでなく、必ず独自の見解をもてるようにしていただくこと。自分の担当以外のキーワードにも関心をもち、ある程度下調べをしておくことが望ましい。また普段から、文化的・社会的事象についてアンテナを張っていること。コンサートはもちろん、各種の美術展や講演会などにも積極的に足を運び、様々なジャンルの本を読むことが、これらのキーワードからいかに豊かな内容を導き出せるかにつながる。

教科書・参考書等

プリント配布のほか、授業時に資料を紹介する。

成績評価

- 出席率(年間2/3以上の出席) / 授業態度 / 議論への積極的な参加 50%、プレゼンテーション50%
- A 100～80点
- B 79～60点
- C 59～50点
- D 50点未満

科目名 音楽史演習 B

対象 音楽専攻 2年

履修条件

特になし。

授業の概要

楽典の知識を音楽の理解や演奏にどう活用するかを考える。

授業の到達目標

簡単な曲が分析できて、文章で表現することができるようになる。

授業計画

- 第1回：楽典とは何か
- 第2回：音程、協和・不協和
- 第3回：和音、非和音
- 第4回：旋法、音階、調・調性
- 第5回：旋律
- 第6回：対位法
- 第7回：リズム、拍・拍節・拍子
- 第8回：フーガ
- 第9回：ソナタ形式
- 第10回：変奏曲
- 第11回：循環形式

期 間 後期

担当教員 久保田 慶一

- 第12回：音楽分析とは
- 第13回：和声分析
- 第14回：様式分析
- 第15回：まとめ

授業時間外の学習

授業で参考CDなどを指示するので、図書館などで試聴しておくこと。
また、参考図書なども適時指示するので、読んでおくことを勧める。

教科書・参考書等

参考書等：「キーワード150音楽通論」久保田慶一（アルテスパブリッシング）
希望者には、初回の授業で販売する。1冊：2,000円

成績評価

評価：出席状況50%とレポート評価50%とする。

- A およそ80点以上
- B およそ60点以上
- C およそ50点以上
- D 49点以下

科目名 音楽療法概論

対象 音楽専攻 2年

履修条件

特になし。

授業の概要

音楽療法とは、心身に障害のある方、発達の遅れや問題を持った方々へ治療・援助の手段として音楽を役立てることであるが、最近では病気や障害に限らず人間の健康な生活に役立てる音楽療法としてのアプローチまで幅広い考え方が広まっている。

本講義では、療法（セラピー）を考える前に、人間の生活と音楽との関わりや人間の健康とは何かを学ぶ。次に音楽療法の様々な背景を考えながら、基本的な知識を学んでいく。

授業の到達目標

人間の生活と音楽の関わりを理解し、さらに療法として音楽を用いる意義とその方法を理解する。

授業計画

- 1 ガイダンス（授業内容と目的等）
- 2 人間の生活と健康・音楽
- 3 音楽療法とは何か①
- 4 音楽療法とは何か②
- 5 療法としての音楽
- 6 緩和ケアの音楽療法（カナダ）
- 7 緩和ケアの音楽療法（日本）

期 間 前期

担当教員 鈴木 千恵子

- 8 高齢者の音楽療法①
- 9 高齢者の音楽療法②
- 10 児童の音楽療法①
- 11 児童の音楽療法②
- 12 音楽療法の技術
- 13 音楽の治療的機能
- 14～15 まとめ

授業時間外の学習

授業の中で課題に対する感想を書いたり、音楽療法のプログラムを作成したりするので、履修者は予習と復習に努めること。

教科書・参考書等

「音楽療法の手引き」松井紀和著（牧野出版）
「音楽療法の実際」松井紀和、鈴木千恵子他著（牧野出版）
以上 参考書
教科書は使用せず、授業時にプリントを配布。

成績評価

出席、授業時の課題、受講態度等40%、期末試験（筆記）60%で100点に換算。

- A 総合点が80点以上の者（基本的な諸事項を十分理解している）
- B 総合点が60点以上の者（基本的な諸事項をほぼ理解している）
- C 総合点が50点以上の者（基本的な諸事項をある程度理解している）
- D 総合点が49点以下の者（基本的な諸事項の理解が欠けている）

科目名 演奏解釈(1) ピアノ楽曲

対象 音楽専攻2年

履修条件

特になし。
ピアノ専修はもちろん、他専修も積極的に履修してほしい。

授業の概要

音楽表現における大切なことの一つに「わかりやすさ」があると思う。わかりやすい演奏をするために、ぜひ知っておいてほしい基本的ないくつかの事柄、楽譜の読み方や曲の構成、フレーズングやアーティキュレーション、その他約束事等、身近な作品を使って、いっしょに学んでいく。授業で学んだことがその場限りで終わらず、先々勉強していく上で幅広く応用でき、自身の演奏のヒントになるような内容にしていきたい。ピアノ曲を主に取り扱うが、声楽や管楽器、弦楽器等の作品にも自然になじめるよう工夫したい。「演奏解釈」を難しく考えず、気軽に演奏し合い、意見を交換できる場にしていきたい。

授業の到達目標

楽曲に向かう際、無意識に音にするのではなく、音楽史の流れを理解し、作曲家の意図や思いを大切にしながら演奏する習慣を身につける。

授業計画

1. ガイダンス
2. バロック時代の音楽～一般的知識の確認
3. 純正律と平均律、バロック時代の楽器
4. バッハ平均律の成り立ち、フーガについて

期間 後期

担当教員 荻野 千里

5. モーツァルト～ピアノを含む作品について
6. モーツァルト～ピアノソナタ、楽譜の読み方、強弱やアーティキュレーション
7. ベートーヴェン～知っておくべき名曲の数々
8. ベートーヴェンのピアノソナタ～年代を追いながら
9. ロマン派について～同時代に生きた作曲家たち
10. シューベルト～歌曲、後期ピアノ作品を取り上げながら
11. シューマン～ピアノ作品、歌曲
12. リスト～音楽界における大きな役割
13. ショパン～時代背景と作品
14. ショパン～各作品ジャンルの特徴
15. まとめ

授業時間外の学習

音楽史上重要な役割を果たした作曲家について、ある程度各自調べておくこと。
各回の内容は次につながるため、しっかり復習をするように。

教科書・参考書等

その都度、配布。必要に応じて各自準備する。
それぞれの作曲家にふさわしい出版社等も、授業内で指導していく。

成績評価

- (1)出席回数(2)積極性(3)レポート等の総合的評価。
- A 欠席回数2回まで、および授業への積極性が特に際だった者
 - B 欠席回数3回まで、および授業への積極性が中程度の者
 - C 欠席回数が5回に達した者
 - D 欠席回数6回以上、およびレポート未提出者

科目名 演奏解釈(2) 声楽曲

対象 音楽専攻2年

履修条件

なし。

授業の概要

モーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」とプッチーニのオペラ「ラ・ボエーム」を鑑賞する。

この授業では個々のアリア、アンサンブルのオペラ全体の中の位置づけをはっきり認識することを目的とし、普段単独に取り出して歌う機会が多いアリア等を中心に全体の流れの中でのその曲のあり方について考察する。また、DVDを用いて視覚的に鑑賞することにより、音楽と演出の結びつきについても詳しく探る。

授業の到達目標

「オペラとはなにか?」を知る。

授業計画

- 第1回 オペラについて概説
- 第2回 歌劇「フィガロの結婚」ケルビーノ役について
- 第3回 スザンナ役について
- 第4回 伯爵夫人役について
- 第5回 フィガロ役、伯爵役について
- 第6回 アンサンブルについてI
- 第7回 アンサンブルについてII
- 第8回 歌劇「フィガロの結婚」のまとめ
- 第9回 歌劇「ラ・ボエーム」第1幕の分析

期間 前期

担当教員 松井 康司

- 第10回 第2幕の分析
- 第11回 第3幕の分析
- 第12回 第4幕の分析
- 第13回 歌劇「ラ・ボエーム」のまとめ
- 第14回 1時間程度で完結するオペラを鑑賞
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

事前にモーツァルト作曲、歌劇「フィガロの結婚」全曲をDVD等で鑑賞しておくこと。
また、授業で学んだ楽曲のこと、専門用語について、より深く調べると共に、次回取り上げる楽曲をCD、DVDで聴いておくこと。

教科書・参考書等

- 「名作オペラボックス」(音楽之友社)
- 1 モーツァルト 歌劇「フィガロの結婚」
 - 6 プッチーニ 歌劇「ラ・ボエーム」
- 「ジャコモ・プッチーニ」星出豊著(知玄舎)

成績評価

- レポートにより評価する。
- A 講義内容をもとに的確に自論を展開できた者。
 - B 講義内容をもとに自論を展開できた者。
 - C 講義内容は把握できているが、自論を展開できなかった者。
 - D 講義内容を把握できなかった者。またはレポート未提出、授業への出席不良の者。

科目名 演奏解釈（3）室内楽曲

対象 音楽専攻2年

履修条件

なし。

授業の概要

この授業は他の専修学生にも広く開放している。古典派の弦楽による室内楽作品を中心とするが、履修者の状況により、ピアノ、管楽器等も含まれる作品も取り上げ授業を進めていく。授業形態としては1年次「弦楽基礎」の発展形と考えてよい。作曲家とその作品に対してより知識を深め、「演奏」という実践にどのようにしたら結び付いていくか考えていく。学生全員参加の活発な意見交換の場になるよう、望んでいる。

授業の到達目標

スコアから作曲家の意図するものをはじめ、様々なことを読み取れるようになること。またそれらを表現につなげていけることを目標とする。

期間 前期

担当教員 寺岡 有希子

授業計画

ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンの弦楽による室内楽作品を基礎課題とするが、履修者の状況を考慮しつつ様々な形態(例えば、フルート四重奏曲やピアノ五重奏曲等)の室内楽作品を取り上げていく。

授業時間外の学習

授業で演奏するメンバーは事前リハーサルをしておくこと。

教科書・参考書等

課題となる曲のスコアをプリントして配布するので、必ず授業に持参すること。

成績評価

授業出席、授業態度、レポート。

科目名 管楽アンサンブル

対象 音楽専攻2年

履修条件

特になし。
管楽器専修(サクソフォン専修以外)必修。

授業の概要

木管五重奏を中心としたアンサンブルと、管楽アンサンブルを主体にピアノや弦楽器にもお手伝いいただき色々な編成の合奏を体験してもらう。

授業の到達目標

他の楽器の特性を理解する。アンサンブルの基本を身につける。

期間 通年

担当教員 石橋 雅一

授業計画

[前期]
第1回 授業内容の説明と曲の選択
第2回～第6回 ハイドン、モーツァルトを中心に演奏実習
第7回～第14回 A.ライヒャF.ダンツィを中心に演奏実習
第15回 前期のまとめ演奏と宿題の概要説明
[後期]
第16回～第18回 提出された課題(木管5重奏編曲)の演奏実習と評価
第19回～第29回 フランス、ドイツの近現代木管五重奏曲を中心に演奏実習
第30回 実技試験(コンサート形式で)

授業時間外の学習

授業をスムーズに進行するためにも、自分のパートをしっかりと予習して身に付ける様にしていく事。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席状況、授業中の演奏を重視。
出席、実習への取組みと態度50%、実技試験、課題提出50%で100点に換算
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 指揮法

対象 音楽専攻2年

履修条件

指揮、指揮することに興味を持つ者。
教職受講者必修。

授業の概要

指揮とは何か、指揮者とは何かについて「指揮法」というものを通して学ぶ。また総譜（スコア）の読み方にも触れる。

授業の到達目標

指揮することにおいていかに息づかいが重要であるか、そして指揮者自らが息で演奏していることが良い指揮につながるということを知る。

期間 通年

担当教員 樋本 英一

授業計画

- 第1講 指揮、指揮者の成り立ち
- 2 指揮の二大要素、運動と図形について
- 3 音を出すこと、とること及びへの扱い
- 4 アクセント(表情の変化)、及び・予備について
- 5 Tempo、ディナミックの変化、左手(指揮棒を持たない方の手)の扱い
- 6~7 第8講以降の課題(Beethoven Sym No.5他)の概説と指揮
- 8以降 上記の課題について個人レッスン形式で授業を進める。
- 30 まとめ

授業時間外の学習

第6講以降の課題曲についてはCDを聴くこと。

教科書・参考書等

Beethoven Sym No.5 (ミニチュアスコアでよい。版は問わない)
他の課題についてはコピー譜を配布。
指揮棒を用意すること(第1講でそれについて解説する)。

成績評価

上記課題による実技試験及び出席状況。
出席評価の明確な基準は示さない方が良しと考える。
実技試験の明確な基準を言葉にはできない。
授業での課題をいかに理解、体現しているかにかかる。

科目名 室内楽A a

対象 音楽専攻2年

履修条件

積極的にアンサンブルに参加する意欲のある学生、また他のグループの演奏に興味を持って聴ける学生。

授業の概要

ピアノ三重奏曲・ピアノ四重奏曲、ピアノ五重奏曲を中心に取上げ、弦楽器とピアノ、各々の楽器の特徴や奏法等も学びながらアンサンブル能力の向上を目指す。

授業はマスタークラス形式で進める。事前に曲目を発表するので、演奏する学生は勿論、聴講する学生も各自楽譜を準備し、アンサンブルを作り上げるプロセスに立ち会って、楽曲への理解を深め、その作品の意図を実現するために必要な技術やアンサンブルの心構えを学んでいく。

授業の到達目標

様々な時代及び編成の室内楽作品を知り、それぞれの楽曲の様式観とアンサンブル技術を習得する。アンサンブルの体験を通して、音楽を共有する喜びを味わうこと。

授業計画

1. ガイダンス、学習曲目の検討
- 2.~5. 古典派の室内楽
(ピアノ・弦楽器を中心に)
モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等
- 6.~8. ロマン派の室内楽
(ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に)
メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等

期間 前期

担当教員 荻野 千里・野口 千代光

- 9.~11. 近現代の室内楽(様々な楽器を含む)
- 12.~13. 声楽を含む室内楽
- 14.~15. 7月に行われる定期演奏会オーディションに向けて

授業時間外の学習

授業に向けて各自十分に練習し、必ず複数回の合わせをしておくこと。
また、お互いの楽器の特徴なども調べておくこと。
日頃から多くの室内楽作品のCD等を聴いて、知識を増やしておくように。

教科書・参考書等

シューマン、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチ、ブラームスのピアノ五重奏曲、ベートーヴェン、メンデルスゾーンのピアノ三重奏曲。モーツァルトのピアノ四重奏曲等。

成績評価

- A 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好の者
- B 事前準備、授業への参加意欲が中程度の者
- C 事前準備が不十分で、授業への参加意欲があまり認められない者
- D 出席が3分の2に満たない者

科目名 室内楽 A b

対象 音楽専攻 2年

履修条件

室内楽に興味と意欲のある方。

授業の概要

開講時に希望を募った上で楽曲を選定。

授業の到達目標

アンサンブルの向上。

期 間 前期

担当教員 北本 秀樹

授業計画

開講時に指示。

授業時間外の学習

各自、十分な練習を行うこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

出席重視。学期末にレポートを提出。

科目名 室内楽 A c

対象 音楽専攻 2年

履修条件

条件は特にないが、アンサンブルはお互いの音や、音楽の流れを聞き分けることが必要不可欠である。その為にはソルフェージュ能力を高めておくことが必要である。

授業では必ず専修している楽器を持参のこと！（備品として学校にあればその限りではない）

授業の概要

各楽器とのアンサンブルを通し、自分達の音楽をイメージし、作り上げていく面白さを実感してみよう。

木管アンサンブル、弦楽も加わったアンサンブル、ギターアンサンブル、邦楽器も加わったアンサンブル、ピアノも加わったアンサンブル…様々な形態があるが、学生諸君が卒業するまでにやってみてみたいアンサンブルをこの授業を通し、是非経験してほしいと思う。

（例）
木管クインテット/ダンツィ作曲 (Fl+Ob+Cl+Hr+Fg) 他
管楽器+弦楽器/モーツァルト作曲 フルートカルテット D-dur (Fl+String) 他

ピアノ+管楽器/サン・サーンス作曲 カプリス (Pf+Fl+Ob+Cl) 他

フルート・アンサンブル/クーラウ作曲 グランド・トリオ他
その他、真面目なしっかりとした曲であれば、ジャンルを問わずどのような曲でも取り上げたいと思う。

（例）
アストル・ピアソラ作曲 タンゴの歴史 (Fl+Guiter)
チック・コリア作曲 ピアノ、フルート、バズーンの為のトリオ等。

授業の到達目標

出来るだけ多く演奏に参加して（最低でも1回以上）これらのアンサンブルを体験し、卒業後の実践に役立てる。

期 間 前期

担当教員 中川 昌三

授業計画

このクラスは室内楽（アンサンブル）の授業であるから、皆さんにはできるだけ演奏に参加してもらいたいが、作品に関しては僕が一方的に押し付けるのではなく、皆さんのやってみたい曲、やりたかった曲を協議の上決めたい。

したがって、このクラスの1回目の授業は「曲決め」をしたいと思うので、是非出席すること。

僕は様々な音楽シーンを経験しているから、必要とあれば、クラシック以外の音楽へのアプローチも実践してみよう。例えばブラジル音楽の「ショーロ」やジャズ的なニュアンスを持った曲、ポップ的な曲、民族音楽的な曲、現代音楽など。

また、近年演奏家は即興演奏を要求されることが多くなったが、皆さんのリクエストがあれば即興に関した初歩的なアンサンブルも取り入れたい。

授業時間外の学習

この学校で勉強している学生の皆さんはクラシック音楽を勉強している訳だが、クラシック音楽は作品として譜面が存在する。これは演劇でいえば台本に当たる。

役者が台本から自分の役作りをするように、演奏家も譜面から自分の音楽作りをしなくてはならない。その為に必要なテクニックの向上は不可欠である。これは自分の専攻している楽器の先生の下、しっかり技術を磨くこと。

そして、他の演奏家の音楽作りは大変参考になるので、是非様々な音楽に接することを勧める。

教科書・参考書等

特になし。ジャンルを問わず、様々なコンサート、ライブ、CD、DVD等、何でも見て聴いてほしい。それが参考書の代わりである。

成績評価

特に試験は行わない。演奏参加を含め授業態度で採点する。

科目名 室内楽 B a

対象 音楽専攻 2年

履修条件

特になし。

授業の概要

履修者と若干の室内楽要員によって演奏可能な室内楽曲を選出し、他奏者および異種楽器と合奏することの喜びと意義を実際に体験していく。それとともに各作曲家のスタイル、室内楽特有の奏法、技法等も学んでいく。

授業の到達目標

合図の出し方、音程の合わせ方等、基本的な合奏能力の向上。独奏曲や協奏曲の演奏等とは違った室内楽特有の奏法やバランス感覚の習得。スコアを含めた読譜力の向上。

期間 後期

担当教員 市坪 俊彦

授業計画

1. ガイダンス
2. 「室内楽」の歴史、概要についての考察、講義
- 3～7. 履修者の専門楽器によって編成を決定し、レッスン形式の授業
古典派…モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、ボックケリーニ他
- 8～11. ロマン派…シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ブラームス他
- 12～14. 近現代…ラヴェル、ドビュッシー、バルトーク、シオスタコーヴィチ他
15. 文化芸術としての室内楽の存在意義についての考察、講義

授業時間外の学習

各回、演奏を担当することになったグループは、事前に準備、練習を行うこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席状況、授業態度、実技等平常点。出席状況50パーセント、演奏実技30パーセント、授業態度20パーセントで100点に換算。
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽 B b

対象 音楽専攻 2年

履修条件

なし。

授業の概要

ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。

アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する感受性や柔軟性が求められる。共演する楽器の特性をふまえた上での音色作りや響きのバランス等、ピアノパートの役割を果たすために必要な具体的な奏法を実践で学ぶ。

ソロでは味わえない響きを体験したり、曲に対するそれぞれの楽器のアプローチを知ることによって、音楽的視野を広げ、曲の理解を深めると共に、より幅広い表現を目指していきたい。

演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。

授業の到達目標

アンサンブルの技術を修得し、相手の音をよく聴きながら一緒に演奏する楽しさを実感できることを目標に曲を仕上げる。

期間 後期

担当教員 蓼沼 恵美子

授業計画

- 1 オリエンテーション及び曲目の検討。
- 2 曲目とメンバーを決定。
- 3 パート練習。(レッスン)
- 4～7 アンサンブル実習。(一回の授業に2～3組)
- 8 楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
- 9 パート練習。(レッスン)
- 10～14 アンサンブル実習。
- 15 発表演奏。

教科書・参考書等

自分のパートをよく、練習して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことは出来ない。
事前にCDを聴いたり、スコアを見るなど、十分に準備を行うこと。

教科書・参考書等

必要に応じて、楽譜を各自準備する。

成績評価

出席状況、授業への取り組み方、意欲などを重視した上で、期末の発表演奏で評価する。
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が65点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽Bc

対象 音楽専攻2年

履修条件

フルート専攻の学生を対象とする。

授業の概要

フルート・アンサンブル(二重奏～五重奏)の重要なレパートリーの習得。

授業の到達目標

仲間と協調しながら自己をよく主張し音楽を表現するという、アンサンブル力の基本的な強化を目指す。

期間 後期

担当教員 白尾 隆

授業計画

課題曲の編成により、数グループに分け、状況を見ながら、期間内に、出来るだけ多くのレパートリーを勉強する。

授業時間外の学習

個人レッスン同様、可能な限り仲間と練習し、授業までによく準備し、また復習すること。

教科書・参考書等

楽譜をその都度貸し出すので、各自コピーすること。

成績評価

授業中の熱意、注意力、反応を考慮して評価する。

科目名 邦楽アンサンブル

対象 音楽専攻2年

履修条件

日本音楽専修は必修。

授業の概要

邦楽器の為の作品(古典と現代)を取り上げる。
邦楽器が出すべき音や、表情、音の響かせ方等々体感する。
また、作曲家に自作品に対する思いや指導をお願いする。

授業の到達目標

アンサンブルの分野で邦楽器の可能性を追求する。

期間 通年

担当教員 野坂 恵子

授業計画

・「六段の調」とグレゴリオ聖歌「クレド」の合奏
・「八段の調」八橋検校作曲 替手・本手の合奏
・「楓の花」松坂検校作曲の合奏
・「水面の舞」金光威和雄作曲
・「フルートと二十絃箏の二重奏曲」堀悦子作曲
・「二十絃と十七絃の為のプレリュード」新実徳英作曲
・「偲琴」西村朗作曲
・「トルソ」廣瀬量平作曲
・「観想の佇い」山本純ノ介作曲
他、若手作曲家の新作も取り上げたい。

授業時間外の学習

授業で取り上げた作品について、理解を深めておくこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席数と平常点で評価する。

科目名 伴奏法

対象 音楽専攻2年

履修条件

教職課程受講生は必修とするが、そうでない学生も、アンサンブルに関心を持つ者は歓迎する。但、ピアノの演奏技量はツェルニー30番程度以上が望ましい。

授業の概要

伴奏の変遷をオーディオ資料と実習で音楽史に沿って見つめていく。

声楽曲、弦楽器曲、管楽器曲等、色々な曲をこなす事によって様式感に合った伴奏技能を身につけていく。

また、旋律譜パートを内的に歌うと同時に伴奏パート譜を見て弾いたり、コードネームを読んでピアノ伴奏をつけるなど、基礎的な事も習得する。

実習では、委託演奏員の協力も得て公開レッスン風に授業を進め、お互いの演奏を聴き合う事により、良い伴奏とはどのようなものかを研究していく。

授業の到達目標

各時代、様式に合った演奏が出来ること。

また、楽器の特性やその作品を幅広く知る事によって、より良いアンサンブルが出来ること。

期間 通年

担当教員 羽生 百合子

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2～3 合唱曲(学校の教材等)
- 4～6 バロック時代の声楽曲(通奏低音)
- 7～9 Mozart、Beethoven、Schubertの歌曲
- 10～13 器楽曲〔I〕
- 14 後期ガイダンス、初見等
- 15～17 器楽曲〔II〕
- 18～19 イタリア歌曲とオペラ
- 20～21 ドイツリート
- 22～23 フランスメロディ
- 24～25 20世紀の歌曲
- 26～30 試験曲研究等まとめ

授業時間外の学習

毎週課題が出されるので、予習、復習に努めること。

また、各期2、3回は公開レッスン時のピアノ伴奏実習に当たるので、十分事前準備をすること。

教科書・参考書等

授業時にその都度プリントを配布する。

成績評価

実技試験、レポート提出、出席状況、平常の授業態度、これらを総合的に評価する。

- A 80点以上(アンサンブルを十分理解し良く表現できた)
- B 60点以上(アンサンブルをほぼ理解し表現できた)
- C 50点以上(アンサンブルをある程度理解し何とか表現できた)
- D 49点以下(アンサンブルを理解できず、うまく表現できなかった。又は出席日数の足りない者)

科目名 第一実技Ⅰ・Ⅱ

対象 音楽専攻1・2年

履修条件

全学生の専門実技として必修科目である。

授業の概要

全学生が、各自の専修実技を担当講師のもとで、本科は週1回、50分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンになるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。試験は前期、後期と2回行い、特に後期試験はレッスンを20回以上受講しないと試験を受ける権利を得ることができない(ただし、声楽については1年次のみ前期には試験をおこなわない)。1年次後期試験と2年次前期試験の成績優秀者は学内演奏会に出演することができ、2年次後期試験の成績優秀者は卒業演奏会に出演することができる。

授業の到達目標

担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。専門実技のテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標になるが、担当講師が各学生のレベルを把握し、レベルに応じてエチュード、楽曲等を与え、与えた課題をレッスンを通して演奏できるようにしていくことを到達目標とする。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション及び課題の検討
- 第2回～第5回 与えられたエチュード、楽曲のレッスン
- 第6回 楽曲のまとめ。伴奏合わせ等。
- 第7回 試験曲の検討。または、新しい課題の検討
- 第8回 試験曲の決定。

期間 通年

担当教員 各担当者

第9回～第13回 エチュード及び試験曲研究。あるいは、与えられた課題のレッスン。

第14回～第15回 試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等。

第16回 新たな課題の検討

第17回～第20回 エチュード、楽曲のレッスン

第21回 楽曲のまとめ。伴奏合わせ等

第22回 試験曲の検討

第23回 試験曲の決定

第24回～第28回 エチュード及び試験曲研究

第29回～第30回 試験曲研究まとめ。伴奏合わせ等

個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

授業時間外の学習

レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。

教科書・参考書等

個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

成績評価

20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。

- A 演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
- B 演奏試験において、審査員の評価の平均点が65点以上の者
- C 演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
- D 演奏試験において、審査員の評価の平均点が49点以下の者
あるいは、レッスンの出席回数が足りなくて、受験資格がなかった者

科目名 副科実技 I・II / 第二実技 I・II

期 間 通年

対 象 音楽専攻 1・2年

担当教員 各担当者

履修条件

● 全学生の必修科目である。
なお、他専攻の学生も履修することができる。

授業の概要

● 全学生が各自の実技担当講師のもとで、週1回、20分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンとなるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。

試験は後期に1回行い、20回以上のレッスンを受けることにより試験を受ける権利を得ることができる。なお、副科実技はレッスン時間が短い。別途徴収にはなるが、レッスン時間を40分にする「第二実技」という制度がある。

授業の到達目標

● 担当講師との一对一の授業となるため、到達目標は各自異なる。副科実技としてのテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。

授業計画

● 第1回 オリエンテーション及び課題の検討
第2回～第21回 与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んで行くという形を繰り返して行く。

第22回 試験曲の検討
第23回 試験曲の決定
第24回～第28回 試験曲のレッスン
第29回～第30回 試験曲のまとめ。伴奏合わせ等

個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

授業時間外の学習

● レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。

教科書・参考書等

● 個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

成績評価

● 20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。

- A 演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
 - B 演奏試験において、審査員の評価の平均点が65点以上の者
 - C 演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
 - D 演奏試験において、審査員の評価の平均点が49点以下の者
- あるいは、レッスンの出席回数が足りなくて受験資格がなかった者

Toho Gakuen College of Drama and Music

芸術科演劇専攻

科目名 基礎演劇演習 A a

期 間 前期

対 象 演劇専攻 1年

担当教員 越光 照文

履修条件

a組必修。
授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、各自が有する資質の伸ばすべき長所と克服すべき短所を見極め、俳優を目指すための確かな動機づけと学習習慣を確立させることを目的とする。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な「モノログドラマ」として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ①「自画像を演ずる」というテーマの基に「モノログドラマ」の完成とその発表。
- ②戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 ウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 本読み、その①
- 7 本読み、その②

- 8 本読み、その③
 - 9 オーディション
 - 10 立ち稽古、その①
 - 11 立ち稽古、その②
 - 12 立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①「自画像」発表へ向けての自主稽古
- ②「シーンワーク」発表へ向けての自主稽古
- ③「自画像」「シーンワーク」における補習授業への出席

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

- (1)出席日数 (2)授業への取り組み (3)発表の内容を総合的に判断して評価する。
- A 全出席。授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
 - B 出席が良好であること。自画像、シーンワークの発表が評価できる。
 - C 出席が規定回数に達している。自画像、シーンワークの発表まで達している。
 - D 出席が規定回数に達していない。自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 基礎演劇演習 A b

期 間 前期

対 象 演劇専攻 1年

担当教員 鈴江 俊郎

履修条件

b組必修。
遅刻、欠席厳禁。グループで取り組む作業になるので、自主的に学生同士で準備、予習をすること。
稽古着、稽古履き着用。7月の演技発表会前の1ヶ月間は放課後に連日自主稽古を行うことになるので、それに全日程参加すること。

授業の概要

人に見られること、その中で人を見ること、その中で意図した台詞を意図した状態を保ちながら意図した動きを実行すること。それらがバランスよく共存し、並行して運動できるような方法を身につけていく。共演者との協力関係、協働した場面構成力は自分と相手を客観視する視点を獲得した上でこそ養われるものである。自分の意図を実現すること、そして相手の意図を実現すること、そしてさらに協働の意図を了解しあい、さらに高まった意図を醸成しあう創造的な関係を共演者と築いていく人間の力まで含めて、演技の練習を通して鍛えていくことを意図する。

基本的に、短い場面を実際に演じて作ってきてもらい、それを批評し検討する、ということを頻繁に行うことを通して学習を進める。

最終的には演技発表会に出演して成果を問うことが目標として設定されている。その自主稽古に欠席、遅刻するものは出演できないので、重々自覚の上参加すること。集団で稽古し、意見を出し合い、意見をたかかわせ、より高次の方針を皆でまとめあげることのできる能力が、演技する力とはまた別の重要な獲得目標である。すべての過程に受身ではなく能動的にかかわることが求められる。

授業の到達目標

授業時間ごとに目標を設定する。自分の感情を把握すること。自分の状況を把握すること。相手との距離を意識して把握すること。その上でその距離を操作すること。それら基本的な項目の獲得の上に、演技に対する理解を深める。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 与えられた台本の短いシーンを演じる①
- 3 与えられた台本の短いシーンを演じる②

- 4 与えられた台本の短いシーンを発表する
 - 5 台本をたくさん読み、探し、演じる①
 - 6 台本をたくさん読み、探し、演じる②
 - 7 自力で探した台本を発表し、批評する①
 - 8 自力で探した台本を発表し、批評する②
 - 9 チームで作品を作る過程について原則の確認①
 - 10 チームで作品を作る過程について原則の確認②
 - 11 演技発表会への課題作品を探し、演じる①
 - 12 演技発表会への課題作品を探し、演じる②
 - 13 発表のためのスタッフワークの分担、原則の確認
 - 14 発表作品の総仕上げ、通し稽古
 - 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
- ※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することがある。

授業時間外の学習

毎回、ショートシーンの課題演技あるいは創作を求めているので、授業前にその準備を行うこと。
また、授業中に出された批評、指導された具体的ななだめ出しを授業後に、検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に配布。
参考資料等：必要に応じて授業時に配布。

成績評価

- (1)出席日数(2)課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否(3)課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A：発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
 - B：発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
 - C：発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
 - D：発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 基礎演劇演習 A c

対象 演劇専攻1年

履修条件

c組必修。
自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ(ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師)とキース・ジョンストン(ルーズムースシアターカルガリー)によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

期間 前期

担当教員 ペーター・ゲスナー

授業計画

- 1 導入
- 2-8 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 9-26 シーンワーク
- 27-28 発表会と反省
- 29-30 まとめ

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著(英語版)

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組みうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 基礎演劇演習 A d

対象 演劇専攻1年

履修条件

d組必修。
遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

基本的な呼吸法、発声、動きを身につける。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、基本的な所作を身につけることに重点を置き、次に、共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点=舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探求する。

後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標とする。
- ① 演技の基礎となる発声を身につける。
 - ② 演技の基礎となる所作を身につける。
 - ③ 集団創作を理解し、上演中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2

期間 前期

担当教員 宮崎 真子

- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古1
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャスティング発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。
「オセロー」小田島雄志訳(白水社版)学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業の出席日数を到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 基礎演劇演習 B a

対象 演劇専攻 1年

履修条件

a組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意がありプロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるためにこの授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズムスシアターカルガリー）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに對する理解を深める。

期 間 前期

担当教員 ペーター・ゲスナー

授業計画

- 1 導入
- 2-8 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 9-26 シーンワーク
- 27-28 発表会と反省
- 29-30 まとめ

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著（英語版）

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組みとうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 基礎演劇演習 B b

対象 演劇専攻 1年

履修条件

b組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

基本的な呼吸法、発声、動きを身につける。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、基本的な所作を身につけることに重点を置き、次に、共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探究する。

後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 演技の基礎となる発声を身につける。
- ② 演技の基礎となる所作を身につける。
- ③ 集団創作を理解し、上演の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2
- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解

期 間 前期

担当教員 宮崎 真子

- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古1
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャストイング発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上舞台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。

「オセロー」小田島雄志訳（白水社版）学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業の出席日数と到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
- B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
- C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
- D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 基礎演劇演習 B c

対象 演劇専攻 1年

履修条件

c組必修。
授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、各自が有する資質の伸ばすべき長所と克服すべき短所を見極め、俳優を目指すための確かな動機づけと学習習慣を確立させることを目的とする。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な「モノローグドラマ」として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ①「自画像を演ずる」というテーマの基に「モノローグドラマ」の完成とその発表。
- ②戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 ウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 本読み、その①

期間 前期

担当教員 越光 照文

- 7 本読み、その②
 - 8 本読み、その③
 - 9 オーディション
 - 10 立ち稽古、その①
 - 11 立ち稽古、その②
 - 12 立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①「自画像」発表へ向けての自主稽古
- ②「シーンワーク」発表へ向けての自主稽古
- ③「自画像」「シーンワーク」における補習授業への出席

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

- (1)出席日数 (2)授業への取り組み (3)発表の内容を総合的に判断して評価する。
- A 全出席。授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
 - B 出席が良好であること。自画像、シーンワークの発表が評価できる。
 - C 出席が規定回数に達している。自画像、シーンワークの発表まで達している。
 - D 出席が規定回数に達していない。自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 基礎演劇演習 B d

対象 演劇専攻 1年

履修条件

d組必修。
遅刻、欠席厳禁。グループで取り組む作業になるので、自主的に学生同士で準備、予習をすること。稽古着、稽古履き着用。7月の演技発表会前の1ヶ月間は放課後に連日自主稽古を行うことになるので、それに全日程参加すること。

授業の概要

人に見られること、その中で人を見ること、その中で意図した台詞を意図した状態を保ちながら意図した動きを実行すること。それらがバランスよく共存し、並行して運動できるような方法を身につけていく。共演者との協力関係、協働した場面構成力は自分と相手を客観視する視点を獲得した上でこそ養われるものである。自分の意図を実現すること、そして相手の意図を実現すること、そしてさらに協働の意図を理解し、さらに高まった意図を醸成しあう創造的な関係を共演者と築いていく人間的な力まで含めて、演技の練習を通して鍛えていくことを意図する。

基本的に、短い場面を実際に演じて作ってきてもらい、それを批評し検討する、ということを頻繁に行うことを通じて学習を進める。

最終的には演技発表会に出演して成果を問うことが目標として設定されている。その自主稽古に欠席、遅刻するものは出演できないので、重々自覚の上参加すること。集団で稽古し、意見を出し合い、意見をたかかわせ、より高次の方針を皆でまとめあげることのできる能力が、演技する力とはまた別の重要な獲得目標である。すべての過程に受身ではなく能動的にかかわることが求められる。

授業の到達目標

授業時間ごとに目標を設定する。自分の感情を把握すること。自分の状況を把握すること。相手との距離を意識して把握すること。その上でその距離を操作すること。それら基本的な項目の獲得の上に、演技に対する理解を深める。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 与えられた台本の短いシーンを演じる①
- 3 与えられた台本の短いシーンを演じる②
- 4 与えられた台本の短いシーンを発表する
- 5 台本をたくさん読み、探し、演じる①

期間 前期

担当教員 鈴江 俊郎

- 6 台本をたくさん読み、探し、演じる②
 - 7 自力で探した台本を発表し、批評する①
 - 8 自力で探した台本を発表し、批評する②
 - 9 チームで作品を作る過程について原則の確認①
 - 10 チームで作品を作る過程について原則の確認②
 - 11 演技発表会への課題作品を探し、演じる①
 - 12 演技発表会への課題作品を探し、演じる②
 - 13 発表のためのスタッフワークの分担、原則の確認
 - 14 発表作品の総仕上げ、通し稽古
 - 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
- ※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することができる。

授業時間外の学習

毎回、ショートシーンの課題演技あるいは創作を求めるので、授業前にその準備を行うこと。
また、授業中に与えられた批判、指導された具体的なだめ出しを授業後に、検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に配布。
参考資料等：必要に応じて授業時に配布。

成績評価

- (1)出席日数 (2)課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3)課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
 - B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
 - C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
 - D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 身体トレーニング a / b / c / d

対象 演劇専攻1年

履修条件

必修。

授業の概要

この授業の目的は、表現者に必要な自身の体を鍛えることによって、豊かな表現力と、パフォーマーとしての基礎体力を身につけることである。内容としては、ボディワークの柔軟性と、リズムトレーニングを含めたステップワーク、モダンダンス、クラシックバレエ、タップダンス等、様々なダンスワークを中心とした授業である。この授業を受けることによって、表現者としての基礎と、体の解放、パワーを、皆さんが身につけてくれればと思っている。

授業の到達目標

表現者としての、様々な分野での活躍のための基礎をつける。

授業計画

- ① ガイダンス+ストレッチ+リズムトレーニング (体の様々な部分)
- ② ストレッチ+ステップワーク (前後左右への重心移動+バランス運動)
- ③ //
- ④ ストレッチ+ステップワーク (4ビート、8ビート、16ビート等によるステップ)
- ⑤ //

期間 前期

担当教員 金森 勢

- ⑥ //
- ⑦ ストレッチ+ステップワーク (体の方向性+連続運動+ダンスワーク)
- ⑧ //
- ⑨ //
- ⑩ //
- ⑪ ストレッチ+ダンスワーク (8～16小節の振付)
- ⑫ //
- ⑬ //
- ⑭ //
- ⑮ テスト (課題の32小節のダンスワーク+パフォーマンス)

授業時間外の学習

毎回、前回課題のボディワークの理解度をチェックするので、練習と質問事項を考えておくこと。

教科書・参考書等

なし

成績評価

振付された課題+パフォーマンス+出席を重視する。

- A 振付された課題が80点以上、出席2/3以上
- B 振付された課題が60点以上、出席2/3以上
- C 振付された課題が50点以上、出席2/3以上
- D 振付された課題が49点以下、出席1/3以下

科目名 ボイス・トレーニング (歌唱) a / b / c / d

対象 演劇専攻1年

履修条件

必修。

素直に何でもトライしたい意欲のある者。

授業の概要

芝居の為、歌の為の呼吸・筋肉・声の出し方・歌い方などを学ぶ。

「ヴォイス」声とはどんな物なのかを知る。

声と心と筋肉の関係を知る。

声について色々な角度から試す。

授業の到達目標

身体を使った声で、芝居も歌も舞台にたてるようになりたい。完全にはできなくとも、意識は持てるように。

授業計画

- 1 自己紹介 (ひとりひとり歌ってもらう)
- 2 //
- 3 呼吸と声
- 4 声と筋肉と心
- 5 //

期間 前期

担当教員 信太 美奈

- 6 発声と感情
- 7 身体の意識
- 8 発声しながら気持ちを出す
- 9 //
- 10 台詞を言いながらの気持ちと筋肉について意識する
- 11 //
- 12 台詞、歌を通しての気持ちと筋肉について意識する
- 13 //
- 14 //
- 15 課題出して試験

授業時間外の学習

授業でやったことを必ず復習。次の授業の時にはそれが無意識でもできるようにしてくる。

たくさん音楽を聞く。たくさん舞台人の声を聞く。

教科書・参考書等

授業中にプリントあるいは楽譜を配布。

成績評価

- A 出席100% 意欲があり、課題に対してもしっかりやってくる人。
- B 出席90% 課題をやってくる。まあまあ覚えてくる。
- C 出席70% 課題はやっても覚えていない。
- D 出席率が悪く、態度も悪い。

科目名 演劇演習 A a

対象 演劇専攻 1年

履修条件

a組必修。

遅刻、欠席厳禁。グループで取り組む作業になるので、自主的に学生同士で準備、予習をすること。稽古着、稽古履き着用。7月の演技発表会前の1ヶ月間は放課後に連日自主稽古を行うことになるので、それに全日程参加すること。

授業の概要

人に見られること、その中で人を見ること、その中で意図した台詞を意図した状態を保ちながら意図した動きを実行すること。それらがバランスよく共存し、並行して運動できるような方法を身につけていく。共演者との協力関係、協働した場面構成力は自分と相手を客観視する視点を獲得した上でこそ養われるものである。自分の意図を実現すること、そして相手の意図を実現すること、そしてさらに協働の意図を理解し、さらに高まった意図を醸成しあう創造的な関係を共演者と築いていく人間の力まで含めて、演技の練習を通して鍛えていくことを意図する。

基本的に、短い場面を実際に演じて作ってきてもらい、それを批評し検討する、ということを頻繁に行うことを通じて学習を進める。

最終的には演技発表会に出演して成果を問うことが目標として設定されている。その自主稽古に欠席、遅刻するものは出演できないので、重々自覚の上参加すること。集団で稽古し、意見を出し合い、意見をたかかわせ、より高次の方針を皆でまとめあげることのできる能力が、演技する力とはまた別の重要な獲得目標である。すべての過程に受身ではなく能動的にかかわることが求められる。

授業の到達目標

授業時間ごとに目標を設定する。自分の感情を把握すること。自分の状況を把握すること。相手との距離を意識して把握すること。その上でその距離を操作すること。それら基本的な項目の獲得の上に、演技に対する理解を深める。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 与えられた台本の短いシーンを演じる①
- 3 与えられた台本の短いシーンを演じる②
- 4 与えられた台本の短いシーンを発表する
- 5 台本をたくさん読み、探し、演じる①
- 6 台本をたくさん読み、探し、演じる②
- 7 自力で探した台本を発表し、批評する①

期 間 後期

担当教員 鈴江 俊郎

- 8 自力で探した台本を発表し、批評する②
 - 9 チームで作品を作る過程について原則の確認①
 - 10 チームで作品を作る過程について原則の確認②
 - 11 演技発表会への課題作品を探し、演じる①
 - 12 演技発表会への課題作品を探し、演じる②
 - 13 発表のためのスタッフワークの分担、原則の確認
 - 14 発表作品の総仕上げ、通し稽古
 - 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
- ※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することがある。

授業時間外の学習

毎回、ショートシーンの課題演技あるいは創作を求めるので、授業前にその準備を行うこと。
また、授業中に出された批判、指導された具体的なため出しを授業後に、検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に配布。
参考資料等：必要に応じて授業時に配布。

成績評価

- 1出席日数 2課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 3課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 演劇演習 A b

対象 演劇専攻 1年

履修条件

b組必修。

授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、前期に開講された「基礎演劇演習」で培った力量を礎に、俳優を目指すための更なる動機づけと学習習慣の確立、さらには良きアンサンブルの取り方を学ぶ。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な“モノローグドラマ”として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題として戯曲(台詞劇)の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ①「自画像を演ずる」というテーマの基に“モノローグドラマ”の完成とその発表。
- ②戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 ウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 本読み、その①

期 間 後期

担当教員 越光 照文

- 7 本読み、その②
 - 8 本読み、その③
 - 9 オーディション
 - 10 立ち稽古、その①
 - 11 立ち稽古、その②
 - 12 立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①「自画像」発表へ向けての自主稽古
- ②「シーンワーク」発表へ向けての自主稽古
- ③「自画像」「シーンワーク」における補習授業への出席音楽之友社

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

- (1)出席日数 (2)授業への取り組み (3)発表の内容を総合的に判断して評価する。
- A 全出席。授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
- B 出席が良好であること。自画像、シーンワークの発表が評価できる。
- C 出席が規定回数に達している。自画像、シーンワークの発表まで達している。
- D 出席が規定回数に達していない。自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 演劇演習 A c

対象 演劇専攻 1年

履修条件

c組必修。
遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

前期で学んだ基本的な呼吸法、発声、動きを、より深く体得する。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、前期で学んだ基礎を応用し、様々な表現を可能にする。共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。前期に発見した自分の癖を直し、自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探求する。後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標とする。
- ① 前期に学んだ演技の基礎となる発声を定着させ、幅広い科白の表現を身につける。
 - ② 演技の基礎となる所作を組み合わせ、応用し、自由に自分の身体を使いこなせるようにする。
 - ③ 集団創作を理解し、上演の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2

期 間 後期

担当教員 宮崎 真子

- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古1
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャストイング発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。
授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。
「マクベス」小田島雄志訳（白水社版）学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業の出席日数と到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 演劇演習 A d

対象 演劇専攻 1年

履修条件

d組必修。
自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるためにこの授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズミアシアターカルガリー）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

期 間 後期

担当教員 ペーター・ゲスナー

授業計画

- 1 導入
- 2-8 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 9-22 シーンワーク
- 23-24 発表会
- 25-30 反省と復習シーンワーク

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著（英語版）

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習 B a

対象 演劇専攻 1年

履修条件

a組必修。

遅刻、欠席は厳禁。与えられた課題に対して十分な時間をかけ、自主的に学生同士で取り組むこと。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

前期で学んだ基本的な呼吸法、発声、動きを、より深く体得する。シェイクスピアの戯曲を通して、きちんと話す、きちんと聞く、きちんと動く、止まる、座る、といった、前期で学んだ基礎を応用し、様々な表現を可能にする。共演者との関係性を構築していくプロセスを体得する。前期に発見した自分の癖を直し、自分らしさ、個性を引き出すと共に、演出的な視点＝舞台空間におけるポジションの取り方、緩急のつけ方、自分の見せ方、観客をどう意識するか等、具体的に客観性を持って、観る人を感動させる表現術を探求する。後半は、前半の授業の成果をひとつにまとめるために、発表会の準備を行う。一本の公演を行うために必要な役割分担、集団創作における協調性を身につける。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標とする。

- ① 前期で学んだ演技の基礎となる発声を定着させ、幅広い科白の表現を身につける。
- ② 演技の基礎となる所作を組み合わせ、応用し、自由に自分の身体を使いこなせるようにする。
- ③ 集団創作を理解し、上演の中の自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 呼吸法、発声、ウォームアップ、即興劇
- 3 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現1
- 4 呼吸法、発声、ウォームアップ、喜怒哀楽の表現2

期 間 後期

担当教員 宮崎 真子

- 5 呼吸法、発声、ウォームアップ、台本の読解
- 6 呼吸法、発声、ウォームアップ、立ち稽古1
- 7 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表1とキャストイング発表
- 8 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表2とダメだし
- 9 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表3とダメだし
- 10 呼吸法、発声、ウォームアップ、課題発表4とダメだし
- 11 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 12 呼吸法、発声、ウォームアップ、通し稽古
- 13 課題発表7とダメだし
- 14 課題発表8とダメだし
- 15 まとめ

授業時間外の学習

毎回ショートシーンの上演台本作り、演技練習の課題が出るので入念に準備すること。

授業で出された批評、だめ出しについて検討、深く理解し、改善すること。

教科書・参考書等

授業時に配布するプリント。

「マクベス」小田島雄志訳（白水社版）学校でまとめて注文する。すでに持っている学生は購入の必要なし。

成績評価

授業の出席日数と到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。

- A 欠席が2日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者。
- B 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者。
- C 欠席が5日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者。
- D 欠席が6日を超える、または、到達目標が49点以下の者。

科目名 演劇演習 B b

対象 演劇専攻 1年

履修条件

b組必修。

自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるためにこの授業でゲームとインプロゼーションとエチュードを行う。次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。①サブテキストをどのように創出するのか②なりゆきの重要性を理解する③ターニングポイントのきっかけを掴む④困難な状況において自分の演技を維持する。さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて役になるのではなく役を演じることを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズミアシアター・カルガリー）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

期 間 後期

担当教員 ペーター・ゲスナー

授業計画

- 1 導入
- 2-8 ゲーム、エチュード、インプロゼーション
- 9-22 シーンワーク
- 23-24 発表会
- 25-30 反省と復習シーンワーク

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

「シアタースポーツ」キース・ジョンストン著（英語版）

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習 B c

対象 演劇専攻 1年

履修条件

c組必修。
遅刻、欠席厳禁。グループで取り組む作業になるので、自主的に学生同士で準備、予習をすること。稽古着、稽古履き着用。7月の演技発表会前の1ヶ月間は放課後に連日自主稽古を行うことになるので、それに全日程参加すること。

授業の概要

人に見られること、その中で人を見ること、その中で意図した台詞を意図した状態を保ちながら意図した動きを実行すること。それらがバランスよく共存し、並行して運動できるような方法を身につけていく。共演者との協力関係、協働した場面構成力は自分と相手を客観視する視点を獲得した上でこそ養われるものである。自分の意図を実現すること、そして相手の意図を実現すること、そしてさらに協働の意図を了解しあい、さらに高まった意図を醸成しあう創造的な関係を共演者と築いていく人間的な力まで含めて、演技の練習を通して鍛えていくことを意図する。

基本的に、短い場面を実際に演じて作ってきてもらい、それを批評し検討する、ということを通して学習を進める。

最終的には演技発表会に出演して成果を問うことが目標として設定されている。その自主稽古に欠席、遅刻するものは出演できないので、重々自覚の上参加すること。集団で稽古し、意見を出し合い、意見をたかかわせ、より高次の方針を皆でまとめあげることのできる能力が、演技する力とはまた別の重要な獲得目標である。すべての過程に受身ではなく能動的にかかわることが求められる。

授業の到達目標

授業時間ごとに目標を設定する。自分の感情を把握すること。自分の状況を把握すること。相手との距離を意識して把握すること。その上でその距離を操作すること。それら基本的な項目の獲得の上に、演技に対する理解を深める。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 与えられた台本の短いシーンを演じる①
- 3 与えられた台本の短いシーンを演じる②
- 4 与えられた台本の短いシーンを発表する
- 5 台本をたくさん読み、探し、演じる①

期間 後期

担当教員 鈴江 俊郎

- 6 台本をたくさん読み、探し、演じる②
 - 7 自力で探した台本を発表し、批評する①
 - 8 自力で探した台本を発表し、批評する②
 - 9 チームで作品を作る過程について原則の確認①
 - 10 チームで作品を作る過程について原則の確認②
 - 11 演技発表会への課題作品を探し、演じる①
 - 12 演技発表会への課題作品を探し、演じる②
 - 13 発表のためのスタッフワークの分担、原則の確認
 - 14 発表作品の総仕上げ、通し稽古
 - 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
- ※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することがある。

授業時間外の学習

毎回、ショートシーンの課題演技あるいは創作を求めるので、授業前にその準備を行うこと。
また、授業中に出示された批判、指導された具体的なだめ出しを授業後に、検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に配布。
参考資料等：必要に応じて授業時に配布。

成績評価

- (1)出席日数 (2)課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3)課題に対する成果等を総合的に評価する。
- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
 - B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
 - C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
 - D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 演劇演習 B d

対象 演劇専攻 1年

履修条件

d組必修。
授業時間外での予習、復習に積極的に取り組むこと。「個」の訓練とグループワークの二つを両立させること。補習を随時実施する予定であるので出席すること。

授業の概要

この授業では、前期に開講された「基礎演劇演習」で培った力量を礎に、俳優を目指すための更なる動機づけと学習習慣の確立、さらには良きアンサンブルの取り方を学ぶ。

そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの基に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な「モノログドラマ」として完成させるという方法をとる。

加えて、第二の課題としてミュージカル台本の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、歌唱・本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、ミュージカル演技の基本を学ぶこととする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

授業の到達目標

- ①「自画像を演ずる」というテーマの基に「モノログドラマ」の完成とその発表。
- ②戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」の完成とその発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 ウォーミングアップ
- 3 「自画像」台本の作成
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」の課題提示
- 6 歌唱・本読み稽古①

期間 後期

担当教員 越光 照文

- 7 歌唱・本読み稽古②
 - 8 歌唱・本読み稽古③
 - 9 オーディション
 - 10 立ち稽古、その①
 - 11 立ち稽古、その②
 - 12 立ち稽古、その③
 - 13 「シーンワーク」の作品発表
 - 14 自己の「自画像」を演じ発表する。
 - 15 他者の「自画像」を演じ発表する。
- ※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①「自画像」発表へ向けての自主稽古
- ②「シーンワーク」発表へ向けての自主稽古
- ③「自画像」「シーンワーク」における補習授業への出席音楽之友社

教科書・参考書等

教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。

成績評価

- (1)出席日数 (2)授業への取り組み (3)発表の内容を総合的に判断して評価する。
- A 全出席。授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる。
 - B 出席が良好であること。自画像、シーンワークの発表が評価できる。
 - C 出席が規定回数に達している。自画像、シーンワークの発表まで達している。
 - D 出席が規定回数に達していない。自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 演劇演習Ca

対象 演劇専攻2年

履修条件

- ①a組必修
- ②授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- 相手役との「関係性」を重視し、40分程度の中編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
※男女混成の4～5人芝居になる予定。
- 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング

期間 後期

担当教員 三浦 剛

- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3
- 9 訓練・課題立ち稽古4
- 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
- 11 訓練・課題上演1
- 12 訓練・課題上演2
- 13 訓練・課題上演3
- 14 訓練・課題上演4
- 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

- ①与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ②課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①出席日数 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
- ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- A：①～⑤のうち全てを獲得した者
- B：①～⑤のうち4つを獲得した者
- C：①～⑤のうち3つを獲得した者
- D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習Cb

対象 演劇専攻2年

履修条件

- ①b組必修
- ②授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- 相手役との「関係性」を重視し、40分程度の中編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
※男女混成の4～5人芝居になる予定。
- 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング

期間 後期

担当教員 三浦 剛

- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3
- 9 訓練・課題立ち稽古4
- 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
- 11 訓練・課題上演1
- 12 訓練・課題上演2
- 13 訓練・課題上演3
- 14 訓練・課題上演4
- 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

- ①与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ②課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①出席日数 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
- ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- A：①～⑤のうち全てを獲得した者
- B：①～⑤のうち4つを獲得した者
- C：①～⑤のうち3つを獲得した者
- D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 C c

対象 演劇専攻 2年

履修条件

c組必修。

演劇は履修者がその空間に共に存在して、その劇的狀況を直接体験しなければ修得することが難しい学問である。この授業では、劇的狀況によって教育成果を求める為、履修者の出席日数及び遅刻回数を重く見て、評価の対象としている。期末試験に関しては、上記の理由からいかなる理由があっても、30%以上欠席したものは、受験を認めず、また、遅刻についても、同様に30%以上は受験を認めないので健康管理には充分注意すること。

再履修者については、授業成立条件を満たす為の人数制限により、履修を許可したのだけとする。また、10%以上の欠席または遅刻をした再履修者については、その時点で履修許可を取り消すことがあるので、あらかじめ十分に注意すること。なお、この科目を履修するにあたっては、上記の履修条件をよく自覚し、自己管理を徹底すること。また、この授業は、ミュージカルの基本である、音楽を確かめつつ、振付、演技へと枠を広げ、ミュージカルの変遷を踏まえた、概論を論じていくので、授業中に出题される宿題を必ず次週までに準備して授業にのぞむことが必要となる。

授業の概要

短期大学の2ヵ年という期間に「演技」を完璧に修得することは大変難しく、その為それに見合う凝縮された教育システムが要求される。そこで、この科目の約6ヶ月間というこの短期授業に、26週間で修得できる演技者養成システムの「シノザキシステム」を使用し、演技基本を修得することを目指す。授業は、①理論、②実技、③基本訓練、の3部から構成され、一回の授業の中で展開していく。また、集団芸術としての演劇には、必須条件のアンサンブルについても、これの修得を目的の一つに上げ、班編成による演技課題の発表を実施する。従って、班別に自主稽古をして、発表の準備をすることが課せられる。

特に、この授業が目指すものは、「演劇とは何か」「演じるとは如何なる行為か」という演劇における基本の理念と、それを可能にする表現方法、そして日常の訓練方法の修得である。毎回の授業は、教科書持参の他、プリント教材を配布。稽古着の着用は当然のこと、すべらないゴム靴の内履きシューズを履く事。また、授業内容によっては、衣裳着用、小道具持参が必要な場合があるので、事前の指示に従い各自調達し準備すること。

授業の到達目標

- 1 演技を演劇全体から考えることができるようになること。
- 2 基礎演技ができるようになること。
- 3 鼻濁音などの音声化の基礎ができるようになること。

期間 後期

担当教員 篠崎 光正

- 4 演技の呼吸が理解できるようになること。
- 5 そのほか自分の個性を表現できるようになること。

授業計画

<基本>

1 序論	呼吸	2 ウソ	3 二つの神経	4 三つの間
5 笑い	6 ダゾデザドゼ	7 手をひっぱたく	8 背中合わせ	
9 真似	10 スローモーション	11 視覚	12 総合課題1	
13 信頼	14 ワルツ	15 喜び	16 耳を動かす	
17 物になる	18 総合課題2	19 大学を落ちて浪人	20 母親の涙	
21 出合い	22 クラウン	23 イメージ	24 役づくり	
25 朗読	26 総合課題3			

<課題>

- 1 脚本の一部を稽古
- 2 脚本の一部を発表
- 3 講評
- 4 複数の脚本の発表

授業時間外の学習

班別に自主稽古をして、演技課題発表の準備をすること。

教科書・参考書等

教科書：篠崎光正著「シノザキ・システム・篠崎光正演技術」(晩成書房)
 参考書：スタニスラフスキー・システム
 近代俳優術 (千田是也著)
 篠崎光正著「シノザキ・システム・ベーシック・アクション」

成績評価

この授業では、劇的狀況によって教育成果を求める為、履修者の出席日数及び遅刻回数を重く見て、評価の対象としている。

- 演技基本の理論、実技、基本訓練のすべてが修得できたものはA
 演技基本の理論、実技、基本訓練のうち2つが修得できたものはB
 演技基本の理論、実技、基本訓練のうち1つが修得できたものはC
 演技基本の理論、実技、基本訓練のどれもが修得できなかったものはD

科目名 演劇演習 C d

対象 演劇専攻 2年

履修条件

①d組必修

- ②授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋(地下足袋は不可)を着用すること。
- ④授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- ・毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- ・相手役との「関係性」を重視し、40分程度の中編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
※男女混成の4~5人芝居になる予定。
- ・「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング

期間 後期

担当教員 三浦 剛

- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3
- 9 訓練・課題立ち稽古4
- 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
- 11 訓練・課題上演1
- 12 訓練・課題上演2
- 13 訓練・課題上演3
- 14 訓練・課題上演4
- 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

- ①与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
- ②課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布(戯曲)
 参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①出席日数
 - ②課題の成果
 - ③表現者としての真摯な姿勢
 - ④自らを研鑽する意欲
 - ⑤身体的、精神的健康の維持
- A: ①~⑤のうち全てを獲得した者
 B: ①~⑤のうち4つを獲得した者
 C: ①~⑤のうち3つを獲得した者
 D: ①~⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 D a

期 間 前期

対 象 演劇専攻 2年

担当教員 岡安 伸治

履修条件

- 1) a組必修。
- 2) 自己管理の徹底。グループ作業のため欠席、遅刻をすると、他のメンバーが作業を進める上で支障となり、この実技科目の目的を果たせない。
- 3) 稽古着を着用し、底の薄い、滑らない内履きシューズを使用すること。

授業の概要

具体的な作品作りにより演技能力を習得するもの。教材の1)「課題稽古」2)「課題発表」3)課題発表グループに対し「批評・感想文」の提出4)提出された文章より「創造へのヒント」を読み取り、更にグループでの話し合いと発表を通して実践できるようにする。個々の演技課題として「セリフの肉体化」「空間認知」「空間バランス」「演技反応」「集中と身体コントロール」他などを具体的に能力として身に付ける。

授業の到達目標

授業時間ごとに演技者として獲得しなければならない能力の課題を提示。

- 1) 空間認知 2) 細部の身体コントロール 3) 無意識の意識化 4) 演技のニュートラル 5) 集中力 6) インスピレーション等 これらの基本要素の理解と表現能力の習得。

授業計画

- 1) 授業ガイダンス 授業概要と進め方について (W/Sはワークショップの略)
- 2) 空間バランスのW/S
- 3) パターン認知のW/S
- 4) バランス感覚のW/S
- 5) 言葉の即興性のW/S
- 6) 距離感をコントロールするW/S

- 7) 人間以外のものを表現するW/S
- 8) 関係を視覚化するW/S
- 9) セリフの肉体化のW/S
- 10) 集中と身体コントロールのW/S
- 11) 肉体と意識をコントロールするW/S
- 12) リアリティ能力アップのW/S
- 13) キャラクターづくりのW/S
- 14) 身体コミュニケーションのI W/S
- 15) 身体コミュニケーションのII W/S

※講義内容に関しては発表成果の進み具合で前後することがある。

授業時間外の学習

授業概要の1)～4)までのプロセスを前提とするこの授業では、少ない授業時間内の打ち合わせ、稽古では発表までの準備は充分とは言えない。自主稽古などの予習、発表後の指摘された問題点の整理など復習を心がけること。

教科書・参考書等

教材は授業時に配布。

成績評価

1)「表現の成果」2)「課題の成果」3)「出席日数」等を総合的に評価。また必要と判断した場合、個人課題を課し改めてテストすることもあり。

- A 評価1)～3)を満足させるもの。特に表現の成果。
- B 評価1)～3)の内一つが努力不足。
- C 評価1)～3)の努力不足
- D 評価1)～3)に問題あり。

科目名 演劇演習 D b

期 間 前期

対 象 演劇専攻 2年

担当教員 三浦 剛

履修条件

- ① b組必修。
- ② 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③ 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋(地下足袋は不可)を着用すること。
- ④ 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤ 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- ・ 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- ・ 相手役との「関係性」を重視し、15分程度の短編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。※男女の二人芝居になる予定。
- ・ 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

短編戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング

- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3
- 9 訓練・課題立ち稽古4
- 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
- 11 訓練・課題上演1
- 12 訓練・課題上演2
- 13 訓練・課題上演3
- 14 訓練・課題上演4
- 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。

課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

教科書：授業時に配布(戯曲)
参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①出席日数 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
 - ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- A：①～⑤のうち全てを獲得した者
 - B：①～⑤のうち4つを獲得した者
 - C：①～⑤のうち3つを獲得した者
 - D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇演習 D c

対象 演劇専攻 2年

履修条件

c組必修。
自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。

まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。

次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置づけを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（ルーズムースシアターカレッジ）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深める。

期 間 前期

担当教員 ペーター・ゲスナー

授業計画

- 1-5 自分の役の準備（コンテキスト、キャラクター、アナライズ）
- 6-11 衣装、舞台、小道具等セット、プランニング
- 12-16 シーン練習、エチュード
- 17-28 ワンシーンを上演する

授業時間外の学習

授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

- 「インプロ・ゲーム」 絹川友梨著
研究旅行（キース・ジョンストン ルーズムースシアター）で集めた書類
- 「シアター スポーツ」（英語版）キース・ジョンストン著

成績評価

(1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組みうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。

- A (1)～(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)～(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)～(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)～(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇演習 D d

対象 演劇専攻 2年

履修条件

- ①d組必修。
- ②授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- ③稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
- ④授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- ⑤遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

- ・ 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
- ・ 相手役との「関係性」を重視し、15分程度の短編戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。＊男女の二人芝居になる予定。
- ・ 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの有効な扱い方を課題の中で学習していく。

授業の到達目標

短編戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たな問題点、課題を発見すること。

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3 訓練・課題読み稽古1
- 4 訓練・課題読み稽古2
- 5 訓練・キャストイング

期 間 前期

担当教員 三浦 剛

- 6 訓練・課題立ち稽古1
- 7 訓練・課題立ち稽古2
- 8 訓練・課題立ち稽古3
- 9 訓練・課題立ち稽古4
- 10 訓練・小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表・ダメだし
- 11 訓練・課題上演1
- 12 訓練・課題上演2
- 13 訓練・課題上演3
- 14 訓練・課題上演4
- 15 全チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

- 教科書：授業時に配布（戯曲）
- 参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①出席日数 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢
- ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- A：①～⑤のうち全てを獲得した者
- B：①～⑤のうち4つを獲得した者
- C：①～⑤のうち3つを獲得した者
- D：①～⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演技演習A (ダイアログ) a/c

対象 演劇専攻2年

履修条件

ストレートプレイコース必修。
 演劇は履修者がその空間に共に存在して、その劇的狀況を直接体験しなければ修得することが難しい学問である。この授業では、劇的狀況によって教育成果を求める為、履修者の出席日数及び遅刻回数を重く見て、評価の対象としている。演技発表日の欠席についても、他の履修者に多大な迷惑をかける為、場合によっては再履修として、発表班から外す場合があることを予め承知しておいてほしい。期末試験に関しては、上記の理由からいかなる理由があっても、30%以上欠席したものは、受験を認めず、また、遅刻についても、同様に30%以上は受験を認めないので健康管理には充分注意すること。
 再履修者については、授業成立条件を満たす為の人数制限により、履修を許可したのだけとする。また、10%以上の欠席または遅刻をした再履修者については、その時点で履修許可を取り消すことがあるので、あらかじめ十分に注意すること。なお、この科目を履修するにあたっては、上記の履修条件をよく自覚し、自己管理を徹底すること。

授業の概要

短期大学の2ヵ年という期間に「演技」を完璧に修得することは大変難しく、その為それに見合う凝縮された教育システムが要求される。そこで、この科目の約6ヶ月間というこの短期授業に、26週間で修得できる演技者養成システムの「シノザキシステム」を使用し、演技基本を修得することを目指す。授業は、①理論、②実技、③基本訓練、の3部から構成され、一回の授業の中で展開していく。また、集団芸術としての演劇には、必須条件のアンサンブルについても、これの修得を目的の一つに上げ、班編成による演技課題の発表を実施する。従って、班別に自主稽古をして、発表の準備をすることが課せられる。
 特に、この授業が目指すものは、「演劇とは何か」「演じるとは如何なる行為か」という演劇における基本の理念と、それを可能にする表現方法、そして日常の訓練方法の修得である。毎回の授業は、教科書持参の他、プリント教材を配布。稽古着の着用は当然のこと、すべらないゴム靴の内履きシューズを履く事。また、授業内容によっては、衣裳着用、小道具持参が必要な場合があるので、事前の指示に従い各自調達し準備すること。

授業の到達目標

- 1 演技を演劇全体から考えることができるようになること。
- 2 基礎演技ができるようになること。
- 3 鼻濁音などの音声化の基礎ができるようになること。

期間 前期・後期

担当教員 篠崎 光正

- 4 演技の呼吸が理解できるようになること。
- 5 そのほか自分の個性を表現できるようになること。

授業計画

<基本>			
1 序論 呼吸	2 ウソ	3 二つの神経	4 三つの間
5 笑い	6 ダブデザドゼ	7 手をひっぱたく	8 背中合わせ
9 真似	10 スローモーション	11 視覚	12 総合課題1
13 信頼	14 ワルツ	15 喜び	16 耳を動かす
17 物になる	18 総合課題2	19 大学を落ちて浪人	20 母親の涙
21 出会い	22 クラウン	23 イメージ	24 役づくり
25 朗読	26 総合課題3		
<課題>			
1 脚本の一部を稽古		2 脚本の一部を発表	
3 講評		4 複数の脚本の発表	

授業時間外の学習

班別に自主稽古をして、演技課題発表の準備をすること。

教科書・参考書等

教科書：篠崎光正著「シノザキ・システム・篠崎光正演技術」(晩成書房)
 参考書：スタニスラフスキー・システム
 近代俳優術 (千田是也著)
 篠崎光正著「シノザキ・システム・ベーシック・アクション」

成績評価

この授業では、劇的狀況によって教育成果を求める為、履修者の出席日数及び遅刻回数を重く見て、評価の対象としている。
 演技基本の理論、実技、基本訓練のすべてが修得できたものはA
 演技基本の理論、実技、基本訓練のうち2つが修得できたものはB
 演技基本の理論、実技、基本訓練のうち1つが修得できたものはC
 演技基本の理論、実技、基本訓練のどれもが修得できなかったものはD

科目名 演技演習B (アンサンブル) a/c

対象 演劇専攻2年

履修条件

- 1) ストレートプレイコース必修。
- 2) 自己管理の徹底。グループ作業のため欠席、遅刻をすると、他のメンバーとの作業を進める上で支障となり、この実技科目の目的を果たせない。
- 3) 稽古着を着用し、底の薄い、滑らない内履きシューズを使用のこと。

授業の概要

演劇の舞台における6つの緊張関係。1)「演技者の内的緊張関係」2)「演技者同士の緊張関係」3)「舞台空間との緊張関係」4)「劇場空間との関係」5)「劇場を取り巻く社会との緊張関係」6)「新しい表現を求めることとの緊張関係」。これらの関係の中で具体的に演技者が獲得すべき「発声も含めた肉体訓練」「反応する能力」「想像力」などいくつかの課題がある。その能力を獲得、向上させるために次のことを実践する。①「課題発表までのプロセス(創ること)」②「発表(結果)」③「批評行為(表現方法の比較により次へのヒントをつかむ)」。これらのプロセスを通して「演劇の表現行為とはどのようなものか」を学び課題を習得する。

授業の到達目標

授業時間ごとに演技者として獲得しなければならない能力の課題を提示。
 1) ものいい 2) 反応能力 3) 位置取り 4) 表情 5) 造形力
 6) うごきの身体コントロール等。これらの基本要素、表現能力の習得。

授業計画

- 1) 授業ガイダンス 授業概要と進め方について 集中とエネルギー
- 2) 認知の違い
- 3) 教材に含まれる課題
- 4) 立つということ
- 5) 空間認知

期間 前期・後期

担当教員 岡安 伸治

- 6) 再度、課題の目的・有効性
- 7) チェック係りの意味
- 8) 体験することに関して
- 9) 視覚の問題
- 10) 批評することの意味
- 11) 触覚の敏感さと演技
- 12) エネルギーのコントロール
- 13) 演技における主と従の関係
- 14) テンションに関して
- 15) セリフに関して

※講義内容に関しては課題発表の進み方で前後する。又、必要に応じてワークショップを組み入れる。

授業時間外の学習

授業概要の①～③までのプロセスを前提とするので、少ない授業時間内の打ち合わせ、稽古では発表までの準備は充分とは言えない。自主稽古などの予習、発表後の指摘された問題点の整理などの復習を心がけること。

教科書・参考書等

教材「トシユン」 教材は授業時に配布。

成績評価

1)「表現の成果」2)「課題の成果」3)「出席日数」等を総合的に評価する。又、必要と判断した場合、個人課題を課し改めてテストすることもある。
 A評価1)～3)を満足させるもの。特に表現の成果。
 B評価1)～3)の内一つが努力不足。
 C評価1)～3)の努力不足。
 D評価1)～3)に問題あり。

科目名 演技演習C (ナレーション) I

対象 演劇専攻2年

履修条件

声優コース必修。
遅刻、欠席のないように。
やる気、向上心をもって取り組むこと。

授業の概要

それぞれの持つ声の資質を知り、その声の魅力を引き出し、より磨きがかかるよう、声を発する基礎から学び、応用へと広げる。そして、同じ言葉でも、その声によって、心によって、相手への届き方が違うように、言葉と声と心の関係を深める。
声が言葉になり、その言葉が相手に届く素晴らしさ、怖さ、楽しさを共に学ぶ。

授業の到達目標

声の魅力が引き出され、伝える能力、喜びを高めることができる。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 声を出す一声と体の関係を知る。
3. 声を出す一声と心の関係を知る。
4. 言葉を届けるとは？
5. 言葉を届ける 時事ネタを読んでみよう。
6. 言葉を届ける 時事ネタを読んでみよう。
7. 言葉を届ける CMを読んでみよう。
8. 言葉を届ける CMを読んでみよう。
9. 言葉を届ける CMを読んでみよう。
10. 自分の思いと声を演出しよう。ラジオ番組を制作する。構想を練る。
11. 自分の思いと声を演出しよう。ラジオ番組を制作する。構成、台本を作る。

期間 前期

担当教員 斉藤 洋美

12. 自分の思いと声を演出しよう。ラジオ番組を制作する。実演しながら表現を学ぶ。
13. 自分の思いと声を演出しよう。ラジオ番組を制作する。実演しながら表現を学ぶ。
14. 自分の思いと声を演出しよう。ラジオ番組を制作する。実演しながら表現を学ぶ。発表。
15. 授業を通して学んだこと、反省点などをまとめ、更なる向上へとステップアップをはかる。
※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することがある。

授業時間外の学習

日々、自分の興味のあるもの、感動したことを書きとめ、「My notebook」を作る。また、授業内容を必ず復習し、練習すること。

教科書・参考書等

教材は授業時に配布。

成績評価

- (1)出席日数、(2)課題に取り組む積極性、(3)課題に対する成果、等を総合的に評価する。
- A 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちの3つの面の成果が獲得できた者
 - B 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちの2つの面の成果が獲得できた者
 - C 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちの1つの面の成果が獲得できた者
 - D 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちのどれも成果が獲得できなかった者

科目名 演技演習C (ナレーション) II

対象 演劇専攻2年

履修条件

声優コース必修。
「演技演習C (ナレーション) I」を履修し、単位を修得していること。
遅刻、欠席のないように。
やる気、向上心をもって取り組むこと。

授業の概要

「演技演習C (ナレーション) I」の授業で学ぶことに加え、それぞれの声と個性を磨く。個々が言葉を発する時、その言葉にこめられるものによって、その言葉が他に与える影響力を学ぶ。
更に、自分の言葉で自分の思いを表現できるように、常に自分の身のまわりで起こることに興味を持ち、心で感じ、個性を磨くことを学ぶ。

授業の到達目標

声の魅力、それぞれの個性が引き出され、伝える能力、喜びを高めることができる。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 課題を通して表現力を学ぶ
3. 課題を通して表現力を学ぶ
4. 課題を通して表現力を学ぶ
5. 個性を磨く スピーチ力をつけよう。
6. 個性を磨く 自己紹介をやってみよう。
7. 個性を磨く 自己紹介をやってみよう。
8. 個性を磨く インタビュー (聞く力) 力をつけよう。
9. 個性を磨く インタビュー (聞く力) 力をつけよう。
10. 課題を通して 語る力を学ぶ。

期間 後期

担当教員 斉藤 洋美

11. 課題を通して 語る力を学ぶ。
12. 課題を通して 語る力を学ぶ。
13. 課題を通して 語る力を学ぶ。
14. 課題を通して 学んだことを発表する。
15. まとめ
※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することがある。

授業時間外の学習

日々、自分の興味のあるもの、感動したことを書きとめ、「My notebook」を作る。それをもとに毎回授業の最初に1分間スピーチを行うため、1分間スピーチを考えてくる。
また、授業内容を必ず復習し、練習すること。

教科書・参考書等

教材は授業時に配布。

成績評価

- (1)出席日数、(2)課題に取り組む積極性、(3)課題に対する成果、等を総合的に評価する。
- A 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちの3つの面の成果が獲得できた者
 - B 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちの2つの面の成果が獲得できた者
 - C 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちの1つの面の成果が獲得できた者
 - D 課題において把握力、表現力、声の魅力のうちのどれも成果が獲得できなかった者

科目名 演技演習D（朗読劇）Ⅱ

対象 演劇専攻2年

履修条件

声優コース必修。
「演技演習D（朗読劇）Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

プロの役者を目指す上で、必要な発声、滑舌等の基礎からマイクワーク、またマイクの前での演技を勉強する。

授業の到達目標

マイクの前での声の出し方、表現方法を身につける。

期間 前期

担当教員 原 えりこ

授業計画

15回の授業の中で、下記の内容を行う。

1. 発声、滑舌
2. マイクワーク
3. マイクの前で、朗読劇、アニメアテレコ、ナレーション等の練習
4. 録音
5. 発表会（マイクを使って生朗読劇）を予定。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

開講時に提示。

成績評価

出席日数、授業中の積極性、修得度を重視する。

科目名 演技演習E（アテレコ）Ⅱ

対象 演劇専攻2年

履修条件

声優コース必修。
健康管理に十分留意し、遅刻・欠席のないようにすること。
*理由無く二回以上を連続で欠席した者については、以降の講義への出席を禁止する。
前年度に「演技演習E（アテレコ）Ⅰ」を履修し、単位を取得していること。
演技演習EⅠの単位を取得していない者は、別途レポートの提出を条件とする。

授業の概要

声優として必要な演技技術を学ぶ。
「演技演習EⅠ」で習得した技術論を分析し、応用し、より具体的にしていく。

「空間感覚・距離感の確立」

「呼吸領域を意識し、身体を鳴らす事を覚える」

「声にパーソナリティを持たせる」

上記三点を柱とし、実際にアニメーション映像にアテレコを行ない、それを視聴してみる事で、アテレコにはどのような技術・能力が必要かを考える。
ボイスサンプルを実際に作成し、収録、配布する。
自分の声の持っている特質、長所、弱点を知る。

授業の到達目標

将来、プロの声優として活動する為の演技技術を身につける。
プロの現場オーディション、所属オーディションで合格出来る実力を養成する。

授業計画

- 1 声優演技について 復習
- 2 神経の多数化について（座学）
- 3 アテレコ実習①（基本理論）
- 4 アテレコ実習②
- 5 アテレコ実習③
- 6 オーディオドラマ演技① マイクワークの実践

期間 前期

担当教員 小金丸 大和

- 7 オーディオドラマ演技②
- 8 オーディオドラマ演技③
- 9 アテレコ実習④（キャラクター表現理論）
- 10 アテレコ実習⑤
- 11 アテレコ実習⑥
- 12 ボイスサンプル原稿作成
- 13 ボイスサンプルリハーサル、収録
- 14 ボイスサンプル視聴と講評
- 15 期末試験、まとめ

授業時間外の学習

目標とするプロの声優・俳優の出演しているアニメーション作品を複数視聴する。

各プロダクション・養成所・研究所の情報を集め、どの事務所がどの方面の仕事に強いかを研究しておき、卒業後の進路を決定する時の指針とする。

教科書・参考書等

教科書：教材プリント、台本は随時授業時に配布
参考資料：「さんにんのかい」DVD「新選組」「孫悟空」（VAPより発売）

成績評価

出席状況及び実技試験における技術の習得状況において評価する。
追加試験、補習授業は原則的に行わないものとする。

成績は、実技試験の得点を元に、ボーダーライン上の場合には出席状況、受講態度等を加味して評価する。

- A：およそ90点以上（プロの声優として作品に出演出来るレベル）
B：およそ70点以上（プロダクション所属オーディション等に合格出来るレベル）
C：およそ60点以上（講義内容を理解し、理論としての声優演技基本を理解出来た者）
D：59点以下（講義内容を理解出来ていない、実践する事が出来ていない者）

科目名 歌唱Ⅰ①

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。
プロ意識を持って、学ぶ意欲のある者。

授業の概要

ミュージカル表現形式の中で重要な三分野の一つ、歌唱、音声学、生理学的理解を深め、発声のしくみ、呼吸のしくみを理解し、実践出来る技術を習得していく。
楽器（インストルメント）としての身体を育て、共鳴させる技術を覚えていく。
歌にイメージを含め、情感豊かに歌うにはどうすれば良いか、身体で覚えていく。

授業の到達目標

歌唱のための理想的な筋肉の使い方、呼吸法を習得すること。
歌にしっかりとイメージを乗せ、かつ表現出来るための心、技、体を作り上げる。

期間 後期

担当教員 橋爪 貴明

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 身体を知る
- 3 発声、呼吸法
- 4 地声、ファルセット
- 5 ミックスボイス
- 6 課題曲の実践
- 7 /
- 8 /
- 9 /
- 10 各自の課題克服
- 11 /
- 12 /
- 13 /
- 14～15 試験、まとめ

授業時間外の学習

決められた課題曲を各自、研鑽しておくこと。
ミュージカル作品、ライブ等を積極的に観劇し、色々なジャンルの音楽を鑑賞する。

教科書・参考書等

授業中に配布。

成績評価

授業態度、出席状況、達成度。
学期末に人前で歌う機会を作り、評価する。

科目名 歌唱Ⅰ②

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。
将来ミュージカルの舞台に演者として進む希望があり、その為の歌唱面での基礎知識及び技術を学ぶ意志のある者。

授業の概要

ほとんどの生徒が本格的に歌を学ぶのは初めてだと思うので、基本的な身体の使い方、息（呼吸）の使い方を重点的に学びその後、徐々に曲を使いながら、発声練習で習得した声を、曲として歌う場合どうすればいいかなどを教えていきたい。

授業の到達目標

- ・歌唱としての身体の使い方、息の使い方を理解する。
- ・曲を歌う場合の息の流れ、身体の構え等を体験する。
- ・上記の2点を自然に無理無く行える様に学ぶ。
- ・曲の解釈（詞の内容、音楽の構成）等も少しずつ学んでいく。

授業計画

- 1 発声練習（基本的身体の使い方、呼吸の仕方）
- 2 発声練習
- 3 発声練習
- 4 発声練習
- 5 曲を使い発声練習で学んだ声を応用させる
- 6
- 7 ↓（様々な歌い方をさせ、声の持つ表現を体験させる。
- 8 複数の曲を使用する場合もあり。）
- 9
- 10 ↓

期間 後期

担当教員 大場 公之

- 11 曲の解釈を交えながら声の持つ表現方法、テクニックも教える
- 12 ↓
- 13 ↓
- 14 ↓
- 15 ↓

授業時間外の学習

自主練習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

学生の進行状況に合わせ、その都度曲を選び教材としていきたい。

成績評価

- A 発声をある程度習得し、曲を歌う場合でも有効に使うことができる。
- B 発声をある程度習得したが、曲を歌う場合、応用が十分にできていない。
- C 発声はまだ十分に理解できてなく、曲での応用が未熟である。
- D 発声が理解できず、曲も歌うまでに到らない。

科目名 歌唱Ⅰ③

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。
歌で自分を表現することに、欲求・熱意・喜びを感じたい人。

授業の概要

ミュージカルであれ劇中歌であれ、あるいはオペラであれ、演劇形式の中の大きな要素として歌われる歌は、単に美しい声で楽譜通りに歌うだけでは成り立たない。

歌でどれだけ感情やニュアンスを伝えられるか、生きた言葉や息遣いを歌の中に吹き込めるかが問われる。

この授業ではできるかぎり個人々に時間をかけ、ミュージカルナンバーを中心に、日本語で歌う。

私自身のミュージカル俳優としての経験から体験したことを伝え、その人にしか歌えない歌を見つけ出してほしい。

授業の到達目標

歌うという行為にまだまだ慣れていない人も多いようである。人前で歌うことに臆することなく、歌うことを面白がるようになること。

体の使い方、呼吸の感じ方、言葉の発し方、等々、各人各様の歌が歌えるように。

期間 後期

担当教員 佐山 陽規

授業計画

- 1 こんやく体操を通して、自分の身体を知り、歌っている時でも身体を開放できるようにする。空間の感覚を養う。
- 2 歌の言葉(歌詞)を、台詞としてしっかり語る。
- 3 台詞として喋った時の身体の使い方、息遣い等を、歌の中に持ち込む。

歌はその人の技量や感覚、音楽や言葉に対するこだわりやセンスに大きく左右される。上記(1~3)を基本として、全授業を通して個々に、それらを地道に磨き上げて行く。

授業時間外の学習

歩いている時、食事をしている時、運動をしている時、座って講義を受けている時、その時々自分の身体の状態、呼吸の状態に意識を向け、常に自らの身体を、呼吸をコントロールする習慣を付けること。

教科書・参考書等

授業時に楽譜を配布。
寝転がったり動いたりでき、裸足になれる服装で。
ミュージカルやオペラの舞台やビデオを観たり、CDを聴いたり、とにかく数多く接すること。

成績評価

期末に実技試験。出席日数、受講態度を加味しA~Cに。出席不良をDとする。

科目名 歌唱Ⅰ④

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。
遅刻、欠席厳禁。授業から授業の間の毎日をしっかりと埋めること(予習復習自己課題の予習復習)。
稽古着、稽古履き着用。
自分を高めようとする意欲のある者。

授業の概要

楽器として自分の体を知ることから始め、そしてそれをどう育てて使っていくか良いのかをボイストレーニングとして呼吸法、筋力トレーニング、アレクサンダーテクニック、ヨガ、解剖学、音声学などを交えて進めていく。また、実際の楽曲を通しそれを実践に移すと共にテクニックだけに偏らない音楽性も開拓していく。楽曲の解釈に必要な和声や理論も随時付加していく。受け身の授業にならず積極的に取り組める授業をめざす。

授業の到達目標

楽器としての体を知り機能させること。演2で行いたいより深い音楽へのアプローチの基礎をしっかりと身に付けること。

授業計画

1. ガイダンス
2. 歌の披露及び体の構造の説明
3. 筋力トレーニング、声の出る仕組み
4. 筋力トレーニング、呼吸法、体の使い方
5. 筋力トレーニング、呼吸法、発声

期間 後期

担当教員 林 絵理

6. 筋力トレーニング、発声、楽曲の提示
- 7~14. 筋力トレーニング、発声、楽曲での実践
15. 発表(試験)、まとめ

※講義内容に関しては生徒達の達成状況により変更する事がある。

授業時間外の学習

出された課題への予習、復習をきちんと行い自分なりの次の授業への課題を持てるようにすること。
同じダメ出しをされないように何らかの形で改善がみられるようにすること。

教科書・参考書等

必要な教材等は授業時に配布。

成績評価

出席日数、授業に取り組む態度、成果等を総合的に判断するが出席日数、受講態度に特に重きを置く。

- A 出席日数、積極性、成果ともに優秀と判断できた者
- B 出席日数、積極性は優秀であったが成果があと一息と判断した者
- C 出席日数、積極性、成果ともにあと一息と判断した者
- D 出席日数、積極性、成果ともに不満足であった者

※最後の授業時に実技試験を行う。

科目名 歌唱Ⅰ⑤

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。
演劇、ミュージカルに強い興味を持ち、必ずプロになることを目標としている人。
音楽に強い興味を持ち楽譜を読むことができる人が望ましい。

授業の概要

音声学を理解させ、その発声原理の元に音楽、演劇を理解できるよう学ぶ。

授業の到達目標

授業中に配布する曲を発表できるようになること。

期間 後期

担当教員 矢部 玲司

授業計画

第1回から第15回の授業で以下の項目を行なう。
音声学を詳細にわたり理解させた上で

- 1 練習曲集を使い、必須音域を確保する。
- 2 歌唱の仕組みを理解する。
- 3 歌詞を科白として朗読する。

授業時間外の学習

楽譜と向き合う時間を作ること。

教科書・参考書等

授業中に配布する。「コンコーネ50番（※主に高声用を使う）」（全音音楽出版）、ミュージカル集等。

成績評価

A 授業態度、出席状況、成果ともに優秀と判断できた者
B 授業態度、出席状況は優秀であったが、成果があと一息と判断した者
C 授業態度、出席状況、成果ともにあと一息と判断した者
D 授業態度、出席状況、成果ともに不満足であった者

科目名 歌唱Ⅱ①④

対象 演劇専攻2年

履修条件

ミュージカルコース必修。
プロ意識を持ち、学ぶ意欲のある者。
「歌唱Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

ミュージカル歌唱の基本的な技術を理解し、確立すること。
ミックスボイスの理解、習得。
最大の響きを無理なく体現できる技術の習得。
歌のイメージ力を育てる。

授業の到達目標

課題曲の中で、これまで習得した技術を、正確に用いることが出来る。

期間 前期

担当教員 橋爪 貴明

授業計画

第1～4週
曲の中でリラックスして歌うことを意識する。
地声とミックスヴォイスのチェンジをスムーズに行う。
5～8週
言葉（歌詞）を台詞として喋る時と、歌う時をシンクロさせて表現する。
9週以降
曲のイメージを掴み、表現していく。
技術、表現力、イメージ力を統合的に発揮していく。

授業時間外の学習

決められた課題曲の研鑽。
ミュージカル作品、ライブ等を積極的に観劇し、色々なジャンルの音楽を鑑賞する。

教科書・参考書等

授業中に配布。

成績評価

出席状況。
授業態度。達成度。

科目名 歌唱Ⅱ②⑤

対象 演劇専攻2年

履修条件

ミュージカルコース必修。
将来ミュージカルもしくはヴォーカルを利用した演者、指導者を希望し、技術の習得に努力する意志のある者。
「歌唱Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

「歌唱Ⅰ」で学んだ事を踏まえ、曲で使われる詞のより深い解釈、表現、テクニックの向上を目指す。演者として必要な伝えようこと、それに伴い欠かすことのできない声の使い方、そして身体の使い方を具体的に学び習得することを心がける。

授業の到達目標

- ・曲の背景、詞の解釈、音楽的理解を総合的に会得する。
- ・自分の思う声の表現、使い方を習得する。
- ・ロングランに耐えられる声を作る。

授業計画

1. 発声練習も同時に行いながら、曲を使い声の表現方法を探る。
- 2.
3. (歌、曲の解釈を深める授業にしたい。声だけに頼らず、
4. 心で感じる解釈を目指す。)
- 5.
6. 各人の進行具合を見ながら、様々な曲を歌わせ、芝居と
7. 歌との関係を無理なく行える様、自然な歌唱を指導する。

期間 前期

担当教員 大場 公之

- 8.
- 9.
- 10.
- 11.
- 12.
13. ↓
14. {これまでのレッスンのまとめとして、各人、自分で解釈し、
15. ↓
15. ☆全て予定通りではなく、進行状況により、計画も流動的に考えて行きたい。

授業時間外の学習

自主練習をしっかりと行うこと。

教科書・参考書等

ミュージカルからの曲もしくは、教材に適した楽曲を用いたい。

成績評価

- A 歌唱においても、解釈の深さ、表現においても十分な習得がみられる。
- B 歌唱においても、解釈、表現においても十分では無いが習得の可能性が高い。
- C 歌唱、解釈、表現において未熟で総合的理解にもう少しである。
- D 総合的理解もできず、技術においても達していない。

科目名 歌唱Ⅱ③

対象 演劇専攻2年

履修条件

ミュージカルコース必修。
「歌唱Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

「歌唱Ⅰ」で学んだことを発展させ、舞台表現としての歌の獲得を目指す。劇場と言う空間を、自分の肉体を声を使って如何に満たして行くか。観客の心にどうしたら響かせることができるか。言葉が聞き取れるという事と、その中身が伝わってくることは違う。実際に多くの舞台上で生きている私自身の体験をもとにして、舞台上で歌うという事はどういう事か、言葉のニュアンスや感情を歌に乗せて観客に伝える、その人なりの方法を、身体全体を使って見つけ出して行く。

授業の到達目標

課題として与えられた作品を、観客の前で発表できるまでにする。

期間 前期

担当教員 佐山 陽規

授業計画

ミュージカルを基とした小品をテキストとし、台詞を喋る事と歌う事を有機的に繋げて行く。
全授業を通して、個人のレッスンで各人の弱点を克服し長所を伸ばすと共に、全員で一つの作品を創り上げて行く。最終的には観客の前で演じることを前提として進めて行く。

授業時間外の学習

歩いている時、食事をしている時、運動をしている時、座って講義を受けている時、その時々自分の身体の状態、呼吸の状態に意識を向け、常に自らの身体を、呼吸をコントロールする習慣を付けること。

教科書・参考書等

授業時に楽譜を配布。
寝転がったり動いたりでき、裸足になれる服装で。
ミュージカルやオペラの舞台やビデオを観たり、CDを聴いたり、とにかく数多く接すること。

成績評価

期末に実技試験。出席日数、受講態度を加味しA～Cに。出席不良をDとする。

科目名 歌唱Ⅱ⑥

対象 演劇専攻2年

履修条件

ミュージカルコース必修。
「歌唱Ⅰ」の単位修得者。遅刻、欠席厳禁。授業から授業の間の毎日をしっかり埋めること（予習復習自己課題の予習復習）。
稽古着、稽古履き着用。
自分を高めようとする意欲のある者。

授業の概要

「歌唱Ⅰ」で行った基礎をより深めていくと共に楽曲と取り組む中でどのように反映させていったらよいのかを探る。また、理論、和声（コード）、リズム等からもアプローチを行いより深い楽曲の解釈の方法を探り、作曲家、作詞家が表現したかった事を読み取り、それを最終的には自分がどう表現し、何を伝えたいのか、個性あふれる表現者として舞台上に立つための様々なアプローチを行う。英語、日本語の発声の違いや言葉をどう音符にのせていったらよいのかにも取り組む。ミュージカルで大切なしゃべるように歌うということについてもアプローチしていきたい。

授業の到達目標

楽曲に対して色々な方向からより深いアプローチが自分なりに出来るようになり自分の個性や思いが聴く人に伝えられるようになること。楽器としての体、声の更なる向上。

授業計画

1. ガイダンス 歌発表 楽曲提示
2. 筋力トレーニング、発声、音楽における横（メロディー）と縦（和声）とリズムの解釈1
3. 筋力トレーニング、発声、音楽における横（メロディー）と縦（和声）とリズムの解釈2

期間 前期

担当教員 林 絵理

- 4～14. 筋力トレーニング、発声、楽曲への反映。個人でアプローチしたことを発表し、歌い、それができたかどうか、できなかったと思う場合は何が出来なかったのか、またみんなですべてに対して意見を出しあう。次の授業ではそれを踏まえてお稽古してきたものを発表。テクニカルな指導。
15. 発表（試験）、まとめ
※講義内容に関しては生徒達の達成状況により変更する事がある。

授業時間外の学習

出された課題への予習、復習をきちんと行い自分なりの次の授業への課題を持てるようにすること。
同じダメ出しをされないように何らかの形で改善がみられるようにすること。

教科書・参考書等

必要な教材等は授業時に配布。

成績評価

- 出席日数、授業に取り組む態度、成果等を総合的に判断するが出席日数、受講態度に特に重きを置く。
- A 出席日数、積極性、成果ともに優秀と判断できた者
 - B 出席日数、積極性は優秀であったが成果があと一息と判断した者
 - C 出席日数、積極性、成果ともにあと一息と判断した者
 - D 出席日数、積極性、成果ともに不満足であった者
- ※最後の授業時に実技試験を行う。

科目名 歌唱Ⅱ⑦

対象 演劇専攻2年

履修条件

ミュージカルコース必修。
「歌唱Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。
演劇、ミュージカルに強い興味を持ち、必ずプロになることを目標としている人。
音楽に強い興味を持ち楽譜を読むことができる人が望ましい。

授業の概要

音声学を理解させ、その発声原理の元に音楽、演劇を理解できるよう学ぶ。

授業の到達目標

授業中に配布する曲を発表できるようになること。

期間 前期

担当教員 矢部 玲司

授業計画

- 第1回から第15回の授業で以下の項目を行なう。
音声学を詳細にわたり理解させた上で
- 1 練習曲集を使い、必須音域を確保する。
 - 2 歌唱の仕組みを理解する。
 - 3 歌詞を科白として朗読する。

授業時間外の学習

楽譜と向き合う時間を作ること。

教科書・参考書等

授業中に配布する。「コンコーネ50番（※主に高声用を使う）」（全音音楽出版）、ミュージカル集等。

成績評価

- A 授業態度、出席状況、成果ともに優秀と判断できた者
- B 授業態度、出席状況は優秀であったが、成果があと一息と判断した者
- C 授業態度、出席状況、成果ともにあと一息と判断した者
- D 授業態度、出席状況、成果ともに不満足であった者

科目名 ショーダンス I c d

対 象 演劇専攻 1 年

履修条件

ミュージカルコース必修。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ステップを覚えて、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- 振り付けを覚えて、作品を創っていく。

授業の到達目標

レベルに個人差があるので、それぞれが目標を作り、その目標に向かって肉体訓練、踊りの感性、表現を習得する。

期 間 後期

担当教員 三村 みどり

授業計画

前半は自分の肉体の長所、短所を知り、踊る為の柔軟性軸を身につける訓練を中心に行う。

後半は感性や感情をプラスして、表現者としての動き、ダンスを中心に行う。

授業時間外の学習

出来ない振りは自主トレーニングして参加すること。

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

成績評価

出席状況及び実技試験で評価する。

科目名 ショーダンス II d

対 象 演劇専攻 2 年

履修条件

ミュージカルコース必修。
「ショーダンス I」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ステップを覚えて、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- 振り付けを覚えて、作品を創っていく。

授業の到達目標

実技公開試験に向けて、作品を踊り込むことにより、肉体、感性、表現を磨いていく。

期 間 前期

担当教員 三村 みどり

授業計画

前半は「ショーダンス I」で学んだ事を復習、確認、さらに表現を広げ、自分の個性が生かされるよう肉体の訓練を行う。

後半は実技公開試験に向けて、振り付けを覚え、踊り込んで作品を創り上げていく。

授業時間外の学習

実技公開試験の振付・練習を行う為、時間外の練習にも参加すること。

出来ない振り付けは自主トレーニングして参加すること。

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

成績評価

出席状況及び実技試験で評価する。

科目名 ソルフェージュ I ①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。

授業の概要

音楽の基礎の力を身につける。読譜力、リズム再現、視唱、譜面を書く力、聞き取る力（聴音）楽典。コード理論。

授業の到達目標

ピアノ、またはギターを使い譜面を読み演奏、表現出来るようになる。

毎回の授業で与えられたテーマについて発表会を行う。

期間 後期

担当教員 岩崎 廉

授業計画

15回の授業を、下記のような流れで行う。

- 1 テスト
- 2 読譜の基礎
- 3 読譜の基礎
- 4 読譜の基礎とリズム再現
- 5 聴音小テスト
- 6 視唱小テスト
- 7 楽器を演奏する。
- 8 楽典と演奏
- 9 小試験
- 10 小発表会
- 11 楽典
- 12 試験、まとめ

授業時間外の学習

前回の授業で与えられたテーマをまとめ、授業の最後に発表する。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

発表点…40点満点

小テスト…20点満点

期末試験…40点満点

3つの点数の総合で評価される

科目名 演劇特別演習 I ①②③

対象 演劇専攻1年

履修条件

やる気があれば、それでいい。逆にいえば、やる気がないのになんとかは受けないでほしい。それは、お互いの不幸になる。

授業の概要

正しい発声とは何か?をはじめとして、「正しい身体とは何か?」「演技とは何か?」など、基本的なことをおさえる。

授業の到達目標

舞台上立つにふさわしい声や身体、演技の考え方、アプローチのしかたを身につけてほしい。

期間 後期

担当教員 鴻上 尚史

授業計画

1回～5回 正しい発声とは何か?

6回～9回 正しい身体とは何か?

10回～15回 リアルな演技とは何か?

授業時間外の学習

とにかく、いろんな芝居（特に20代とか同世代の）を見てほしい。20代の俳優が何をしているか、仙川から出て、見ること。

教科書・参考書等

参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）と「俳優になりたいあなたへ」（ちくまプリマー新書）「演技と演出のレッスン」（白水社）です。

が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。

成績評価

出席及び授業での参加態度・結果によって判断する。

科目名 演劇特別演習Ⅱ a / c

対象 演劇専攻2年

履修条件

● ストレートプレイコース必修。
「演劇特別演習Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。
やる気があれば、それでいい。逆にいえば、やる気がないのに
なんとなくは受けないでほしい。それは、お互いの不幸になる。

授業の概要

- スタニスラフスキー・システムをざっと解説
- 「声の5つの要素」
- 三つの集中の輪
- リアルな感情と意識した（ひねった動き）の共通部分としての演技の追求。

授業の到達目標

● リアルにかつ楽しく演技ができるようになること。
「嘘」と「嘘くさい」と「リアル」の演技の違いが分かるようになること。

期 間 前期

担当教員 鴻上 尚史

授業計画

- 1回～5回 スタニスラフスキー・システムについて
- 6回～9回 声の教養・身体の教養を上げるために
- 10回～15回 さまざまな演技のトライアル

授業時間外の学習

● とにかく、いろんな芝居（特に20代とか同世代の）を見てほしい。20代の俳優が何をしているか、仙川から出て、見ること。

教科書・参考書等

● 参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）と「俳優になりたいあなたへ」（ちくまプリマー新書）「演技と演出のレッスン」（白水社）である。
が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。

成績評価

● 出席及び授業での参加態度・結果によって判断する。

科目名 演劇特別演習Ⅱ b d

対象 演劇専攻2年

履修条件

● 「演劇特別演習Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。
やる気があれば、それでいい。逆にいえば、やる気がないのに
なんとなくは受けないでほしい。それは、お互いの不幸になる。

授業の概要

- ○スタニスラフスキー・システムをざっと解説
- ○「声の5つの要素」
- ○三つの集中の輪
- ○リアルな感情と意識した（ひねった動き）の共通部分としての演技の追求。

授業の到達目標

● リアルにかつ楽しく演技ができるようになること。
「嘘」と「嘘くさい」と「リアル」の演技の違いが分かるようになること。

期 間 前期

担当教員 鴻上 尚史

授業計画

- 1回～5回 スタニスラフスキー・システムについて
- 6回～9回 声の教養・身体の教養を上げるために
- 10回～15回 さまざまな演技のトライアル

授業時間外の学習

● とにかく、いろんな芝居（特に20代とか同世代の）を見てほしい。20代の俳優が何をしているか、仙川から出て、見ること。

教科書・参考書等

● 参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）と「俳優になりたいあなたへ」（ちくまプリマー新書）「演技と演出のレッスン」（白水社）である。
が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。

成績評価

● 出席及び授業での参加態度・結果によって判断する。

科目名 身体表現Ⅱ a c

対象 演劇専攻2年

履修条件

「身体表現Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。
カラダを動かすことをいとわない者が望ましい。

授業の概要

- ・コンテンポラリーダンスの授業である。テクニックの習得もさることながら、受講者個人のカラダに対する許容範囲を広げることを目的とする。よって受講者の身体能力によって授業内容は変化する。
- ・ダンスカンパニーコンドルズの持つ不思議な世界を紹介する、そこから舞台人として自身の見せ方、見られ方を学ぶ。
- ・楽器を使える人、声を使える人はコンテンポラリーダンスを自身のパフォーマンスと融合することを学ぶ。

授業の到達目標

カラダを動かすことによって気付く自身の可能性を発見、認識、利用、表現する。

期 間 前期

担当教員 山本 光二郎

授業計画

- 第一週 ガイダンスを受ける
- 第二週～第六週 ストレッチする
カラダで遊んでみる
踊るを遊ぶ
- 第七週～第十週 DVD,CD,ファッション雑誌などメディアを使った授業を受ける
音のでもものを使って踊る
- 第十一週～第十五週 コンドルズのダンスを踊ってみる
演出を含めた小作品をつくる

授業時間外の学習

授業に参加するには健康であることが大前提であるので、日常的に怪我や病気に注意し、健やかな状態を維持すること。

教科書・参考書等

動きやすい、床に転がってもよい服装
裸足もしくは靴下

成績評価

出席状況、授業への取り組み重視 (90%)
レポート提出 (10%) を100点に換算

- A: 80点以上
- B: 60点以上
- C: 50点以上
- D: 49点以下

科目名 マイム①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

稽古着着用。日常に常に眼を向け、感受性豊かな感性で授業に出ること。

授業の概要

脳の場所で、想像(創造)性や空間性を司る右脳の働きを利用して、想像(創造)の力で、集中力をつけていく。さらにその集中力を深化させることで、動きの中から自己の内に眠っている才能を目覚めさせ、なおかつプラス思考で、より良く生きるクセをつける。そのことにより、表現力豊かで明るく自分らしい生き方を見つけ出し、人間関係におけるコミュニケーションを円滑にして、社会の中で生き生きと楽しんで生きる方法を、パントマイムの訓練である「変身の原理」を通して学んでいく。

授業の到達目標

頭で考えたこと、心で思ったことを言葉を使わなくても表現できる方法と精神力を身につけること。

授業計画

- ・想像したとおりに自分の身体を動かす練習(イメージを創る)
- ・発想の転換をする練習(プラス思考の持ち方)
- ・宇宙すべてのものを模倣する練習(感性を磨く)
- ・考えを徹底的に1つのことにしぼり込む練習(集中力の深化)
- ・グループで遊びを創作したり表現したりする練習(協調性を養う)

期 間 前期

担当教員 服部 宣子

- ・自由な発想と動きの中から個性の開発をする練習(才能に気づく)
- ・お話を創り、それを演じる練習(創作)
- ・心の状態を言葉や、ダンスの動きを使わなくても表現でき、それを人に伝えられるような心の動きの開発をしていく練習(人とのコミュニケーション)
- ・生活の中にあるものを、体が代わって表現する練習(見えないはずのものが見えてくる)
- ・瞬間にどんなものでも状態でも表現できる柔軟な心と体を作る練習(変身の原理)
- ・自然な動きの練習(自然体の発見)

授業時間外の学習

日常に常に眼を向け、感性を磨くこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

出席状況を重視。心の成長を評価。レポート及び実技試験を行う。

科目名 アクション①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

現代アクション、時代アクション(殺陣)を隔週で行なう。立ち廻りによって身体を動かすことにより、わきあがる感情を自然に表現できるよう基本を指導する。現代アクションは、表現者として身体をつかって感情を出せるように指導する。時代アクションは、刀など武器に感情がのるように指導する。

授業の到達目標

俳優として最小限の基本を身につけることや、人を怪我させないように立ち廻りをできることを目標にする。

期間 後期

担当教員 藤田 けん

授業計画

- 現代アクション、時代アクションとも体をあたためることからはじめる。
・現代アクションの基本練習
o 殴り、蹴り、受け、よけ方など
o 1対1での基本練習
o 基本的な立ち廻り
・時代アクションの基本練習
o 正眼、真っ向、袈裟、突き、体裁きなど
o 1対1での基本練習
o 基本的な立ち廻り
回数によってレベルを上げていく。

授業時間外の学習

自己の体調管理、体力の増進を行なう。

教科書・参考書等

動きやすい格好。

成績評価

- A 立ち廻りが十分に表現できるもの。
B 立ち廻りがほぼ表現できるもの。
C 立ち廻りがあまり表現できないもの。
D 立ち廻りがまったく表現できないもの。

科目名 日本舞踊 I ①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

「座学」と「実技」の二部構成。「座学」では表現者として必要な「価値を生むことに必要な素養—健康・品性・コミュニケーション能力—」について学ぶ。美意識を高め、表現者必須の精神性を学ぶ。実技では、「人前で表現する者として必要な所作」を、古典芸能を通じて体得する。座学で深めた理解を実際に表現する手法を学ぶ。
[曲目]
長唄「松」
上記の曲目を課題曲とする。

授業の到達目標

- 1 唯一無二の存在の確認
2 プロとしての心得とマナーの修得
3 日本人としての価値観を見出し磨く
4 古典芸能に触れ、表現者として現場での説得力を増すスキルを身に付ける
5 人前出ることへの美意識を向上させる

期間 後期

担当教員 藤間 希穂

授業計画

Table with 3 columns: [座学], [実技], and content. Rows include themes like '価値観を知る', 'コミュニケーションワーク', '計画を立てる・実行・継続する', and '価値を生むことができるようになる'.

授業時間外の学習

講義内容の復習を行うこと。

教科書・参考書等

授業時に配布。必ず和服を着用すること。

成績評価

- 筆記試験・出席日数・実技テスト・授業態度・コミュニケーションを総合100点にて評価
A 100～90点
B 90～85点
C 85～70点
D 69点以下
※値は絶対値ではなく総体数のため変化する場合あり。

科目名 狂言 I ①②

対象 演劇専攻 1年

履修条件

特になし。

授業の概要

- ・腹式呼吸でしっかり声を出す訓練から始める。
- ・狂言の謡を謡い、身体を動かす訓練の舞を舞う。
- ・狂言「附子」または「呼声」を実習する。
- ・三次元の空間に自分の体がどのようにあるべきか演劇の基本が感得できるだろう。

授業の到達目標

大きな声を出すこと。
まっすぐ前を向いて(下、横を見ずに)摺り足で前に進み元の位置に正しく戻ることができること。
「左右」の完成。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(声の出し方)「盃」の謡①
- 第2回 「盃」の謡② お話「声楽と謡」のちがいを
- 第3回 「盃」の謡③ お話「すりについて」「盃」の舞①
- 第4回 「泰山府君」謡① 「盃」謡④ 「盃」の舞②
- 第5回 「泰山府君」謡② 「盃」謡⑤ 「盃」の舞③
- 第6回 「土車」の謡① 「泰山府君」謡③ 「盃」の舞④

期 間 後期

担当教員 善竹 富太郎

- 第7回 「土車」の謡② 「泰山府君」謡④ 舞の試験⑤
- 第8回 「土車」の謡③ 「泰山府君」謡⑤ 泰山府君の舞①
- 第9回 「土車」の謡④ 泰山府君の舞②
- 第10回 「土車」の謡⑤ 泰山府君の舞③
- 第11回 土車の舞① 泰山府君の舞④
- 第12回 土車の舞② 泰山府君の舞⑤
- 第13回 土車の舞③
- 第14回 土車の舞④
- 第15回 「土車」試験

授業時間外の学習

授業内容をふまえ、自主練習を行うこと。

教科書・参考書等

「狂言」ガイドブック(三省堂)

成績評価

出席点と実技。

- A 出席点90%以上 実技点80点以上
- B 出席点70%以上 実技点65点以上
- C 出席点50%以上 実技点50点以上
- D 出席点49%以下 実技点49点以下

科目名 クラシック唱法 I

対象 演劇専攻 1年

履修条件

なし。

授業の概要

クラシックの発声の基本は「響き」にある。大オーケストラの伴奏であっても、マイクも使わずに声を通るのは全身が響いているからである。いかに声を響かせ遠くに飛ばすか、それは芝居のセリフにおいても同じである。

この授業では、響きを意識することに重点を置いて発声を学んでいく。なお、独唱曲ばかりでなく、ハーモニー感覚を身につけるため、合唱曲も取り上げる。

授業の到達目標

日本語による歌唱のハーモニー感覚を身につける。

期 間 後期

担当教員 松井 康司

授業計画

- 第1回 ガイダンス
 - 第2回 ヴォイス・トレーニング 歌うための呼吸について
 - 第3回 ヴォイス・トレーニング 声と響きについて
 - 第4回 ヴォイス・トレーニング 発音(母音)について
 - 第5回 ヴォイス・トレーニング 発音(子音)について
 - 第6回 ヴォイス・トレーニング 言葉について
 - 第7回 ヴォイス・トレーニング 声&言葉&表現
 - 第8回~第15回 全員でのヴォイストレーニング及び個々のヴォイストレーニング
- 各回、合唱曲を教材とし、ハーモニー感覚を身につける。

授業時間外の学習

各授業のテーマについて、次の授業までに、各自実践的に復習しておくこと。
また、個人ヴォイストレーニングで与えられた課題は日々の訓練として活用していくこと。

教科書・参考書等

授業時に楽譜を配布。

成績評価

- A 授業に積極的に参加し、声作りのための努力を継続的に行った者。
- B 授業に参加し、声作りの努力をした者。
- C 授業への欠席はあったが、声作りの努力をした者。
- D 授業への欠席が目立った者。

科目名 クラシック唱法Ⅱ a b c

対象 演劇専攻2年

履修条件

声優コースは必修。
「クラシック唱法Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

「クラシック唱法Ⅰ」で学んだことを基礎に、発声することから表現することへレベルアップしていく。日本語の歌を取り上げ、いかに良い発声で日本語を美しく歌えるようにしていくかを研究する。実技公開テストに向けては、2～3人で1曲を割り振るので、与えられた曲を協力して演出し、歌と演技によるパフォーマンスとして発表する。

授業の到達目標

ひとりひとりが歌うことに自信を持てるようにする。

期間 前期

担当教員 松井 康司

授業計画

- 1 ガイダンス、試聴会
- 2 試聴会
- 3 合唱曲の練習
- 4 実技公開テストの選曲決定、公開レッスン形式の個別指導
- 5～8 公開レッスン形式の個別指導及び合唱練習
- 9～13 演技パフォーマンスを加えた歌唱指導及び合唱練習
- 14 通し稽古
- 15 G.P

授業時間外の学習

与えられた曲に対し、各グループごとに予習復習を必ず行うこと。また、その曲に対するイメージをしっかりと持ち、演出を考えていくこと。

教科書・参考書等

授業時に楽譜を配布。

成績評価

- A 授業に100%出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- B 授業に90%以上出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- C 授業に80%以上出席し、与えられた曲に積極的に取り組んだ。
- D 授業への出席が悪く、与えられた曲も消化できなかった。

科目名 ミュージカル唱法Ⅰ①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

- なるべく譜面が読める人。あるいはピアノ等から音を聞き、その音で歌えること。
- 譜面が読めなくても努力する人。

授業の概要

歌うための筋肉の使い方、呼吸法、発声法を学ぶ。
課題にした曲の内容を深め表現できるようにする。

授業の到達目標

私の思う呼吸法、歌うための筋肉を意識してそれをどう使うか、無意識でもできるように日々練習。
暗譜したミュージカルナンバーを表現しながら歌えるようになる。

授業計画

1. 自己紹介&一曲歌う
2. /
3. 歌というもの、表現への意識(呼吸、筋肉、表現)
4. /
5. /
6. /
7. /

期間 後期

担当教員 信太 美奈

8. /
9. /
10. /
11. /
12. /
13. /
14. /
15. 試験、まとめ

授業時間外の学習

- 授業で学んだ身体・筋肉の使い方と毎日復習する。
- 譜面が読めるように努力する。
- ミュージカルはもちろんそれ以外の音楽も聞くようにする。
- 課題を必ず毎日歌う。
- 映画や舞台・DVDなどをなるべく観る。

教科書・参考書等

授業中に配布。
CD、ミュージカル作品、ライブ、コンサート等、見たり聞いたりしてほしい。

成績評価

- A 出席状況、態度、成績 100～80
- B 出席状況、態度、成績 79～60
- C 出席状況、態度、成績 59～50
- D 出席状況、態度、成績 49以下

科目名 ミュージカル唱法Ⅱd

期 間 前期

対 象 演劇専攻2年

担当教員 信太 美奈

履修条件

- ミュージカルコース必修。
- 「ミュージカル唱法Ⅰ」を履修し、単位を修得してる人。
- なるべく譜面が読める。
- 将来はミュージカルにトライしたいと思ってる人。

- 8. /
- 9. /
- 10. /
- 11. /
- 12. /
- 13. /
- 14. /
- 15. 公開試験

授業の概要

ミュージカル作品の歌を、ストーリー、セリフの中からの流れで気持ちをどのように込めて歌うか。
呼吸法・発声法・筋肉の使い方。
最後に7月の高校生の為のワークショップを公開試験とする。

授業時間外の学習

- 呼吸・筋肉の使い方をマスターするように日々努力する。
- 楽譜が読めるように努力する。
- 課題を必ず次の授業までに暗譜する。
- グループで歌う場合は集まって練習する。

授業の到達目標

昨年度より引き続き、呼吸、筋肉の意識を高める。
暗譜したミュージカルナンバーをダンスやステージングに取り入れながら表現していく。

教科書・参考書等

● CD、ミュージカル作品を見たり聞いたりして欲しい。
授業中に資料配布。

授業計画

1. 前年度の反省と今学期の目標など語りあう
2. 曲選び
3. 具体的に選曲した楽曲を歌い込む
4. /
5. /
6. 歌の周囲のステージング、セリフなども練習
7. /

成績評価

- A 出席率が良く、歌もダンスもセリフもバツグンの人（～80）
- B 出席率が良く、歌もダンスもセリフも一般的な人（79～60）
- C 出席率が良く、歌もダンスもセリフもかなり努力が必要な人（59～50）
- D 出席率が悪く、歌もダンスもセリフもかなり努力が必要な人（49以下）

科目名 ジャズダンスA①

期 間 前期

対 象 演劇専攻1年

担当教員 畔柳 小枝子

履修条件

● なし。

授業の概要

● 最近、ダンスは身近なものになり、殆んどの人々が経験をした事がある。得意である。という状況になっている。その為、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとても大切になる。この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の訓練を行う。授業で使用する曲等で、ジャズダンスの特長であるリズム感を養い、コンビネーションで振付を覚えて、音楽に合った表現を踊り、どう見せるか？見せたいか？見えたか？を考えながら、身体表現の訓練を行う。

- ⑧ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②
- ⑨ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②
- ⑩コンビネーション②重視
- ⑪基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
- ⑫基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
- ⑬基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
- ⑭基礎トレーニング。ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。コンビネーション③
- ⑮まとめ

授業の到達目標

● 到達目標は各自のスキルアップが目標であるが、基礎知識・基礎訓練が中心でもある為、自分自身の身体を知り、自信をつける反面欠点を認識し、トレーニング方法を見つける事も重視したい。数回、小テストを行う事により、本人の得意・不得意を知り、自分自身の成長に気付くことができる。

授業時間外の学習

● 各自、柔軟、筋力トレーニングは行って欲しい。
小テストを行うので各自練習をしておくこと。

授業計画

- ①ストレッチ・エクササイズ中心（正しいストレッチの仕方）。音のとおり方・のり方。コンビネーション①
- ②ストレッチ・エクササイズ中心。音のとおり方・のり方。コンビネーション①
- ③アイソレーション・クロスフロア重視。ストレッチ・エクササイズ。軸のとおり方。コンビネーション①
- ④アイソレーション・クロスフロア重視。ストレッチ・エクササイズ。軸のとおり方。コンビネーション①
- ⑤コンビネーション①重視
- ⑥ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②
- ⑦ステップ、ジャンプ、ターン重視。ストレッチ・エクササイズ。コンビネーション②

教科書・参考書等

● 稽古着を着用。
・ダンスシューズ（ジャズシューズ等）を使用。

成績評価

- 出席日数・小テスト・期末テストの状況で評価する。
- A 音に合わせて表現でき、研究、練習した者。
- B 音に合わせて表現できた。注意点を意識できた者。
- C 振付を覚えた。又は努力した者。
- D 振付を覚えず、努力しなかった者。出席日数が足りず受験資格がない者。

科目名 ジャズダンス A ②

対象 演劇専攻 1年

履修条件

なし。

授業の概要

「踊る」以前に「音楽の中で表現する」ことを学んでいく。舞台上に立った時の「姿」「歩く」「走る」といった基本的な動きを、音楽を使ってカウント(小節)を決め、「音楽の中で動く(表現する)」ことに慣れていく。そのための筋肉の使い方、重心の移し方、体の引き上げ方を勉強し、クラシックバレエ、ジャズダンス、タップダンス、HIPHOP等の基本的なステップを使って、「振付」「ステージング」を覚える感覚を身につけていく。

個人のレベルに合わせた振付を覚えてもらうが、最終的にはテクニックのみならず、表現力も身につけていきたい。

授業の到達目標

ただ「ステップを覚える」のではなく、舞台のシーン等イメージしながら、自分の「感情」を「音楽」の中で、「体全体」を使って「表現」できること。

授業計画

- 1 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイストレーション
(体のパーツを動かす)、簡単なステップ
- 2 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイストレーション
(体のパーツを動かす)、簡単なステップ
- 3 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、
コンビネーション(振付)①-1
- 4 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、
コンビネーション(振付)①-2
- 5 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、
コンビネーション(振付)①-3
- 6 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、
コンビネーション(振付)①-4
- 7 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、
コンビネーション(振付)①-まとめ

期 間 前期

担当教員 渡邊 美津子

- 8 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション②-1
- 9 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション②-2
- 10 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション②-3
- 11 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション②-4
- 12 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション②-まとめ
- 13 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション①②レベルアップ
- 14 ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、リズム感、
コンビネーション①②レベルアップ
- 15 実技試験、コンビネーション①、②

授業時間外の学習

ストレッチ、筋カトレーニング、振付の自主練習を行うこと。

教科書・参考書等

稽古着を着用。バレエ基礎は裸足(くつ下)で行うのでフータータイツ不可。ダンスシューズ、またはスニーカーを着用。

成績評価

(1)出席日数、(2)授業態度、(3)課題に対する成果、等を総合的に評価する。

- A 実技試験において、評価が80点以上で、表現力のある者。
- B 実技試験において、評価が60点以上の者。
- C 実技試験において、評価が40点以上の者。
- D 実技試験において、評価が39点以下の者。

科目名 ジャズダンス A ③

対象 演劇専攻 1年

履修条件

なし。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ステップを覚えて、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- 振りを覚えて、表現、感性を磨く。

授業の到達目標

レベルに個人差があるので、それぞれが目標を作り、その目標に向かって肉体訓練、踊りの感性表現を習得する。

期 間 前期

担当教員 三村 みどり

授業計画

- 自分の肉体の長所、短所を知り、踊る為の柔軟性、軸を身につける。
- 振り付けを覚えて、音、振り付けで感じた感性をプラスし、踊りで自分や作品を表現していく。

授業時間外の学習

出来ない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

成績評価

出席状況及び実技試験で評価する。

科目名 ジャズダンス B ①

対象 演劇専攻 1年

履修条件

なし。

授業の概要

最近、ダンスは身近なものになり、殆んどの人々が経験した事がある・得意であるという状況になっている。その為、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとても大切になる。この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の訓練を通して、表現方法を見つけていく。

ストレッチエクササイズ・アイソレーション・クロスフロアー・コンビネーションで行う。

授業の到達目標

到達目標は、各自のスキルアップが目標である。

柔軟・筋力トレーニングを通して、各自のトレーニング方法を見つけ、動きの範囲を広げる事で、表現方法に生かし、更にテクニックをつける事も目標とする。小テストを行う事により、自分自身の成長に気付くことができる。

授業計画

- ①ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ②ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ③ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ④ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心。コンビネーション①
- ⑤コンビネーション①中心。
- ⑥クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）。基礎トレーニング。コンビネーション②

期 間 後期

担当教員 畔柳 小枝子

⑦クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）。基礎トレーニング。コンビネーション②

⑧クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）。基礎トレーニング。コンビネーション②

⑨クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）。基礎トレーニング。コンビネーション②

⑩コンビネーション②中心。

⑪動きの見せ方について考えて踊る。

⑫動きの見え方について考えて踊る。

⑬音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を考える。

⑭音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を表わす。

⑮まとめ

授業時間外の学習

各自、柔軟・筋力トレーニングは行って欲しい。

小テストを行うので、各自練習をしておくこと。

教科書・参考書等

ダンスシューズ（ジャズシューズ等）を使用。

成績評価

出席日数・小テスト・期末テストの状況で評価する。

- A 音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者。
- B 音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者。
- C 振付を覚えて踊れる。又は成果がでた者。
- D 振付を覚えず練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者。

科目名 ジャズダンス B ②

対象 演劇専攻 1年

履修条件

経験者、前期「ジャズダンスA」受講者が望ましいが、未経験者でも可。

授業の概要

「踊る」以前に「音楽の中で表現する」ことを学んでいく。舞台に立った時の「姿」「歩く」「走る」といった基本的な動きを、音楽を使ってカウント(小節)を決め、「音楽の中で動く(表現する)」ことに慣れていく。そのための筋肉の使い方、重心の移し方、体の引き上げ方を勉強し、クラシックバレエ、ジャズダンス、タップダンス、HIPHOP等の基本的なステップを使って、「振付」「ステップング」を覚える感覚を身につけていく。

個人のレベルに合わせた振付を覚えてもらうが、最終的にはテクニックのみならず、表現力も身につけていきたい。

授業の到達目標

ただ「ステップを覚える」のではなく、舞台のシーン等イメージしながら、自分の「感情」を「音楽」の中で、「体全体」を使って「表現」できること。

授業計画

- 1 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション①-1
- 2 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション①-2
- 3 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション①-3
- 4 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション①-4
- 5 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション①-まとめ
- 6 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、ターン(回転)、リズム感

期 間 後期

担当教員 渡邊 美津子

7 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、ターン(回転)、リズム感

8 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション②-1

9 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション②-2

10 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション②-3

11 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション②-4

12 ストレッチ、筋肉トレーニング、アイソレーション、バレエ基礎、コンビネーション②-まとめ

13 復習、レベルアップ、コンビネーション①、②

14 復習、レベルアップ、コンビネーション①、②

15 実技試験、コンビネーション①、②

授業時間外の学習

ストレッチ、筋力トレーニング、振付の自主練習を行うこと。

教科書・参考書等

稽古着を着用。バレエ基礎は裸足(くつ下)で行うのでフータータイツ不可。ダンスシューズ、またはスニーカーを着用。

成績評価

(1)出席日数、(2)授業態度、(3)課題に対する成果、等を総合的に評価する。

- A 実技試験において、評価が80点以上で、表現力のある者。
- B 実技試験において、評価が60点以上の者。
- C 実技試験において、評価が40点以上の者。
- D 実技試験において、評価が39点以下の者。

科目名 ジャズダンス B ③

対 象 演劇専攻1年

履修条件

なし。

授業の概要

肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていく為の授業である。

- 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につける為に、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
- 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
- ステップを覚えて、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
- 振りを覚えて、表現、感性を磨く。

授業の到達目標

レベルに個人差があるので、それぞれが目標を作り、その目標に向かって肉体訓練、踊りの感性、表現を習得する。

期 間 後期

担当教員 三村 みどり

授業計画

- 自分の肉体の長所、短所を知り、踊る為の柔軟性、軸を身につける。
- 振り付けを覚えて、音、振り付けで感じた感性をプラスし、踊りで自分や作品を表現していく。

授業時間外の学習

出来ない振りは自主トレーニングして次の授業に参加すること。

教科書・参考書等

稽古着を着用すること。

成績評価

出席状況及び実技試験で評価する。

科目名 バレエ・ムーヴメント①②

対 象 演劇専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して

- 1 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、placement
- 2 あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
- 3 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
- 4 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚

等を身につけられるように、基本的なレッスンをを行う。

授業の到達目標

初歩のバーレッスン、センターでの簡単なアンシェヌマンが全員できるようになること。

授業計画

毎回、床上でのバーレッスン、ストレッチから始める。

- ①：姿勢とプレイズメント、足の5つのポジション、ポール・ド・ブラ
「バーの基本レッスン」
- ②から⑤：プリエ、バットマン・タンジュ、バットマン・デガジェ、ロン・ド・ジャンプ・ア・テール、グラン・バットマン

期 間 前期

担当教員 安達 悦子

⑥から⑧：加えて、バットマン・フラッペ、バットマン・フォンジュ、デヴロッペ、ロン・ド・ジャンプ・アン・レール
「バーレッスンとセンターレッスン。センターでは次の基本ステップを加えていく。」

⑨から⑪：アダージュ、バットマン・タンジュ、バランス（ワルツステップ）小さいジャンプ等

⑫から⑬：グリッサード、アッサンブレ、ビルエット等

⑭：試験のアンシェヌマン

⑮：試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①出席日数②授業の状況③期末試験を総合的に100点満点で評価する。

A 総合点が80点以上の者

B 総合点が60点以上の者

C 総合点が50点以上の者

D 総合点が49点以下の者（出席の足りない者）

科目名 クラシックバレエI①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して

- 1 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、placement
- 2 あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
- 3 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
- 4 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚

等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。

授業の到達目標

初歩のバーレッスン、センターでの簡単なアンシェヌマンが全員できるようになること。

授業計画

- ①：姿勢とプレイズメント、足の5つのポジション、ボール・ド・ブラ
「バーの基本レッスン」
- ②から④：プリエ、バットマン・タンジュ、バットマン・デガジェ、ロン・ド・ジャンプ・ア・テール、グラン・バットマン、ルルベ

期間 後期

担当教員 安達 悦子

⑤から⑦：加えて、バットマン・フラッペ、バットマン・フォンジュ、デヴロップ、ロン・ド・ジャンプ・アン・レール
「バーレッスンとセンターレッスン。センターでは次の基本ステップを加えていく。」

⑧から⑩：アダージョ、バットマン・タンジュ、バラッセ（ワルツステップ）、ピルエット、小さいジャンプ、グリッサード等

⑪から⑬：アッサンブレ、ジュテ、シソヌ、移動する回転等

⑭：試験のアンシェヌマン

⑮：試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①出席日数②授業の状況③期末試験を総合的に100点満点で評価する。

A 総合点が80点以上の者

B 総合点が60点以上の者

C 総合点が50点以上の者

D 総合点が49点以下の者（出席の足りない者）

科目名 クラシックバレエII d

対象 演劇専攻2年

履修条件

ミュージカルコース必修。

「クラシックバレエI」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して

- 1 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、placement
- 2 あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
- 3 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
- 4 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚

等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。

授業の到達目標

それぞれが自分の体と向き合い、自分の体を理解する。
豊かな表現ができる体を作る。
バレエのアカデミックなムーブメント、テクニックを学び、動きの可能性を拡げる。
音楽的に踊れるように、感性を磨く。

授業計画

1限 初心者クラス 2限 経験者クラスとしてレベルに応じたクラスレッスンを行う。

①：クラス分け

期間 前期

担当教員 安達 悦子

②から⑤：初心者クラスでは1年後期の授業で学んだことを深め、次の段階に進む。中、上級のクラスレッスンを行う。

⑥から⑨：バーレッスン、センターレッスン、実技公開試験のアンシェヌマン（アダージョ、バットマン・タンジュ、ピルエット、グラン・バットマン等）

⑩から⑬：バーレッスン、センターレッスン、実技公開試験のアンシェヌマン（アレグロ、ワルツ、グラン・アレグロ、コーダ等）

⑭：クラスレッスンと実技公開試験のアンシェヌマンのまとめ

⑮：実技公開試験

授業時間外の学習

毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。女性は髪をまとめるように。

成績評価

①出席日数②授業の状況③期末試験を総合的に100点満点で評価する。

A 総合点が80点以上の者

B 総合点が60点以上の者

C 総合点が50点以上の者

D 総合点が49点以下の者（出席の足りない者）

科目名 タップダンスⅠ①②

対象 演劇専攻1年

履修条件

基本が大切なので欠席をしないこと。体調不良の場合でもなるべく見学すること。

授業の概要

タップダンスの楽しさから、プロになるための本格的なテクニックまでを基礎からしっかりと教えて行く。リズム感(音の強弱・音色・アクセント等)はダンスの基本としてはもとより、芝居や歌を唱うことにおいても大変重要なことである。タップダンスのレッスンを通じて、耳だけでなく、身体全体で感じることや表現することを体得してもらいたいと思う。

授業の到達目標

基本のステップを覚え数曲の振付も仕上げて行く。

期間 後期

担当教員 中川 裕季子

授業計画

タップダンスは基礎が大切(重要)である。始めのレッスンからしっかりと基礎を身につけていく。

- 1 まず音の出し方。タップシューズとチップと床の感触をつかんでハッキリと大きな音を出すこと。
- 2 正確に基礎ステップのパターンを覚えていくこと。
- 3 自分が出す音をよききいて色々なリズムのバリエーションを覚えること。
- 4 様々なジャンルの曲や音に合わせて、より多くの表現を身につけること。

以上をふまえて、9、10月はタップシューズを履いて基本的な音の出し方とステップ練習、以後はいくつかのジャンルに分けて、できる限り幅広く振付曲も進めていく。

授業時間外の学習

常に復習、練習をすること。

教科書・参考書等

タップシューズ。

成績評価

出席状況を重視し普段の授業態度と試験で評価する。

科目名 舞台芸術概論

対象 演劇専攻1年

履修条件

演劇専攻全学生の必修授業。健康管理に十分留意し、遅刻、欠席のないようにすること。積極的な知的好奇心をもって講義を受講すること。

授業の概要

この授業では本学の多くの教員が分担して、行う。演劇についての常識的な知識を、初学者として広く浅く獲得することが、その後の技術、メンタリティの獲得のためには必ず重要な基礎となる。ミュージカルを志す者にとっても、ストレートプレイを志す者にとっても、自分が何をしているのか、自分のうちこむ芸術分野はどんな根拠に基づき、どんな思想的背景を持ち、どんな歴史的な経緯を持って成立しているのか、などを知ることは、その後の進む道にとってとても重要な意味を持つことになる。大学に入って意気込んでいる学生諸君に、まず「演劇とはなにか」「演劇とはどういう流れの中にあるのか」ということについて、この授業で、演劇人としての最低限度の教養として思考することとなる。ここで学ぶ教員たちがそれぞれの歴史観、芸術観、社会に対する価値観を持って臨むことになるので、その個性のひとつひとつをよくうけとめ、思索を刺激されるように積極的な受講態度をもつこと。

授業の到達目標

講義を通して、日本および外国の古典および近現代の演劇、舞台表現作品全般の基本的な必須知識、教養を習得する。

授業計画

担当教員	内容
1 鈴江俊郎	ガイダンス
2 ベーター・ゲスナー	外国演劇について①
3 ベーター・ゲスナー	外国演劇について②
4 鈴江俊郎	現代日本で演劇活動をする経済や実際について
5 鈴江俊郎	現代日本の劇作家について
6 宮崎真子	演出家の仕事とは

期間 前期

担当教員 全専任

- 7 宮崎真子 ひとつの公演ができるプロセスとは
- 8 三浦 剛 現代日本演劇について
- 9 松井康司 オペラについて①
- 10 松井康司 オペラについて②
- 11 信太美奈 ミュージカルについて①
- 12 信太美奈 ミュージカルについて②
- 13 安宅りさ子 歌舞伎について
- 14 安宅りさ子 シェイクスピアについて
- 15 鈴江俊郎 期末試験、まとめ

授業時間外の学習

毎回の内容が、最終回の期末試験には少しずつの配点で出題されるので、毎回の授業ごとにきちんとノートをまとめ、復習し、最低限の知識を確実に習得すること。予告されたテーマについて事前に予備知識を得るようにして、自分なりの疑問を整理し、問題意識を高めて授業に臨むと、学習効果は高くなるので、予習を怠らないこと。

教科書・参考書等

毎回プリントを配布するか映像資料を鑑賞する。参考となる書籍等については、適宜紹介する。

成績評価

出席状況や取り組みの態度などをもとにした平常点と筆記試験による期末試験の点による。担当教員によっては授業中に小テストを行うので、それらをもとに平常点が積算される。

- A 総合点が80点以上の者(講義内容の理解度が優れていると認められる者)
- B 総合点が70点以上の者(講義内容の理解度が一定以上には達したと認められる者)
- C 総合点が50点以上の者(講義内容の理解度にやや不安を覚えるが、最低限の段階には一応達したと認められる者)
- D 総合点が50点未満の者(講義内容の理解度が極めて不十分と判断せざるを得ない者)

科目名 日本演劇史 A (古典)

対象 演劇専攻 1年

履修条件

なし。
ストレートブレイクコース必修。

授業の概要

日本で俳優修行を積み、将来的に日本または外国において俳優或いは演劇関係の仕事に関わることを天職に選んだ若きプロアーティスト諸君へ、必須と思われる日本古典芸能史・演劇史に関する知識を伝える。本講義ではまず芸能・演劇の概念規定とその本質論について論じ、特に芸能が我々の文化・文明に如何なる影響を残しているかを考察する。次いで能・狂言、歌舞伎、人形浄瑠璃(文楽)の生成、発展史と各々の特質等を論じる。上記古典演劇を観た経験が無い諸君もあろうかと思うので、ビデオ等を用い基本的鑑賞知識も伝える。講義では諸君らが今まで耳にしたことがない、人物名・作品名・学術用語等が頻出する。それらを理解し記憶することは苦痛であろうが、本講義が本学教育課程に設置された目的が幅広い知見を有した俳優養成を目指すものであることから、それは甘受してほしい。その上で俳優という職業人である以前に、一個の自律した人間として生きるための智慧となるべきものを伝えられればと願っている。

授業の到達目標

講義を通じ、日本古典芸能史および演劇史に関する基本的必須知識、教養を習得し、それらを説明することができる。

授業計画

- 第1回 講義概要・事務的連絡
- 第2回 芸能とは何か、演劇とは何か
- 第3回 日本古典芸能の内容とその本質
- 第4回 神と人間—折口信夫「マレビト論」
- 第5回 神と人間—反「マレビト論」柳田国男の靈魂観

期間 後期

担当教員 安富 順

- 第6回 ハレとケ—芸能としての祭り
- 第7回 能・狂言発生史概論
- 第8回 能・狂言成長・展開史概論
- 第9回 劇人世阿弥
- 第10回 飾ることと見立てること—風流・歌舞伎
- 第11回 身体的表象の変化—古代・中世的身体表現から近世的身体表現へ
- 第12回 怨み・笑い—鶴屋南北の世界
- 第13回 七五の律動—河竹黙阿弥の世界
- 第14回 慰み—近松門左衛門
- 第15回 総論・統括

授業時間外の学習

指定文献を事前に読むこと。

教科書・参考書等

プリントを配布する。参考となる書籍等については適宜紹介する。

成績評価

- 出席点・筆記試験。出席点は1回0.5点とする。すなわち15回出席した場合の出席点は7.5点となりコマ以下四捨五入し8点に換算する。その各自素点と筆記試験の点数を加え算出された総合点数を以って成績評価とする。
 - A 総合点80点以上(講義内容の理解度が優れていると認められる者)
 - B 総合点60点以上(講義内容の理解度が一定以上には達したと認められる者)
 - C 総合点50点以上(講義内容の理解度にやや不安を覚えるが最低限の段階には一応達したと認められる者)
 - D 総合点49点以下(講義内容の理解度が極めて不十分と判断せざるを得ない者)

科目名 日本演劇史 C (現代)

対象 演劇専攻 2年

履修条件

特になし。私の授業はあらかじめの知識は一切必要とされない。
ストレートブレイクコース必修。

授業の概要

日本の演劇史には、1960年代頃、大いなる断層が出現した。アングラ・小劇場運動の台頭である。そこでは戦後新劇へ批判が渦巻いていた。そのことは単に演劇だけの話ではなく、戦後の世界観の変容過程ともかかわっていたのであり、激動する(?)日本の文化の縮図として、当時の演劇は大きな意味を持っていたのである。さらに、外国の現代演劇に対する新たな評価もそれに随伴し、そうした態度は、その運動を担う人々からは、近代劇から現代劇への変化として理解されていた。それゆえに、この時代以降をわれわれはアングラ以降と呼ぶが、それから半世紀が過ぎ、いまではこの現代演劇の状況をわれわれは歴史的にも概観することが出来るようになってきている。今日の日本の演劇に関わろうとするものは、この事態をどのように反省的に受け止めるべきだろうか。私の授業はそうしたことへとアプローチする思索の場になるであろう。

授業の到達目標

アングラ・小劇場演劇のおおよその見取り図を理解できるようになること。さらに、そこに登場した重要な演劇人の幾人かについて、個人的に調べ、その人たちの活動にたいして概観し、自分の意見が書けるようになること。

授業計画

- 1 日本現代演劇の流れ、その概要(アングラの出現)。
- 2 唐十郎とテント芝居(『特権的肉体論』をめぐって)。
- 3 寺山修司(見世物の復権から密室と市街へ)。

期間 前期

担当教員 鴻 英良

- 4 鈴木忠志における身体の意味(『内角の和』から『騙りの地平』へ)。
- 5 日本現代演劇とサミュエル・ベケット(『ゴドーを待ちながら』など)。
- 6 別役実の方へ(『電信柱のある宇宙』)。
- 7 日本最初の国際演劇祭「利賀フェスティバル」(1982年)の意味。
- 8 タデウシュ・カントールの衝撃(『死の教室』を中心に)。
- 9 アングラ・小劇場の第二世代(山崎哲ほか)。
- 10 アングラ・小劇場の第三世代とその後(野田秀樹『赤鬼の挑戦』ほか)。
- 11 ダム・タイプの90年代(演劇のポリティクスをめぐって)。
- 12 静かな演劇ブームとは何か。
- 13 解体社とポスト・ヒューマン・シアター。
- 14 日本におけるアジア演劇。
- 15 まとめ。

授業時間外の学習

授業中に推薦する演劇を随時見るように。また、教場で推薦された著書に関しても、読み切ることができなくともいいので、それらをできるだけ手に取るようにすること。

教科書・参考書等

参考書は教場で指示するが、当面は、授業計画に挙げられている著作を参考にするように。

成績評価

最終的にはレポートで判断するが、出席ことは極めて重要である。また、ときおり、小試験を行う。レポート80%、出席10%、小試験10%の割合で、評価する。

科目名 西洋演劇史 A (古典)

対象 演劇専攻1年

履修条件

ストレートプレイコース必修。
予習・復習に努め、演劇の基礎知識を習得する意志のある者。

授業の概要

ギリシャ悲劇やシェイクスピア劇は、現在も数多く上演されている。この授業では、紀元前5世紀の古代ギリシャ劇から17世紀のフランス古典劇にいたるまでの西洋演劇史を概観し、演劇人に求められる基礎的な知識を習得する。各項目において、時代背景、文化状況をふまえながら、劇場構造、上演形態、作品等を考察していく。

また、各時代の演劇が後世の演劇にどのような影響を与え、どのような要素が継承されたのかを、それぞれの事象を関連づけながら探っていきたい。さらに、現代における古典作品の上演についても言及し、その芸術的価値を論じていきたい。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標にする。

- 代表的な劇作家とその作品について、説明することができる。
- 劇場構造や上演形態について、その特色を説明することができる。
- 紀元前5世紀から17世紀までの西洋演劇史の流れを説明することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 古代ギリシャの演劇
3. ギリシャ悲劇Ⅰ アイスキュロス
4. ギリシャ悲劇Ⅱ ソポクレス
5. ギリシャ悲劇Ⅲ エウリピデス

期間 後期

担当教員 安宅 りさ子

6. ギリシャ喜劇／ローマ演劇
7. 中世の宗教劇
8. コメディア・デラルテ
9. フランス古典悲劇
10. フランス古典喜劇
11. エリザベス朝演劇
12. シェイクスピアⅠ 悲劇
13. シェイクスピアⅡ 史劇
14. シェイクスピアⅢ 喜劇
15. まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の冒頭で、前回の授業内容と宿題に関する小テストを行うので、履修者は予習と復習に努めること。

教科書・参考書等

教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。参考書は、適宜授業内で紹介する。

成績評価

小テスト成績30%、期末試験成績70%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が60点以上の者(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が50点以上の者(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が49点以下の者(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 西洋演劇史 C (現代)

対象 演劇専攻2年

履修条件

ストレートプレイコース必修。
予習・復習に努め、演劇の基礎知識を習得する意志のある者。

授業の概要

西洋における反近代劇運動から現代までの流れを概観する。第二次世界大戦における不条理な殺戮・戦争犯罪は、人々の世界観を大きく揺るがした。もはや写実性を重んじる近代劇の枠組みでは語りつくせない現実を前に、新たな演劇の潮流が出現する。歴史的背景をふまえながら、個々の様式の特徴を把握し、その影響について考察をすすめる。

授業の到達目標

以下の3点をこの授業の到達目標にする。

- 代表的な劇作家とその作品について、説明することができる。
- 代表的な演劇理論について、その要点を説明することができる。
- 第二次世界大戦前後から現在までの西洋演劇史の流れを説明することができる。

授業計画

1. ガイダンス
2. アントナン・アルトー
3. 実存主義演劇とその周辺
4. 不条理演劇Ⅰ(イヨネスコ)
5. 不条理演劇Ⅱ(ベケット)
6. プレヒトⅠ
7. プレヒトⅡ

期間 前期

担当教員 安宅 りさ子

8. アメリカの演劇Ⅰ(ウィリアムズ)
9. アメリカの演劇Ⅱ(ミラー)
10. イギリスの演劇Ⅰ(ウェズカー)
11. イギリスの演劇Ⅱ(ピンター)
12. 英米演劇の現在
13. 東欧・ロシアの演劇(リュビーモフ グロトフスキ)
14. 異文化のコラボレーション(ブルック)
15. まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の冒頭で、前回の授業内容と宿題に関する小テストを行うので、履修者は予習と復習に努めること。

教科書・参考書等

教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。参考書は、適宜授業内で紹介する。

成績評価

小テスト成績30%、期末試験成績70%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者(基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる)
- B 総合点が60点以上の者(基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる)
- C 総合点が50点以上の者(基本的な諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる)
- D 総合点が49点以下の者(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 ミュージカル概論

対象 演劇専攻1年

履修条件

ミュージカルコース必修。
遅刻、欠席厳禁。プロの表現者になる熱意があり、学ぶ欲求があること。

授業の概要

比較的新しい表現形式であるミュージカルの歴史を研鑽し、他の演劇形式との違い、共通点を学び、ミュージカルの可能性を探っていく。

理論と実技、そして映像。それぞれの角度からミュージカルという表現形式の理解を深めていく。

ミュージカルの原点は何処にあるのか？ どんなルートを辿ってこの芸術、文化が日本に入ってきたのか？ オペラからミュージカルが派生したのはどの時点か？

フランス～ニューオリンズ～ブロードウェイへと至る変遷、またウエストエンドの状況も同時に学んでいく。

授業の到達目標

ミュージカルの作品分類が出来、歴史を理解し、表現形式を身体で覚えること。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 自己受容、自己表現
- 3 歌の原点を知る。歴史を学ぶ。
- 4 芝居の原点を知り、歴史を学ぶ。

期間 後期

担当教員 橋爪 貴明

- 5 身体表現の原点を知り、歴史を学ぶ。ミュージカル作品の分類の仕方。
- 6 オペラ～ミュージカル、派生の場所と時期
- 7 ボードビルショー、ニューオリンズで花開くものは…
- 8 課題曲 レッスン
- 9 課題曲 レッスン
- 10 オペラ、ポップス、ミュージカル、発声の違いを学ぶ。
- 11 台詞、課題、研究
- 12 滑舌、発声、音に対する感性を開く。
- 13 身体表現の実践と研究
- 14 DVD鑑賞
- 15 課題曲、台詞、まとめ、伴奏合わせ

授業時間外の学習

与えられた課題の準備を授業前に行うこと。
授業中に学んだことを検討し、改善・研究に努めること。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。

成績評価

レポート50%、実技(歌・台詞)50%で100点に換算

- A レポート及び実技において評価の平均点が80点以上の者
- B レポート及び実技において評価の平均点が65点以上の者
- C レポート及び実技において評価の平均点が50点以上の者
- D レポート及び実技において評価の平均点が49点以下の者、また、出席回数が足りなくて受験資格がない者

科目名 ミュージカル論B

対象 演劇専攻2年

履修条件

特になし。
ミュージカルコース必修。

授業の概要

ミュージカルの歴史を学び、作品を研究発表する。
ミュージカルのためのエチュードを通して、ミュージカルへの理解を深める。

シーンを試演してもらい、演技、歌、ダンスをひとつにつなげる。

授業の到達目標

ミュージカルの俳優としての資質を高め、ミュージカルをより深く理解し、これからの活動の目標を見つける。
日本におけるミュージカルの役割を考える。

期間 前期

担当教員 横山 由和

授業計画

- ・ミュージカルの歴史
- ・作品研究と発表
- ・ミュージカルのためのエチュード
- ・創作ミュージカル
- ・名作ミュージカルのシーン試演等

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

譜面・台本等は授業時に配布。
DVD等は授業時に指示。

成績評価

出席と授業態度。ならびに試演や研究発表による評価。

科目名 映画論

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

本講義では、映画はどうやって制作されていくのか題材をどこに求めるのか等について、演劇と映画の具体的な作品を参照しながら、テーマごとに掘り下げていく。具体的な作品の解説を通じて講義を進めていくため、学術的な内容よりも実践的な内容が中心となるが、映画制作にとどまらず創作活動において重要となる要素について、丁寧に扱っていかねばと考えている。

講義を通じて、学生の皆さんと質疑応答だけでなくテーマごとにディスカッションを活発にできればと、思っている。

授業の到達目標

映画制作に関するいくつかの論点を通じて、映画制作にとどまらず、創作活動において基礎となる大事なポイントを理解してほしい。

期間 集中講義

担当教員 行定 勲

授業計画

以下、テーマについて、具体的な作品を参照しながら、解説、ディスカッションの流れで授業を進めていく。

- 1-2 映画はどうやって制作されているのかという概論
- 3-4 演出における自作論と発想
- 5 演劇作品の映画化についての考察
- 6 映画における演劇的演出の意義
- 7 評価されることの意義
- 8 映画化企画のプレゼンテーション

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

出席状況 レポート課題(予定)。

科目名 演出論

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

井上ひさし作『紙屋町さくらホテル』を読み進めながら、舞台演出のありかたについて考える。

授業の到達目標

演出者の役割とは何か。一定の共通認識を得たい。

期間 集中

担当教員 鷗山 仁

授業計画

・演出的観点から見た芝居作りの基本課題。

「音を変える」

・読み合わせ段階での課題。

「相手役が存在」

・立ち稽古段階での課題。

「第三者の出現」

・上演に際しての課題

「『劇場』と『観客』の登場」

等々、芝居作りの各段階に擬して、現場的な課題を具体的に検証していく。

授業時間外の学習

・『紙屋町さくらホテル』を授業前にしっかり読んで来ること。

教科書・参考書等

井上ひさし作『紙屋町さくらホテル』(始業時にプリントを配布する)

成績評価

出席状況50%、レポート50%

科目名 舞踊論

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

身体表現に興味をもっていること。

授業の概要

ダンサーに限らず、演技を必要とする芸術に携わる人々にとって、身体表現はかなりの重要性を持っている。言葉を用いず身体表現だけで全てを伝える舞踊芸術では、その表現法が高度に発達している。この授業で優れた舞踊作品のVTRを見た受講生は、舞踊の言葉を超える表現の大きさに驚嘆するにちがいない。

授業では、舞踊の歴史を概観しながら各時代ごとに作品を鑑賞し、どのような場合に身体表現が大きな力を発揮するかを確認してゆく。身体表現の力を知り、その力を意識することは、演劇人を目指す皆さんにとってかなり有益なことであると確信している。

授業の到達目標

身体表現の可能性を知り、自らの芸術活動に役立てること。

授業計画

- 第1回～第3回 バレエの発生からロマン主義バレエまで。『ジゼル』の分析。
- 第4回～第6回 ロシア・バレエの黄金時代—チャイコフスキーの三大バレエの誕生。
現代において古典を上演する意義について。
- 第7回 モダン・バレエの誕生
- 第8回 バレエ・リュス：総合芸術としてのバレエ。

期間 後期

担当教員 村山 久美子

- 第9回 ドラマティック・バレエとは。
『ロミオとジュリエット』の分析。
- 第10回 シンフォニック・バレエとは。
- 第11回 バレエの概念を変えたモダン・バレエ—ベジャールとプティ。ベジャール芸術の体現者としてのジョルジュ・ドン。
- 第12回 モダン・ダンスの誕生と発展。
- 第13回～第14回 コンテンポラリー・ダンスの概念、その発展の流れ：ノイマイヤー、キリアン、フォーサイス
- 第15回 まとめ
※毎回VTRで舞踊作品を見る。
※教員が解説しながら、2～3作品全幕をVTRで見、レポートを提出。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

教科書：村山久美子「二十世紀の10大ダンサー」（東京堂書店）
参考書：
「知らされるロシア・バレエ史」村山久美子著（東洋書店）
「バレエ・ギャラリー」村山久美子共著（学研）
「DVD解説書『華麗なるバレエ』」村山久美子共著シリーズ（小学館）

成績評価

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 戯曲論

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

この授業は、すでに演劇、ひいては人生について、確信を持ち、従ってすべてに迷い疑うことのない人にとっては、役に立たないだろう。—すなわち、演劇・人生・世界について、心をひらいて未知の海に乗り出す勇氣、未知に対する興味、辞書（広義の）を引きテキストを読む辛抱—そんな人たちに語りたい。

授業の概要

シェイクスピアは「芝居は世界に対して掲げる鏡」だと言った。鏡とは何だ。考えてみよう。自分と他人・社会・世界（宇宙）、その関係が演劇だと僕は思っているが、それも自分の頭と心で捉え直して見よう。—多年試行錯誤を重ねて来て、もっとも大切で有用な《鏡》は、シェイクスピアではないか、と思う。その見地から「発声」や「エチュード」を。そして歌舞伎のテキストを読むことも。

授業の到達目標

例年、休暇明けに1人3分の持ち時間（5人でやれば15分）で、なにがしかのパフォーマンス発表を行わせ、それを試験とする。生徒たちの自主的、主体的な感性がすこしでも反映されれば。

授業計画

- ① 発声（自分と宇宙）
- ② エチュード（他者との交流）
- ③ 古典的（西欧・正統的）ドラマトゥルギーと世界
- ④ 前回の続き（発見と急転）
- ⑤ シェイクスピア1（ブランク・ヴァースと日本語）

期間 前期

担当教員 福田 善之

- ⑥ シェイクスピア2（承前、「ハムレット」他）
- ⑦ シェイクスピア3（「オセロー」他）
- ⑧ シェイクスピア4（承前、四大悲劇）
- ⑨ シェイクスピア5（承前）
- ⑩ 歌舞伎劇（忠臣蔵・千本桜）
- ⑪ 承前（南北・黙阿彌）
- ⑫ 大衆劇（長谷川伸）
- ⑬ ミュージカル経験
- ⑭ 芝居を書くための知識と多少の技術
- ⑮ 承前・まとめ。
以上、随時テキスト（事前配布）のリーディング、ときにエチュード。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

「シェイクスピアの世界」木下順二（同時代ライブラリー、岩波書店刊）

成績評価

【授業到達目標】の項参照。
自前の、主体的な感性と知性が僕にどれほどか突き刺さり、触れてくればA、驚きや魅力に乏しいがバランスがとれて纏まっているなら、その程度に応じてAかB、触れてくる何もものもなくとも、努力のあとがあればB、事情が理解できる場合はC、出席日数が足りない者はD。

科目名 演劇論

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

ヨーロッパの都市を歩くと、街の中心には必ず劇場があり、そこはその街にとって極めて重要な場所であることが分かる。劇場のない都市を想定することはヨーロッパでは不可能だ。なぜ劇場があれほどまでに重要な場所であるのか、また演劇という表象の形式がきわめて重要な活動とされているのはなぜか、それはヨーロッパにおける演劇の出自やその歴史と深くかかわっている。いや、ヨーロッパ社会の出現は演劇なしに考えられない。この授業では、演劇と文化との関係を視野に入れつつ、演劇とは何か、それはどのような役割を演じてきたのか、あるいはそれはどのように語られてきたのかを概説する。そのことによって、演劇の魅力はより深まりをみせるだろう。また、日本における演劇の未来について私たち自身が構想していくことができるようになるであろう。

授業の到達目標

授業で支持される演劇に関する著作をすべて読むことはかなり難しいので、そのうちの幾つかを自発的に読みはじめ、そこに書かれていることについて考えるようになること。

授業計画

- 1 演劇の誕生 (J.E.ハリソン『古代芸術と祭式』)。
- 2 ギリシア悲劇とは何か (ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』に倣いて)。
- 3 ギリシア喜劇とは何か (鴻英良『処方箋なき診断書』)。
- 4 アリストテレスの『詩学』を読む。
- 5 叙事詩から演劇へ (E・シュタイガー『詩学の根本概念』をめぐって)。

期間 後期

担当教員 鴻 英良

- 6 近代戯曲とは何か (ジェルジ・ルカーチ『演劇の社会学によせて』)。
- 7 自然主義演劇と象徴主義演劇 (イプセン、ストリンドベリ、ハウプトマンについて)。
- 8 チェーホフ論の現在。
- 9 現代演劇論へのアプローチ1 (タデウシュ・カントール『死の演劇』について)。
- 10 現代演劇論へのアプローチ2 (プレヒトの演劇論をめぐって)。
- 11 現代演劇論へのアプローチ3 (メイエルホロドの演劇をめぐって)。
- 12 アルトールとは誰か (ジャック・デリダ『エクリチュールと差異』)。
- 13 ピーター・ブルック『何もない空間』を読む。
- 14 日本の演劇人の演劇論概論 (これらについての詳細は日本演劇史で講義する)。
- 15 まとめ。

授業時間外の学習

演劇について学び、その世界で活動したいと思うとき、実際に上演されている舞台を見ることが不可欠である。海外に行くことが容易ではないわれわれは海外から招聘された演劇はできるだけ観に行くようにその都度指示する。

教科書・参考書等

授業計画で指示された著作はすべて参考文献である。参考文献に関しては、ほかにもその都度、教場で提示することになる。

成績評価

最終的にはレポートで判断するが、出席を重視する。中間試験のようなものを幾度か行うので、それを受けていないものはきわめて不利になる。レポート80%、出席10%、中間試験10%。

科目名 音声生理学

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

なし。

授業の概要

演劇、歌唱時の発声は、普通の会話と違い、特殊な、時には無理な発声を要求されることがある。この無理な発声や声の酷使により声の病気(音声障害)を生じることがある。発声器官の解剖と発声の仕組みを学ぶことから声はいかにして作られ、どのような原因で音声障害が生じるのかを知る。この基礎知識をもって発声することにより、少しでも音声障害を予防し、早期治療を受けることができる俳優、歌手として必要な予備知識を養うことをこの講義の目的とする。

授業の到達目標

音声障害を理解するための、必要最少限の専門用語の理解を目標とする。

期間 前期集中

担当教員 川崎 順久

授業計画

- 第1回から第5回まで以下の内容を行なう。
 - 1 発声器官の解剖と発声の仕組み(声はいかにして作られるか)を解説する。
 - 2 音声障害の診断と治療(声の病気にはどのようなものがあるか、その検査や治療法)等について解説する。
 - 3 ことばの障害(読む、話すことの異常)について解説する。テキストプリントを配布し、声の病気に関するスライド、ビデオを供覧しながら、講義を進める。

授業時間外の学習

予習の必要はないが、授業中に配布したプリントで授業内容の復習をよくしておくこと。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布する。

成績評価

授業最終日に出題する問題をレポートで解答、提出する。(100点満点)

- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分理解している)。
- B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ理解している)。
- C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事項をある程度理解している)。
- D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項の理解が欠けている。不合格とする。授業放棄、レポート未提出の者。不合格とする)。

科目名 戯曲講読演習 A (古典)

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

「オイディプス王」(ソポクレス作)と「ハムレット」(シェイクスピア作)を事前に読んでおくこと。

授業の概要

西洋の古典劇の理解に必要な基礎知識(歴史、文化、演劇の様式等)を習得しながら、ギリシャ古典劇の傑作「オイディプス王」とシェイクスピアの不朽の名作「ハムレット」を購読する。時代・文化の違いを超えて、現代人の心を揺さぶり続けるドラマの真髄を探っていきたい。ディスカッションを重ねながら授業を進めるので、受講生は各自指定されたテキストを購入の上、作品の内容をよく把握しておくこと。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標にする。
- ギリシャ古典劇、エリザベス朝演劇の特徴を説明することができる。
 - 各作品の特徴を説明することができる。
 - 各作品が後世の演劇に与えた影響について説明することができる。

授業計画

- 第1回 ギリシャ劇について
- 第2回 ギリシャ神話とテバイ伝説
- 第3回 「オイディプス王」I
- 第4回 「オイディプス王」II
- 第5回 「オイディプス王」III

期間 前期

担当教員 安宅 りさ子

- 第6回 「オイディプス王」IV
- 第7回 アリストテレスの「詩学」
- 第8回 エリザベス朝演劇について
- 第9回 「ハムレット」I
- 第10回 「ハムレット」II
- 第11回 「ハムレット」III
- 第12回 「ハムレット」IV
- 第13回 「ハムレット」V
- 第14回 「ハムレット」の上演史
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の冒頭で、前回の授業内容と宿題に関する小テストを行うので、履修者は予習と復習に努めること。

教科書・参考書等

- 「ギリシャ悲劇II」ソポクレス(ちくま文庫)
- 「ハムレット」シェイクスピア全集1 松岡和子訳(ちくま文庫)

成績評価

- 小テスト30% 期末試験成績70%で100点
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事情を十分に把握し、説明ができる)
 - B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事情をほぼ把握し、説明ができる)
 - C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事情の理解に欠け、説明があいまいになる)
 - D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 戯曲講読演習 B (近現代)

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

「かもめ」(チェーホフ作)と「ゴドーを待ちながら」(ベケット作)を事前に読んでおくこと。

授業の概要

近代劇・現代劇の理解に必要な基礎知識(歴史、文化、ドラマツルギー等)を習得しながら、近代リアリズムの傑作「かもめ」(チェーホフ)と不条理劇を代表する「ゴドーを待ちながら」を購読する。時代・文化の違いを超えて、観客の心をとらえる両作品の魅力を探っていきたい。チェーホフの「ポドテキスト」や「間」を駆使した作劇術は、近代の演技術の発展に大きく貢献した。一方、ベケットは、現実生活の再現を拒み、作品の思想を形式に表した。両者とも後世の演劇に多大な影響を与えている。ディスカッションを交えながら演習を進めるので、受講生は各自テキストを購入の上、作品の内容をよく把握しておくこと。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標にする。
- 各作品の歴史的背景を説明することができる。
 - 各作品の特徴を説明することができる。
 - 各作品が後世の演劇に与えた影響について説明することができる。

授業計画

- 第1回 アントン・チェーホフについて
- 第2回 チェーホフとモスクワ芸術座
- 第3回 「かもめ」I
- 第4回 「かもめ」II
- 第5回 「かもめ」III
- 第6回 「かもめ」IV

期間 後期

担当教員 安宅 りさ子

- 第7回 日本におけるチェーホフ
- 第8回 サミュエル・ベケットについて
- 第9回 「ゴドーを待ちながら」I
- 第10回 「ゴドーを待ちながら」II
- 第11回 「ゴドーを待ちながら」III
- 第12回 「ゴドーを待ちながら」IV
- 第13回 「ゴドーを待ちながら」V
- 第14回 日本におけるベケット
- 第15回 まとめ

授業時間外の学習

毎回授業の冒頭で、前回の授業内容と宿題に関する小テストを行うので、履修者は予習と復習に努めること。

教科書・参考書等

- 「かもめ・ワーニャ伯父さん」神西 清訳(新潮文庫)
- 「ゴドーを待ちながら」ベスト・オブ・ベケット1 安藤信也・高橋康也訳(白水社)

成績評価

- 小テスト30% 期末試験成績70%で100点
- A 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事情を十分に把握し、説明ができる)
 - B 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事情をほぼ把握し、説明ができる)
 - C 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事情の理解に欠け、説明があいまいになる)
 - D 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項を理解せず、説明ができない)

科目名 戯曲講読演習C (日本)

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

与えられた課題を予習・復習し、課題のレポート提出のできる者。

授業の概要

今年度は日本近代戯曲の発展形態を辿りながら、ドラマとは、何かを把握していく。一幕物と多幕物の違いなどの正確な把握、分析の方法も検討する。演出プラン、演技プラン、装置プランなどにも言及したい。現代戯曲を中心にする。

取り上げた戯曲のビデオやDVDがある場合は、それを視聴し、机上で学んだ戯曲がどのように立体化されたかを知る。演技・演出・作劇述などを討論する。ビデオやDVDを視聴した後にはレポートを提出する。

授業の到達目標

ドラマとは何かを確実に理解する。
一幕物と多幕物の違いを理解する。
戯曲の形式によって、検討方法や表現方法が異なることを理解する。
上記の目標を文章で表現することができる。

授業計画

- (1) ドラマとは何かについて検討する。
- (2) 木下順二のドラマ論を知る。
- (3) 同上
- (4) 現代戯曲＝井上ひさしの戯曲を中心に検討する。
- (5) 木下のドラマ論と井上の戯曲のちがいをさぐる。

期間 後期

担当教員 井上 理恵

- (6) 民話劇のちがいは何かを知る。(木下民話と井上戯曲)
- (7) 井上戯曲の初期作品の検討。
- (8) 同上
- (9) 同上
- (10) 井上戯曲の中期作品の検討。
- (11) 同上
- (12) 最後の作品の検討。
- (13) 同上
- (14) 同上
- (15) まとめと試験

授業時間外の学習

前回の復習の成果を次の授業で発表する。

教科書・参考書等

教材は授業時に配布。
参考書：日本近代演劇史研究会編『井上ひさしの演劇』（翰林書房刊）

成績評価

- A 総合点が80点以上の者
(戯曲を正確に把握し、説明することができる)
- B 総合点が60点以上の者
(戯曲をほぼ把握し、説明できる)
- C 総合点が50点以上の者
(戯曲の正確な理解に欠ける、説明が曖昧である)
- D 総合点が49点以下の者
(戯曲の理解に基だしく欠け、説明ができない)

科目名 劇作法

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

後期は実技の発表会他、試演会などがあり、自己管理に十分留意し遅刻、欠席をしないこと。

授業の概要

劇作は舞台のためのテキスト。この授業は創造的現場に関わる人たちが劇作というものを具体的に学ぶもの。この科目は台本演技・演出などの関係を知ることから入り、具体的にテキスト・台本を書き上げることを目標にする。

毎回授業で簡単な「だれ」「どこ」「なに」「出来事」など、劇の要素を学ぶ課題に取り組む。フィクション、ノンフィクションの違いなど具体的に理解を深めるためのワークショップも行う。これらを元に授業時間内に小作品を書き上げ、劇作の基礎を学ぶものである。

授業の到達目標

与えられた今日の題材、あらすじを元に原稿用紙30枚程度の小作品の一つ書き上げる。

授業計画

- 1) ガイダンス。「現在形」への取り組み
- 2) 会話のスケッチ
- 3) 五感を有効に
- 4) 夢の内容から
- 5) 表現の現場
- 6) フィクションとノンフィクション

期間 後期

担当教員 岡安 伸治

- 7) 無意識と創造性
 - 8) 登場人物・だれ
 - 9) 場面・どこ
 - 10) 関心事
 - 11) 音としてのせりふ
 - 12) ストーリー
 - 13) 人生相談より
 - 14) これまで課題で書き溜めたものを元を書く作業
 - 15) 清書して提出
- ※講義内容に関して、上演されたものや試演会作品などの具体的事例から取り上げる場合もあり、内容が前後することがある。

授業時間外の学習

講義の中で劇作に関する具体例としていくつかの作品を紹介する。図書館の視聴覚資料など有効に活用して調べること。

教科書・参考書等

教材は授業時に配布。
「岡安伸治戯曲集」I～III他 日本戯曲 海外戯曲など

成績評価

- 成績は1)「提出作品の完成度」2)「授業出席日数」3)「授業態度」等を総合的に評価。
A 評価1)～3)を満足させるもの。特に完成度
B 評価1)～3)の内一つが努力不足。
C 評価1)～3)の努力不足
D 評価1)～3)に問題あり。特に出席日数

科目名 外国映画論

対象 演劇専攻2年

履修条件

特になし。
声優コース必修。

授業の概要

外国映画の歴史を学ぶ。特に吹き替えに重点を置き、日本語翻訳がどのように行われて来たのかを実践的に学習していく。映画の翻訳は単なる日本語訳ではない。映画の制作された時代背景や風俗などを踏まえた上で、日本語ではどのように表現を行うのかを知らなくてはならない。

この授業は単なる座学ではなく、課題として取りあげた作品の研究から、自作の吹き替え台本を制作し、実際にアテレコを行っていく。また、他の受講生のアテレコや台本を講評し、自身の台本と照らし合わせることで、自身の言葉による表現力をつけていく。

授業の到達目標

- ・映画の歴史や制作された時代背景が理解出来ている。
- ・自分の言葉での台本が制作出来る。
- ・アテレコが出来る。
- ・他者の作品を講評することが出来る。

授業計画

- (1) ガイダンス・自己紹介・グループ制作
- (2) 課題映画①発表・研究
- (3) 課題映画①台本制作
- (4) 課題映画①アテレコ・講評会
- (5) 映画史概論
- (6) 課題映画②発表・研究
- (7) 課題映画②台本制作

期間 前期

担当教員 石原 康臣

- (8) 課題映画②アテレコ・講評会
- (9) 課題映画③発表・研究
- (10) 課題映画③台本制作
- (11) 課題映画③アテレコ・講評会
- (12) 課題映画④発表・研究
- (13) 課題映画④台本制作
- (14) 課題映画④アテレコ・講評会
- (15) 総括

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

映画史を学ぶクリティカル・ワーズ(村山匡一郎著・フィルムアート社)
はじめての映像翻訳(日本映像翻訳アカデミー編・アルク)
他適時指示

成績評価

研究20%、台本20%、アテレコ20%、講評会20%、授業態度20%で100点に換算。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 特別講義 A

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

専攻科演劇専攻の必修科目であることを前提に履修すること。
毎回のゲスト講師に失礼のないマナーで真剣に勉強すること。

授業の概要

演劇に関わる、幅広い分野の専門家を迎える本格的な演劇学の講義。

理論と実践の対比や、歴史背景と現代演劇の連続性など、様々な視点を新たに得て、自らがたずさわる演劇を見つめ直してほしい。

早稲田大学演劇博物館の協力を得て実現した特別な機会である。教えてもらうのではなく、自ら学びとろうとする積極的な姿勢で臨むこと。

授業の到達目標

自分たちが今後も続けていく演劇に、新しい意識とより幅広い考え方でとらえ直していきけるようになること。

授業計画

- 第1回 4月6日 ガイダンス
- 第2回 4月20日
- 第3回 4月27日
- 第4回 5月18日
- 第5回 5月25日
- 第6回 6月1日

期間 前期

担当教員 ペーター・ゲスナー

- 第7回 6月8日
- 第8回 6月15日
- 第9回 6月22日
- 第10回 7月20日

授業時間外の学習

- 次回の講師について、事前に調べ、最低五つの質問を用意し、紙に書いてくること。
- 講義の中で出た話題や人名・書名などをしっかりノートにとって、講義後、自分で調べ直すこと。全プログラム終了後に、各自一本のレポートを課す。

教科書・参考書等

各講義に合わせて、各自で用意・持参すること。
受講生は12時30分までに入室し、出欠確認をすること。履修者以外の受講は認めない。

成績評価

- プログラム終了後に作成したレポートを参考にする。
- A 全回の授業に積極的に参加し、講義の内容を十分に理解している。
 - B 7回以上授業に参加し、講義の内容をほぼ理解している。
 - C 6回以上授業に参加し、講義の内容をあまり理解していない。
 - D 出席が不足し、講義の内容も理解できていない。

科目名 特別講義B

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

専攻科演劇専攻の必修科目であることを前提に履修すること。
演劇専攻のことばと演技の問題に関心のある学生。毎回のゲストに失礼のないマナーで真剣に臨むこと。

授業の概要

演劇の一線で活躍する俳優、劇作家、演出家、プランナー、制作者の方々の現場の声を伺い、質疑応答を行う。ことばを使った表現についての模索と、どのようにして表現成果にたどり着くのか、創作のなぞを解き明かす。

学生時代、修行時代、あるいは芸術家の卵だった時代はどのような生活、訓練をしていたか、どんなことを考え、なにを悩んでいたか、などお伺いする。そして、現在の表現をめぐる自らの模索の有様を、なるべくありありと実感を込めたことばで語っていただくなかで、受講生たちが自分を見つめ、自分の過去と将来に直面して思索をする好機にすることを目指す。

なお、講義の進行の妨げとなるので、遅刻、早退等の入退室は一切認められない。

授業の到達目標

以下の三点をこの授業の到達目標とする。

- ①ことばを使った表現について、アーティストはどのようなポイントで悩み、考えているのか、実際の表現活動の核に当たる表現者の事情をつかみ、自分の表現行為の日常に適用する原則を獲得する。
- ②芸術家の卵として、先輩たちの卵時代の苦労、熱意に触れ、どのような覚悟が自らに必要なのか、つかみとる。

期間 後期

担当教員 鈴江 俊郎

授業計画

- 第1回 9月21日 ガイダンス
- 第2回 9月28日
- 第3回 10月5日
- 第4回 10月12日
- 第5回 10月19日
- 第6回 10月26日
- 第7回 11月9日
- 第8回 12月7日
- 第9回 12月14日

※各回のゲストについては、決定次第発表する。

授業時間外の学習

毎回、来られるゲストの方の出演している作品をDVDや記録、文章で読み、あらかじめその創作姿勢について想像をたくましくして臨むこと。鋭くて的確な質問を練って準備してくることが望ましい。終了後は語られたひとつひとつのことばをふりかえり、かみしめ、自分の現在と将来にてらしあわせて思索を積み重ねること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業の出席日数とレポートで評価する。

- A 欠席が2回以内で、出席分のレポートをすべて出しているもの
- B 欠席が3回以内で、出席分のレポートをすべて出しているもの
- C 欠席が4回以内で、出席分のレポートをすべて出しているもの
- D 欠席が4回を超えるもの

科目名 集中講義（舞台照明実習）

対象 演劇専攻1年

履修条件

なし。

授業の概要

おそらく大多数の人が、未知の分野である舞台照明について、演劇に関わる上で、最低限度の必要な事柄を、ピックアップしていく。

- ・舞台照明とは？
- ・簡単な歴史
- ・どんな仕事があるのか
- ・照明と設備と配置
- ・各種照明器材の説明
- ・実際の公演における仕事とパート
- ・デザインについて
- ・仕込から撤去まで

以上の仕事を実際に小劇場の機構を使用して実習する。

授業の到達目標

自分達が舞台上に立った時、どのくらい照明が必要か、わかるようにしたいと思う。

期間 前期集中

担当教員 森脇 清治

授業計画

本を使って歴史や設備を勉強する。小劇場の機構を使用して、スポットを吊って照明の実際を勉強する。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

レポートによる。

科目名 集中講義（舞台音響実習）

対象 演劇専攻1年

履修条件

なし。

授業の概要

舞台における俳優が知っておくとい音響の知識を学ぶ。音響的なことではなく、俳優視点の授業である。授業の最後に、実習を行う。

授業の到達目標

音響の仕事、機器の扱いを理解することにより、スタッフの意図を汲み、よりクオリティの高い作品づくりを目指す。「伝える」ことの難しさを知る。

期間 前期集中

担当教員 佐藤 こうじ

授業計画

- ・搬入、仕込み、サウンドチェックの見学
- ・ライブハウスPA、舞台音響、ミュージカル音響の違い
- ・スピーカーの向きの検証（モニターの必要性）
- ・カラオケボックスでキーンとなるのは何故か（ハウリングの検証）
- ・有線マイク、ワイヤレスマイク（ハンドマイク、ピンマイク）の取り扱い
- ・実際に音を出して音響の仕事を紹介、その効果
- ・サンプラーの紹介（刀の音、殴る、蹴るなどの音を動きと合わせる音響効果）
- ・実習（チームごとにわかれ、テキストを上演する）
- ・撤去

授業時間外の学習

実習で使用するプリントを事前配布するので、目を通し理解しておくこと。

教科書・参考書等

プリントを配布する。
筆記用具、舞台で動けるようなシャツ、ズボン着用のこと。
小劇場で作業をするために必要な上履き、運動靴着用のこと。

成績評価

出席50%、実習への取り組みと態度50%を100点換算して評価する。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 集中講義（舞台監督実習）

対象 演劇専攻1年

履修条件

なし。

授業の概要

演劇を構成する要素を理解する。俳優が集まるだけでは、上演にこぎ着けるのは難しい。色々なセクションのスタッフが集まり、チームを立ち上げることによって公演の初日を迎えることができ、上演の成果を得ることができる。限られた条件（稽古時間や公演予算、人手不足等）の中で最良の舞台を作るには、その作品に関わる俳優と全スタッフのチームワークが何よりも必要である。舞台監督はチームワークの要でもあるので、その仕事の範囲を理解する。また演出の仕事との違いや、制作の仕事も理解する。

授業の到達目標

小劇場の舞台を作り、客席を作り、そしてバラス。それを2度繰り返すことで、クラス全員のチームワークを体現する。

授業計画

- 1 演劇を構成する要素
- 2 舞台監督の仕事の範囲（演出家との仕事の違い）
 - A 舞台の総括責任者としての仕事
 - B 稽古場を作る→進行する
 - C 舞台の設営
 - D 毎日の上演の安全管理

期間 後期集中

担当教員 宮下 卓

- 3 舞台（稽古場）の安全管理
 - A 作業中の安全管理
 - B 舞台進行上の安全管理
- 4 簡単な道具製作作業
- 5 小劇場の舞台を設営、客席を作る
- 6 小劇場の舞台のバラス、客席のバラス

授業時間外の学習

「履修届」を提出した時「プリント」を受け取り、集中講義の履修前に目を通しておく。
「ザ・スタッフ、舞台監督は裏の主役～装置を飾る迄」伊藤弘成著（晩成書房）の配布プリントを読んでおく。

教科書・参考書等

必ず作業着を着用し、釘袋その他の作業道具を各自用意し、内履きシューズを使用。

成績評価

- 集中講義の出席状況30%、レポート70%で100点に換算。
- A 総合点が80点以上の者
 - B 総合点が60点以上の者
 - C 総合点が50点以上の者
 - D 総合点が49点以下の者

科目名 集中講義 (ヘアメイク実習)

対象 演劇専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

演劇メイクの基本、メイクアップの必要性、などを学ぶ。
舞台メイクに必要な道具説明に始まり、選び方、使用法、メイクの種類、役柄に合わせたメイクなどを講義する。そして、基本の舞台メイクデモンストレーションののち、各自実習する。
その他、特殊メイクやシルクドソレイユ等のスペシャルなメイクデモンストレーションも見せる。

授業の到達目標

舞台メイクアップの基本技術習得。

授業計画

舞台のための基本メイクアップ

1. メイクアップ基本概要 (選び方、使用法、顔修正など)
2. 男女それぞれのメイクアップ法、デモンストレーション
3. 各自メイクアップ実習
4. 役柄に合わせての顔作り、デモンストレーション

期間 前期集中

担当教員 宮崎 龍

EX. エイジメイク (老け顔)
特殊メイク (キズ、アザ等)
動物顔 (キャッツ的)
宝塚メイク
シルクドソレイユ (サーカスのメイク)

授業時間外の学習

授業前に様々な舞台、演劇のメイクアップを確認すること。
授業中に出された批評、指導された部分を授業後に検討、復習し、理解を深めること。

教科書・参考書等

教材:化粧品として、ファンデーション・パウダー・スポンジ・パフ・アイライナーペンシル等。
その他用意するもの:鏡、ティッシュ、タオル、基礎化粧品等、その他お手持ちの化粧品。

成績評価

- A 授業態度、講義内容への理解、メイクアップテクニック、向上心、全てに優れている。
- B 向上心が感じられ、授業態度の良いもの。
- C 向上心が感じられないもの。
- D 授業の妨げになるもの。

科目名 舞台基本実習 (入門講座)

対象 演劇専攻1年

履修条件

約10日間にわたる第1回オープンキャンパス「滝廉太郎物語」の稽古、準備及び本番のうち、必要な活動に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフ面での学習に強い関心を持つ学生が、基礎的な力をつけるために、主体的、能動的な態度で臨むことが必要。
履修を希望する場合は別途説明会を行うので、掲示を見ておくこと。効率的な学習を保障するために人数制限をするので、説明会に参加し、内容を理解し、受講のためのオーディションに合格することが必要。

授業の概要

役者としてのみならず、舞台スタッフとしての基礎的な素養を身につけることを目標とする。音楽専攻と演劇専攻の卒業生のパフォーマンスを、舞台美術を組み、照明を仕込み、音響のケアをし、当日の受付、撤去、反省会まで一連の全般的なスタッフワークを担うことで、舞台を支える側の視点を獲得する。その経験を通して、総合演劇を担う演劇人としての自覚を持つ。実力を高める。プロの演出家の指導の下、スタッフとして1本の作品の完全上演に参加し、その能力を向上させていく。舞台美術、照明、音響、制作、舞台監督のすべての作業をひととおり経験することになるので、柔軟な学習態度で備えること。

授業の到達目標

オープンキャンパスという学外のお客様を招き入れる行事を支えるために必要な緊張感を獲得すること。完成度の高い上演作品を目指して貢献すること。座組の一員として必要な規律、モラル、マナー、意識の高さ、礼儀、社交性、すべての基礎を身につける。

授業計画

実習のプロセスは作品及び出演者チームのリーダーの方針によるが、おおよそ以下の流れに沿って進行する。
学生は進行の過程において、スタッフとして参加する。

- 1 出演者チームとの顔合わせ、打ち合わせ
- 2 通し稽古 (過去に上演された作品、チームなので、本読み、抜き稽古のプロセスはほぼない)
- 3 たたき (舞台装置の製作)
- 4 仕込み、本番、片付け
- 5 反省会

実習はこの流れに沿いながら行うものとする。
履修者の本実習への参加は原則以下の通り。

期間 前期集中

担当教員 鈴江 俊郎

- 1 あらかじめ出演者チームのリーダー、舞台監督、教員と打ち合わせ、稽古の必要とされる時間に参加。
事前準備、本番、後片付け、諸々の打ち合わせにも参加すること。
- 2 稽古の準備に参加すること
- 3 稽古中の代役も含め稽古中のスタッフワークを行うこと
- 4 出演者チームのリーダー、舞台監督、教員の指示に従ってスタッフワークを行うこと
- 5 専門技術を身につける一スタッフ分野の一員として、あわせて座組を支える全分野を実行するスタッフの一員として参加すること
- 6 全日程終了後、レポートを提出すること
実施に当たっては、作品理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で作業、仕込み、本番などに臨むことが求められる。
本実習に参加することで、緊張感のある現場の空気をうけとめ、ひととおりの上演までのプロセス全般を経験し、基礎的な能力を身につける。

授業時間外の学習

ミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なため出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布 (台本の作成も求められる場合がある)。

成績評価

- 出席状況や受講態度、及びその成果を総合して評価する。
- A 総合点が80点以上の者 (必要な活動に出席し、専門的知識及び技能を向上させるとともに、スタッフワークにおいて協調した)
 - B 総合点が70点以上の者 (必要な活動に出席し、専門的知識及び技能を向上させた)
 - C 総合点が50点以上の者 (必要な活動に出席し、専門的知識または技能を向上させた)
 - D 総合点が50点未満の者 (専門的知識および技能の習得の面、スタッフワークへの協調の面がともに不十分といわざるを得ない者)

科目名 舞台スタッフ実習 A / B

対象 演劇専攻 1年

履修条件

40日間にわたる稽古及び本番のうち、必要な活動に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。
スタッフ面での学習を、さらに深めたい学生、意欲の高い学生が主体的、能動的な態度で臨むことが必要。履修を希望する場合は稽古開始時期の前に専攻主任の承諾を得て、担当演出家と打ち合わせを行うこと。

授業の概要

役者としてのみならず、舞台スタッフとしての素養をより豊かにすることを目標とする。一本の劇上演実習に、スタッフとして参加し、上演を支える経験をつむ。その経験を通して、総合演劇を担う演劇人としての実力を高める。プロの演出家の指導の下、スタッフとして一本の作品の完全上演に参加し、その能力を向上させていく。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。
座組の一員として必要な規律、モラル、マナー、意識の高さ、礼儀、社交性、すべての基礎を身につける。

授業計画

実習のプロセスは作品及び演出家の方針によるが、おおよそ以下の流れに沿って進行する。
学生は進行の過程において、スタッフとして参加する。

- 1 本読み
 - 2 立ち稽古
 - 3 舞台稽古
 - 4 本番
- 実習はこの流れに沿いながら行うものとする。
履修者の本実習への参加は原則以下の通り。
- 1 あらかじめ演出家あるいは舞台監督あるいは制作と打ち合わせ、稽古の必要とされる時間に参加。
事前準備、本番、後片付け、諸々の打ち合わせにも参加すること。
 - 2 稽古の準備に参加すること
 - 3 稽古中の代役も含め稽古中のスタッフワークを行うこと
 - 4 演出家あるいは舞台監督あるいは制作の指示に従ってスタッフ

期間 後期集中

担当教員 各担当教員

- ワークを行うこと
- 5 専門スタッフ分野の一員として、あわせて座組を支える全分野を実行するスタッフの一員として参加すること
 - 6 全日程終了後、レポートを提出すること
実施に当たっては、作品理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。
本実習に参加することで、厳しい現場の空気をうけとめ、常に一步先の仕事を予測して備え、必要な時に迅速に正確に対応できる力を身につけることになる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について作業を行い、指導者によるその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布（台本の作成も求められる場合がある）。
必要に応じて指示。

成績評価

出席状況や受講態度、及びその成果を総合して評価する。

- A 総合点が80点以上の者（必要な活動に出席し、専門的知識及び技能を向上させるとともに、スタッフワークにおいて協調した）
- B 総合点が70点以上の者（必要な活動に出席し、専門的知識及び技能を向上させた）
- C 総合点が50点以上の者（必要な活動に出席し、専門的知識または技能を向上させた）
- D 総合点が50点未満の者（専門的知識および技能の習得の面、スタッフワークへの協調の面がともに不十分といわざるを得ない者）

科目名 舞台制作実習 A / B

対象 演劇専攻 1年

履修条件

40日間にわたる稽古及び本番のうち、必要な活動に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。
スタッフ面での学習を、さらに深めたい学生、意欲の高い学生が主体的、能動的な態度で臨むことが必要。履修を希望する場合は稽古開始時期の前に専攻主任の承諾を得て、担当演出家と打ち合わせを行うこと。

授業の概要

役者としてのみならず、舞台スタッフとしての素養をより豊かにすることを目標とする。一本の劇上演実習に、スタッフとして参加し、上演を支える経験をつむ。その経験を通して、総合演劇を担う演劇人としての実力を高める。プロの演出家の指導の下、スタッフとして一本の作品の完全上演に参加し、その能力を向上させていく。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。
座組の一員として必要な規律、モラル、マナー、意識の高さ、礼儀、社交性、すべての基礎を身につける。

授業計画

実習のプロセスは作品及び演出家の方針によるが、おおよそ以下の流れに沿って進行する。
学生は進行の過程において、スタッフとして参加する。

- 1 本読み
 - 2 立ち稽古
 - 3 舞台稽古
 - 4 本番
- 実習はこの流れに沿いながら行うものとする。
履修者の本実習への参加は原則以下の通り。
- 1 あらかじめ演出家あるいは舞台監督あるいは制作と打ち合わせ、稽古の必要とされる時間に参加。
事前準備、本番、後片付け、諸々の打ち合わせにも参加すること。
 - 2 稽古の準備に参加すること
 - 3 稽古中の代役も含め稽古中のスタッフワークを行うこと
 - 4 演出家あるいは舞台監督あるいは制作の指示に従ってスタッフ

期間 後期集中

担当教員 各担当教員

- ワークを行うこと
- 5 専門スタッフ分野の一員として、あわせて座組を支える全分野を実行するスタッフの一員として参加すること
 - 6 全日程終了後、レポートを提出すること
実施に当たっては、作品理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。
本実習に参加することで、厳しい現場の空気をうけとめ、常に一步先の仕事を予測して備え、必要な時に迅速に正確に対応できる力を身につけることになる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について作業を行い、指導者によるその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布（台本の作成も求められる場合がある）。
必要に応じて指示。

成績評価

出席状況や受講態度、及びその成果を総合して評価する。

- A 総合点が80点以上の者（必要な活動に出席し、専門的知識及び技能を向上させるとともに、スタッフワークにおいて協調した）
- B 総合点が70点以上の者（必要な活動に出席し、専門的知識及び技能を向上させた）
- C 総合点が50点以上の者（必要な活動に出席し、専門的知識または技能を向上させた）
- D 総合点が50点未満の者（専門的知識および技能の習得の面、スタッフワークへの協調の面がともに不十分といわざるを得ない者）

科目名 ワークショップ1年次

対象 演劇専攻1年

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

ストレートプレイ系、ミュージカル系のワークショップを各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただく。

授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現・声による表現に関する理解を体験的に深める。

期間 後期集中

担当教員 担当教員

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

(1) 研修の現場への出席態度 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A ワークショップにおいて協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B ワークショップにおいて協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C ワークショップにおいて協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D ワークショップにおいて協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 ワークショップ2年次

対象 演劇専攻2年

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

ストレートプレイ系、ミュージカル系、声優系のワークショップを各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただく。

授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深める。

期間 前期集中

担当教員 担当教員

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

(1) 研修の現場への出席態度 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A ワークショップにおいて協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B ワークショップにおいて協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C ワークショップにおいて協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D ワークショップにおいて協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 演劇研修（ハケ岳合宿）

対象 演劇専攻1年

履修条件

原則として演1全員参加。

授業の概要

演劇専攻の教育課程の基本は次の三つである。

- 1 戯曲が読めること。
 - 2 からだを鍛えること。
 - 3 アンサンブルが取れること。
- この授業では、特に3の「アンサンブルがとれること」が課題となる。個人だけではできない演劇創造の実践を短期間のうちにしかも極限状態の中での集中作業で修得する実演発表形式をとる。
なお、この授業は三泊四日の合宿形式による集中講義でもある。場所は本学の施設ハケ岳高原寮を使用する。

授業の到達目標

合宿研修の全過程を通じて、アンサンブルの重要性を学ぶ。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 第一日目 出発
- 3 第一日目 課題の提示、課題作品を読み取り、理解する。
- 4 第一日目 レクリエーション アンサンブルの前提となるコミュニケーション能力を発揮する。
- 5 第一日目 課題稽古① 課題作品の中からなにを表現の主題とするか、検討し、いったん台本としてまとめる。
- 6 第二日目 沢登り アンサンブルの前提となる共同作業、共同の体験を積み、体験的に協力を意味を獲得する。
- 7 第二日目 課題稽古② 台本の再検討、部分的に立体化を試みる。
- 8 第二日目 課題稽古③ 立体化したシーンを検討することによって、さらに台本の再検討に進む。
- 9 第二日目 課題稽古④ さらに台本をまとめ、完成させる。
- 10 第三日目 課題稽古⑤ 台本をもとにして完全なる上演を作る。スタッフワークも検討する。

期間 前期集中

担当教員 鈴江 俊郎

- 11 第三日目 舞台稽古 実際の発表会場をつかってスタッフワークと合わせてリハーサルを行う。
- 12 第三日目 発表（劇上演） 参加者相互で創作した作品を鑑賞しあう。
- 13 第三日目 講評 教員から演技、構想、集団作業のすべての面についての講評を受け、自己分析をする。
- 14 第三日目 うちあげ お互いの苦労と共同作業の成果を確認し、アンサンブルの意義を再確認する。
- 15 第四日目 清掃、帰京 創作の会場に感謝を込めて原状復帰し、創作の全プロセスを締めくくる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを確認し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書きとめ、その内容を復習するように努めること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次の時間帯のミーティングで発言できるように事前準備をすること。毎回合意された内容について作業を行い、着実に完成に向けて進めていくこと。稽古時間外のそうした思索が、発表する作品成果を左右するので、合宿生活を通して緊張感を維持すること。

教科書・参考書等

参考資料等：必要に応じて合宿時に配布。

成績評価

- (1) 出席日数 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
 - B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
 - C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
 - D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 海外研修

対象 演劇専攻1・2年

履修条件

良好な体調で研修に参加できること。

授業の概要

海外の演劇教育機関でワークショップ(15時間程度)に参加し、訪問国の俳優訓練を体験する。また、現地の学生・先生方との交流を通じ、国際理解を深めていく。

最近イタリアのテアトロアーセナレ、オーストラリア(シドニー)の国立演劇学院NIDA、カナダのカルガリーのルーズムーズシアターで研修を行った。今年はヨーロッパ方面への研修を行う予定。

授業の到達目標

外国での演劇研修を通じて、国際的視野を広め、理解を深める。

期間 後期集中

担当教員 ペーター・ゲスナー

授業計画

- 訪問国に関する事前学習
海外研修…ワークショップ
観劇等

授業時間外の学習

研修旅行の準備として、その国の言語・政治・文化などを各自で調べること。
また、研修中のwsで出された課題や内容について、繰り返し考え、自分の意見を加えて、次のwsに臨むこと。

教科書・参考書等

必要に応じて指示。

成績評価

- (1) 研修態度と姿勢 (2) レポート
- A (1)、(2)の総合点が80点以上の者
 - B (1)、(2)の総合点が60点以上の者
 - C (1)、(2)の総合点が50点以上の者
 - D (1)、(2)の総合点が49点以下の者

科目名 劇上演実習 A (試演会)

期 間 後期集中

対 象 演劇専攻 2 年

担当教員 担当教員

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。
欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。授業計画の準備上、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③

14 本番

15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。

実習中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

(1)出席日数 (2)課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3)課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 B (卒業公演)

期 間 後期集中

対 象 演劇専攻 2 年

担当教員 担当教員

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。
欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
卒業に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。授業計画の準備上、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②

13 舞台稽古③

14 本番

15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。

実習中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

(1)出席日数 (2)課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3)課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習C / D (学外出演)

期 間 集中

対 象 演劇専攻1・2年

担当教員 専任教員

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)を提示。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

プロの公演、映画等への主役・準主役での出演。ただし、学内の劇上演実習での40日間の稽古時間と同等の学習の意義の認められる上演内容であり、同等の稽古環境であり、同等の学習成果が認められる場合のみ単位認定は可能。

授業の到達目標

プロの公演、映画等に通用する実践力を養う。さまざまな現場のスタッフ、共演者、関係者との共同作業を通して、協調し、協力する態度を可能にする表現力や日常的な心構え、表現者としての高い意識を獲得する。本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画・授業時間外の学習

一流の演出家・俳優等との仕事を通じ、プロとしての意識を養い、現場に通用する演技力を身につける。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②

- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み あるいは撮影セット内でのリハーサル
- 11 舞台稽古① あるいはリハーサル①
- 12 舞台稽古② あるいはリハーサル②
- 13 舞台稽古③ あるいはリハーサル③
- 14 本番 あるいは撮影
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

(1) 研修の現場への出席態度 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程で与えられた役割を十分に果たせず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習E / F (学内出演)

期 間 集中

対 象 演劇専攻1・2年

担当教員 担当教員

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)を提示。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)への参加。ただし出演依頼を授業担当教員から受けた場合に限る。

授業の到達目標

さまざまな実習、演習に出演者として参加し、さまざまな関係者、出演者、スタッフと協調し、協力する態度を可能にする表現力を養う。本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画・授業時間外の学習

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)に参加し、協調し、協力するプロセスを通じて表現力を養う。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②

- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

(1) 研修の現場への出席態度 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程で与えられた役割を十分に果たせず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

Toho Gakuen College of Drama and Music

芸術科ステージ・クリエイト専攻

科目名 スタッフ演習A I (演出)

期 間 前期

対 象 ステージ・クリエイト専攻 2 年

担当教員 越光 照文

履修条件

授業時間外での学習に積極的に取り組むこと。授業の進行具合によっては、補習を実施する必要があることを覚悟しておくこと。(補習のスケジュールは、前もって受講生諸君と調整するので、ご心配なく…)

授業の概要

この授業は、舞台演出に関わる様々な要素に焦点を当てながら「演出行為とは何か?」について、具体的な且つ実践的に探求することを目的とする。

その為に、第1の課題として「自画像」をテーマに据え、演劇的な作品として「モノログ・ドラマ」を創造する、という方法をとる。受講生はその一人ひとりが、自己の「自画像」の台本作成、演出プランの提示、及び演技すること(演出家の多くが一応の演技経験を経ている!)を通して、「演出行為とは何か?」を知る手掛かりとする。

加えて、第2の課題として戯曲の一部(作品はこちらで指定する)を題材にとった「シーンワーク」の演出を試みながら、美術、証明、音響、衣装等々のスタッフ・ワーク全般渡って、一定程度の理解を深めることを目標とする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に必要とあらば補習を実施し、作品の完成度を高めることが求められる。

授業の到達目標

- ①「自画像」の台本作成、演出プランの提示、及びその作品発表。
- ②「シーンワーク」の演出プランの提示、及びその作品発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 「自画像」台本作成
- 3 「シーンワーク」台本の研究
- 4 「自画像」台本の発表
- 5 「シーンワーク」台本の決定

- 6 「自画像」演出プランの提示
- 7 「シーンワーク」演出プランの提示
- 8 「自画像」の稽古、その①
- 9 「シーンワーク」の稽古、その①
- 10 「自画像」の稽古、その②
- 11 「シーンワーク」の稽古、その②
- 12 「自画像」の稽古、その③
- 13 「シーンワーク」の稽古、その③
- 14 「自画像」の作品発表。
- 15 「シーンワーク」の作品発表。

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①「自画像」発表へ向けての自主稽古
- ②「シーンワーク」発表へ向けての自主稽古
- ③「自画像」「シーンワーク」における補習授業への出席

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に発表。
参考書・必要に応じて随時指定。

成績評価

- (1)出席日数 (2)授業への取り組み (3)発表の内容を総合的に判断して評価する。
- A 出席が良好であり、自画像、シーンワークの発表が両者とも高く評価できる。
 - B 出席が良好であり、自画像、シーンワークの発表が両者とも一定程度評価できる。
 - C 出席が規定回数に達しており、自画像、シーンワークの発表まで達している。
 - D 出席が規定回数に達していない。自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 スタッフ演習A II (演出)

期 間 後期

対 象 ステージ・クリエイト専攻 2 年

担当教員 越光 照文

履修条件

授業時間外での学習に積極的に取り組むこと。授業の進行具合によっては、補習を実施する必要があることを覚悟しておくこと。(補習のスケジュールは、前もって受講生諸君と調整するので、ご心配なく…)
当然のことながら、「スタッフ演習A I」の単位を取得した者に限る。

授業の概要

この授業は、舞台演出に関わる様々な要素に焦点を当てながら「演出行為とは何か?」について、具体的な且つ実践的に探求することを目的とし、前期での授業の発展を目指す。

その為に、第1の課題として「自画像」をテーマに据え、演劇的な作品として「モノログ・ドラマ」を創造する、という方法をとる。受講生はその一人ひとりが、前期に取り上げた他者の「自画像」をテキストまたは素材として、もう一つの「自画像」(この授業では「他画像」と称する)を完成し、発表することを通し、「演出行為とは何か?」を知る更なる手掛かりとする。

加えて、第2の課題として戯曲の一部(作品はこちらで指定する)を題材にとった「シーンワーク」の演出を試みながら、美術、証明、音響、衣装等々のスタッフ・ワーク全般渡って、前期にも増して一層の理解を深めることを目標とする。

なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に必要とあらば補習を実施し、作品の完成度を高めることが求められる。

授業の到達目標

- ①「自画像(他画像)」の台本作成、演出プランの提示、及びその作品発表。
- ②「シーンワーク」の演出プランの提示、及びその作品発表。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 「自画像」台本の決定
- 3 「シーンワーク」台本の研究
- 4 「自画像」台本の作成(直し)

- 5 「シーンワーク」台本の決定
- 6 「自画像」演出プランの提示
- 7 「シーンワーク」演出プランの提示
- 8 「自画像」の稽古、その①
- 9 「シーンワーク」の稽古、その①
- 10 「自画像」の稽古、その②
- 11 「シーンワーク」の稽古、その②
- 12 「自画像」の稽古、その③
- 13 「シーンワーク」の稽古、その③
- 14 「自画像」の作品発表。
- 15 「シーンワーク」の作品発表。

※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。

授業時間外の学習

- ①「自画像」発表へ向けての自主稽古
- ②「シーンワーク」発表へ向けての自主稽古
- ③「自画像」「シーンワーク」における補習授業への出席

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に発表。
参考書・必要に応じて随時指定。

成績評価

- (1)出席日数 (2)授業への取り組み (3)発表の内容を総合的に判断して評価する。
- A 出席が良好であり、自画像、シーンワークの発表が両者とも高く評価できる。
 - B 出席が良好であり、自画像、シーンワークの発表が両者とも一定程度評価できる。
 - C 出席が規定回数に達しており、自画像、シーンワークの発表まで達している。
 - D 出席が規定回数に達していない。自画像、シーンワークの発表が評価できない。

科目名 スタッフ演習E I (芸術運営)

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

遅刻・欠席厳禁。

授業の概要

我が国の演劇産業とその創造・運営の在り方を、他の芸術分野や諸外国の事例を活用しながら、客観的に多角的に概観するとともに、これからの演劇運営を考えていく。講義とワークショップ形式。

授業の到達目標

演劇運営の次世代リーダーにふさわしい自覚と知識、批判的分析能力をはぐくむ。

期間 前期

担当教員 中山 夏織

授業計画

1. オリエンテーションー演劇産業をマップ化する
2. 商業演劇
3. 公立文化施設
4. 民間劇場
5. 劇団
6. 芸術運営の特殊性と文化政策の関与
7. 芸術支援の理論的根拠ー芸術に支援は必要なのか？
8. 非営利と公共性
9. 文化政策の策定と意思決定の構造
10. 芸術支援プログラムの実際
11. 劇場法と指定管理制度
12. 芸術監督制度
13. 演劇のミッションと意思決定
14. 演劇に働く人々のモチベーション&グループダイナミクス
15. 芸術組織のリーダーという存在

授業時間外の学習

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。
次回の授業のために指示されたテーマについて、下調べすること。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 スタッフ演習E II (芸術運営)

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

遅刻・欠席厳禁。「スタッフ演習E I」を受講し、単位を修得した者。

授業の概要

次世代の演劇創造・運営の担い手として求められる知識を培うとともに、実践的な能力を身につける。一つの演劇作品を活用して、演劇の社会的責任を果たすための多様なプログラムを作成する。講義とワークショップ形式。

授業の到達目標

演劇運営の次世代リーダーにふさわしい自覚と知識、批判的分析能力に加え、実践的な能力を培う。

期間 後期

担当教員 中山 夏織

授業計画

1. 演劇の社会的責任を考える。
2. 企画書を書くー誰のために、なぜこの作品なのか。
3. 全体計画の作成と予算
4. 助成金申請書を書く
5. 芸術を評価する基準
6. 申請書を評価する
7. マーケティングとは何か。
8. マーケティング・プログラムを創る
9. 芸術創造と観客開発・育成
10. エデュケーション・プログラムとは何か
11. エデュケーション・プログラムの手法
12. エデュケーション・プログラムを創る1
13. エデュケーション・プログラムを創る2
14. エデュケーション・プログラムを評価する
15. まとめ

授業時間外の学習

新聞を読み、社会に対してつねにアンテナを張っておくこと。
次回の授業のために指示されたテーマについて、下調べすること。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 演奏制作法B

期 間 前期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 佐藤 修悦

履修条件

引き続き、学校で義務付けられる以外にもコンサート会場、劇場に目を向け、通う習慣を身に付けること。

授業の概要

「演奏会制作法B」は「演奏会制作法A」の応用編であるから、学生にとってより自信となり、確実な力になる事を目指したい。更に音楽界に馴染み、事情に明るくなって行く事。情報収集は不可欠なため、アナログ的ではあるが実際に音楽現場に行っレパートリーを増やす努力をさせたい。

新人アーティストの発掘と育成や営業を実際にできるようになるため、外交や交渉の仕方、社内外へのミーティングの進め方、あるいは参加の仕方など、社会に出てすぐ実務に入れるような学び方をしてもらいたい。

授業の到達目標

- 以下3点を到達目標とする
- ◎都内プロオーケストラ、オペラ、バレエ団について確実に体得。
 - ◎著作権・著作隣接権を完全理解。
 - ◎指定管理者制度の完全理解。

授業計画

1. 授業ガイダンス
2. 新人アーティスト発掘のために。調査①
3. 新人アーティスト発掘のために。調査②
4. 新人アーティスト育成方法とは
5. 海外アーティスト招聘と営業
6. アーティストマネジメント

7. 発掘・育成・営業のためのミーティングの仕方
8. 外交・交渉・営業のためのマナー講座
9. アーティストのキャリアサポートとセルフマネジメント
10. 指定管理者制度の実態(就職先を探る)
11. 指定管理者制度の今後(就職先を探る)
12. 会社の立ち上げ方と運営戦略
13. 著作権、著作隣接権の知識
14. 資金調達法、メセナ、スポンサー、公的補助について
15. まとめ

授業時間外の学習

- ◎オーケストラ事務局、音楽事務所訪問
- ◎レストランで外交・交渉・営業のためのマナー講座

教科書・参考書等

教科書は使用せず、授業時にプリントを配布。参考書は、適宜授業内で紹介する。

成績評価

- 授業全体の理解について、100点満点で評価する。
小テスト(20点)、レポート(50点)、出席日数(30点)
- A. 総合点が80点以上の者
(基本的な諸事項を十分理解している)
 - B. 総合点が60点以上の者
(基本的な諸事項をほぼ理解している)
 - C. 総合点が50点以上の者
(基本的な諸事項をある程度理解している)
 - D. 総合点が49点以下の者
(基本的な諸事項の理解が欠けている)

科目名 舞台プロデュース法A

期 間 前期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 中島 豊

履修条件

前期・後期通しての受講が望ましい。

授業の概要

将来日本の舞台芸術の中核を担い、広く世界で活躍しうるクリエイターの育成を目標とする。

生きた知識、高度な技術、この世界で生き抜くための心構えを、今、業界現場で行われているエピソードを交えながら講義していく。

プロデューサー志望者のみならず、その他の舞台スタッフ、俳優志望者にも役に立つ舞台芸術における、マネージメント(企画立案、予算作成、広報・宣伝、配役、オーディション、スタッフィング、交渉、スタッフワークの実際、劇場平面図の読み方など)の基礎を中心とした指導。

授業の到達目標

戯曲を元に、中規模の劇場(400名~600名)を想定した基礎的な企画の立案、配役、スタッフィング、収入予算書、支出予算書、各種香盤表の作成ができるまで。

授業計画

1. 舞台芸術の現場
2. プロフェッショナルの視点
3. 劇場、劇団、プロデュースの公演形態
4. 劇場構造、平面図の読み方、仕込みから本番。
5. プロデューサー概論
6. 企画立案方法

7. 予算作成法 収入編
8. 予算作成法 支出編
9. スタッフィング作業
10. キャスティング・オーディション作業
11. 俳優プロダクションとの交渉
12. 海外の公演事情
13. 制作進行 顔合わせ、稽古、公演管理
14. ビジネスとしてのアートマネージメント
15. プランナー 照明、音響、衣装、美術、音楽

授業時間外の学習

将来の為に、劇場やPCなどで入手できる、舞台公演の情報(パンフレット、ちらし、DM、雑誌、ホームページなど)から、クリエイター、プランナー、クルー、スタッフカンパニー、業者などを拾い出し、どのような作品にどのような人材、会社が関わっているのかを、PC、ノートなどにまとめておくこと。

教科書・参考書等

俳優契約書、スタッフ契約書、予算書、収益表、キャストイングプラン表、各種香盤表など授業にて配布。
電卓持参のこと。
パソコン Word・Excel、マスターのこと

成績評価

評価A=出席率80%以上
評価B=出席率70%以上
評価C=出席率60%以上
評価D=出席率60%以下
不認定=出席率50%以下

科目名 舞台プロデュース法B

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

前期・後期通しての受講が望ましい。

授業の概要

前期でマスターした基礎技術から卒業後20年、30年と仕事をしていくために必要な、応用力。自己を発展させる為の方法論。知識のインプットから仕事へのアウトプットなどを身に付けてもらい、総合的なクリエイターの養成を目的とする。

志望に合わせた卒業後の進路相談は随時おこなう。

授業の到達目標

前期で学んだことを基本に、さらに高度な技術力の養成と、クリエイターとしての実践的な作業と創造性の養成。国内外の第一線で活躍するアーティストたちとの仕事の経験を通し、より高度な知識、実践的な技術、卒業後を見据えた進路アドバイス、業界で生き抜くための心構えなどを指導。

授業計画

1. チケット販売計画・団体営業
2. 公的助成
3. 全国ツアー、営業戦略
4. 全国ツアーの実際・演劇鑑賞組織
5. 舞台機構と仕組み
6. プロデューサーの現場手腕
7. 海外公演、招聘公演、
8. 国際共同プロジェクト
9. 劇作家との共同作業

期 間 後期

担当教員 中島 豊

10. ビデオ作品鑑賞
11. 劇場経営、劇団経営
12. 業界地図、制作団体、
13. 在外研修員への道・海外留学制度の応募方法
14. ステージ・スタッフの収入
15. 現場に旅立つにあたっての心構え

授業時間外の学習

代表的な大規模公演から小劇場公演の、入場料金、劇場キャバシティー、席種別料金などから予想収入、スタッフィング、配役などから支出予想の算出をしてみる。

海外の劇場（ナショナルシアター・コメディーフランセーズ、ベルリナーアンサンブル、メトロポリタンオペラ、バリオペラ座など）の英語版ホームページから、海外の舞台芸術事情を把握しておくこと。

教科書・参考書等

海外留学制度申請書類（文化庁在外研修員制度）、制作進行行程表、制作進行チェックリスト、文化助成申請書類、確定申告方法など、授業にてプリント配布。電卓持参のこと。

成績評価

評価A＝出席率80%以上 レポート提出
評価B＝出席率70%以上 レポート提出
評価C＝出席率60%以上 レポート提出
評価D＝出席率60%以下 レポート提出
不認定＝上記、いずれも未到達

科目名 舞台美術法A

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

「舞台美術法B」とあわせて受講するのが望ましい。

授業の概要

舞台美術における演劇的表現を課題を通して楽しむ。

クラスは、主にデザイン課題と講評とで構成され、デザイン表現とコミュニケーション技術の習得を目指す。

授業では、デザイン・イメージ・コラージュ・スケッチ、模型製作を行い、初歩的な舞台平面図、断面図を描けるよう学習する。

授業の到達目標

演劇のビジュアル的感性を磨く。

期 間 前期

担当教員 島川 とおる

授業計画

デザイン課題をこなす勤勉さが要求される。クラスではデザイン課題の発表と講評とで進められる。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

課題提出物。

科目名 舞台美術法B

期 間 後期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 島川 とおる

履修条件

「舞台美術法A」とあわせて受講するのが望ましい。

授業計画

デザイン課題と講評とで進められる。

授業の概要

舞台美術による演劇参加のために必要な技術を習得する。
「舞台美術法A」の延長として、課題を通して技術に支えられたビジュアル表現を目指す。
課題として、模型提出は不可欠。

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

特になし。

授業の到達目標

演劇のビジュアル的感性を磨く。

成績評価

課題提出物。

科目名 コンサート・ステージング(クラシック)A

期 間 前期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 合田 香

履修条件

特になし。

- 11 演奏会の概要について
 - 12 演奏会の運営について
 - 13 関係する色々な仕事について(指揮者、ライブラリアン、企画等)
 - 14 現場での実習
 - 15 まとめ
- 受講学生の音楽経験などによって、授業内容を調整する。

授業の概要

この授業ではクラシックの演奏会に関する基本的な知識、個別の楽器の知識、オーケストラ・アンサンブル等の演奏形態ごとの特色等について取り上げる。
クラシック音楽のことが全くわからない学生も最初からわかるように、基本的な知識からスタートして、最終的には現場で多く行われるアンサンブルやオーケストラのセッティングについて習得する。併せて演奏会運営の実習も行いたい。
なお、希望者を募って都内の音楽ホールの見学も行いたい。

授業時間外の学習

クラシック関係の演奏会に出かけたり、クラシック音楽番組やDVDの観賞などを通じて、多様なクラシック音楽に触れることによって、この授業の内容についての理解が深まるので、積極的にそのようなチャンスをいかしてほしい。

授業の到達目標

一流演奏家との仕事に応え得る知識の習得と実習を行うことを目的とする。

教科書・参考書等

資料を配布する。
「はじめてのオーケストラ・スコア」野本由紀夫著(音楽之友社)

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 楽器の話(基礎)
- 3-7 楽器について—
弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器、ハープ、鍵盤楽器
- 8-10 楽器の配置と響きについて
色々な演奏形態について
声楽を含む演奏形態について

成績評価

出席を重視。期末にレポートを課す。

- A 総合点80点以上
- B 総合点60点以上
- C 総合点50点以上
- D 総合点49点以上

科目名 コンサート・ステージング(クラシック)B

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

「コンサート・ステージング(クラシック)A」を履修した者であることが望ましいが、特に希望がある時には、それ以外の者の受講も認める。

授業の概要

この授業では、「コンサート・ステージング(クラシック)A」(前期)で得た基礎知識をもとに、演奏会に適したステージングやその判断材料等を説明しながら、実際の演奏会の見学や、ホール見学(バックステージ)、ホール関係者等との対話等を経て最終的にはコンサート運営の実習も行いたい。

授業の到達目標

音楽系舞台の配置、コンサート運営についてのノウハウの習得と実習体験。

期間 後期

担当教員 合田 香

授業計画

- 1 オリエンテーション、概要説明
 - 2 基礎知識の確認
 - 3-6 演奏形態の違いによる配置の学習
 - 7-10 クラシック音楽の演奏会等における様々なケーススタディ
 - 11 演奏会運営計画のシュミレーション
 - 12 音楽業界におけるホスタビリティについて
 - 13 現場見学
 - 14 演奏会の実際の運用体験
 - 15 まとめ
- 受講学生の音楽経験などによって、授業内容を調整する。

授業時間外の学習

クラシック関係の演奏会に出かけたり、クラシック音楽番組やDVDの観賞などを通じて、多様なクラシック音楽に触れることによって、この授業の内容についての理解が深まるので、積極的にそのようなチャンスをいかしてほしい。

教科書・参考書等

資料を配布する。
「はじめてのオーケストラ・スコア」野本由紀夫著(音楽之友社)

成績評価

- A 総合点80点以上
- B 総合点60点以上
- C 総合点50点以上
- D 総合点49点以上

科目名 コンサート・ステージング(ライブ)A

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

特になし。

授業の概要

コンサート、イベント等の必要なすべての知識の把握。
企画から上演の過程を自身が作成したテキストを基に対話形式で進めていく。

授業の到達目標

プロになる為の意識。
想像力、積極性。
卒業後、現場での対応性。

期間 前期

担当教員 高田 憲治

授業計画

- 1~3 ○dea・企画・予算管理・広報。
- 4~6 ○全演出プラン作成・台本。
- 7~9 ○演出案実行・All Staff 指示、把握・全RH立会・現場管理進行。
- 10~12 ○作曲・シンガーソングライター・作詞・編曲・写譜・INSPECTOR・ミュージシャン・RH。
- 13~15 ○Solo 振付・ステージング振付用音源・美術・照明・PA電飾・特効・衣裳des stylist・特機。
○現場での体験研修。
○各職種ゲスト講演。

授業時間外の学習

前回の授業内容に関して、質問または小テストを行うため、復習を行うこと。

教科書・参考書等

自身が作成したテキストをデータ配布。

成績評価

- 出席状況(70% 全出席)。
発言の積極性・授業に対する姿勢(30%)。
- A 総合点80点以上
 - B 総合点60点以上
 - C 総合点50点以上
 - D 総合点49点以下

科目名 コンサート・ステージング(ライブ) B

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

● 履修条件

特になし。

● 授業の概要

コンサート・イベント等の企画・上演をおこなう。

● 授業の到達目標

企画・上演の経験。

期 間 後期

担当教員 高田 憲治

● 授業計画

- 1～15 ○企画に基づき上演
(会場 スペース桐朋)
○上演後の結果検証

● 授業時間外の学習

授業内容により、課外活動時間が必要となる。

● 教科書・参考書等

自身が作成したテキストをデータ配布。

● 成績評価

- 出席状況(50% 全出席)。
発言の積極性・授業に対する姿勢(50%)。
A 総合点80点以上
B 総合点60点以上
C 総合点50点以上
D 総合点49点以下

科目名 メディアリテラシー

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

● 履修条件

特になし。

● 授業の概要

テレビ、新聞、広告などのメディアの作り手は、どのような「意図」のもとに情報を発信しているのか？

メディアが社会の価値観に与える影響を認識し、情報を読み解くための能力(メディア・リテラシー)を、理論面から身に付ける。自らが情報の発信者となる場合も必要な能力である。

● 授業の到達目標

メディアの情報をうのみにしない目を養う。

期 間 後期集中

担当教員 渡辺 真由子

● 授業計画

1. ガイダンス
2. 客観報道という幻想
3. 広告の意図
4. 映画産業と女性
5. メディアの言葉づかい
6. メディアの暴力・性表現
7. インターネット・リテラシー
8. 恋愛リテラシー

● 授業時間外の学習

日頃からメディアに接する際に、授業で学んだことを意識して分析すること。

● 教科書・参考書等

「オトナのメディア・リテラシー」 渡辺真由子(リベルタ出版)

● 成績評価

- ・出席状況、授業態度 20%
- ・ディスカッションへの貢献度 20%
- ・ミニ報告 25%
- ・レポート 35%

科目名 芸術経営論

期 間 前期集中

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 伊藤 裕夫

履修条件

特になし。
他専攻学生も履修可。

授業の概要

今日のアートマネジメントとは、単なる芸術活動の企画・実施や文化施設の管理・運営だけではなく、芸術活動を継続的・発展的に展開していくことにより、その成果を社会に還元し、地域や同時代の「文化」の形成につなげていくことを課題としている。そうした観点から、まず今日の芸術活動の実態や取り巻く社会的環境を認識し、その上で芸術と社会をつなぐ重要な橋渡しとしてのアートマネジメントの役割を、「資金(マネー)」の確保という点を軸に具体的に考える。

また併せて、近年の文化政策の変化などを踏まえて、これからのアートマネジメントの課題について問題提起したい。

授業の到達目標

- 今日の社会におけるアートマネジメント(芸術経営)の役割を理解する。
- アートマネジメントの基本的な進め方を理解する。

授業計画

1. ガイダンス——アート(芸術)をマネジメント(経営)するとは
2. 日本の芸術文化組織とその現状
3. 芸術文化を取り巻く社会的環境
4. アートマネジメントの登場と基本的な考え方

5. 「資金」をいかに確保するか(1) Make Money
6. 「資金」をいかに確保するか(2) Raise Money
7. 「資金」をいかに確保するか(3) Save Money
8. これからの芸術経営の課題——まとめにかえて

授業時間外の学習

事前に、ネットTAMの「アートマネジメント事始め」(<http://www.nettam.jp/learning/intro/>)の宮崎「アートマネジメント入門」、河島「アートマーケティング入門」、伊藤「文化政策入門」に目を通しておくこと。(ネットTAMのホームページにはキャリアバンクという芸術文化関係の就職情報もあるので、ぜひ普段から見るようにして欲しい。)

教科書・参考書等

教科書は使用せず、授業時にプリントを配布。参考書は、授業時に適宜紹介する。

成績評価

受講状況(毎回リアクションペーパーで質問・感想を求める)40%、レポート60%で総合的に評価。

- A 講義内容を十分に理解し、的確に自論を展開できた者
- B 講義内容を把握し、それにそった自論を展開できた者
- C 講義内容はある程度把握できているが、自論を展開できていない者
- D 講義内容をほとんど把握できていない、あるいはレポート未提出の者

科目名 芸術心理学

期 間 前期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 熊谷 保宏

履修条件

なし。

授業の概要

ヒトはなぜアートするのか。あるいは、芸術とはどのような精神活動なのか。

これ(ら)を問うべく、近代的な意味での「芸術」あるいは「娯楽」的な志向・目的性をかならずしも持たない

芸能および演劇的行動・実践の領域、事例を検討してゆく。

レクチャーを基本とするが、デモンストレーションまたアクティビティーも随時おこなう。

授業の到達目標

上記「概要」の冒頭に示したがごとき問題設定の意味と必要性を理解し、議論できるようになること。

授業計画

1. 開講にあたって(ガイダンス)
2. 大文字の ART と小文字の arts
3. 演劇のイメージ
4. 能力としての演劇
5. 特別な演劇的ニーズ
6. 手段としての演劇

7. ロールプレイングについて
8. モレノとサイコドラマ
9. アウグスト・ボアールと被抑圧者の演劇
10. 第三世界の民衆文化運動と演劇
11. 演劇をやらない人々の詩学
12. 日本の応用演劇
13. 応用的な芸術研究について
14. 現代のアート、現代とアート
15. レビュー/レポート

授業時間外の学習

一定のリサーチワークをもとめる。

教科書・参考書等

教科書は使用せず。必要な参考書および資料は授業時に提示、配布する。

成績評価

出席(参加)状況およびレポートによる。

基準は授業内容について:

- A. 十分に理解したうえで発展的な認識を示した
- B. ほぼ理解したうえで基本的な整理をおこなえた
- C. 理解が欠けており整理も十分でなかった
- D. 理解できておらず整理もできなかった

科目名 知的財産権論・著作権論

期 間 後期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 中山 夏織

履修条件

遅刻・欠席厳禁。

授業の概要

知的財産権ならびに著作権・隣接権の全体像を概観するとともに、芸術活動への影響や実際的な相関関係を学ぶ。

授業計画

1. 知的財産権と舞台芸術
2. 著作権制度の沿革
3. 著作物と著作者—著作物としての条件
4. 権利の内容
5. 著作権判例1
6. 著作権判例2
7. 著作権隣接権について
8. 実演家の権利
9. 伝達する者の権利
10. 音楽産業の構造と契約
11. 演劇・映画と著作権・隣接権
12. インターネット時代の著作権
13. 権利の保護期間
14. 他人の著作物の利用と例外
15. コピーライトとコピーレフト—知的財産権・著作権の課題

授業時間外の学習

折々に課題を指示するので、その課題を準備して授業に臨むこと。

教科書・参考書等

授業時にプリントを配布。参考書は適宜授業内で紹介する。

授業の到達目標

実務で活用しうる基礎的な知識をもつ。

成績評価

出席ならびに授業への貢献、課題に対する成果等を総合的に評価する。

科目名 スタッフ実習（劇上演実習）

期 間 前期集中・後期集中

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 実習担当各教員

履修条件

40日間にわたる稽古及び本番の全日程に参加すること。
欠席・遅刻・早退は一切認めない。
スタッフワークにおいて、集団のチームワークを重んじること。
「スタッフ実習O」「スタッフ実習Q」は、卒業に必要な単位
修得の見込みのある学生のみ参加できる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、スタッフとして1本の作品の完全上演に参加し、その能力を向上させていく。授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は認められないので注意すること。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。
座組の一員として必要な規律、モラル、マナー、意識の高さ、礼儀、社交性、すべての基礎を身につけ、座組に必要とされる仕事はどんなことでも厭わず実行し、頼られるスタッフ、使えるスタッフとしてのあり方を目指す。

授業計画・授業時間外の学習

実習のプロセスは作品及び演出家の方針によるが、おおよそ以下の流れに沿って進行する。学生は進行の過程において、臨機応変にスタッフの業務を担当し、その仕事をこなすことを通して、実行能力を多岐にわたって向上させていく。

- 1 本読み
- 2 立ち稽古
- 3 舞台稽古
- 4 本番

実習この流れに沿いながら行うものとする。スタッフ実習履修者の本実習への参加は原則以下の通り。

- 1 全稽古時間に参加。事前準備、仕込み、本番、後片付け、諸々

- の打ち合わせに参加すること
- 2 稽古の準備に参加すること
- 3 稽古中の代役も含め稽古中のスタッフワークを行うこと
- 4 「SC担当コーディネーター」の指示に従ってスタッフワークを行うこと
- 5 専門スタッフ分野の1つと、基本的に全分野の基本スタッフとして参加すること
- 6 全日程終了後、終了レポートを提出すること
実施に当たっては、作品理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。本実習に参加することで、厳しい現場の空気に耐え、常に一歩先の仕事を予測して備え、必要な時に迅速に正確に対応できる力を身につけることになる。
その力を応用して、実際に上演のプロセスで少しずつ責任者、小さな部署のリーダー的な立場を担えるように努めること。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布(台本の作成も求められる場合がある)必要に応じて指示

成績評価

出席状況や受講態度、及びその成果を総合して評価する。

- A 総合点が80点以上の者(活動のすべてに出席し、専門的知識及び技能を向上させるとともに、スタッフワークにおいて協調した)
- B 総合点が70点以上の者(活動のすべてに出席し、専門的知識及び技能を向上させた)
- C 総合点が50点以上の者(活動のすべてに出席し、専門的知識または技能を向上させた)
- D 総合点が50点未満の者(活動すべてに出席しないか、現場における活動の全てに出席したが成果が獲得できなかった)

科目名 スタッフ実習（音楽演奏会等）

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

演奏会の準備及び本番の全日程に参加すること。
欠席・遅刻・早退は一切認めない。
スタッフワークにおいて、集団チームワークを重んじること。

授業の概要

コンサートのスタッフをするには、まず楽器の特徴を知っていないてはならない。また、音楽家が、コンサートを前にして、何を考え、どのような準備をしていくのかを知ることが大切である。この授業では、音楽専攻のコンサートを通して、コンサートの現場体験をしていく。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い演奏会にスタッフとして参加する。

授業計画・授業時間外の学習

実習のプロセスは現場を担当する教員によるが、おおよそ以下の流れにそって進行する。学生は進行の過程において、スタッフとして参加する。

- 1 事前会議（公演内容の理解）

期 間 後期集中

担当教員 実習担当各教員

- 2 事前準備（広報、制作物の作成等）
※公演により行わないことがある。
- 3 事前準備Ⅱ（プログラム・アンケートの作成等）
※公演により行わないことがある。
- 4 当日運営（リハーサル→ゲネプロ→本番→後片付け）
- 5 全日程終了後、終了レポートの提出
実施に当たっては、作品理解や運営意図の把握に努め、主体的な姿勢で準備及び本番に臨むことが求められる。

教科書・参考書等

必要に応じて指示

成績評価

出席状況や受講態度、及びその成果を総合して評価する。

- A 総合点が80点以上の者（活動のすべてに出席し、専門的知識及び技能を向上させるとともに、スタッフワークにおいて協調した）
- B 総合点が70点以上の者（活動のすべてに出席し、専門的知識及び技能を向上させた）
- C 総合点が50点以上の者（活動のすべてに出席し、専門的知識または技能を向上させた）
- D 総合点が50点未満の者（活動のすべてに出席しないか、現場における活動の全てに出席したが成果が獲得できなかった）

科目名 スタッフ実習M（オペラ実習）

対象 ステージ・クリエイト専攻2年

履修条件

なし。

授業の概要

オペラは総合芸術と言われている。その上演においては、多くの人に関わり、ひとつの作品を創り上げていく。そこにオペラの醍醐味があるが、同時にスタッフ一人一人の責任感も必要となる。それはキャストと同様である。本実習ではオペラの上演がどのようにして創られているのかを実体験を通して学んでいく。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高いオペラ作品を目指す。

授業計画・授業時間外の学習

実習のプロセスは担当教員の方針によるが、おおよそ以下の流れに沿って進行する。学生は進行の過程において、スタッフとして参加する。

- 1 事前会議（公演内容の確認）
- 2 事前準備（広報、制作物の作成等）
- 3 事前準備Ⅱ（専門スタッフ分野のプランなどの作成）

期 間 後期集中

担当教員 実習担当各教員

- 4 当日運営（仕込み→リハーサル→ゲネプロ→本番→後片付け）
- 5 全日程終了後、終了レポートの提出
実施に当たっては、作品理解や運営意図の把握に努め、主体的な姿勢で準備及び本番に臨むことが求められる。
公演は2014年2月26日、調布市せんがわ劇場にて行われる。

教科書・参考書等

稽古開始までに楽譜配布（楽譜の印刷及び編集も求められる場合がある）
必要に応じて指示

成績評価

出席状況や受講態度、及びその成果を総合して評価する。

- A 総合点が80点以上の者（活動のすべてに出席し、専門的知識及び技能を向上させるとともに、スタッフワークにおいて協調した）
- B 総合点が70点以上の者（活動のすべてに出席し、専門的知識及び技能を向上させた）
- C 総合点が50点以上の者（活動のすべてに出席し、専門的知識または技能を向上させた）
- D 総合点が50点未満の者（活動のすべてに出席しないか、現場における活動の全てに出席したが成果が獲得できなかった）

科目名 スタッフ実習N (学外制作研修)

期 間 集中

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 安宅 りさ子

履修条件

なし。重複(複数回)履修可能。

授業計画・授業時間外の学習

各々の研修先によって異なるので、現場での指示に従うこととなる。

授業の概要

ステージ・クリエイト専攻2年生の中から、学外団体の上演やイベント等へのスタッフ参加を認められて、一定期間現場で研修をしてきた学生に単位の認定をする。現場で多くの経験を積み、芸術制作やスタッフワークの実際を身につけ、将来の進路選択とも結び付けてほしい。なお、本制作研修の許可は、研修内容および申請者の履修状況などを考慮してその決定を行う。学外研修は、正規の授業に妨げのない期間に行うことを原則とする。

教科書・参考書等

適宜、指示する。

授業の到達目標

芸術制作及びスタッフワークの現場で求められる技術、知識、態度を学んでくること。

成績評価

出席状況、研修先からの評価等を総合して評価する。

- A 総合点が80点以上の者(現場における活動のすべてに出席し、特に良い評価を得た)
- B 総合点が60点以上の者(現場における活動のすべてに出席し、良い評価を得た)
- C 総合点が50点以上の者(現場における活動のすべてに出席したが、並みの評価であった)
- D 総合点が50点未満の者(現場における活動のすべてに出席しないか、現場における活動のすべてに出席したが悪い評価であった)

科目名 卒業創作

期 間 後期

対 象 ステージ・クリエイト専攻2年

担当教員 安宅 りさ子 ほか

履修条件

卒業創作のテーマをもつ者。

- 第10回 卒業創作 5
- 第11回 卒業創作 6
- 第12回 要旨作成
- 第13回 レジュメ作成
- 第14回 口頭発表にむけて
- 第15回 口頭発表

授業の概要

ステージ・クリエイト専攻における学習をもとに、各自が興味を持つテーマについて論文(20,000字)を執筆するか、上演時間60分程度の創作戯曲を完成させる。題材に関する資料を収集するところから始め、課題を見出しながら草稿を書き進めていく。論文・戯曲の執筆に必要な基本的な技法を学ぶとともに、独自性のあるクリエイティブな論考・作品に挑んでほしい。

授業時間外の学習

第6回までに第一稿を仕上げしておくこと。第7回以降は、教員の指導を参考に、推敲を進めていくこと。第12回までに口頭発表の論旨を、第13回までにレジュメをまとめておくこと。

授業の到達目標

論文または戯曲を完成させ、30分間の口頭発表を行う。そこで、論文・戯曲の根幹をなす自らの考えを論理的に説明できることが最終目標となる。

教科書・参考書等

授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 文章を読む 1
- 第3回 文章を読む 2
- 第4回 文章を書く 1
- 第5回 文章を書く 2
- 第6回 卒業創作 1
- 第7回 卒業創作 2
- 第8回 卒業創作 3
- 第9回 卒業創作 4

成績評価

各回の課題への取り組み、論文または戯曲の完成度、口頭発表の内容を総合して評価する。

- A 課題への取り組み、論文または戯曲の完成度、口頭発表の内容がいずれも優秀な者。
- B 論文または戯曲の完成度、口頭発表の内容は優秀であるが、課題への取り組みが不十分な者。
- C 論文または戯曲の完成度は優秀であるが、口頭発表の内容、課題への取り組みが不十分な者。
- D 課題への取り組み、論文または戯曲の完成度、口頭発表の内容がいずれも不十分な者。

Toho Gakuen College of Drama and Music

専攻科音楽専攻

科目名 音楽理論 [和声] V・VI

対象 専攻科音楽専攻1年

履修条件

[和声I・II・III・IV]の教程内容に習熟した上で、さらに高度な内容を求めていること。

授業の概要

音楽における旋律的要素―拍節、律動、非和声音とそれに伴う不協和音程が、和声法にあってどのように考慮されるべきかを詳察する。その上で、半音階的転調を伴う歌謡形式のソプラノ課題を実施し、実践的な和声法の能力を培う。

また、上記の内容がロマン派の小品にあってどのように現れているかを観察、分析し、さらに以上の教程を通じて修得された素養をもとに、最後に自作の旋律による簡単な歌謡形式の和声的小品を試作する。

授業の到達目標

前期：非和声音を含むソプラノ和声課題の実施を通して、和声法を実践する技術の習熟をはかる。

後期：実際の音楽作品総体における和声的側面を音楽的発想の一部として感得するための力を養う。

授業計画

前期：

第1～4回 内部変換

・非和声音とリズムの変化を伴う和声課題の実施に先立ち、同一和音内での配置の変更の際の諸作法に通暁する。

第5～9回 構成音の転位

・非和声音を含む旋律の和声的状態を把握する際の、音響的条件とその変化の可能性(和音進行、終止形の形成)を解析し、感覚的な把握をし得る素地を養う。

・非和声音を含むソプラノ課題を実施し、旋律が規定する条件下で、同時に旋律自体が内在的に含有する和声感を、直覚的に発見する能力を開発する。

第10～14回 遠隔転調を含むソプラノ課題の実施

・準関係調、副次関係調への転調について理解し、それらの転調を含むソプラノ課題を実施する。

期間 前期・後期

担当教員 平井 正志

第15回 最終課題の内容検討と、提出。

後期：

第16～19回 ロマン派のピアノ小品において、いかに上記の要件が実践されているかを詳細に分析する。

第20回以降 以上の教程において養われた能力と素養を発揮して、ロマン派的な和声様式による小品を試作する。

第20～22回 テーマ創作法の指導。旋律構成法、伴奏法の実践的経験を通して。

第23～29回 自作曲の内容検討。楽曲構成法、転調法の指導を通して。

第30回 完成曲の最終内容検討と提出。

授業時間外の学習

後期の授業内容に備えて、ロマン派の和声様式によって作曲された小品に親しんでおくこと。

教科書・参考書等

教科書：課題、及び参考曲のプリントを配布。

参考書等：和声「理論と実習」第三巻 音楽之友社(執筆責任 島岡 譲)

成績評価

前期末、最終実施課題をレポートとして提出。後期末、自作の小品を完成し、譜面を提出する。

単位認定の可否については、提出課題内容の優劣のみならず、課題実施を通じて総合音楽力を伸長できた度合いを重視して勘案しつつ、可否を決定する。

A 前期の和声課題において、原則に対する理解、和声法に対する洞察が確かで、和声的書法における習熟度が高い。後期の自作曲において発想にすぐれ、前期を通して身につけた和声的感覚を十分に発揮できた。

B 上記の条件において、まだ追求の余地が残されていた。

C 和声法に対する習熟度が足りず、自作品の内容に関する追求が十分でない。

D 和声法への理解が到らず、自作品を満足な状態で完成できない。

科目名 日本音楽理論C

対象 専攻科音楽専攻1年

履修条件

特になし。

授業の概要

「演奏をする」には、楽譜から、メロディ、リズム、和音などを読み取り、構成を把握し、作品の内容や作曲家の意図すること、これを理解した上で音楽的表現をすることが必要である。

楽譜を読み解き再構築するための目を養うことを目的として、ここでは、近・現代の邦楽器を含む編成の作品を取りあげることとする。まず、分析的見地から楽曲を考察し、その後、実際に演奏をしながら、直接演奏に結びつくような視点でのアプローチをしてゆきたい。

履修生の顔ぶれによって、内容、進度は検討するものとする。でき得る限り全員が演奏に参加できるようなかたちでの展開にしたい。

前期末、後期末に1曲ずつ、授業内に取り上げた曲を演奏(発表)する機会をもつ。

授業の到達目標

楽譜に書かれた様々な情報を元に作品を読み解き、理解を深め、それを自らの演奏に活かせるようにする。

授業計画

1. ガイダンス

2. 楽曲1の分析

3～6. 楽曲1の演奏と解釈

7. 楽曲1のまとめ

期間 通年

担当教員 名倉 明子

8. 楽曲2の分析

9～12. 楽曲2の演奏と解釈

13. 楽曲2のまとめ

14. 成果発表の準備

15. 発表

16. 楽曲3の分析

17～20. 楽曲3の演奏と解釈

21. 楽曲3のまとめ

22. 楽曲4の分析

23～26. 楽曲4の演奏と解釈

27. 楽曲4のまとめ

28～29. 成果発表の準備

30. 発表

授業時間外の学習

課題となる楽曲については、ただ漠然と演奏するのではなく、作曲家が何を意図して書いているのか、自身がどのように演奏したいのかを、考えたり感じたりした上で練習をしておくこと。

教科書・参考書等

開講時に楽曲を指定する。

成績評価

出席状況を重要視した上で、課題に取り組む姿勢と成果発表の結果を評価の対象とする。

A 出席4/5以上で上記の2点において優れている者。

B 出席4/5以上で上記の1点において優れている者。または、出席2/3以上で上記の2点において優れている者。

C 出席2/3以上で上記の1点において優れている者。

D 出席2/3未満の者。上記の2点で低評価の者。

科目名 楽曲分析A

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

自分自身で既知の、未知の、つまりあらゆる楽曲を分析する能力を身につけようとする積極的な意欲を持つ者に限る。

授業の概要

1. 分析に必要な知識を修得する。従来の和音記号の復習、数字付低音、コード・ネーム等。同時に和声音と非和声音を認識すること。
2. それらを応用し、バッハからドビュッシーまでの作品の分析を行う。
3. 音楽の諸要素—旋律、和声、リズム、強弱、色彩など—についても考察を深める。

授業の到達目標

上記を通して、各自の分析力を高めること。同時に音楽観を深めること。

期間 前期

担当教員 新実 徳英

授業計画

1. ガイダンス
2.] 和音記号
3.] I、II、IV、V₇、V̇₇、V̇₇ …
4.]
5.]
6.] 数字付低音の学習
7.]
8.]
9.] コード・ネームの学習
10.]
11.]
12.]
13.] バッハからロマン派の楽曲までを
14.] 上記の和音分析の方法により実習する。
15.]

授業時間外の学習

授業時に指定された本、楽譜等を自ら読む・体験すること。

教科書・参考書等

『和声学』（音楽之友社）、『風を聴く 音を聴く』（音楽之友社）
『新実徳英の作曲入門』（音楽之友社）

成績評価

出席、及び平常点を重視する。なお、欠席回数が4回を越えたものには単位を認定しない。

科目名 楽曲分析B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

「楽曲分析A」の単位を取得した者。または同等の実力があると認定された者。

授業の概要

1. 和声法、和音進行の知識の確認
 2. 各種楽曲を編曲の視点から分析する
 3. 親しまれている旋律を編曲する
 4. より高度な編曲を試みる
- 注意：授業は授業計画に沿って行うが、受講者の実力、達成程度によっては少なからぬ変更が必要となることもある。

授業の到達目標

上記の1～4を通して分析力、理解力をつける。

期間 後期

担当教員 新実 徳英

授業計画

1.] 和音記号、数字付低音、
2.] コード・ネームの復習、実践
3.]
4.] 各種楽曲を編曲の視点から分析する。
5.] とくに主旋律、和音とバスの関係をよく理解する。
6.]
7.]
8.] [主旋律+和音+バス]の形での編曲を試みる。
9.]
10.] 混声四部合唱のスタイル
11.] (弦楽四重奏のスタイル)で編曲を試みる。
12.]
13.] 小編成ブラスバンド、
14.] 小編成オケによる編曲を試みる。
15.]

授業時間外の学習

秀れた室内楽曲(管弦楽曲)を集中的に聴くこと。

教科書・参考書等

『新実徳英の作曲入門』（音楽之友社）

成績評価

出席点、平常点、及び提出点の合計である。欠席が4回を超えた者には単位を与えない。

科目名 音楽史研究

期 間 通年

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

担当教員 関野 さとみ

履修条件

特になし。授業内容に興味・関心をもち、積極的に参加する学生は、専攻を問わず大いに歓迎する。

授業の概要

テーマは「近現代フランス音楽の諸相」。音楽史のみならず、一般史においてもとりわけ混沌とした一時代である19世紀～20世紀半ば頃までの近現代フランス音楽に焦点をあて、当時の社会の脈絡から生み出された音楽がどのようなものであったかを知る。具体的には1830～1945年頃までを対象とするが、フランスのみならず、これまで学んできた他国の音楽状況や一般史全体との関係も視野に入れていくので、扱う内容は広範かつ多岐にわたる。音源や映像資料を多く活用し、参考資料や推薦図書もその都度紹介する予定である。

基本的には講義形式だが、場合によっては討論の場を設けることも考えている。クラシック音楽において、いまだに正当な評価を得ていないと言え難い近現代フランス音楽への理解を深めることにより、受講生が音楽に対する柔軟な視点を養い、独自の音楽表現へつなげるための新しいアプローチの方法を発見できるようにしたい。

授業の到達目標

- 1 これまでの授業であまり扱われてこなかった近現代のフランス音楽について幅広く学び、フランス音楽についての新しい視座を得る。
- 2 1つの国の時代の音楽を、他の国々との比較や芸術史、一般史全体から多角的に検討することを通じて、音楽作品に生じている音楽的な現象を幅広く捉え、考えることができるようにする。

授業計画

<前期>	<後期>
1 ガイダンス	1 ヴァグネルISM
2 フランス革命と音楽	2 象徴主義と印象主義①
3 ロマン主義	3 象徴主義と印象主義②
4 オペラの時代	4 調性と旋法性①
5 オペレッタの流行	5 フォーレ/ドビュッシー
6 サロン文化と音楽	6 調性と旋法性②
7 メロディの確立	7 ドビュッシー/ラヴェル
8 まとめ(第1～7回まで)	8 まとめ(第1～7回まで)
9 「モデルニテ」の概念	9 バレエ・リュス
10 万国博覧会と音楽	10 世界大戦の時代
11 フランス音楽における'exotique'	11 「6人組」と前衛の時代
12 サン＝サーンスとフランク	12 映画音楽
13 フランスにおける交響詩の系譜	13 ポストモダン
14 宗教的精神の変容と音楽	14 音楽における伝統/個性/革新
15 まとめ(前期)	15 まとめ(全体)

授業時間外の学習

予習は必要ないが、復習に力を入れてほしい(ここでの復習とは、本講義の内容だけでなく、これまで学んできた音楽史や音楽理論の内容も含まれる)。授業で紹介した音源や参考文献を図書館などでチェックし、自分が関心をもった作曲家やその作品、さらに同時代の文化的・社会的現象についても積極的に調べ、主体的に学ぶ習慣を身に付けること。

教科書・参考書等

毎回プリントを配布する。その他の参考文献は授業時に紹介。

成績評価

平常点(出席率(年間2/3以上)/授業態度)と期末課題(レポート)によって判定
A 100～80点 B 79～60点
C 59～50点 D 50点未満

科目名 日本音楽史研究A/B

期 間 通年

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

担当教員 野川 美穂子

履修条件

なし。今年度と来年度では、授業の内容が異なる。
日本音楽専修は必修。

授業の概要

日本音楽にはさまざまな種目があり、使われる楽器の種類、音楽の特徴などに違いがある。いっぽうで、異なる種目でありながら、共通する特徴もある。また、舞踊や演劇と結びついているものが多い。この授業では、江戸時代以降に成立した種目を中心に、その歴史と特徴を理解しながら、音楽以外の分野とどのように結びついてきたのか、社会や文化の変遷の中で音楽がどのように伝えられてきたのかなどを考える。毎回、視聴覚教材を活用しながら、授業を進める。

授業の到達目標

日本音楽の歴史と特徴を多面的に理解する。

授業計画

- 次のような流れで進める。
- (1) 日本音楽の歴史と特徴
- (2) 三味線の伝来と種類
- (3) 三曲の歴史と特徴
- (4) ～(8) 三曲の代表曲
- (9) 三曲の伝承と発展
- (10) (11) 楽器の製造

- (12) (13) 歌舞伎や文楽に登場する三曲
- (14) 文楽や歌舞伎に使われる楽器
- (15) まとめ
- (16) 文楽の歴史と特徴
- (17) (18) 文楽の代表曲
- (19) 文楽の伝承と発展
- (20) 歌舞伎の歴史と特徴
- (21) ～(23) 歌舞伎の代表曲
- (24) 音楽と演劇－文楽と歌舞伎の比較－
- (25) 音楽と舞踊－舞踊と舞－
- (26) 同じ題材による楽曲群
- (27) (28) 歌舞伎の伝承と発展
- (29) 小編歌謡、浪曲
- (30) まとめ

授業時間外の学習

授業でとりあげた種目や作品の特徴を整理し、より深く調べること。

教科書・参考書等

毎授業時にプリントを配布する。参考書については、その都度指示する。

成績評価

前期末と後期末に筆記試験を行う。出席状況50%、前期・後期末の筆記試験の成績50%の配分で評価する。

科目名 音楽療法概説 A / B

期 間 通年

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

担当教員 鈴木 千恵子

履修条件

特になし。

授業の概要

本講義では、音楽の様々な働きがどのように治療に生かされるのかを理解し、さらに音楽が人間や社会に働きかける可能性を探っていく。

音楽という芸術を治療という科学の領域に入れること自体に難しさはあるが、この領域は20世紀に入り大きく発展してきた。音楽・患者(対象者)・治療者の三者から構築される治療技法の音楽療法は、医療、福祉、教育、保健領域で生かされ、また新しい学問としても現代社会において注目を浴びている。

前期では理論を中心に基本的概念を学ぶ。

後期では音楽療法に必要な治療技法について学ぶ。

現場実習としては、慰問演奏への参加を必修とする。

授業の到達目標

音楽療法の定義を理解し、音楽の治療的機能を把握する。

授業計画

[前期]	[後期]
1 音楽療法とは何か	1 音楽療法における事例研究①
2 /	2 / ②
3 音楽療法の対象と目標	3 治療プログラムの立て方①
4 /	4 / ②
5 音楽活動の活動的意義	5 / ③

6 /	6 評価について
7 実習リハーサル	7 実習リハーサル
8 /	8 /
9 実習	9 実習
10 /	10 /
11 フィードバック	11 フィードバック
12 評価について	12 音楽療法と音楽
13 まとめ・その他	13 まとめ・その他
14 /	14 /
15 /	15 /

授業時間外の学習

理論と学習を行なうので、2つの柱が結びつくように授業の復習に努めること。

教科書・参考書等

「音楽療法の手引き」松井紀和著(牧野出版)

「音楽療法の実際」松井紀和、鈴木千恵子他著(牧野出版)

成績評価

出席、授業時の課題、実習への取組みと態度50%、期末試験(筆記)50%で100点に換算。

- A 総合点が80点以上の者(基本的な諸事項を十分理解している)
- B 総合点が60点以上の者(基本的な諸事項をほぼ理解している)
- C 総合点が50点以上の者(基本的な諸事項をある程度理解している)
- D 総合点が49点以下の者(基本的な諸事項の理解が欠けている)

科目名 音楽療法演習 A / B

期 間 通年

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

担当教員 鈴木 千恵子

履修条件

「音楽療法概説」を履修していることが望ましい。

授業の概要

この授業は音楽療法の実習を中心とし、実践に関する技術等も学ぶ。

実習現場は高齢者や児童施設を予定しているが、他領域での体験も可能であればしたいと考えている。

音楽療法の実践は治療計画から始まり、フィードバック(振り返り)に至るまで、各々の積極的な取組みが必要である。また、実習の時期や内容に合わせて授業を進めていくので、その点をしっかり考えて授業に臨んでほしい。

授業の到達目標

音楽療法の実践に必要な臨床的音楽技術を身につける。

授業計画

[前期]	[後期]
1 音楽療法における職業的能力について	1 臨床現場についての理解
2 セラピーに用いられる楽曲について	2 セッションの計画
3 セッションの組立て方	3 /
4 /	4 /
	5 /

5 模擬セッション	6 実習
6 /	7 フィードバック
7 /	8 実習
8 臨床的音楽技術(1)選曲	9 フィードバック
9 / (2)伴奏	10 臨床的音楽技術(4)即興演奏
10 / (3)編曲	11 /
11 実習	12 まとめ
12 まとめ	13 /
14 /	14 /
15 /	15 /

授業時間外の学習

音楽治療の実習に関しては、プログラム作成が最も大切である。選曲等は深く調べ、練習もしっかり行うよう努めること。

教科書・参考書等

「音楽療法の手引き」松井紀和著(牧野出版)

「音楽療法の実際」松井紀和、鈴木千恵子他著(牧野出版)

成績評価

出席、実習への取組みと態度50%、実技試験50%で100点に換算。

- A 総合点が80点以上の者(セッションの基本的な技術を十分に理解、実践できている)
- B 総合点が60点以上の者(セッションの基本的な技術をほぼ理解、実践できている)
- C 総合点が50点以上の者(セッションの基本的な技術をある程度理解、実践できている)
- D 総合点が49点以下の者(セッションの基本的な技術の理解が欠けている)

科目名 演奏現場論 A / B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

この20年大小の音楽専門ホールが続々オープンし、都内では乱立気味。一方、オーケストラの世界ではホールとのフランチャイズ提携が増えてきて、本番と同じ場所で練習ができるオーケストラが増えてきている。こればかりも直さず、日本の音楽界において「響き」（音響）の意識が向上して、それに呼応して周りの環境も整ってきたものであろう。

演奏者も、教育者も、聴衆も、音楽をプロデュースする立場の者も、そして当のホール関係者もホールでの音響、楽器同士の関係等に鈍感ではいられない。

演奏者は（声楽を含んで）自分の楽器の特性、別の楽器の特性をよく理解し、違ったホールにおいても即座に色々な状況を感じ取って対応していかなければならない。プロデュースする者やスタッフも演目に合ったホールの選択が当然の時代になってきている。

この授業では個別の楽器の音響的個性の理解に始まり、ホールの響きとの関係、問題点の解消方法を学ぶ。

また一方、「演奏」という進路の他に「音楽業界」を視野に入れたい人にはこの授業中で行う、色々なケーススタディーや会場（現場）での体験の機会が自分の進路選択に役立つと思う。

授業の到達目標

- ・実技やアンサンブルの学習の段階において、また実際の演奏現場等で活用することのできる「響きや配置の『考え方』」の習得。
- ・クラシック音楽業界の理解と体験。

授業計画

受講学生の専攻や将来展望によって、系統1と系統2を織り交ぜながら授業を構成する。

[系統1] 楽器とホールと音響と配置

- 1 個別の楽器の音、指向性、伝播特性

期間 前期

担当教員 合田 香

- 2 楽器間の音の干渉
 - 3 ステージ上の配置による響きと変化
 - 4 ホール内の位置による聞こえ方の相違
 - 5 響きの判断の材料
 - 6 楽曲や作曲者による配置の違いについて
- 上記を授業の中で取り上げ、授業参加者に実際の演奏で体験、検証してもらう。

[系統2] コンサートビジネスとその色々

- 1 コンサートの業界
- 2 働く人々とその職種
- 3 個別的な仕事の内容
- 4 コンサート業界に必要な知識
- 5 出演者でもなく、聴衆でもない形でコンサートに関係する
- 6 ホスピタリティの考え方について

授業時間外の学習

この授業で理解した内容を、アンサンブル、オーケストラ、実技レッスン、他の授業などで試してみて、その経験をまた授業にフィードバックできることが望ましい。

教科書・参考書等

資料を配布する。
「はじめてのオーケストラ・スコア」野本由紀夫著（音楽之友社）

成績評価

出席を重視。期末にレポートを課す。

- A 総合点80点以上
- B 総合点60点以上
- C 総合点50点以上
- D 総合点49点以下

科目名 ピアノデュオ研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

専攻1ピアノ専修必修。
他専修の学生もぜひ履修してほしい。

授業の概要

自由に組んだチームの公開レッスン形式で行う。日頃は一人でピアノに向かうことが多いが、連弾や二台ピアノの体験を通して、相手の音楽やタッチ等を敏感に感じ取り、合わせたり競ったりと、ソロとはまた違った味わいや音楽づくりを学ぶ。

近年は、オリジナルのみならず、様々な曲がピアノデュオ用に編曲されているので、ピアノという楽器での表現の可能性を、存分に楽しんでほしい。

授業の到達目標

音を美しく鳴らし合わせることで、さらにはお互いの個性も生かしながら、精度の高い音楽づくりを目指す。

授業計画

- 1 ガイダンス 連弾・2台ピアノ作品の選曲について
- 2～3 専攻科1年生 シューベルトの小品等を用いながら
- 4～5 専攻科2年生 一年次の経験を生かし、各ペアが発表

期間 通年

担当教員 荻野 千里

- 6～7 ブラームス ハンガリー舞曲
- 8～9 ドビュッシー 小組曲
- 10～15 定期演奏会オーディションに向けて
- 16～17 夏休み成果発表
- 18～19 定期演奏会出演者確認
- 20～22 古典の連弾、2台ピアノ（難度の高いもの）
- 23～25 ロマン派の連弾、2台ピアノ（難度の高いもの）
- 26～28 近現代の連弾、2台ピアノ（難度の高いもの）
- 29～30 まとめ、発表

授業時間外の学習

授業に向けて、パートナーとの合わせを充分に行なっておくこと。

教科書・参考書等

その都度配布。必要に応じて各自準備する。入手困難な楽譜については相談すること。

成績評価

- A 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好の者
- B 事前準備、授業への参加意欲が中程度の者
- C 事前準備が不十分で、授業への参加意欲があまり認められない者
- D 出席が3分の2に満たない者

科目名 管楽アンサンブル研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

履修条件

特になし。
管楽器専修(Sx以外)必修。

授業の概要

木管五重奏を中心としたアンサンブルと、管楽アンサンブルを主体にピアノや弦楽器にもお手伝いいただいて色々な編成の合奏を体験していただく。

授業の到達目標

他の楽器の特性を理解する。アンサンブルの基本を身につける。

期間 通年

担当教員 石橋 雅一

授業計画

[前期]
第1回 授業内容の説明と曲の選択
第2回～第6回 ハイドン、モーツァルトを中心に演奏実習
第7回～第14回 A.ライヒャF.ダンツィを中心に演奏実習
第15回 前期のまとめ演奏と宿題の概要説明
[後期]
第16回～第18回 提出された課題(木管5重奏編曲)の演奏実習と評価
第19回～第29回 フランス、ドイツの近現代木管五重奏曲を中心に演奏実習
第30回 実技 試験(コンサート形式で)

授業時間外の学習

授業をスムーズに進行するためにも、自分のパートをしっかりと予習して身に付ける様にしてください。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席状況、授業中の演奏を重視。
出席、実習への取り組みと態度50%、実技試験、課題提出50%で100点に換算
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽研究 A / C a

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

履修条件

積極的にアンサンブルに参加する意欲のある学生、また他のグループの演奏に興味を持って聴ける学生。

授業の概要

ピアノ三重奏曲・ピアノ四重奏曲、ピアノ五重奏曲を中心に取り上げ、弦楽器とピアノ、各々の楽器の特徴や奏法等も学びながらアンサンブル能力の向上を目指す。

授業はマスタークラス形式で進める。事前に曲目を発表するので、演奏する学生は勿論、聴講する学生も各自楽譜を準備し、アンサンブルを作り上げるプロセスに立ち会って、楽曲への理解を深め、その作品の意図を実現するために必要な技術やアンサンブルの心構えを学んでいく。

授業の到達目標

様々な時代及び編成の室内楽作品を知り、それぞれの楽曲の様式観とアンサンブル技術を習得する。アンサンブルの体験を通して、音楽を共有する喜びを味わうこと。

授業計画

1. ガイダンス、学習曲目の検討
- 2.～5. 古典派の室内楽
(ピアノ・弦楽器を中心に)
モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等
- 6.～8. ロマン派の室内楽
(ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に)
メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等

期間 前期

担当教員 荻野 千里・野口 千代光

- 9.～11. 近現代の室内楽(様々な楽器を含む)
- 12.～13. 声楽を含む室内楽
- 14.～15. 7月に行われる定期演奏会オーディションに向けて

授業時間外の学習

授業に向けて各自十分に練習し、必ず複数回の合わせをしておくこと。
また、お互いの楽器の特徴なども調べておくこと。
日頃から多くの室内楽作品のCD等を聴いて、知識を増やしておくように。

教科書・参考書等

シューマン、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチ、ブラームスのピアノ五重奏曲、ベートーヴェン、メンデルスゾーンのパiano三重奏曲。モーツァルトのピアノ四重奏曲等。

成績評価

- A 事前準備が充分で、積極的な授業参加意欲が認められ、かつ出席良好の者
- B 事前準備、授業への参加意欲が中程度の者
- C 事前準備が不十分で、授業への参加意欲があまり認められない者
- D 出席が3分の2に満たない者

科目名 室内楽研究 A / C b

対 象 専攻科音楽専攻 1・2年

履修条件

室内楽に興味と意欲のある方。

授業の概要

開講時に希望を募った上で楽曲を選定。

授業の到達目標

アンサンブルの向上。

期 間 前期

担当教員 北本 秀樹

授業計画

開講時に指示。

授業時間外の学習

各自、十分な練習を行うこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

出席重視。学期末にレポートを提出。

科目名 室内楽研究 A / C c

対 象 専攻科音楽専攻 1・2年

履修条件

条件は特にないが、アンサンブルはお互いの音や、音楽の流れを聞き分けることが必要不可欠である。その為にはソルフェージュ能力を高めておくことが必要である。

授業では必ず専修している楽器を持参のこと！（備品として学校にあればその限りではない。）

授業の概要

各楽器とのアンサンブルを通し、自分達の音楽をイメージし、作り上げていく面白さを実感してみよう。

木管アンサンブル、弦楽も加わったアンサンブル、ギターアンサンブル、邦楽器も加わったアンサンブル、ピアノも加わったアンサンブル・・・様々な形態があるが、学生諸君が卒業するまでにやってみたいアンサンブルをこの授業を通し、是非経験してほしいと思う。

(例)
木管クインテット/ダンツィ作曲 (Fl+Ob+Cl+Hr+Fg) 他
管楽器+弦楽器/モーツァルト作曲 フルートカルテット D-dur (Fl+String) 他
ピアノ+管楽器/サン・サーンス作曲 カプリス (Pf+Fl+Ob+Cl) 他
フルート・アンサンブル/クーラウ作曲 グランド・トリオ他
その他、真面目なしっかりとした曲であれば、ジャンルを問わずどのような曲でも取り上げたいと思う。

(例)
アストル・ピアソラ作曲 タンゴの歴史 (Fl+Guitar)
チック・コリア作曲 ピアノ、フルート、バズーンの為のトリオ等。

授業の到達目標

出来るだけ多く演奏に参加して（最低でも1回以上）これらのアンサンブルを体験し、卒業後の実践に役立てる。

期 間 前期

担当教員 中川 昌三

授業計画

このクラスは室内楽（アンサンブル）の授業であるから、皆さんにはできるだけ演奏に参加してもらいたいが、作品に関しては僕が一方向的に押し付けるのではなく、皆さんのやってみたい曲、やりたかった曲を協議の上決めたい。

したがって、このクラスの1回目の授業は「曲決め」をしたいと思うので、是非出席すること。

僕は様々な音楽シーンを経験しているから、必要とあれば、クラシック以外の音楽へのアプローチも実践してみよう。例えばブラジル音楽の「ショーロ」やジャズ的なニュアンスを持った曲、ポップ的な曲、民族音楽的な曲、現代音楽など。

また、近年演奏家は即興演奏を要求されることが多くなったが、皆さんのリクエストがあれば即興に関した初歩的なアンサンブルも取り入れたい。

授業時間外の学習

この学校で勉強している学生の皆さんはクラシック音楽を勉強している訳だが、クラシック音楽は作品として譜面が存在する。これは演劇でいえば台本に当たる。

役者が台本から自分の役作りをするように、演奏家も譜面から自分の音楽作りをしなくてはならない。その為に必要なテクニックの向上は不可欠である。これは自分の専攻している楽器の先生の下、しっかり技術を磨くこと。

そして、他の演奏家の音楽作りは大変参考になるので、是非様々な音楽に接することを勧める。

教科書・参考書等

特になし。ジャンルを問わず、様々なコンサート、ライブ、CD、DVD等、何でも見て聴いてほしい。それが参考書の代わりである。

成績評価

特に試験は行わない。演奏参加を含め授業態度で採点する。

科目名 室内楽研究B / D a

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

履修者と若干の室内楽要員によって演奏可能な室内楽曲を選出し、他奏者および異種楽器と合奏することの喜びと意義を実際に体験していく。それとともに各作曲家のスタイル、室内楽特有の奏法、技法等も学んでいく。

授業の到達目標

合図の出し方、音程の合わせ方等、基本的な合奏能力の向上。独奏曲や協奏曲の演奏等とは違った室内楽特有の奏法やバランス感覚の習得。スコアを含めた読譜力の向上。

期間 後期

担当教員 市坪 俊彦

授業計画

1. ガイダンス
2. 「室内楽」の歴史、概要についての考察、講義
- 3～7. 履修者の専門楽器によって編成を決定し、レッスン形式の授業
古典派…モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、ボッケリーニ他
- 8～11. ロマン派…シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ブラームス他
- 12～14. 近現代…ラヴェル、ドビュッシー、バルトーク、ショスタコーヴィチ他
15. 文化芸術としての室内楽の存在意義についての考察、講義

授業時間外の学習

各回、演奏を担当することになったグループは、事前に準備、練習を行うこと。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

出席状況、授業態度、実技等平常点。出席状況50パーセント、演奏実技30パーセント、授業態度20パーセントで100点に換算。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽研究B / D b

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

なし。

授業の概要

ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。

アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する感受性や柔軟性が求められる。共演する楽器の特性をふまえた上での音色作りや響きのバランス等、ピアノパートの役割を果たすために必要な具体的な奏法を実践で学ぶ。

ソロでは味わえない響きを体験したり、曲に対するそれぞれの楽器のアプローチを知ることによって、音楽的視野を広げ、曲の理解を深めると共に、より幅広い表現を目指していきたい。

演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。

授業の到達目標

アンサンブルの技術を修得し、相手の音をよく聴きながら一緒に演奏する楽しさを実感できることを目標に曲を仕上げる。

期間 後期

担当教員 蓼沼 恵美子

授業計画

- 1 オリエンテーション及び曲目の検討。
- 2 曲目とメンバーを決定。
- 3 パート練習。(レッスン)
- 4～7 アンサンブル実習。(一回の授業に2～3組)
- 8 楽曲のまとめ。発表演奏の曲を決定。
- 9 パート練習。(レッスン)
- 10～14 アンサンブル実習。
- 15 発表演奏。

教科書・参考書等

自分のパートをよく、練習して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことは出来ない。

事前にCDを聴いたり、スコアを見るなど、十分に準備を行うこと。

教科書・参考書等

必要に応じて、楽譜を各自準備する。

成績評価

出席状況、授業への取り組み方、意欲などを重視した上で、期末の発表演奏で評価する。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が65点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 室内楽研究 B / D c

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

履修条件

フルート専攻の学生を対象とする。

授業の概要

フルート・アンサンブル(二重奏～五重奏)の重要なレパートリーの習得。

授業の到達目標

仲間と協調しながら自己をよく主張し音楽を表現するという、アンサンブル力の基本的な強化を目指す。

期 間 後期

担当教員 白尾 隆

授業計画

課題曲の編成により、数グループに分け、状況を見ながら、期間内に、出来るだけ多くのレパートリーを勉強する。

授業時間外の学習

個人レッスン同様、可能な限り仲間と練習し、授業までによく準備し、また復習すること。

教科書・参考書等

楽譜をその都度貸し出すので、各自コピーすること。

成績評価

授業中の熱意、注意力、反応を考慮して評価する。

科目名 室内楽特設クラス A / B / C / D

対象 専攻科音楽専攻 1・2年

履修条件

室内楽作品を深く掘り下げて研究したい、アンサンブルに意欲的な学生。

授業の概要

弦楽器・管楽器・ピアノを含む室内楽曲(デュオ・ピアノトリオ・ピアノカルテット等)を中心に引き上げ、演奏助手の協力のもと、アンサンブル能力の向上を目指す。非常に柔軟性のある形態をもち、半期につき、5回程度個人レッスンの形で授業を行う。他の室内楽クラスを履修しつつ受講することも可能で、同じ曲目を別の観点から学ぶことも、良い勉強になるだろう。経験の有無や量を問わずに履修できるという利点があり、半期の間は同じメンバーで、お互いを理解し共演者と共に音楽を作り上げていく。主として担当教員が指導に当たるが、必要に応じてアンサンブル指導員(弦楽器・管楽器等)のレッスンを受講することもある。

受講希望者は、メンバー確定後履修登録をし、受講曲が決まり次第早目に担当教員に申し出ること。具体的な日程等については、演奏員とも相談の上、後日掲示する。前期受講希望者多数の場合は、後期に履修変更となることもあり得る。

授業の到達目標

共演者としてお互いを信頼し合い、ひとりひとりが積極的に音楽作りに参加できるようになること。

期 間 前期集中・後期集中

担当教員 荻野 千里

授業計画

基本的には、各グループの希望曲(複数可)を取り上げる。レッスンの進め方については、臨機応変に対応したい。例えば、経験の少ないグループの場合は各楽器の特徴の理解や、基本的な合わせ方等から入り、選曲のアドバイス等も行う。

定期演奏会のオーディション参加を希望するグループは、より深く音楽を掘り下げ、説得力のある演奏を目指す。

授業時間外の学習

レッスンに向けて、お互い迷惑にならないように、各自十分に練習を積んでおくこと。受講曲目についても、深く調べておくように。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

- A 規定のレッスン回数を受講し、事前準備が十分で学習意欲が強く認められた者
- B 規定のレッスン回数を受講し、事前準備、学習意欲が中程度の者
- C 規定のレッスン回数を受講し、事前準備、学習意欲が不十分と思われる者
- D 規定のレッスン回数に満たない者

科目名 歌曲研究 A / B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

詩人の思いが言葉を通して詩となり、さらに作曲家がその詩に共感して音にする。そしてその詩と音楽を演奏家が感じ、表現して、聴衆の心に訴える。歌曲が聴衆の耳に届くまでにはこれだけ様々な人の心を通っていくのである。歌曲の奥深さはここにある。

この授業ではドイツ歌曲・日本歌曲を題材に、歌曲をどのように解釈し、演奏したら良いかを研究する。楽譜に込められた詩人や作曲家の思いを正しく受け止め自分自身の表現に結びつけること、またアンサンブルをする上で大切なこと等、受講者自身による演奏を通じて実践的に研究を進めていく。

また歌とピアノの組み合わせにとどまらず、本学の専修を生かし他の弦・管楽器、あるいは和楽器とのコラボレーションも随時取り上げる。

授業の到達目標

年度末の研究発表会（2月初旬）には受講者各自がドイツ歌曲または日本歌曲を少なくとも1曲演奏する。

期 間 通年

担当教員 松井 康司・東井 美佳

授業計画

履修者の専修楽器が決まらなると取り上げる曲を決めることはできない。

曲を決定してからの授業の流れは下記の通りである。

- 1 第1組の曲を発表
 - 2 第2組の曲を発表
 - 3 第1組のレッスン。第3組の曲を発表
 - 4 第2組のレッスン。第1組の曲を発表。第4組の曲を発表
 - 5 第3組のレッスン。第2組の曲を発表。第5組の曲を発表
- この流れで30回の授業を行っていく。取り上げる曲については、短期間で準備をする訓練のため、2週間前の発表とする。

授業時間外の学習

翌週取り上げる曲を必ず各自譜読みをし、曲の内容を理解してから授業に臨むこと。

教科書・参考書等

- 「ドイツ・リートの歴史と美学」 ヴィオーラ（音楽之友社）
- 「シューベルトの歌曲をたどって」 フィッシャー・ディースカウ（白水社）
- 「日本歌曲百選 詩の分析と解釈」 塚田佳男選曲・構成（音楽之友社）

成績評価

出席60%、レポート10%、年度末発表曲の演奏30%で100点に換算。

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 オペラ実習 A / B

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

声楽を履修していることを条件とする。コレペライトーアの養成としてピアノ専修の学生を若干名受け入れる。その他の専修、他専攻の希望者は要相談。

授業の概要

オペラの上演では、多くの人が関わりひとつの作品を創り上げていく。そこにオペラの醍醐味があるが、同時に一人一人の責任感が必要であり、それは歌い演じること以上に大切なことである。

この授業では、オペラの上演がどのようにして創られてゆくのかを実体験を通して学ぶ。全授業に出席する覚悟を持って履修してもらいたい。欠席が多い者は途中で失格とすることもある。

なお、オペラ実習（演奏）（演技）（上演）を分けて履修することはできない。

また、試演会に向けてのキャスティングは、後期になってから新たに行う。

授業の到達目標

身体表現を伴う歌唱表現を身につける。

期 間 通年

担当教員 松井 康司・ペーター・ゲスナー

授業計画

前期にはオペラ実習（演奏）として、レチタティーヴォの基本とアンサンブルを音楽稽古の形で学ぶ。（15回）また、同時にオペラ演習（演技）として、演技のみを取り上げ身体表現の基本を学んでいく。（15回）

後期には前期の授業を一本化し、オペラ実習（上演）として、前期にオペラ実習（演奏）で学んだ曲に演技をつけ、オペラ創りを行う。

なお、試演会を行うため、かなりの回数で追加稽古が行われるため、後期の授業回数は15回を越える。

授業時間外の学習

ここに書くまでもなく、授業時間外の学習時間の方が多い授業である。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

出席40%、オペラ実習（演奏）20%、（演技）20%、（上演）20%で100点に換算

- A 総合点が80点以上の者
- B 総合点が60点以上の者
- C 総合点が50点以上の者
- D 総合点が49点以下の者

科目名 邦楽アンサンブル研究A / B

期 間 通年

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

担当教員 野坂 恵子

履修条件

● 日本音楽専修は必修。

授業の概要

● 邦楽器の為の作品(古典と現代)を取り上げる。
邦楽器が出すべき音や、表情、音の響かせ方等々体感する。
又作曲家に自作品に対する思いや指導をお願いする。

授業の到達目標

● アンサンブルの分野で邦楽器の可能性を追求する。

授業計画

- 「六段の調」とグレゴリオ聖歌「クレド」の合奏
- 「八段の調」八橋検校作曲 替手・本手の合奏
- 「楓の花」松坂検校作曲の合奏
- 「水面の舞」金光威和雄作曲
- 「フルートと二十絃箏の二重奏曲」堀悦子作曲
- 「二十絃と十七絃の為のプレリュード」新実徳英作曲
- 「偲琴」西村朗作曲
- 「トルソ」廣瀬量平作曲
- 「観想の佇い」山本純ノ介作曲
- 他、若手作曲家の新作も取り上げたい。

授業時間外の学習

● 授業で取り上げた作品について、理解を深めておくこと。

教科書・参考書等

● 特になし。

成績評価

● 出席数と平常点で評価する。

科目名 オーケストラ・スタディC / D

期 間 前期

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

担当教員 奥田 雅代

履修条件

● 弦楽器専修者は必修である。

授業の概要

- 後期「合奏」授業への準備段階とする。
- ① オーケストラプレイヤーとしての心がまえ、事前準備の重要性の認識。各自の練習、スコアの用意、CD等なども聴き、作品を理解して臨む。
- ② 演奏するためのテクニックやアンサンブル態力を習得する。パートごと、時に一人ずつの演奏を課しながら、個人、セクションの責任を高める。それぞれのパートを把握し、ひとりひとりがオーケストラ全体を捉えられるようにする。

授業の到達目標

● オーケストラを通して、個人の、そしてアンサンブルの技術の向上。全員で1つの作品を作り上げる喜びを知る。

授業計画

● 曲目は4月に発表する。
11月定期演奏会(オーケストラ)の演奏曲目を課題とする。
毎回の練習スケジュールを作り、進める。しかし、進行状況により、適宜スケジュールを調整するものとする。

授業時間外の学習

● 課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であれば、コンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

● 楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

- 無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意すること。
学期末に実技試験を行う。(9月を予定)
- A 授業内容をよく理解して自らのパートのみならず、他のパートをしっかりと把握してアンサンブル奏者としての力を発揮できる者
- B 試験時、ところどころ技術向上、改善努力が必要に思われるが、後期合奏においてアンサンブル能力向上が見込まれる者
- C 後期合奏授業においてなんとかついていけるレベル、もしくは相当の個人的努力を求められる者
- D 後期合奏授業についていける能力が見込まれない者、遅刻、無断欠席をした者

● 試験の結果により後期合奏授業へのレベルが達していないと思われる者には追試験を行い、場合によっては個人的指導も行う、合奏授業に向けての能力を引き上げる機会を持つ。

科目名 合奏C / D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

前期授業「オーケストラ・スタディ」で単位認定を受けた者。弦楽器専修者は必修である。弦楽器奏者以外についてはオーディション等で選出された者。

授業の概要

黒岩英臣氏を指揮者にお迎えして、11月の定期演奏会本番に向けて、約6日間の集中リハーサルが行われる。個々の力が合わさると、素晴らしい響き、音楽が生まれることを体感してほしい。演奏会当日まで、各自、練習・準備をすること。

授業の到達目標

オーケストラのリハーサルを通して、全員で演奏会に向けて、それぞれの曲の完成度を高めていく。

期間 後期集中

担当教員 奥田 雅代

授業計画

- 第1回 オーケストラガイダンス(オーケストラ授業に対する心がまえ、様々な準備などについての確認)
 - 第2回～第7回 黒岩氏とのリハーサル
 - 定期演奏会当日 ゲネプロ 本番
 - 第8回 演奏会録画を鑑賞しながら、演奏について検証、反省を行い、意見交換の場とする
- 毎回のリハーサルスケジュールは、進行状況により、指揮者の判断で適宜調整するものとする。

授業時間外の学習

課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であればコンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。

教科書・参考書等

楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、CDを準備すること。

成績評価

無断欠席、遅刻等をした者はその時点で履修を取消とし、失格の対象とするので注意のこと。演奏だけではなく、譜面台や椅子の準備も含めて成績評価の対象とする。

科目名 ギター・アンサンブルC / D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

ギター専修者必修。

授業の概要

古典から現代までのギターアンサンブル作品をオリジナル曲、編曲作品に加え学生自身の作品、学生自身による編曲作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの習得過程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会を得ることは特に貴重である。将来、様々な楽器とのアンサンブルや、新しい作品の演奏の際にスムーズに演奏を達成できるよう、様々な様式のアンサンブルに慣れ親しんでおく。さらにアンサンブルを通してギターという楽器の独自の表現力を各自が知ることとなる。

また将来、多様な場面に応じて、自在なアンサンブルと形態で応えられるよう簡単なアレンジも学生自身が行う。

授業の到達目標

年2回の発表会に向けて、アンサンブルの課題曲の演奏を完成させる。

期間 通年

担当教員 佐藤 紀雄

授業計画

- 1～5回 カルメン組曲
- 6～10回 ロッシーニ『どろぼうかささぎ』序曲
- 11～15回 バントウクイッカン
- 16～20回 ヴィバルディ四季より『春』
- 21～25回 ラベル・ワルツ
- 26～30回 佐藤敏直『風と光と空』

授業時間外の学習

学習する作品の原曲をCDで何度も聴いておく。また、スコアをよく見ておく。作品の背景について調べておく。

教科書・参考書等

開講時に楽曲を与える。
音楽史、楽典書をその都度参考。

成績評価

- A 100～75点以上
- B 75～55点
- C 55～41点 出席75%以下
- D 40点以下 出席50%以下

科目名 初見演奏（応用）

対 象 専攻科音楽専攻 1 年

履修条件

ピアノ専修者に限る。（専1は必修）

授業の概要

バロックから現代にいたる作品をテキストとして、初見奏で求められる正確な読譜力、想像力、集中力を習得し、ピアノ演奏の基礎能力を高めていく。

楽譜を丁寧に読み、正確で表現をともなった演奏ができるよう実習する。

「初見演奏（基礎）」の授業よりも、さらに難易度の高い曲に取り組んでいく。

毎回の授業でなるべく多くの演奏ができるよう、積極的に参加してほしい。

連弾や二台ピアノの作品も随時取り入れて、アンサンブルの経験も積んでいく。

授業の到達目標

短い時間で曲の構成や特徴を把握し、ただ音を弾くばかりではなく、テンポ、フレーズ、ペダリングなどにも考慮して、表現豊かな演奏ができるようになること。

期 間 後期

担当教員 吉田 真穂

授業計画

- (1) ガイダンス
- (2) 小品の演奏①
- (3) 小品の演奏②
- (4) バロックの作品①
- (5) バロックの作品②
- (6) 古典派の作品①
- (7) 古典派の作品②
- (8) ロマン派の作品①
- (9) ロマン派の作品②
- (10) 近・現代の作品①
- (11) 近・現代の作品②
- (12) 連弾 オーケストラの編曲
- (13) 協奏曲①
- (14) 協奏曲②
- (15) まとめ

授業時間外の学習

授業で配布したテキストでの復習、また、指示する曲集、曲目などを参考に予習するよう努めてほしい。

教科書・参考書等

その都度配布。

成績評価

- A 欠席1/3以下で、授業態度および試験の成績が80点以上の者
- B 欠席1/3以下で、授業態度および試験の成績が65点以上の者
- C 欠席1/3以下で、授業態度および試験の成績が50点以上の者
- D 欠席1/2以下で、授業態度および試験の成績が50点未満の者

科目名 伴奏C / D

対 象 専攻科音楽専攻 1・2 年

履修条件

なし。

授業の概要

前期・後期とも同一学生との5回以上の第一実技レッスン時の伴奏及び演奏発表(実技試験・学内演奏会・修了演奏会)をもって各々単位認定を行う。「伴奏受講票」を使用のこと。

授業の到達目標

伴奏の役割を学びつつ、また、アンサンブルの楽しみも感じてほしい。

それらを試験、演奏会という場につなげるようにする。

期 間 前期集中・後期集中

担当教員 荻野 千里

授業計画

各々の実技担当教員のレッスン計画による。

授業時間外の学習

「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

決められたレッスン回数をクリアし、演奏発表を行った場合は「A」と認定する。

上記条件を満たしていない場合は「D」と認定する。

科目名 伴奏研究 A / B / C / D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

● 学内試験、学内演奏会等でピアノ(伴奏)を担当する学生。

授業の概要

● 主としてピアノと弦楽器または管楽器のデュオ作品を扱う。

学内試験の伴奏を担当するピアノの学生が、パートナーの実技担当教員のレッスンだけでなく、ピアノ専任教員からもレッスンを受け、助言を得ることで、伴奏にとどまらない「共演ピアニスト」としての自覚を持って、より積極的にふたりで音楽を創り上げていけるようなデュオを目指す。

授業はレッスン形式で行い、5回程度のレッスン受講とパートナーの学内試験や学内演奏会での演奏を以って単位を認定する。

受講希望者は、予め履修登録をした後、パートナーと受講曲が決まり次第届け出ること。

具体的な日程については、後日掲示発表する。

授業の到達目標

● 共演者としての役割をしっかりと認識し、責任を持ってパートナーと共に学び、音楽を作り上げられるようになること。

期 間 前期集中・後期集中

担当教員 荻野 千里

授業計画

● 前期は、5月中旬を目途にパートナー、受講曲を決定し、5月末～7月にレッスンを受ける。

後期は、11月中旬を目途にパートナー、受講曲を決定し、11月末～2月にレッスンを受ける。

授業時間は、他の授業と重ならないよう、6限目(17:30以降)や土曜日等に設定する。

必要に応じて、ピアノパートのみのレッスンも行うが、原則として、パートナーと一緒に出席すること。

授業時間外の学習

● 大事な試験や学内演奏会に向けての科目となるので、個人練習を充分に行なっておくこと。また、演奏曲目の内容についても深く理解しておくように。

教科書・参考書等

● 各自用意。教員用の楽譜(コピー可)も準備すること。

成績評価

● 規定回数のレッスンを受講し、本番の出演を以って「A」と認定する。

● レッスンが規定回数に満たない場合、または本番出演がない場合は「D」となる。

科目名 海外特別演習 C / D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

● 研修旅行に参加する意志のある者。

授業の概要

● 今回の研修旅行は、ドイツを訪れる。前半は、ドイツ・リュエックにてレッスンを受け、その後、ハンブルク、メルヘン街道の町として有名なブルーメン、ハーメルンをはじめ、ケルン、ボン(ベートーヴェン生誕、シューマン終焉の地)等を訪れる。また、各都市にて、オペラ・コンサートの鑑賞も予定している。

授業の到達目標

● 充実した研修旅行にするため、実技面において、レッスンに向け、十分な事前準備を心がける。

期 間 前期集中

担当教員 松井 康司・荻野 千里

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 旅行会社による説明会 I
- 3 訪問都市についての勉強会 I
- 4 〃 II
- 5 旅行会社による説明会 II
- 6 訪問都市についての勉強会 III
- 7 受講曲による試聴会
- 8 研修旅行

授業時間外の学習

● 訪れる町の歴史や、関係する作曲家について深く学んでおくこと。

教科書・参考書等

● 必要に応じて指示する。

成績評価

- A 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に積極的に参加した者
- B 事前の授業に休むことなく出席し、研修旅行に参加した者
- C 事前の授業に出席し、研修旅行に参加した者
- D 事前の授業に出席不良、研修旅行に参加できなかった者

科目名 特別演習C/D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

Cは全専修必修。

授業の概要

特別講座(公開講座)、学内演奏会、定期演奏会、卒業演奏会の4つが特別演習の内容である。特別講座はプロの演奏家、および研究生による演奏会を中心とする。定期演奏会は2夜で構成され、オーディションにより出演者を決める。学内演奏会は本科生は成績優秀者の出演、専攻科生は必須で全員出演する。卒業演奏会も成績優秀者による演奏会である。

これらの演奏会を聴講することで単位認定を行う。

授業の到達目標

音楽の勉強は自分自身の毎日の練習、訓練の積み重ねが大切なのはもちろんだが、現役で活動している音楽家や、一緒に学んでいる学生の演奏を聴くことから得るもの大きさも是非認識してほしい。

期間 通年

担当教員 荻野 千里

授業計画

年4回の特別講座、3回の学外演奏会、6回(または7回)の学内演奏会が行われ、それぞれのジャンルに出席義務回数が定められている。

日程、演目の詳細はオリエンテーション時に発表する。

また日程は変更となる場合もあり、常に掲示を確認のこと。

授業時間外の学習

ゲストの音楽家や、演奏される楽曲について調べ、理解を深める。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

各公演の開演前、終演後に行う出席チェックによる出席状況にて評価

- A 3つのジャンルの出席義務回数を満たし、さらにそれ以上の出席回数が認められた者
- B 3つのジャンルの出席義務回数を満たした者
- C 3つのジャンルの出席義務回数を満たさず、担当者と相談の上、他ジャンルへの複数出席を条件とされた者
- D 出席回数不足の者

科目名 コラボレイト実習C/D

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

なし。

授業の概要

専攻主任からの依頼により、他専攻の試演会、卒業公演等に演奏者として参加する場合、5回以上の稽古への参加と発表をもって単位認定を行う。コラボレイト実習受講票を使用のこと。

なお、単位認定は、前期・後期、1回ずつを限度とする。

期間 前期集中・後期集中

担当教員 松井 康司

授業計画

- 1 打ち合わせ
- 2 音楽のみの練習I
- 3 音楽のみの練習II
- 4
- 5 舞台稽古への参加(1回が2コマ分)
- 8
- 9 通し稽古
- 10 G.P

授業時間外の学習

演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督に要望に応えるよう練習をしていかなければならない。

教科書・参考書等

公演台本等、各公演により異なる。

成績評価

専攻主任の依頼により履修できる授業のため、評価はAのみ。Aに相応しくない者が出た場合は履修取り消しとなる。

授業の到達目標

演劇公演等に演奏者として参加することにより、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶ。

科目名 楽曲分析 [編曲]

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

特にないが、音楽について実践的な知識や実習をしたいという興味や意欲があること。専攻科1年生、2年生、共に履修可。また、可能であれば、後期「楽曲分析[創作]」も履修することが望ましい。

授業の概要

この授業では、様々なジャンルの音楽を参考にしながら、編曲を学んでいく。メロディーに合うコードをつけ、伴奏つけていくことから始まり、それぞれの専攻楽器が必要とされる編曲を選び、各々個人指導していく。様々なレベルの受講生に対応するため、3段階のレベルのプリントを用意するので、初心者から、さらに知識を広げていきたい学生も受講可能である。

授業の到達目標

この授業では、和声法やソルフェージュの基礎をもう一度確認しながら、卒業後の音楽活動に直接役立つような伴奏付けや編曲などを学んで実践的な力を身につけていくことを目標の一つとしている。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、ポップスとクラシックのコード進行の違い
- 第2回 ポップスのコード進行1 (参考曲 ビートルズ)
- 第3回 ポップスのコード進行2 (参考曲 その他のポップス)
- 第4回 歌曲のコード進行1 (参考曲 モーツァルトなどの古典派の音楽)
- 第5回 歌曲のコード進行2 (参考曲 シューベルト、シューマンなどのロマン派の音楽)
- 第6回 様々な曲のメロディーにコードつけ 実習1

期間 前期

担当教員 たかの 舞俐

- (実習例 サイモン&ガーファングルの作品)
- 第7回 様々な曲のメロディーにコードつけ 実習2
〔実習例 様々な日本童謡や日本歌曲〕
- 第8回 様々な伴奏パターン 実習1 (参考曲 シューベルトなどの歌曲)
- 第9回 様々な伴奏パターン 実習2 (参考曲 宇多田ヒカルの作品など)
- 第10回 ジャズのコードはどのようにできているのか?
- 第11回 室内アンサンブルの楽器について
- 第12回 編曲実習1
- 第13回 編曲実習2
- 第14回 編曲実習3
- 第15回 編曲実習 まとめ
順序、及び内容は、授業開始後の状況にバランスをとっていくため、若干変わることもある。

授業時間外の学習

授業内で課題が終わらなかった場合、宿題にすることもある。

教科書・参考書等

授業で毎回プリント(3レベルの課題を用意する)を配布。

成績評価

- A 積極的に授業に参加しており、試験、ないしレポート提出において高い評価を得ている。
- B 授業の欠席が少なく、まじめに授業に参加し、試験、ないしレポート提出をこなしている。
- C Bに次ぐ
- D 授業参加日数が十分ではなく、試験不参加、ないしレポート未提出である。

科目名 楽曲分析 [創作]

対象 専攻科音楽専攻1・2年

履修条件

特にないが、音楽について実践的な知識や実習をしたいという興味や意欲があること。専攻科1年生、2年生、共に履修可。また、可能であれば、前期「楽曲分析[編曲]」も履修することが望ましい。

授業の概要

この授業では、様々なジャンルの音楽を参考にしながら、創作を学んでいく。まずメロディー、リズム、ハーモニーの3つの分野で、簡単な創作実習を行い、それぞれの自由作曲を個人指導していく。様々なレベルの受講生に対応するため、3段階のレベルのプリントを用意するので、初心者から、さらに知識を広げていきたい方も受講可能である。

授業の到達目標

この授業では、和声法やソルフェージュの基礎をもう一度確認しながら、卒業後の音楽活動に直接役立つような伴奏付けや編曲などを学んで実践的な力を身につけていくことを目標の一つとしている。また、メロディー、リズム、ハーモニーといった音楽の主要3要素の創作を学んでいくことで、それぞれの中に持っている音楽の言葉を引き出し、のばしていく事を目標としている。

授業計画

- 第1回 様々な作品の紹介
- 第2回 様々なリズムパターンの創作 実習1 (参考 ドラムリズムパターンなど)
- 第3回 様々なリズムパターンの創作 実習2 (さらに、様々な音楽のリズムを参考)
- 第4回 メロディーの創作 実習1
- 第5回 メロディーの創作 実習2

期間 後期

担当教員 たかの 舞俐

- 第6回 ハーモニーをつける 実習1
- 第7回 ハーモニーをつける 実習2
- 第8回 たかの舞俐作品分析
- 第9回 音楽の構造の作り方について 1 (基礎的な構造)
- 第10回 音楽の構造の作り方について 2 (さらに発展した構造)
- 第11回 創作実習 1
- 第12回 創作実習 2
- 第13回 創作実習 3
- 第14回 創作実習 4
- 第15回 創作実習 まとめ
順序、及び内容は、授業開始後の状況にバランスをとっていくため、若干変わることもある。

授業時間外の学習

授業内で課題が終わらなかった場合、宿題にすることもある。

教科書・参考書等

授業で毎回プリント(3レベルの課題を用意する)を配布。

成績評価

- A 積極的に授業に参加しており、試験、ないしレポート提出において高い評価を得ている。
- B 授業の欠席が少なく、まじめに授業に参加し、試験、ないしレポート提出をこなしている。
- C Bに次ぐ
- D 授業参加日数が十分ではなく、試験不参加、ないしレポート未提出である。

科目名 第一実技Ⅲ・Ⅳ／第二実技Ⅲ・Ⅳ

対 象 専攻科音楽専攻1・2年

期 間 通年

担当教員 各担当者

履修条件

● 第一実技は全学生の専門実技として必修科目である。別途徴収になるが、第二実技として専門実技以外の実技を履修することができる。第二実技は他専攻の学生も履修することができる。

授業の概要

● 第一実技は、全学生が各自の専修実技の担当講師のもとで、週1回、60分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンになるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。試験は前期、後期と2回行い、また、後期には学内演奏会に出演する。尚、2年次後期の成績優秀者は修了演奏会に出演することができる。

● 第二実技は、別途徴収になるが、週1回、40分のレッスンを受けることができ、前期、後期に試験を行う。

授業の到達目標

● 担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。副科実技としてのテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。

授業計画

● 第1回 オリエンテーション及び課題の検討
第2回～第21回 与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んで行くという形を繰り返して行く。

第22回 試験曲の検討
第23回 試験曲の決定
第24回～第28回 試験曲のレッスン
第29回～第30回 試験曲のまとめ。伴奏合わせ等

個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

授業時間外の学習

● レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。

教科書・参考書等

● 個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

成績評価

● 20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
A 演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B 演奏試験において、審査員の評価の平均点が65点以上の者
C 演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D 演奏試験において、審査員の評価の平均点が49点以下の者
あるいは、レッスンの出席回数が足りなくて受験資格がなかった者

Toho Gakuen College of Drama and Music

専攻科演劇専攻

科目名 演劇特別研究

対象 専攻科演劇専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

「演じる」とはどうか。

戯曲、演出、演技の役割分担のうち、俳優が担うのは演技であるが、俳優がその役割を果たすためには、何が必要とされるか、創作を通じて考えてみたい。

まず、「私の日常」が問われる。それは、「どういう時代に生きているのか、何に興味があり、何が好きで、何が嫌いか」といった事柄が問われるということだ。そして役を創造する上で、その「日常」が演技として成立するためには、どのような手続きが必要なのか。

そして、俳優の立場から、演出、戯曲の役割をも考える。

授業の到達目標

授業を通して、演劇の役割や表現の可能性、そして自己を認識する。

期間 通年

担当教員 志賀 廣太郎

授業計画

1. ガイダンス
2. 既存のテキストを使用した部分創作①
3. 〃 ②
4. 〃 ③
5. 〃 ④
6. あるテーマに即した創作①
7. 〃 ②
8. 〃 ③
9. 〃 ④
10. 自由創作 場所、プロットなど
11. 〃 背景、人物設定など
12. 〃 科白（エチュードを交じえる）
13. 〃 〃
14. 〃 演じる、直し
15. 直し、発表

授業時間外の学習

事前によく考え、授業は基本的に発表の場と心得るように。

教科書・参考書等

平田オリザ著「演劇入門」「演出と演技」（講談社現代新書）

成績評価

出席点。

科目名 演劇研究A（現代劇）

対象 専攻科演劇専攻1・2年

履修条件

遅刻、欠席厳禁。グループで取り組む作業になるので、自主的に学生同士で準備、予習をすること。稽古着、稽古履き着用。

授業の概要

ことばを理解しコントロールする能力を基本とした演技の能力を發展させる。台詞を考え、操り、相手役との呼吸や距離をさらに發展させ、演技に応用する力をつける。

そのためには台本を読み解く力、が必要になる。台本には台詞、ト書きしかないが、その表面上のテキストを正確に把握することはもちろん、さらに重要なことは台詞自体には書かれていない、役の人物の感情や配慮、気がかり、生理的な違和感、などを想像し、創造すること。テキストの陰に隠れた人物の含み持つ表現の意図、サブテキストをいかに読み取るか、構成していくか、ここが俳優の能力の重要な分かれ目になる。その読み取り方を実際の台本をもとに紹介し、それをもとにチャレンジし、参加メンバーで相互批評し、実際にシーンに作り上げてみて、奥行きふかい創造の領域を味わう。

一見無原則で自由度の高い「読み取り」という分野の仕事であるが、人間観察、人間についての思想、現実の社会の制約、などをもとにすれば、一定の法則性や原則は認識しないといけないことが次第にわかってくる。それをあせることなく試しながら獲得していく。

授業の到達目標

授業時間ごとに目標を設定する。自分の感情を把握すること。自分の状況を把握すること。相手との距離を意識して把握すること。その上でその距離を操作すること。それら基本的な項目の獲得の上に、演技に対する理解を深める。

授業計画

- 1 授業ガイダンス
- 2 与えられた台本の短いシーンを演じる①
- 3 与えられた台本の短いシーンを演じる②
- 4 行われた上演が無意識に含んでいた「サブテキスト」を分析する①
- 5 行われた上演が無意識に含んでいた「サブテキスト」を分析する②

期間 通年

担当教員 鈴江 俊郎

- 6 同じ台本で、ちがったサブテキストが読み取れることの紹介
- 7 社会と人間の問題をさぐる①
- 8 社会と人間の問題をさぐる②
- 9 台本全体を通してサブテキストのヒントになる情報を収集する①
- 10 台本全体を通してサブテキストのヒントになる情報を収集する②
- 11 自力でサブテキストを最大限豊かに読み取り、構成してみる①
- 12 自力でサブテキストを最大限豊かに読み取り、構成してみる②
- 13 構成したサブテキストをチームで共有し、立体化してみる①
- 14 構成したサブテキストをチームで共有し、立体化してみる②
- 15 読み取りのプロセスを振り返って、次の目標を獲得する
※講義内容に関しては、発表成果の深度をみて前後することがある。

授業時間外の学習

毎回、ショートシーンの課題演技あるいは読み取りの成果を求めるので、授業前にその準備を行うこと。また、授業中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを授業後に、検討し意味を理解し、改善すること。

教科書・参考書等

教科書・教材は授業時に配布。
参考資料等：必要に応じて授業時に配布。

成績評価

- (1) 出席日数 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果等を総合的に評価する。
- A 台本を読み取り、社会の問題を探究するプロセスで、調査、創造、探究のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 台本を読み取り、社会の問題を探究するプロセスで、調査、創造、探究のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 台本を読み取り、社会の問題を探究するプロセスで、調査、創造、探究のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 台本を読み取り、社会の問題を探究するプロセスで、調査、創造、探究のうち1つも成果が獲得できなかった者

科目名 演劇研究 B (日本演劇)

対象 専攻科演劇専攻 1・2年

履修条件

- 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
- 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋(地下足袋は不可)を着用すること。
- 授業時間内は必ず時計、アクセサリ等を外すこと。
- 遅刻、欠席の場合は理由書を作成し必ず直接提出しにくること。

授業の概要

● 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。ユニットを2チーム作り、それぞれ同じ「課題戯曲」を上演する。お互いのチームを参考に切磋琢磨の中でこそ産まれるグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。

授業の到達目標

- 課題戯曲の研究、完成と発表。
上演した成果から一人一人の新たなステップアップの道筋を発見すること。

期間 通年

担当教員 三浦 剛

授業計画

- 1 授業ガイダンス・訓練
- 2 訓練・課題発表
- 3~5 訓練・課題読み稽古
- 6 訓練・ユニット、キャスト発表
- 7~15 訓練・課題立ち稽古
- 16~20 訓練・衣装、小道具、音響、照明のプランニング発表
- 21~27 訓練・課題立ち稽古2
- 28 課題上演1
- 29 課題上演2
- 30 両チームの総評、アンケートとディスカッション

授業時間外の学習

- 与えられた課題の研究、稽古を行うなかで「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、作成すること。

教科書・参考書等

- 教科書：授業時に配布(戯曲)
- 参考書：随時授業時に配布

成績評価

- ①出席日数 ②課題の成果 ③表現者としての真摯な姿勢 ④自らを研鑽する意欲 ⑤身体的、精神的健康の維持
- A: ①~⑤のうち全てを獲得した者
- B: ①~⑤のうち4つを獲得した者
- C: ①~⑤のうち3つを獲得した者
- D: ①~⑤のうち2つしか獲得できなかった者

科目名 演劇研究 C (外国演劇)

対象 専攻科演劇専攻 1・2年

履修条件

- 自己を自分の身体全てを用いて表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

授業の概要

● 役者の舞台上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。

まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。

次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置づけを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ベンカ(ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師)とキース・ジョンストン(ルーズムースシアター・カルガリー)によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

授業の到達目標

- 演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに對する理解を深める。

授業計画

- [前期]
1 導入

期間 通年

担当教員 ペーター・ゲスナー

- 2-4 エチュード
- 5-15 シーンワーク

[後期]

- 1 前期の復習
- 2-13 即興、シーンワーク
- 14 発表
- 15 反省

授業時間外の学習

- 授業の中で出された、課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

教科書・参考書等

- 「インプロ・ゲーム」 絹川友梨著
研究旅行(キース・ジョンストン ルーズムースシアター)で集めた書類
「シアター スポーツ」キース・ジョンストン著(英語版)

成績評価

- (1)出席日数、(2)課題に対する成果、(3)授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否、(4)役者としてどのくらい能力が培われたか、(5)課題に対する到達度等を総合的に評価する。
- A (1)~(5)まで80%以上獲得した者
- B (1)~(5)まで60%以上獲得した者
- C (1)~(5)まで50%以上獲得した者
- D (1)~(5)まで49%以下獲得した者

科目名 演劇研究D (演劇論)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

履修条件

特になし。

授業の概要

スタニスラフスキー・システムは、20世紀初頭から、ロシアの演出家・俳優コンスタンチン・スタニスラフスキーが俳優教育法を体系的にまとめあげたものである。このスタニスラフスキー・システムは演技の文法として世界中に普及し、各国で独自の発展を遂げている。

この授業では、スタニスラフスキーの著書「俳優の仕事」を読み進めながら、システムの真髄を探っていきたい。「俳優の仕事」は「難解な大作」と敬遠されがちであるが、演劇学校の日記という形式で書かれており、演劇を学ぶ学生にとっては身近な話題が多く取り上げられている。自身の体験と重ねつつ読み込めば、演技に関する考察が一層深まることであろう。

授業の到達目標

「俳優教育」を読み、スタニスラフスキー・システムの基本的な考え方を理解する。

授業計画

- 1 ガイダンス
- 2 第1章 ディレクティブイズム
- 3 第2章 舞台の芸術と舞台の職人芸
- 4・5 第3章 行動くもしも>、<与えられた状況>
- 6・7 第4章 想像力
- 8・9 第5章 舞台における注意
- 10・11 第6章 筋肉の解放
- 12・13 第7章 断片と課題
- 14・15 第8章 真実の感情と確信
- 16 第9章 情緒的記憶

期間 通年

担当教員 安宅 りさ子

- | | | |
|-------|------|-------------------------|
| 17 | 第10章 | 交流 |
| 18 | 第11章 | 適応、及びその他の要素、俳優の特性、能力、天分 |
| 19 | 第12章 | 精神活動の原動力 |
| 20 | 第13章 | 精神活動の原動力の流れ |
| 21・22 | 第14章 | 舞台における内的な自己感覚 |
| 23・24 | 第15章 | 究極課題と一貫した行動 |
| 25・26 | 第16章 | 俳優の舞台上での自己感覚における潜在意識 |
| 27・28 | 第2部 | 第6章 テンポ・リズム |
| 29・30 | 第2部 | 第7章 論理と一貫性 |

授業時間外の学習

授業でとりあげる章を必ず事前に読んでおくこと。また文中の作品、作者等についても予め調べておくこと。

教科書・参考書等

「俳優の仕事—俳優教育システム 第一部」スタニスラフスキー著 岩田貴他訳 (未来社)

成績評価

授業内課題と期末レポートで評価する。

- A スタニスラフスキー・システムの諸事項を把握し、説明ができる。
- B スタニスラフスキー・システムの諸事項をほぼ把握し、説明ができる。
- C スタニスラフスキー・システムの諸事項の理解に欠け、説明があいまいになる。
- D スタニスラフスキー・システムの諸事項を理解せず、説明ができない。

科目名 演劇研究E (実験劇)

対象 専攻科演劇専攻1・2年

履修条件

遅刻、欠席は厳禁。専攻科生としての自覚を持ち、責任を持って課題に取り組み、自主的に学生同士で舞台芸術家として高め合う意識があること。

授業の概要

通年で、テーマごと(例:童話、歴史劇、怪談、古典、など、ディスカッションを積んで、決定する)にユニットをつくり、演出と俳優を分担し、ほぼ二ヶ月に一度の割合でシーンの発表を行う。発表に対しては、教員が講評を行う。芸術科1年、2年で学んだこと、自分の将来の志向を語り合わせ、より高度な発表をすることが望まれる。どの学生も一度は必ず作品選び、上演台本作成、演出を担当することで、演出の視点で改めて演技を見つめ直し、本当に自分の作りたい舞台作品とはなんなのかをディスカッション、稽古を通じて探求する。発表は授業時間に縛られる必要はなく、演出担当の学生が上演したい場所、時間に行い、受講していない学生に公開することも可とする。

授業の到達目標

- 以下の3点をこの授業の到達目標とする。
- ① 演出家にとって、俳優とはなにか、を体得する。
 - ② 演劇人として、自分が本当にどういう表現者になりたいのか、を見つめなおし、発見する。
 - ③ 演出の仕事と集団創作の方法を理解し、自分の役割をきちんと全うする。

授業計画

- 1 ガイダンス、1年間の具体的なカリキュラム作り。
- 2 作品1のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 3 作品1の稽古①
- 4 作品1の稽古②
- 5 作品1の稽古③
- 6 作品1の発表と講評
- 7 作品2のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 8 作品2の稽古①
- 9 作品2の稽古②
- 10 作品2の稽古③

期間 通年

担当教員 宮崎 真子

- 11 作品2の発表と講評
- 12 作品3のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 13 作品3の稽古①
- 14 作品3の稽古②
- 15 作品3の稽古③
- 16 作品3の発表と講評
- 17 作品4のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 18 作品4の稽古①
- 19 作品4の稽古②
- 20 作品4の稽古③
- 21 作品4の発表と講評
- 22 作品5のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 23 作品5の稽古①
- 24 作品5の稽古②
- 25 作品5の稽古③
- 26 作品5の発表と講評
- 27 作品6のチームわけ、ディスカッション、方針決定
- 28 作品6の稽古①
- 29 作品6の稽古②
- 30 作品6の発表と講評

授業時間外の学習

上演する作品のコンセプトをまとめ、上演台本を作製、キャストイングやスタッフワークを練り上げる。チームごとに稽古を自主的に進め、授業で成果を発表・準備をすること。

教科書・参考書等

テキストは学生が自分で選び、作成する。

成績評価

- 授業の出席日数と到達目標達成度で評価する。遅刻、早退は半日にカウントする。
- A 欠席が4日以内で、かつ、到達目標が80点以上の者
 - B 欠席が8日以内で、かつ、到達目標が60点以上の者
 - C 欠席が10日以内で、かつ、到達目標が50点以上の者
 - D 欠席が10日を超える、または、到達目標が49点以下の者

科目名 実技A (コンテンポラリー)

期 間 通年

対 象 専攻科演劇専攻1・2年

担当教員 勝倉 寧子

履修条件

経験の有無に関わらず、コンテンポラリー・ダンスに興味があり、身体表現の習得に意欲的であること。

授業の概要

同時代のダンスという意味のコンテンポラリー・ダンスは、バレエにはない動きで表現の幅を大きく広げたモダンダンスよりもさらに新しい、最先端を行くダンスである。スキルフルで洗練され、アクロバティックで、重力を利用した美しい脱力特徴的。舞台芸術の中でも、心とからだの密接な関係を深く実感できる、実に魅力的な身体表現である。

コンテンポラリー・ダンスの中でも、バレエ、ジャズ、ストリート、舞踏等あらゆるダンスを理解した上に成り立つ技法は、音楽、演劇における身体表現に結びつく可能性を非常に多く含んでおり、舞踊表現の質の向上にも大いに有効である。

この授業では、まずコンテンポラリー・ダンスのトレーニングを積み重ねることで、からだを意思どおりにコントロールできる能力を養い、その後、段階を踏みながら更なる技術のスキルアップを図りつつ、身体表現に必要とされる要素に迫り、応用へと発展させていく。

授業の到達目標

- ・コンテンポラリー・ダンスの理解を深め、その技術を習得すること。
- ・プロの俳優として通用するからだをつくること。
- ・演じる上で、身体を使った感情表現がスムーズに行えること。
- ・プロの演出家、振付家の要求に対応し得る基礎力、応用力を身に付けること。
- ・豊かな発想を生み出す能力を養い、説得力のある身体表現を可能にすること。

授業計画

- 基礎トレーニング
 - ・ストレッチ&リリース
 - ・スイング+フロアテクニック (筋力トレーニングを含む)
 - ・アライメント…姿勢の矯正、ポジショニング
 - ・重力のコントロール
 - …フォール、リバウンド、リカバリー、サスペンション
- 移動を伴う動きのトレーニング

- ・ステップ・バリエーションによるスムーズな重心移動
- ・ジャンプ、ターン、フロアワークの組み合わせによる三次元的空間使い

3 応用

- ・フレーズを踊る…振付された動きを通して身体表現の実践を行う。
- ・舞台空間の使い方
 - …ソロ、デュオ、ユニゾンetc. シーンに沿ったスペーシング法
- ・緩急の配分 (呼吸法を含む) …長いフレーズの中での実践
- ・感情を伴う身体表現
 - …音楽を使った実践、シチュエーションを設定しての実践
 - 内面 (こころ) と動き (からだ) の演出上有効な距離選択の検証
- ・インプロビゼーション (即興力、新しい動きの開発)
 - …手がかりとなる手法を用いての実践
- ・創作 (振付力、個性、独創性の発展)
 - …自らテーマを設け、自作自演の実践を行う。

※音楽は、クラシック、現代音楽、エレクトロニカ、アンビエント、ロック、ポップス、R&B等々、あらゆるジャンルのものを用いる。

授業時間外の学習

毎回授業で学んだテクニックは、次回のステップアップに繋がるよう、最大限の復習に努めること。

教科書・参考書等

稽古着を着用。授業は基本的にシューズを履かずにを行う。

成績評価

授業に取組む姿勢、出席状況、実技試験の成績、身体表現能力開発の成果を総合的に評価。

- 総合点が80点以上の者 (基本的な諸事項を十分に理解し、それらを明確に表現し応用出来る身体能力を持っている)。
- 総合点が65点以上の者 (基本的な諸事項をほぼ理解し、それらを明確に表現する身体能力を持っている)。
- 総合点が50点以上の者 (基本的な諸事項をある程度理解し、身体表現能力に向上が見られる)。
- 総合点が49点以下の者 (基本的な諸事項の理解に欠け、身体表現能力に向上が見られない)。

科目名 実技B (ヒップホップ)

期 間 通年

対 象 専攻科演劇専攻1・2年

担当教員 赤地 寿美

履修条件

なし。

授業の概要

授業のねらいは、大きく分けて2つである。1つ目は、身体的能力及びリズム感の向上をねらいとすること。2つ目は、身体表現や感情表現を加え「思っていること、伝えたいこと、表現したいこと、吐き出したいこと等」今の自分をストレートに出していくこと、または「こうなりたい、あの気持ち良さを体感してみたい等」演じることによって得られる感覚により新たな自分を発見して次のステップへ進むきっかけとなることをねらいとすることである。

授業はステップ1基礎トレーニング (主に筋肉及びリズムトレーニング) をステップ、パーツ使いやコンビネーションを幅広くじっくりと練習。ステップ2としてステップ1で学んだものを応用して、単純な感情表現を踊りの中に組み込んでいく。さらにステップ3では今まで「トレーニング」してきたものを土台にして音楽を自分が「感じ」るままに表現または創作していくことを体感していく。

授業の到達目標

身体を使った表現の習得。

授業計画

- ステップ1からステップ3までを行い、最終授業日に発表会を行う。
 - 1-8 ステップ1 (基礎トレーニング)
 - 9-16 ステップ2 (表現のトレーニング)
 - 17-29 ステップ3 (感じて表現するトレーニング、作品にするトレーニング)
 - 30 発表会

授業時間外の学習

授業で学んだ内容について、自主トレーニングに努めること。

教科書・参考書等

必ず稽古着を着用し、楽な内履きシューズを使用する。

成績評価

作品発表を重視する。

科目名 ミュージカル唱法

期 間 通年

対 象 専攻科演劇専攻1・2年

担当教員 信太 美奈

履修条件

楽譜が読める。または読む努力をする。
前もって歌う曲、課題は予習しておく。

授業の概要

発声、呼吸法、身体の使い方を学ぶ。
個人に合った曲を探し、それを歌う。
歌う時に、習ったことを活用できるように意識する。
たくさんのミュージカルナンバーを聞く。そのナンバーの解釈もする。
ミュージカルナンバーに合った動きやダンスも必要ならば歌と同時にできるようにする。
他の方々に見て頂く時間を作って披露することもある。(日程次第)

授業の到達目標

身体を使った発声と歌詞をしっかりと心の底から理解して、感情と共に声にできるような歌い方ができるように、また、必要ならば曲のステージング等も。

授業計画

- 1 自己紹介(ひとりひとりに歌ってもらう)
- 2 “ ” (“ ”)
- 3 呼吸の意識
- 4 “ ”

- 5 発声
- 6 声と心
- 7 各自が練習の為の曲を選び歌う
- 8 “ ”
- 9 “ ”
- 10 “ ”
- 11 曲にあったステージング(ダンスを含む)
- 12 “ ”
- 13 “ ”
- 14 “ ”
- 15 総しあげ

授業時間外の学習

- ・呼吸、筋力トレーニング。課題は次の授業までに暗譜する。
- ・たくさんのCD、DVD、舞台を聞いたり、観たりする。
- ・自分を知る為の意識をもつ。音楽にふれる。

教科書・参考書等

授業中に配布。CDを聞いたり、舞台を見にいたり、コンサート、ライブを体験する。

成績評価

- A 出席率もよく、総合点が80点以上
- B 出席率もよく、総合点が60点以上
- C 出席率もよく、総合点が50点以上
- D 出席が悪く、どうにもならない人

科目名 ワークショップA/B

期 間 前期集中・後期集中

対 象 専攻科演劇専攻1・2年

担当教員 担当教員

履修条件

ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。

授業の概要

各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各1回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。

授業の到達目標

演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深める。

授業計画・授業時間外の学習

ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。

教科書・参考書等

必要に応じて指示する。

成績評価

- (1) 出席日数(2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否(3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A ワークショップにおいて、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B ワークショップにおいて、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C ワークショップにおいて、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D ワークショップにおいて、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 海外研修

期 間 後期集中

対 象 専攻科演劇専攻1・2年

担当教員 ペーター・ゲスナー

履修条件

● 良好な体調で研修に参加できること。

授業計画

● 訪問国に関する事前学習
海外研修…ワークショップ
観劇等

授業の概要

● 海外の演劇教育機関でワークショップ(15時間程度)に参加し、訪問国の俳優訓練を体験する。また、現地の学生・先生方との交流を通じ、国際理解を深めていく。

● 最近イタリアのテアトロアーセナレ、オーストラリア(シドニー)の国立演劇学院NIDA、カナダのカルガリーのルーズムーズシアターで研修を行った。今年はヨーロッパ方面への研修を行う予定。

授業時間外の学習

● 研修旅行の準備として、その国の言語・政治・文化などを各自で調べること。

● また、研修中のwsで出された課題や内容について、繰り返し考え、自分の意見を加えて、次のwsに臨むこと。

授業の到達目標

● 外国での演劇研修を通じて、国際的視野を広げ、理解を深める。

教科書・参考書等

● 必要に応じて指示。

成績評価

● (1)研修態度と姿勢 (2)レポート

- A (1)、(2)の総合点が80点以上の者
- B (1)、(2)の総合点が60点以上の者
- C (1)、(2)の総合点が50点以上の者
- D (1)、(2)の総合点が49点以下の者

科目名 特別講義 A

期 間 前期

対 象 専攻科演劇専攻1・2年

担当教員 ペーター・ゲスナー

履修条件

● 必修。
毎回のゲスト講師に失礼のないマナーで真剣に勉強すること。

第7回 6月8日
第8回 6月15日
第9回 6月22日
第10回 7月20日

授業の概要

● 演劇に関わる、幅広い分野の専門家を迎える本格的な演劇学の講義。

● 理論と実践の対比や、歴史背景と現代演劇の連続性など、様々な視点を新たに得て、自らがたずさわる演劇を見つめ直してほしい。

● 早稲田大学演劇博物館の協力を得て実現した特別な機会である。教えてもらうのではなく、自ら学びとろうとする積極的な姿勢で臨むこと。

授業時間外の学習

- ○次回の講師について、事前に調べ、最低五つの質問を用意し、紙に書いてくること。
- ○講義の中で出た話題や人名・書名などをしっかりノートにとって、講義後、自分で調べ直すこと。全プログラム終了後に、各自一本のレポートを課す。

授業の到達目標

● 自分たちが今後も続けていく演劇に、新しい意識とより幅広い考え方でとらえ直せるようになること。

教科書・参考書等

● 各講義に合わせて、各自で用意・持参すること。
● 受講生は12時30分までに入室し、出欠確認をすること。履修者以外の受講は認めない。

授業計画

● 第1回 4月6日 ガイダンス
第2回 4月20日
第3回 4月27日
第4回 5月18日
第5回 5月25日
第6回 6月1日

成績評価

● プログラム終了後に作成したレポートを参考にする。

- A 全回の授業に積極的に参加し、講義の内容を十分に理解している。
- B 7回以上授業に参加し、講義の内容をほぼ理解している。
- C 6回以上授業に参加し、講義の内容をあまり理解していない。
- D 出席が不足し、講義の内容も理解できていない。

科目名 特別講義 B

対象 専攻科演劇専攻1・2年

履修条件

必修。演劇専攻のことばと演技の問題に関心のある学生。毎回のゲストに失礼のないマナーで真剣に臨むこと。

授業の概要

演劇の一線で活躍する俳優、劇作家、演出家、プランナー、制作者の方々の現場の声を伺い、質疑応答を行う。ことばを使った表現についての模索と、どのようにして表現成果にたどり着くのか、創作のなぞを解き明かす。

学生時代、修行時代、あるいは芸術家の卵だった時代はどのような生活、訓練をしていたか、どんなことを考え、なにを悩んでいたか、などお伺いする。そして、現在の表現をめぐる自らの模索の有様を、なるべくありありと実感を込めたことばで語っていただくなかで、受講生たちが自分を見つめ、自分の過去と将来に直面して思索をする好機にすることを旨とする。

なお、講義の進行の妨げとなるので、遅刻、早退等の入退室は一切認められない。

授業の到達目標

以下の三点をこの授業の到達目標とする。

- ①ことばを使った表現について、アーティストはどのようなポイントで悩み、考えているのか、実際の表現活動の核に当たる表現者の事情をつかみ、自分の表現行為の日常に適用する原則を獲得する。
- ②芸術家の卵として、先輩たちの卵時代の苦労、熱意に触れ、どのような覚悟が自らに必要なのか、つかみとる。

期間 後期

担当教員 鈴江 俊郎

授業計画

- 第1回 9月21日 ガイダンス
 - 第2回 9月28日
 - 第3回 10月5日
 - 第4回 10月12日
 - 第5回 10月19日
 - 第6回 10月26日
 - 第7回 11月9日
 - 第8回 12月7日
 - 第9回 12月14日
- ※各回のゲストについては、決定次第発表する。

授業時間外の学習

毎回、来られるゲストの方の出演している作品をDVDや記録、文章で読み、あらかじめその創作姿勢について想像をたくましくして臨むこと。鋭くて的確な質問を練って準備しておくことが望ましい。終了後は語られたひとつひとつのことばをふりかえり、かみしめ、自分の現在と将来にたらしあわせて思索を積み重ねること。

教科書・参考書等

特になし。

成績評価

授業の出席日数とレポートで評価する。

- A 欠席が2回以内で、出席分のレポートをすべて出しているもの
- B 欠席が3回以内で、出席分のレポートをすべて出しているもの
- C 欠席が4回以内で、出席分のレポートをすべて出しているもの
- D 欠席が4回を超えるもの

科目名 劇上演実習 A / B

対象 専攻科演劇専攻1・2年

履修条件

40日間にわたる稽古及び本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は認められないので注意すること。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②

期間 前期集中・後期集中

担当教員 担当教員

13 舞台稽古③

14 本番

15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。

実習中に与えられた批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

(1) 出席日数 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 C (専1 最終公演)

期 間 後期集中

対 象 専攻科演劇専攻1年

担当教員 担当教員

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。修了に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、一本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。授業計画の準備上、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。なおこの公演は、調布市せんがわ劇場において調布市の指定事業として行われるものである。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①

12 舞台稽古②

13 舞台稽古③

14 本番

15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。

実習中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- (1) 出席日数 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
 - B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
 - C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
 - D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 D (修了公演)

期 間 後期集中

対 象 専攻科演劇専攻2年

担当教員 担当教員

履修条件

40日間にわたる稽古・本番の全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじる。専攻科修了に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。

授業の概要

プロの演出家の指導の下、専攻科における学習成果を総合化させていく。授業計画の準備上、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。この実習では、修了後演劇活動に従事することを想定し、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。なおこの公演は、調布市せんがわ劇場において調布市の指定事業として行われるものである。

授業の到達目標

公開にふさわしい完成度の高い上演作品を目指す。

授業計画

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①

12 舞台稽古②

13 舞台稽古③

14 本番

15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

授業時間外の学習

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングでなにが合意されたか、記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。

実習中に出された批評、指導された具体的なだめ出しを毎回、事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

教科書・参考書等

稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

成績評価

- (1) 出席日数 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。
- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
 - B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
 - C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
 - D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 E / F (学外出演)

対象 専攻科演劇専攻 1・2年

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)を提示。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

プロの公演、映画等への主役・準主役での出演。ただし、学内の劇上演実習での40日間の稽古時間と同等の学習の意義の認められる上演内容であり、同等の稽古環境であり、同等の学習成果が認められる場合のみ単位認定は可能。

授業の到達目標

プロの公演、映画等に通用する実践力を養う。さまざまな現場のスタッフ、共演者、関係者との共同作業を通して、協調し、協力する態度を可能にする表現力や日常的な心構え、表現者としての高い意識を獲得する。本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画・授業時間外の学習

一流の演出家・俳優等との仕事を通じ、プロとしての意識を養い、現場に通用する演技力を身につける。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②

期間 集中

担当教員 担当教員

- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み あるいは撮影セット内でのリハーサル
- 11 舞台稽古① あるいはリハーサル①
- 12 舞台稽古② あるいはリハーサル②
- 13 舞台稽古③ あるいはリハーサル③
- 14 本番 あるいは撮影
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

(1) 研修の現場への出席態度 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程で与えられた役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程で与えられた役割を十分に果たせず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

科目名 劇上演実習 G (学内出演)

対象 専攻科演劇専攻 1・2年

履修条件

履修登録時に企画書・印刷物(チラシ等)を提示。専攻会議の審議を経て履修を認める。

授業の概要

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)への参加。ただし出演依頼を授業担当教員から受けた場合に限る。

授業の到達目標

さまざまな実習、演習に出演者として参加し、さまざまな関係者、出演者、スタッフと協調し、協力する態度を可能にする表現力を養う。本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得する。

授業計画・授業時間外の学習

学内の実習(他専攻の実習・演習を含む)に参加し、協調し、協力するプロセスを通じて表現力を養う。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

- 1 本読み①
- 2 本読み②
- 3 本読み③
- 4 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
- 5 上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②

期間 集中

担当教員 担当教員

- 6 たち稽古①
- 7 たち稽古②
- 8 たち稽古③
- 9 たち稽古④
- 10 舞台の仮組み
- 11 舞台稽古①
- 12 舞台稽古②
- 13 舞台稽古③
- 14 本番
- 15 創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

教科書・参考書等

なし。

成績評価

(1) 研修の現場への出席態度 (2) 課題に取り組む積極性、共演者との協力関係の成否 (3) 課題に対する成果 等を総合的に評価する。

- A 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち3つの面の成果が獲得できた者
- B 発表作品の稽古過程でチームの中心的役割を果たし、協調、創造、探求のうち2つの面の成果が獲得できた者
- C 発表作品の稽古過程でチームの援助的役割を果たし、協調、創造、探求のうち1つの面の成果が獲得できた者
- D 発表作品の稽古過程でチームに貢献できず、協調、創造、探求のどれも成果が獲得できなかった者

Toho Gakuen College of Drama and Music

教職科目

科目名 教師論

対象 教職1年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

教育界を取り巻く状況も、そして教育界に向ける世間の眼差しも大きく変化してきている昨今、そんな中において学校の教師はどのように考えて、どのように行動すべきか、そのために必要な教師の資質は何か、さらにその資質を獲得するにはどんな方法があるのかを、共に探っていく。

教師にとって、時代や社会の変化に対しても“動かしてはならないもの”を確認する一方で、社会の動きに従う必要のあるものをも見る意味で、報道された話題をも教材として利用する場面を多く用意する。

質問紙その他を活用して、受講生一人ひとりの見方、考え方、そして経験等を集約し、それらを教材として話題を深めていく。

授業の到達目標

学校の教師の実態を把握し、これから必要とされる教師像を明確に描けるようになること。

授業計画

- 1 教育に関する学生の意識
- 2 学校・教育・教師のイメージ
- 3 教師像様々
- 4 教師の執務の場面と業務様々
- 5 教師を取り巻く人間関係
- 6 教育法規に親しむ
- 7 評価に対する姿勢と実態、方法様々
- 8 教師の研究・研修、趣味・特技
- 9 ITと教師

期間 後期

担当教員 岡本 直久

- 10 教育行政と教師
- 11 著作権と教師
- 12 学校経営と教師
- 13 報道社会の中の教師
- 14 教師の必需品
- 15 これからの教師のあり方

授業時間外の学習

教育に関する話題の報道される機会の少なくない現在、教材とし得る記事やニュースに囲まれていると言ってよい状況にあることを大いに利用し、関係記事の切り抜きなどの作業を日常的に続けること。その成果は講義の際の資料として集約する心算である。

教科書・参考書等

特に書物は使用しない。資料としてその都度プリントで配付するものを利用する。
関連書物、関係文献等は、授業の中でやはりその都度紹介する。

成績評価

各回の講義への取り組み

- | | |
|---|--------|
| A 講義内容に対する自己の立場を具体的に表明
理解を示す表現力
各回の講義への取り組み
講義内容の正確な把握 |] ができる |
| B 理解を示す表現力
各回の講義への取り組み
講義内容の正確な把握 | |
| C 各回の講義への取り組み
講義内容の正確な把握 |] ができる |
| D 上記の条件を満たしていない | |

科目名 教育原理

対象 教職1年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

今日の様々な子どもをめぐる課題について考える上で必要と思われる教育の本質や教師論を中心に講義する。

そして学校の問題のみならず、家庭・社会の状況や、子どもの視点・大人の視点の両方から考察するというように、広い視野から物事を捉え直すことを試みる。

授業の到達目標

これまで授業を受ける側つまり児童・生徒・学生としての学校・教育・教師観であったものを、学習を支える側の教師や保護者、地域の人々の立場も踏まえて考えられるようになる。

授業計画

- 1 はじめに
- 2 教育とは何か
- 3 家族の中の子ども
- 4 教育の制度(1) 教育行政と学校の統治
- 5 学校の多様化

期間 後期

担当教員 林 直美

- 6 学習の過程と形態
- 7 学習環境の整備と活性化
- 8 授業をつくる
- 9 学習集団と生活集団
- 10 教育制度(2) 教育における法と子どもの権利
- 11 学力とは何か
- 12 特別ニーズ教育
- 13 子ども専用の囲い地
- 14 学校制度への懐疑
- 15 総論

授業時間外の学習

授業の板書は必要最小限のことしか書かないので、理解を深めるために各回の授業後自分で言葉を補足するなどして、オリジナルノートを完成させる。

ネット、テレビ、新聞などのメディアから教育に関する情報を常に収集するよう心がけること。それをもとに授業内で討論することもある。

教科書・参考書等

参考文献
[教育学をつかむ] 木村元・小玉重夫・船橋一男著(有斐閣)
その他は授業において紹介する。
[よくわかる教育原理] 汐見稔幸ほか編著(ミネルヴァ書房)

成績評価

原則として学生便覧にある受験資格を有する学生の成績については出席状況30%、試験・レポート・授業態度70%として点数化し、学校の定める成績評価の基準に則して評価する。

科目名 教育心理学

対象 教職2年

履修条件

教職課程受講者必修。
教員免許取得のための科目の履修であることをわきまえ、学生便覧・講義概要の3学修の評価①受験資格などのきまりと、社会的な規範などを遵守できること。

授業の概要

教育心理学には、①成長・発達②教授・学習③人格・適応④評価・測定⑤集団・社会と、大きく5つの分野の柱がある。
女性の平均寿命が約85.9歳、100歳以上が51,363人と高齢社会となり、過半数の若者が高等教育を受け、高学歴化といわれ、さらには、地球化といわれるような情報化時代における、今日のわが国における教育的営みとは何か。受験や不登校・いじめ等様々な課題をかかえた教育場面における心理学と教師の役割・あり方とは何か、等について、検討をする予定である。
教育的営みは、学校教育の場面だけでなく、生涯教育といわれるように、ひとの一生にわたるものであり、生涯発達という観点から、これらの5つの柱の各領域について、一冊ずつのテキストを用いて、検討をする。
なお、初回の講義では、講義概要を述べるので、原則として、初回欠席者の履修を認めない。遅刻・欠席が目立つので注意すること。

授業の到達目標

高齢社会の中で、生涯にわたり学び続ける意義・意味と、その入口となる学校教育、ヒトの発達と学んでいく過程等について、教職課程の1科目として理解を深めること。

授業計画

- 1 教育心理学ってなに？
- 2 発達developmentとは？
- 3 遺伝か環境か
- 4 刻印づけimprintingと狼少女
- 5 学習learningとはなに？
- 6 知能は変わるのか
- 7 知的的好奇心と内発的欲求
- 8 生涯発達と生涯学習について
- 9 セサミストリートとヘッドスタート計画
- 10 いじめについて
- 11 教育評価ってなに？
- 12 個性を尊重する教育評価

期間 前期

担当教員 佐藤 哲男

- 13 発達障害について
- 14 教育の社会史・日本の教育を中心に
- 15 子どもの学びについて・灰谷健次郎の著書をめぐり

教科書・参考書等

成長・発達：「子どもの発達と環境」 井上健治著（東大出版会）1973年 2730円
 教授・学習：「知的好奇心」 波多野・稲垣著（中公新書）1973年 756円
 「人はいかに学ぶか」 稲垣・波多野著（中公新書）1989年 756円
 人格・適応：「性格心理学への招待（改訂版）」 詫間武俊著（サイエンス社）2205円
 集団・社会：「社会心理学」 藤原武弘著（培風館）1997年 1995円
 評価・測定：「子どもの能力と教育評価（第2版）」 東洋著（東大出版）2001年 2050円
 参考文献：「発達とはなにか」 永野重史著（東大出版）2001年 2730円
 「子どもに教わったこと」 灰谷健次郎著（NHKまたは角川文庫）
 「せんせい、あのね」 鹿島和夫著（ミネルヴァ書房）2010年 2100円
 「競争止めたら学力世界一」 福田誠治著（朝日新聞）2006年
 「子どもと教師の関係づくり」 （東大出版）2004年 2835円
 「教師と子どもの関係づくり」 近藤邦夫著（東大出版）1994年 2835円
 「いじめとは何か」 森田洋司著（中公新書）2010年 774円
 （この他の文献については、適宜、紹介をする）

授業時間外の学習

大学設置法・規則などにあるように、テキストは事前に熟読したうえで、講義に臨み、かつ、講義受講後には、復習をするとともに、適宜紹介する文献・資料について、熟読・推敲をして、知見を深めること。

成績評価

成績評価については、①レポート、②出席、③受講態度を総合して評価する。
 レポートについては、課題の文献について、①著者のいわんとすることは何か、②学生自身がどのようなことに、興味・関心を持ったか、③それらについて、今後の自己にどのように生かせるかをまとめるポイントとする。
 A 総合点が80点以上の者（3ポイントに基づき、文献を読みこみ、推敲が認められる）
 B 総合点が60点以上の者（3ポイントからのずれが認められ、推敲が乏しいレポート）
 C 総合点が50点以上の者（3ポイントに基づかず、主観的な展開が見られるレポート）
 D 総合点が49点以下の者（論点がずれていて、要領を得ない内容のレポート）

科目名 教育史概説

対象 教職2年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

西洋ならびに日本における原始社会から現代までの教育観・子ども観の変遷と歴史的背景を考察し、教育を考える上で基礎的な知識を得ることを狙いとする。そして歴史的な分析にとどまらず、現代社会における教育課題についても言及していく。

授業の到達目標

様々な資料を読み解くことによって、学問の面白さと、歴史を学ぶことは記憶することではなく考えることであることを理解できるようにする。

授業計画

- 1 はじめに
- 2 原始社会における子育て
- 3 子どもの発見
- 4 西洋における近代教育思想（1）
- 5 西洋における近代教育思想（2）
- 6 近代公教育とは
- 7 幼児教育の変遷

期間 前期

担当教員 林 直美

- 8 絵巻物に見る子育て
- 9 中世社会に見られる教育活動
- 10 なぜ今、江戸時代の教育なのか
- 11 近代教育の黎明—立身出世
- 12 大正新教育運動
- 13 戦後の新教育運動
- 14 高度経済成長後の社会と教育
- 15 総論

授業時間外の学習

授業の板書は必要最小限のことしか書かないので、理解を深めるために各回の授業後自分で言葉を補足するなどして、オリジナルノートを作成させる。
 ネット、テレビ、新聞などのメディアから教育に関する情報を常に収集するよう心がけること。それをもとに授業内で討論することもある。

教科書・参考書等

参考文献
 『教育史』 柴田義松・斉藤利彦編（学文社）
 『教育思想史』 今井康雄（有斐閣）

成績評価

原則として学生便覧にある受験資格を有する学生の成績については出席状況30%、試験・レポート・授業態度70%として点数化し、学校の定める成績評価の基準、評価の基準に則して評価する。

科目名 音楽科教育法

対象 教職1年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

今日の我が国の音楽教育の現状と課題、とりわけ中学校における音楽教育の目的、現状・問題点等についての認識を深めつつ、中学校音楽科教員としての実践的な指導法を身につけようとするものである。

「学習指導要領」の主旨とそれにしたがって編集された教科書の検討、実際に授業を行う場合の学習指導案作成等を柱として、講義ならびに実践演習を行う。

- ・歌唱指導における声の問題
- ・器楽指導における諸問題
- ・鑑賞教材及び内容の工夫
- ・視聴覚機器の活用法 ―等々を含む

授業の到達目標

中学校音楽科教員としての実践的な指導法を身につける。

科目名 道德教育の研究

対象 教職1年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

いじめの問題に体罰が加わって、教育に於ける人間関係を考えさせられる日が絶えないことから、昨今、学校教育の中の道德教育の立場が話題にされる機会が多くなってきている。また、新指導要領でも道德の意義が強調されている。加えて、「道德」を教科にしようという大きな変改の動きが活発になって来ている今だからこそ、本講義は重要な意味を持つ。道德は、教科教育や体育と違って、人々の心の中の動きに絡む活動であることから、評価等他の学校内の活動とは異なって、慎重な扱いが必要である。加えて、身近な話題から社会問題、芸術や文芸作品等まで、教材として利用できるものに大きな幅があることから、教師の経験に負う所が大きい。このように様々な活動形態が考えられる中、道德教育の柱としてあるべきかは何かを、我が国の道德教育の歴史とも相談し、そして受講生の受けてきた道德教育の経験を集約しながら、明らかにしていく。

授業の到達目標

我が国の道德教育の歴史の流れを明確に把握し、これからあるべき道德教育の姿を明確に意識できること。

授業計画

- 1 一般の道德観
- 2 道德教育のイメージ
- 3 “心のノート”とその周辺

期間 後期

担当教員 森下 俊一

授業計画

- 1 音楽科教育を取り巻く諸課題をめぐって
- 2 新旧・学習指導要領について ―音楽科教育の目標と意義、我が国の現状と課題
- 3 学習指導案の作成について ―教材研究法及び模擬授業による実践演習に向けて
- 4 音楽科教育の軌道修正 ―国際理解(とりわけアジア)と世界音楽の多様性の認識
- 5 模擬授業による実践演習I
- 6 模擬授業による実践演習II
- 7 模擬授業による実践演習III
- 8 模擬授業による実践演習IV
- 9 模擬授業による実践演習V
- 10 模擬授業による実践演習VI
- 11 実践演習の総括
- 12 教育実習の意義と心得

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

中学校学習指導要領(平成20年7月) ―音楽編(文部省)

成績評価

出席状況、授業への取り組み姿勢、提出物等を総合的に勘案して評価する。
評価基準、評価区分は学則に準拠する。

期間 後期集中

担当教員 岡本 直久

- 4 小さな親切運動と道德教育
- 5 期待される人間像と道德教育
- 6 修身と道德教育
- 7 道德教育の理念
- 8 今求められるべき道德教育

授業時間外の学習

道德が対象とする基を人が人間関係であることを踏まえ、所謂人間観察の機会を逃さず、事実と考察を記録すること。その成果は、講義の際の資料として集約する心算りである。

教科書・参考書等

書物は特定しない。その都度プリントその他で配付するものを使用する。
関連書物・参考文献等は、授業の中で紹介する。

成績評価

- 各回の講義への取り組み
- | | |
|---|--------|
| A 講義内容に対する自己の立場を具体的に表明
理解を示す表現力
各回の講義への取り組み
講義内容の正確な把握 |] ができる |
| B 理解を示す表現力
各回の講義への取り組み
講義内容の正確な把握 | |
| C 各回の講義への取り組み
講義内容の正確な把握 |] ができる |
| D 上記の条件を満たしていない | |

科目名 特別活動の研究

対象 教職1年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

中学・高校のカリキュラムは、教科活動と教科外活動とから構成されている。ここで言う特別活動とは、主として教科外活動を指している。具体的には、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の3つで、部活動についても触れる。

教師は、多分に自分が学生時代どのような経験を積んできたか、ということがベースとなって生徒に接している。つまり特別活動を指導するに当たっては、自分が中高時代にいかに真剣に上記のような活動に取り組んだかが重要である。

現役の中高教師である私の、39年間のつたない経験をもとに、みなさんとともに特別活動の重要性について考えてみたいと思う。

授業の到達目標

中高生たちが「生きる力」を身につけていくために特別活動がいかに重要であるかを、これから教師を目指す短大生に認識してもらえれば幸いである。

期間 後期集中

担当教員 真野 彰

授業計画

- 1 特別活動とは、学習指導要領の変遷
- 2 ホームルーム活動の進め方、クレーム対応
- 3 生徒会活動と校則、部活動への関わり方、学校行事の考え方
- 4 特別活動の評価
- 5 教師論、特別活動の位置づけ

授業時間外の学習

12月までに、教育に関する新聞記事やテレビ番組に積極的に触れて、自分の考える視点を養っておいてほしい。

教科書・参考書等

授業時にプリント資料を配付。

成績評価

出席点とレポートによる。

科目名 生徒指導Ⅰ

対象 教職1年

履修条件

教職課程受講者必修。

授業の概要

「生徒指導Ⅰ」では、指導の主要な構成要素である、教育相談のイメージをつかむことを目標とする。

教育相談では、「聞き上手」であることが求められるが、教師として、どのような配慮が必要であるかについて、事例を通して理解してゆく。

さらに、コミュニケーションにおいて、時に言語以上に影響力を持ち得る「ノンバーバル行動」についても、知識・理解を深めたい。

講座全体を通して、生徒指導の基礎理論を把握しつつ、芸術科目の特質を活用した指導や、自分の個性を教育現場に生かす方法についても考察して欲しい。そのためには、開講時の演習(エゴグラム・チェックと交流分析の概略)も参考になるであろう。自主的な学習態度には支援を惜しまない。

授業の到達目標

生徒を受け止める姿勢を養う。

授業計画

- 1 オリエンテーションとエゴグラム・チェック(エゴグラムにより自分のコミュニケーション特性について考える。)
- 2-3 交流分析(コミュニケーションの構造を分析する方法について概略を学ぶ。)
- 4-5 聞き上手のポイント(カウンセリングについての知識とともに、教師に必要とされる「こどもの話を聞く態度」について理解する。)
- 6-7 ノンバーバル・コミュニケーション(こどもを良く理解する材料として、ノンバーバル行動について考える。)
- 8 教師が抱え得る問題(ビデオ教材を用いて、教師自身

期間 後期

担当教員 安富 由美子

- が抱える可能性のある問題について考える。)
- 9-11 応用事例(小グループに分かれて意見交換しながら、これまで学んできたことを応用し、問題解決力を養いたい。教育環境に対する提案(ビデオ教材を参考に問題解決法について考えたい。))
 - 12
 - 13 集団の意志決定に関する実習(グループ演習を通して、個人の意志と集団の意志の切り替えについて考えたい。)

授業時間外の学習

自分の目標とする教師像や人間像を実現することを念頭に、授業で扱ったテーマについて、自分の考えをノートなどに記してみよう。そのためには、少々の補習も必要になるかもしれない。ただ頭の中で考えるだけでなく、文章に顯わすことで、考察の曖昧な点も明らかになり、実現に向けての具体的な課題が明確になるので、是非チャレンジしてほしい。

教科書・参考書等

「教育相談—その理論と方法—」江川斑成編著(学芸図書)
「心理臨床のノンバーバル・コミュニケーション」春木豊編著(川島書店)

成績評価

期末の論述試験による。

- A 授業で扱ったテーマについて充分理解し、自分の考えを明確に伝えることができる。(80点以上)
- B 授業で扱ったテーマについて充分理解しているか、または自分の考えを明確に伝えることができる。(70点以上)
- C 授業で扱ったテーマについてある程度理解しており、自分の考えを伝える努力が認められる。(60点以上)
- D 授業で扱ったテーマについて理解が不十分であるか、または自分の考えを示していない。(59点以下)

科目名 生徒指導Ⅱ

対象 教職2年

履修条件

教職課程受講者必修。
「生徒指導Ⅰ」を履修し、単位を修得していること。

授業の概要

「生徒指導Ⅰ」で学んだことを実践で生かすに当たり、様々な課題が浮上すると予想される。そこで、知識と少々の体験を補うことで、現実的な問題解決力を養うことを当講座の目的とする。

講義と演習を取り混ぜて進行する予定なので、演習には、演習前に学んだ知識の概要を把握して臨むことが大切である。参考書等も予・復習に活用すると、理解と問題意識が高まると思われる。

授業の到達目標

教師としての自分を磨き、指導のための精神的なゆとりを持つ。

授業計画

- 1 オリエンテーション
- 2-3 野外活動(体験と講義:生徒を引率して野外に出る際の留意点について考え、学ぶ。)
- 4-6 障害(講義と演習:VTRも利用しながら、生徒が先天的・後天的に抱えるかもしれない障害について学び、指導を考える。)
- 7-8 心理検査(講義と演習:学校で用いられる心理検査を中心に、特徴と利用上の注意点について理解する。動作性検査を体験し、その利用について考えてみる。)2回
- 9-10 保護者との面談(演習と講義:事例を元に考える)2回

期間 前期

担当教員 安富 由美子

11-12 教室での問題(グループ討論:事例について検討する)2回

13-14 アサーション(講義と演習:教師と生徒それぞれの立場からのアサーションについて学び、考える。)

(注:ここでの「演習」は「体験」よりも能動的・建設的態度が要求される。)

授業時間外の学習

教育実習前は生徒たちとの交流を思い描きながら、また実習後は思い通りにできたことやできなかったことを思い出ししながら、授業で扱ったテーマに当てはめて考察してみよう。任意のレポートにまとめて提出された場合は、コメントを付けて返却する。

教科書・参考書等

必要な資料はプリント配布。
「教育相談—その理論と方法—」江川斑成編著(学芸図書)
「精神医学ハンドブック」山下格著(日本評論社)
「インタープリテーション入門」レニエ他著(小学館)
「アサーション・トレーニング」平木典子著(金子書房)

成績評価

期末の論述試験による。

- A 授業で扱ったテーマについて充分理解し、自分の考えを明確に伝えることができる。(80点以上)
- B 授業で扱ったテーマについて充分理解しているか、または自分の考えを明確に伝えることができる。(70点以上)
- C 授業で扱ったテーマについてある程度理解しており、自分の考えを伝える努力が認められる。(60点以上)
- D 授業で扱ったテーマについて理解が不十分であるか、または自分の考えを示していない。(59点以下)

科目名 教育実習Ⅰ

対象 教職1年

履修条件

将来、音楽教員をめざす強い希望と意志をもつ者。「教育実習Ⅱ」必修。

授業の概要

〈教育実習〉とは、文字どおり、指導教員の指導のもと中学校で行う実習(3週間から4週間)そのものをいい、この授業はその実習をより有意義に行うための事前指導が中心となる。教職課程履修にあたっての心構え、実習までに身につけておくべきこと、実習までに必要な諸手続きなど、より具体的な内容および課題を取り上げる。

授業の到達目標

- (1) 教育実習の意義を理解する。
- (2) 教育実習に必要なそれぞれの課題を意識し、十分に準備する。

授業計画

- (1) 教職課程履修の心構え
- (2) 実習校について(1)
- (3) 実習校について(2)
- (4) 介護等体験オリエンテーション
- (5) 教育実習の実際(1)

期間 通年

担当教員 松井康司・荻野千里・永井由比

- (6) 教育実習の実際(2)
- (7) 教育実習の実際(3)
- (8) 教育実習の実際(4)
- (9) 教育実習の実際(5)
- (10) 教育実習報告(1)
- (11) 教育実習報告(2)
- (12) 介護等体験の実際(1)
- (13) 介護等体験の実際(2)
- (14) 介護等体験報告(1)
- (15) 介護等体験報告(2)

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

資料配布。

成績評価

出席90%で評価。授業への参加姿勢10%。遅刻(-0.5)、欠席(-1)については、それぞれ減点ポイントがあり、-2.0ポイントに達した場合には教育実習を認めない。

- A 80点以上(授業内容を十分に理解している)
- B 60点以上(授業内容をほぼ理解している)
- C 50点以上(授業内容をある程度理解している)
- D 49点以下(授業内容の理解が欠けている)

科目名 教育実習Ⅱ

期 間 通年

対 象 教職2年

担当教員 松井康司・荻野千里・永井由比

履修条件

将来、音楽教員をめざす強い希望と意志をもつ者。「教育実習Ⅰ」必修。

授業の概要

〈教育実習〉とは、文字どおり、指導教員の指導のもと中学校で行う実習(3週間から4週間)そのものをいい、この授業は実習直前の具体的な準備と、さらに実習後、卒業までの具体的な課題を意識し、将来に備えるための事前および事後指導が中心となる。

授業の到達目標

- (1) 教育実習の意義を理解する。
- (2) 教育実習に必要なそれぞれの課題を意識し、十分に準備する。
- (3) 教育実習後の課題を認識し、必要な知識および技術を身につける。

授業計画

- (1) 諸手続きについて(1)
- (2) 教育実習の実際(1)
- (3) 教育実習の実際(2)

- (4) 教育実習の実際(3)
- (5) 教育実習の実際(4)
- (6) 教育実習の実際(5)
- (7) 教育実習の実際(6)
- (8) 教育実習の実際(7)
- (9) 教育実習の実際(8)
- (10) 教育実習の実際(9)
- (11) 教育実習の実際(10)
- (12) 教育実習報告(1)
- (13) 教育実習報告(2)
- (14) 教育実習報告(3)
- (15) 諸手続きについて(2)

授業時間外の学習

授業時に適宜指示する。

教科書・参考書等

資料配布。

成績評価

出席90%で評価。授業への参加姿勢10%。遅刻(-0.5)、欠席(-1)については、それぞれ減点ポイントがあり、-2.0ポイントに達した場合には教育実習を認めない。

- A 80点以上(授業内容を十分に理解している)
- B 60点以上(授業内容をほぼ理解している)
- C 50点以上(授業内容をある程度理解している)
- D 49点以下(授業内容の理解が欠けている)

科目名 教職実践演習(中学校)

期 間 後期

対 象 教職2年

担当教員 永井 由比

履修条件

なし。

授業の概要

2年間で学んだ学問としての教育に関する知識と、教育実習や介護等体験において学んだ実践力の更なる統合を目指し、これまでの学習成果をもとに、教員としての資質の構築をより深く具体化するための授業である。

授業の形態としては、講義や事例研究、ロールプレイング、現職教員をゲストスピーカーとしたフィールドワーク等を行うものとする。

授業の到達目標

教員として求められる基本的な資質として以下の4つのテーマを定め、到達目標とする。

- 1 教育に対するの使命感や責任感及び児童・生徒への教育的愛情を持っている
- 2 社会性及び人とのコミュニケーション能力が身についている
- 3 児童・生徒との間に信頼関係を築き、規律ある学級経営を行うことができる
- 4 教科内容を理解し、児童・生徒の反応や学習状況に応じた指導ができる

授業計画

- 1 ガイダンス(本演習の目的と概要の説明、授業担当者紹介)
- 2 教育実習における実体験をもとに、事例研究・集団討議
- 3 講義「教職の意義・教師の職務や役割について」
- 4 他教職員・生徒・保護者・社会と教師との繋がりについて事例研究・ロールプレイング
- 5 教育現場で起こりうる様々な問題(家庭内の問題、学級内いじめ、不登校等)への対応について事例研究・ロールプレイング
- 6 連携先の学校の授業見学、模擬授業、現職教員との意見交換等
- 7 クラブ活動の指導体験
- 8 特別支援学級の運営や課題について事例研究・集団討議
- 9 研究発表「これからの学校教育に求められるもの」、集団討議
- 10 本演習のまとめ

授業時間外の学習

授業で取り上げる課題・事例について理解を深めておくこと。

教科書・参考書等

テキスト：各回で必要なプリント等を配布する。
参考書：必要に応じて紹介する。

成績評価

- A 授業に積極的に参加し、レポートの評価が80点以上の者
- B 授業に積極的に参加し、レポートの評価が60点以上の者
- C 授業に積極的に参加し、レポートの評価が50点以上の者
- D 授業への参加が消極的で、レポートも未提出の者

課・係名	開設時間	取扱業務（主なもの）	
女子部門事務局	総合受付	8:15～16:30 土曜日は、 8:15～12:40 1. 学園全体の受付・案内等のインフォメーション 2. 学園案内・募集要項・桐朋教育等の頒布	
	経理窓口	8:15～15:00 (11:30～13:00 を除く) 土曜日は、 8:15～12:00 1. 授業料等に関する事 2. 学生会・自治会の出納・経理に関する事	
	管財課	8:15～16:30 土曜日は、 8:15～12:40 1. 学内備品の使用に関する事 2. 火気使用等の保安に関する事	
*事務局で行う以外の事務は、短大教学課及び各専攻研究室で行う。			
短大教学課	窓口	8:15～16:20 土曜日は、 8:15～12:30 1. 学生証、学割等の発行に関する事 2. 証明書等の交付に関する事 3. 一般教室等の使用に関する事	
	教務	8:15～16:20 土曜日は、 8:15～12:30 1. 授業（試験を含む）・履修・成績・卒業等に関する事 2. 学籍に関する事 3. 教育職員免許状に関する事	
	学生	8:15～16:20 土曜日は、 8:15～12:30 1. 入学式・卒業式・桐朋祭等諸行事に関する事 2. 学生活動、学生生活、奨学金に関する事 3. 保安に関する事	
総合ガイダンスセンター (キャリア支援室)	10:00～17:00 土曜日は 休室	1. 就職や進学に関する支援 2. 大学案内・広報活動	
本学には、音楽専攻・演劇専攻・SC専攻それぞれに研究室がある。			
研究室	各専攻共通の業務		1. 学生と教員間の諸連絡 2. 授業の準備、教材・教具の保管管理 3. 学生ロッカーの管理
	音楽専攻	8:30～16:30 土曜日は、 8:30～12:30	1. レッスン室使用に関する事 2. 演奏会等に関する事
	演劇専攻		1. 小劇場・実習室の使用に関する事
	SC専攻		1. スタジオ使用に関する事
短大図書館	9:00～18:00 水曜日は、 9:00～16:00 土曜日は、 9:00～14:00	P.30参照	
保健室	8:15～16:30 土曜日は、 8:15～12:40 ただし、 不在の場合 もある。	1. 定期健康診断 2. 健康相談 3. 救急処置 4. 学生教育研究災害傷害保険、学研災付帯賠償責任保険の手続に関する事 5. スクールカウンセラーの面談の申込み	
桐朋教育研究所	9:15～16:45	P.30参照	

〈4月〉

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

〈5月〉

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

〈6月〉

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

〈7月〉

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

〈8月〉

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

〈9月〉

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

〈10月〉

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

〈11月〉

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

〈12月〉

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

〈1月〉

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

〈2月〉

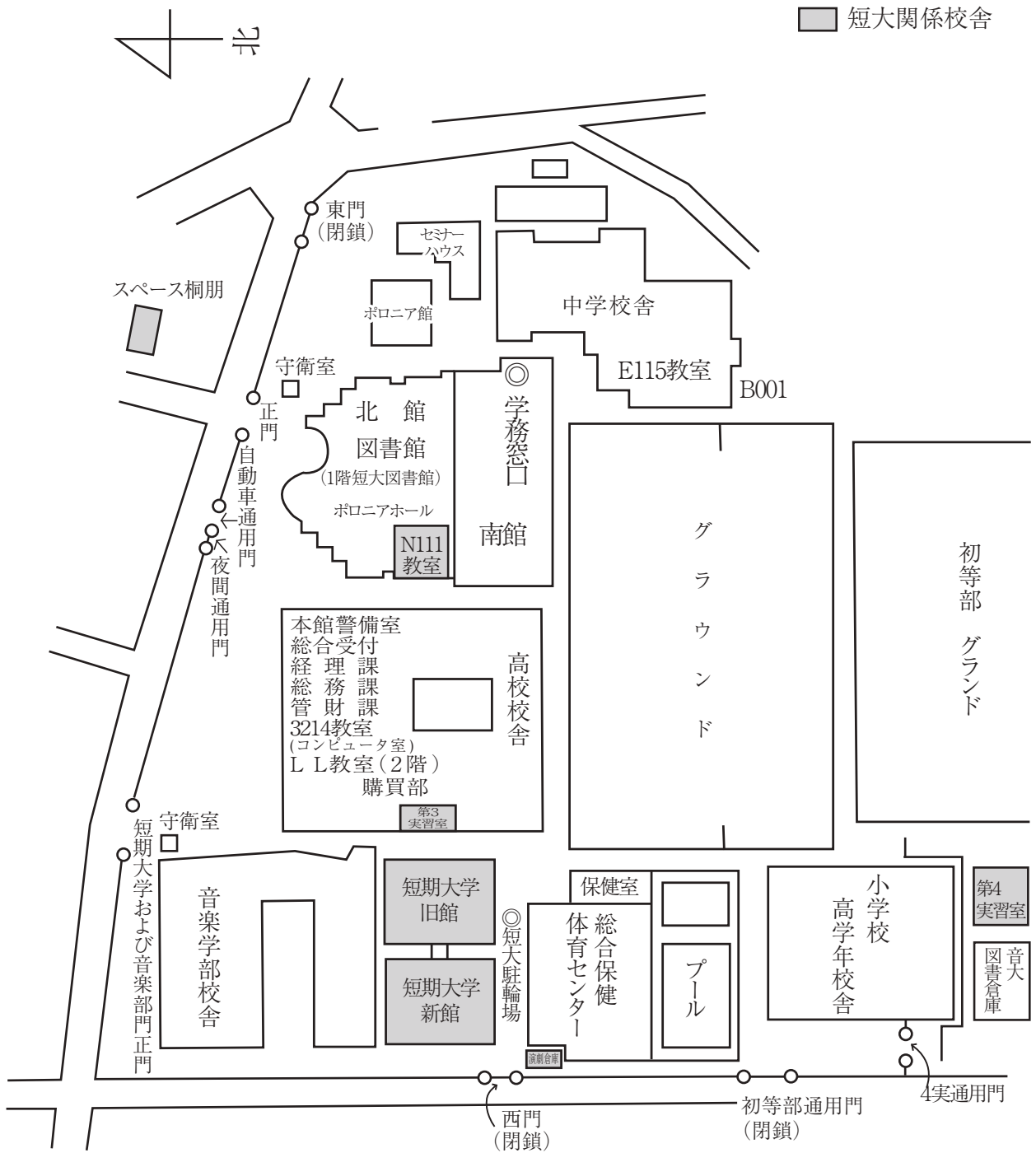
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

〈3月〉

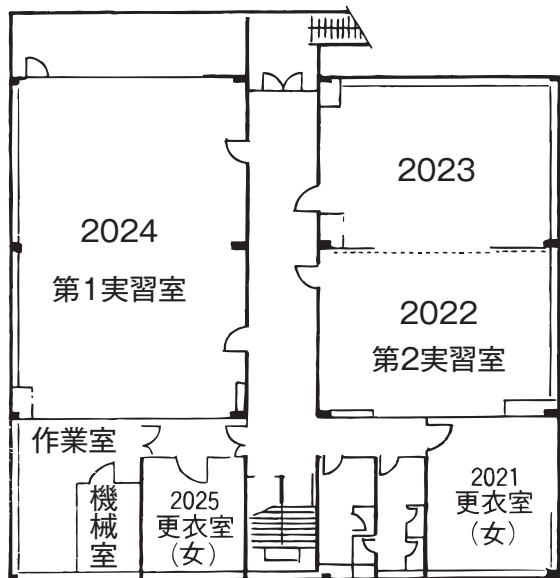
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

通常開館 9:00~18:00 土 14:00
休館

短縮開館
(開館時間の詳細は図書館で確認してください)



地下2階



(新館)

教室番号の読み方読み方

4桁……建物番号を示す

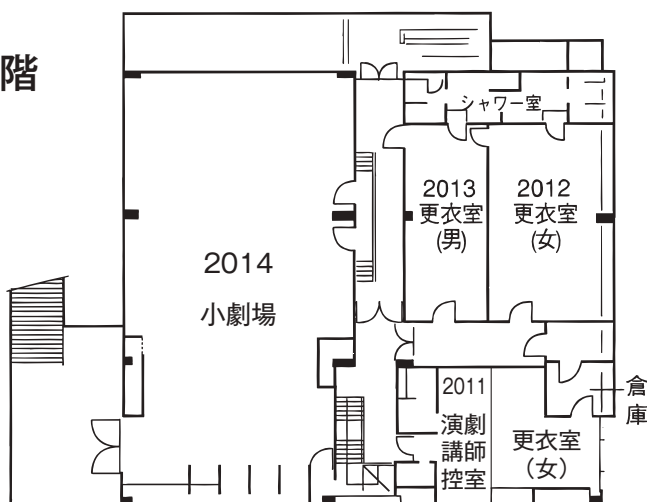
3桁……階数を示す (0は地下を示す)

1桁・2桁……教室番号を示す

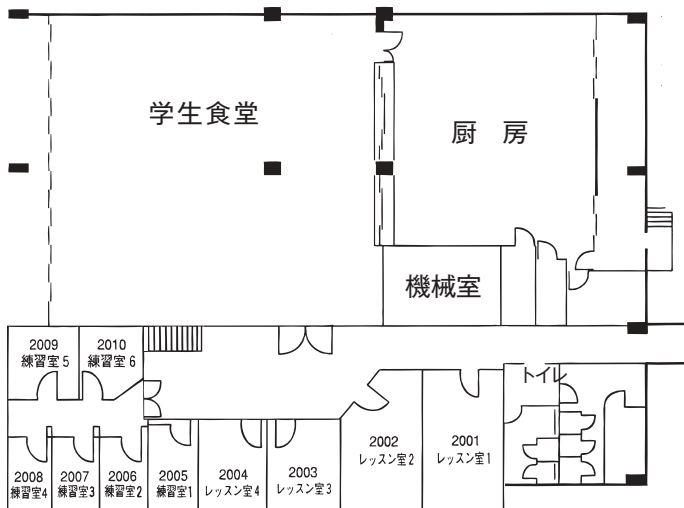
(例) 2014

2号館, 地下, 14番教室 (小劇場)

地下1階

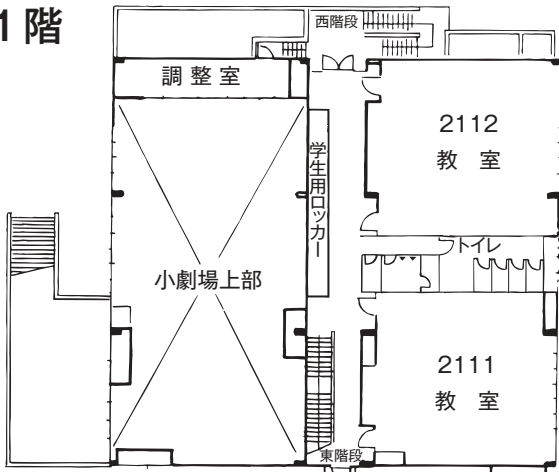


(新館)

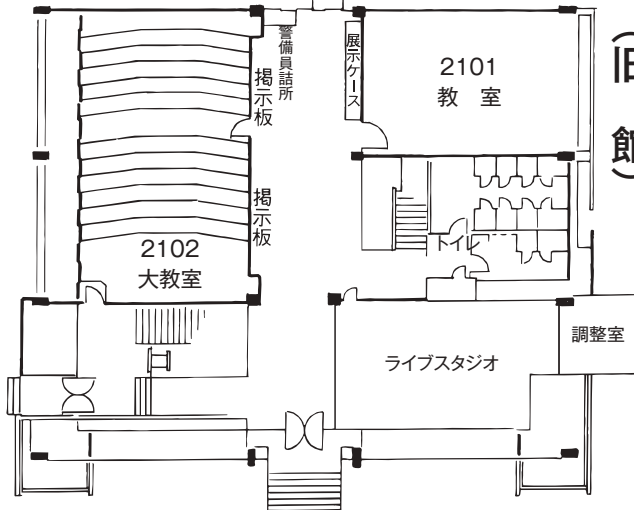


(旧館)

1階

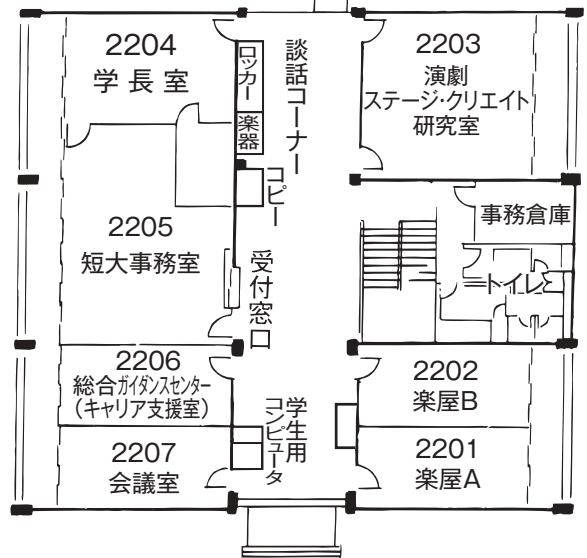
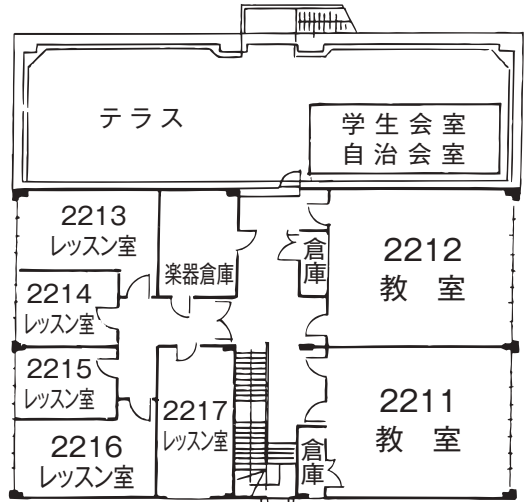


(新館)

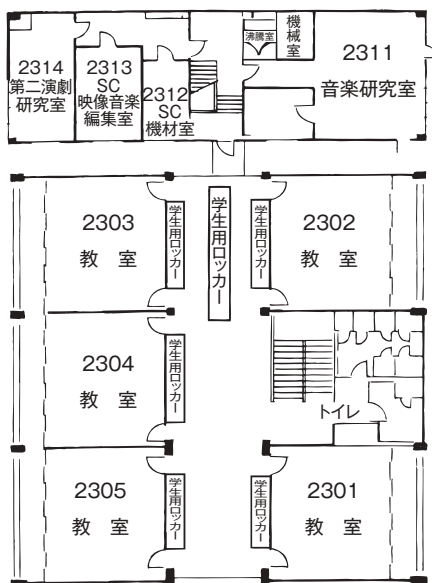


(旧館)

2階



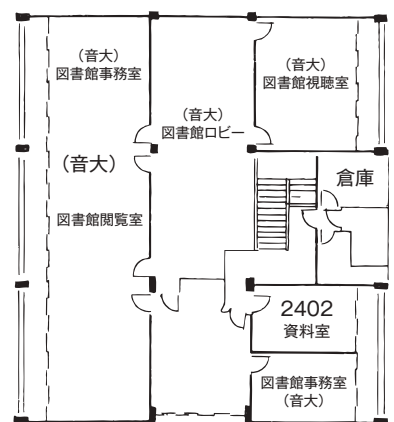
3階



(新館)

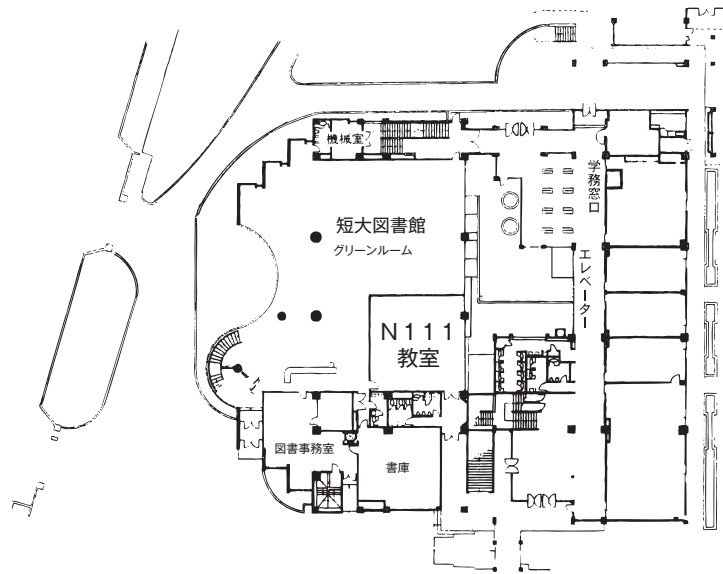
(旧館)

4階

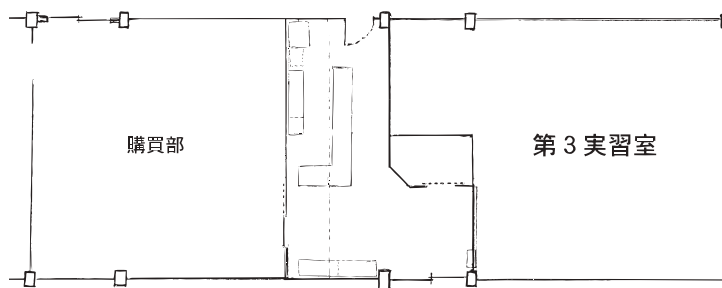


(旧館)

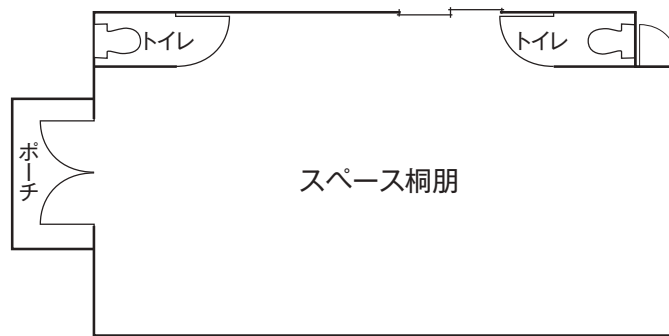
北館 1階



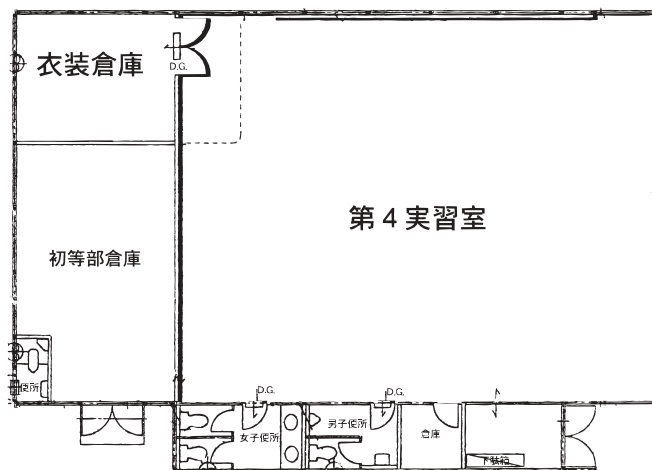
本館 1階



別棟



別棟



1 非常事態発見の時

キャンパス内で、火災、急病者等の非常事態に遭遇したり、発見した学生は、速やかに近くにいる教職員に通報し指示を受けること。また、教職員のない夜間や休業中の時は、短大夜間警備員または本館警備員に連絡し、指示を受けること。

- (1) 急病者、けが人、不審者等を発見した時
 - ・直ぐに教職員、警備員に通報し指示を受けること。
 - ・急病者の搬送等の要請にはできるだけ協力すること。
- (2) 火災を発見した時
 - ・直ぐに教職員、警備員に通報し、初期消火にできるだけ協力をすること。
 - ・避難は、教職員等の指示に従って行動すること。なお、巡回、救出作業等、危険の及ばない限り協力すること。
- (3) 地震発生時
 - ・地震が起きた時、すぐに外に飛び出すことは危険である。机の下などに身を伏せ、しばらく様子を見ること。
 - ・ドアや窓を開放し、非常脱出口を確保すること。
 - ・火の始末をすること。もし、火が出たら、教職員、警備員に通報し、初期消火にできるだけ協力すること。
 - ・緊急放送や教職員等の指示に従い、建物から離れた避難場所（グラウンド等）に集合すること。
 - ・巡回、救出作業等、危険の及ばない限り協力すること。
 - ・帰宅は学園の指示に従うこと。

交通機関運休時（スト・悪天候等）の対応

1 午前6時現在…

午前6時現在、京王線およびJ R（首都圏）が運行している場合は平常どおり授業を行う。

2 JR(首都圏)…

J R（首都圏）が止まっている場合でも、京王線が運行している場合は、2時限より授業を行う。

3 京王線が…

京王線が午前9時までに運行を開始した場合は、3時限より授業を行う。

4 京王線が…

京王線が午前9時現在運行していない場合は、全面休校とする。

Tempo di Marcia

石 森 延 男 作 詞
入 野 義 朗 作 曲



1. こ ころ の し る し こ む ら - さ - き ゆ た か に
2. と う と き い の ち ま も り - つ - つ し ん り の
3. つ ゆ く さ し げ る む さ し - の - の ひ か り に



に お う き り の - は な き ぼ う は は る - か お お - ら か
せ か い あ こ が - る る わ れ ら は わ か - し す が - す が
ま な こ あ ら わ - れ て は る か に あ お - ぐ ふ じ - さ ん



に は ば た く つ ば さ た く - ま し く -
し う た わ ん い ざ や よ ろ - こ び を - く も よ
は し た し く よ べ り こ の - あ さ も -



な が れ よ わ - が と も よ - も の み な こ こ に ひ び - き あ -



い と う ほう が く えん さ ち - あ ふ - る

学 園 歌

第二章

心の象徴しるしこむらさき、
ゆたかに匂ふ桐の花、
希望ははるかおほらかに、
はばたく翼たくましく。

(くり返し)

雲よ、流れよ、わが友よ、
ものみなここに響きあひ、
桐朋学園幸あふる。

第二章

尊いのちき生命守りつつ、
真理の世界あこがるる、
われらは若しすがすがし、
歌わんいざや飲びを。

第三章

露草茂るむさしのの、
光に眼洗まなこはれて、
はるかに仰ぐ富士山は
親しく呼べり、この朝も。

2013年（平成25年）4月1日 印刷
2013年（平成25年）4月1日 発行

発 行 者

桐朋学園芸術短期大学

東京都調布市若葉町1-41-1
tel. (3300) 2111（代表）
fax. (3300) 4253
<http://www.toho.ac.jp>

